
アジとサンマとクローバー

仲村 歩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

アジとサンマとクローバー

【Nコード】

N1172Y

【作者名】

仲村 歩

【あらすじ】

突然の兄の訃報を母から受けて小笠原に行くと
幼い女の子が泣きながら抱き着いてきた
それが全ての始まりだった

ブローグ

「しかし、暑いな……」

それが正直な気持ちだった。

東京では心地良い秋風がそろそろと吹こうかと言つ9月の終わりなのに、ここは未だ夏の名残と言うよりは……

竹芝桟橋から船で揺られる事25時間半。

船はゆつくりと港に接岸しようとしている。

港には人や荷物を待ちわびた人が集まりにぎわっている。

6日に一度しか船は来ない。

どんな僻地かと思うかもしれないが住所的には東京都となっている。ため息を漏らしタラップを重い足取りで降りていく。

「パパ！」

少し離れた所から小さな女の子の声が桟橋に響き女の子が走り出した。

単身赴任か仕事の都合で離ればなれになっている父親との再会だろう。

辺りを見渡すと沢山の観光客に交じり見るからに仕事関係の人だろうと思える姿の人が見て取れる。

小さな女の子の声が泣き声に変わり。

足に小さな衝撃を受ける。

驚いて見下ろすと花柄のノースリーブの白いワンピースを着た女の子が俺の脚にしがみついて泣きじゃくっている。

潮風が吹き抜け女の子の色素の薄い肩まで伸びている髪が風に舞った。

島に

それはお袋からの一本の電話から始まった。

俺は一応アパレル関係の会社で営業の仕事をしている。

一応と言うのは俗にいう窓際族なんて呼ばれている部類に含まれているからだ。

人件費削減や経費削減が叫ばれている中で、営業成績も下から数えた方が早く定時に出勤して定時に退社する様な俺が会社に残っているのが自分自身でも不思議に思う。

が、決して転職なんて考えた事は無い。

就職難のご時世にぬるま湯に浸かっていられる幸せを噛み締めていたいからだ。

「おい、沢渡。沢渡典彰君、2番に電話だよ」

「すみません」

上司である水野課長に言われ机の上にある電話の受話器を取り点滅している2の番号を押すと沈んだ様なお袋の声がした。

「ノリちゃん？」

「お袋、会社でノリちゃんは止めてくれ。何か用か？」

本来なら携帯に掛けてくれば用は済む事だが、俺が実家からの電話に殆ど出ない事を見越して会社に掛けて来たのだろう。そしてお袋の口から信じられない言葉が発せられた。

「宗ちゃんが死んだ」

「はあ？ 何の冗談だ。昨日の夜に電話で喋ったばかりだぞ」

「修理中のアンテナの資材が落ちてきて宗ちゃんに……」

「おい、お袋！」

受話器の向こうでお袋は泣き崩れてしまった。

これ以上お袋から事情を聴くのは無理だと判断し、一旦通話を止めて昨夜掛ってきた履歴から宗一の携帯を呼び出す。

すると機械的な声で電源が入っていないか電波の届かないと告げら

れた。

堪らず営業部を飛び出して唯一テレビのある社員食堂に駆け出していた。

廊下を重い足取りで営業部に戻る。

握りしめた携帯が着信を知らせ友人や知人から宗の事を告げられ、真実を受け入れる前に何度も再認識させられた。

営業部に戻り課長に事の次第を告げる。

「沢渡君、急に如何したんだ？」

「すいません。取り乱して実は仕事中の事故で兄が亡くなりました」

「何と言えば良いか。こっちの事は任せて早く帰りなさい、総務には忌引の手続きをしておくから。確か君のお兄さんは小笠原で」

「はい」

「それじゃ時間が掛るだろう。戻ってきてから有給の手続きが出来るように取り計らっておくから」

「ありがとうございます。それじゃ失礼します」

自分のデスクに戻り同僚に頭を下げて営業部を後にする。

昨夜の宗一からの電話は突然の物だった、虫の知らせと言うやつか。電話では何か煮え切らない奥歯に物が挟まった様な感じで、何かを俺に相談したかったのかもしれないが今はもう聞く事すら出来ない。後ろから同僚が課長に抗議している声が聞こえてきた。

「課長、何で沢渡を庇うんですか？ あんな営業部のお荷物なんて」

「それじゃ、君は沢渡君が作った記録を塗り替える事が出来るのかな？」

「それは…… それにそんな記録さえ本当か」

「四の五言わずにそれを越えようとする事がひいては当社の成長を促すのでは？」

「判りました。あんな記録無理だろう、勝ち逃げ野郎が」

会社から直で兄の家に向かう。

兄の家は新興住宅地の中にある小綺麗な一戸建てだった。
表札に能登島の名前がある。

インターフォンを鳴らすと兄の愛娘である可奈ちゃんドアを開けてくれた。

「ああ、ノリだ。ママ、お婆ちゃん、ノリが来たよ」

姪の可奈ちゃんの声でお袋が出迎えてくれた。

「意外と早かったのね」

「あのな、電話口で泣き崩れたお袋が言う言葉か」

リビングに行くと兄の奥さんである一つ年上の美紀^{みのり}さんが放心状態でソファに座っていた。

「今、お茶でも」

「冷たいのをくれよ、喉がカラカラだ」

「はいはい」

こんな時にはなんて声を掛ければいいのだろう30年生きて来ても戸惑ってしまう。

大丈夫の筈も無ければすっかりしてとも言えずだんまりを決め込むしか出来なかった。

全く現実味が無く平坦な時間が流れている。

それはあまりにも遠い場所で起きた事だからだろうか。

ニューヨークまで12時間ちよいハワイまでなら7時間で着いてしまう。

それなのに兄貴がいる場所は日本国内なのに25時間以上かかってしまう。

「ノリは何時まで居るの？」

「可奈ちゃん……」

「はい、冷たい麦茶」

「サンキュー」

お袋が持ってきてくれた麦茶を一気に喉に流しこむ。

可奈ちゃんは何も判らずに俺の横に座り嬉しそうに足をブラブラさ

せていた。

お袋と俺が遊びに来たと思っているのだろう。

確かに6歳の子どもに父親が死んだなんて理解できないだろうし、ましてや父親と毎日顔を合わせていた訳じゃない。

単身赴任先で死んでしまつて死に顔さえ見る事は不可能だったのだから。

「典彰君、来てくれたんだ」

「義姉さん、当たり前でしょ」

「そうだよ。何だか実感が無くて悪い夢を見ているみたいで」

ここにも夫の死を受け入れられない人がいる。

理由は可奈ちゃんと同じ様なものだろう。

「お袋、義姉さんの両親は？」

俺の問いにお袋は何も言わずに首を横に振った。

美紀さんみのりの方の家族とはほぼ絶縁状態になっている。

時々美紀さんが近況を電話で報告していると聞いた事はあるけど年下の兄と結婚話が持ち上がった時に反対され、美紀さんが半ば強引に兄の所に転がり込むように結婚してしまった。

その事に責任を感じた兄は能登島の姓を受け継いだ。

「ノリ、あんたが島に行つてきなさい」

「はあ？ お袋は何を言っているんだ？ 会社は？」

「忌引と有給を引つ付ければ良いじゃない。あんたが行かなきゃ誰が宗ちゃんを迎えに行くの」

「典彰さん、私からもお願いします」

「美紀さん……」

美紀さんは極度の乗り物酔いをするので1度だけ島に可奈ちゃんを連れて行った時には大騒ぎになった。

お袋が親父がと思ったが美紀さんがこの状態じゃお袋は無理だし、

親父は……も無理か。

押し切られる様に自宅に戻り準備を始め、パソコンで島までの経路を調べてみる。

「船って6日に1便……」

慌てて船会社に電話して俺は船上の人になった。

青天の霹靂

「これ、昂！ その人は……」

俺の脚にしがみついた女の子の後を慌てて数人の作業着姿や近所の人だろつかが追いかけてきている。

「あんたが宗一さんのかい？ それにしても昂が勘違いするのも仕方がないか」

「能登島宗一の弟の沢渡典彰です」

「あら、苗字が違うね」

「兄は婿養子に行ったので」

「で、単身赴任かい？」

「まあ、兄は大好きな仕事に着けたのですから本望だと思いますよ」

職場の人や近所の人に連れられて兄が暮らしていた家に向かう。

兄は茶毘に付され葬儀は滞りなく職場の同僚達の手によって執り行われた後だった。

近くに兄の家族が居ないのが現状でましてや船は週一しかないのだから、いつ家族が来られるか判断しようが無かったのだろう。

仕方がないで片づけたくはないが今は飲み込むしかなかった。

そして俺の脚にしがみ付いていた女の子は片時も俺から離れようとしなかった。

「あの、つかぬ事を聞きますがこの子は？」

「何を言っているんだい。宗一さんの娘さんの昂ちゃんじゃないか」

「はああ？」

思わずその場から逃げ出したくなった。

人の死なんていつ訪れるか誰にも判らないしこの世の中に終わらないものなんて無いと思っている俺ですら兄の死以上に受け入れがたい言葉だった。

「しかし、見れば見るほど宗一さんにそっくりだね。だけど宗一さ

んの方が優しそうだけど」

「まあ、一卵性の双子ですし良くある話で出来た兄と出来の悪い弟でしたから」

兄は出来過ぎるくらいだった。

頭も良いし誰かれなく優しく出来る人間で、唯一と言えば人が良すぎる所が今の世知辛い世の中じゃ欠点なのかもしれない。

それに対して俺はと言うと若干兄より運動が得意だけで常に兄と比べられた。

それに嫌気がさして兄がしない様な悪さは全てやってきた気がする。タバコ、酒、喧嘩etc

自慢できる事じゃないが補導や前科が無いのが唯一の自慢かもしれない。

お蔭で一応大学も卒業出来て今の会社に入る事も出来た。

大学に行ったのは親のたつての願いだったからで俺自身が行きたかったかと言えば嘘になる。

現にバイトや遊びに明け暮れて単位もギリで卒業を切り抜けた。

一方の兄は成績も優秀、推薦で自ら望む大学に行き自分のやりたい事に打ち込んで、希望通り国立天文台の技師になり念願のオレンジペペで仕事が出来るようになった。

俺たちが高校の頃から兄貴と美紀さんは付き合っていて、兄貴が大学を卒業と同時に結婚して可奈ちゃんが生まれ幸せな家庭だと思っていた。

そんな兄に可奈ちゃんと同じ年の隠し子が居たなんて青天の霹靂だった。

そして彼女の名前の昴も星や月が大好きだった兄なら頷ける。

近所の人に聞いても娘だと信じて疑わず、俺自身も言い出せなる雰囲気じゃなかった。

「宗さんが島に来た時には奥さんも一緒だったけど時々フラと居なくなる事が多くてね、もともと不思議な感じの人だったけどね。」

ある日、フラツと帰って来なくなっただよ」
そんな事を兄の仕事中に昴の面倒を見ていた近所の人と話してくれた。

集落から少し離れた町明りがあまり届かない様な場所に兄が暮らしていたコンクリート造りの平屋建ての小さな家があった。

玄関の前で小さな何かが動いている。

「何だ、このチビっこいの」

「チビちがう。サン」

「どう見てもチビだろう」

昴が名前を教えてくれた子犬は生意気な事に俺に向かって全身で威嚇していつちよ前に牙を剥いている。

「小さいのに生意気だぞ」

俺がしゃがみ込んで斑な狼の様な毛色の子犬に手を出そうとすると近所の人に止められてしまった。

「やめときな、沢渡さん。その子犬は昴にしか懐かないんだ。宗一さんでも梃子摺っていたんだから」

「余所者の俺じゃ駄目ですかね。やっぱり」

「多分、猟犬の血が入っているから主人以外には攻撃的なんだと思うよ」

「へえ、猟犬ね」

子犬の前にしゃがみ込むと背中の中毛を立てて今にも飛び掛かろうとしていた。

猟犬らしく俺の目をジッと睨みつけている。

俺が目を逸らした瞬間を逃さない為だろう。

目を逸らさずに静かに掌を犬の前に差し出す。

「沢渡さん、危ないよ」

「大丈夫」

静かに子犬の鼻先に指先を近づけた。

周りでは固唾を吞んで見守っているのだろう、昴は怖いのか俺の背

中に隠れる様になっている。

子犬とは言え指先を噛まれればそれなりの怪我をしてしまうだろう。静かに息を吐き出すと子犬が唸るのを止めた。

そして俺の指先の匂いを嗅ぎ始めると周りから驚きの声上がる。

子犬が俺の指先を舐めていた。

「お前が昂を守っていたんだな、よしよし」

子犬の口を掴むと前足で俺の手を退けようとしている。

今度は首元に手を入れ子犬をひっくり返すと甘噛みをしてジャレついて来た。

俺に対しての警戒心はもう何処にも無いようだ。

「サン！」

昂が子犬の名前を呼ぶが遊ぶのに気を取られて反応しなかった。

「サン、ご主人様が呼んでるぞ」

俺がそう言つとクルンと体を起こして顔を上げてお座りをした。

「良い子だ」

「いいこ、いいこ」

昂がサンの頭をなでるとクンクンと鼻を鳴らし始めた。

近所の人の話ではサンは栈橋で観光客などに噛みついたりして危険だと言つ事で捕獲される事がきまり島の人が捕まえようとしたらしい。

子犬が栈橋に居ると言つのを聞いて兄貴と見に来ていた昂は追い詰められたサンを見て突然駆け出してサンを抱きしめてそれ以来兄貴が責任を持つて飼う事になったと話してくれた。

昂に子犬、どれだけ兄貴は優しいと言うかお人よしと言うか。

で、自分はあつという間に空に昇つて尻切れ蜻蛉かよ。

兄の暮らしていた家で帰りの日まで寝泊りする事にした。

その方が荷物の片づけや何かと都合が良いからで、昂はと言つと近所の人が『しばらくは、おばちゃんの家でね』と言つ言葉にがんと首を縦に振らなかった。

今は兄の前で静かに寝息を立てている。

その横でタバコを吸う訳にもいかず表に出て星空を眺めながら一服していた。

「いくら星が好きだからって自分が星になってどうするんだよ、馬鹿兄貴」

頭の上には満点の降る様な星空が広がっている。

子どもの頃に兄貴が嬉しそうに星々の名前や星座の由来を教えてくれたのを思い出す。

すると俺らと同年くらいの男性が声を掛けてきた。

昼間に出迎えてくれた作業着姿の人だった。

「こんばんは、沢渡さん」

「あなたは確か天文台の」

「安曇あずみって言います。能登島とは同期で」

「そうですか。で、こんな夜更けに何か？」

「いえ、近くを通ったら姿が見えたので少し話がしたいと」

「もしかして、昴の事ですか？」

思っていた事をそのままぶつけてみた。

「ええ、どうしてそれを」

「近所の人は知らないようですが天文台の職員が知らない訳はないだろうと思っていましたから」

「そうですか、そうですよね普通。実は能登島から周りに話さないように言われていたんです。僕ら自身も本当の事は良く知らなくてただ現実を見ると昴ちゃんの母親は行方知れずで能登島しか昴ちゃんを守る奴が居なくて」

安曇さんの話は昴が兄貴の本当の子どもかまでは知らず、ただ東京に奥さんと娘がいる筈なのにと感じていたらしい。

兄貴から話すなど言われていたならば仕方がない事だし、仲間としては不要な噂が小さな島で広がるのを恐れたのだらう。

そんな事になれば島を去らざる負えなくなる事態になるかもしれないからだ。

昂が能登島の姓だと言う事は兄貴の籍に入っているのだろう事が容易に想像つくが、美紀さんやお袋にどうやって話すか考えるのは容易な事ではなかった。

だが判っている事は昂を連れて帰る以外に選択肢が無い事、そこから先は話し合いで決めるか最悪は施設に預ける事になるだろう。そしてもう一つ。

昂は兄貴が生きているかも知れないと告げられた。アンテナの修理中に足場の鉄骨が崩れ兄貴の頭部に直撃し即死の状態で昂に合わせられる状態ではなくそれ故に兄貴が船で帰ってくると思っただけだ。

そこに兄貴とそっくりな俺が船から降りてくればあの状況も頷くしかなくそれが本当の話なのだろう。

翌日からサンの散歩と荷物の整理を始める。

昂は兄貴が帰ってきたと勘違いしているのか泣く様な事も無く近所の子どもと遊びに行ってしまった。

荷物の整理をしながら俺は昂の母親の手掛かりを探す事になるが、殆ど見つけ出す事は出来ずに時間だけが過ぎていく。

状況を知りたいお袋から電話が掛ってきた。

「ノリ、そっちはどうなの？」

「兄貴の荷物を毎日片づけているよ。まあ几帳面な兄貴だから手間は取らないけど帰りの船はまだ数日先だからね。とりあえず兄貴だけでも連れて帰るよ」

「そう、お願いね。それと宗の事だから浮気なんかしてなかったと思うけど」

「ばーか。真面目を絵に描いた様な兄貴に隠し子でも居て見る腰を抜かすだろうが。でも子犬が居ただけだな」

「あんたと違って手の掛らない子だったからね。でも犬は駄目よ怖いし苦手だから」

「判っているよ」

冗談交じりにワンクッション入れておく。

帰りの船を翌日に控え片付けは大方終わっていた。

仕事の資料などは天文台の方に引き渡し兄貴が使っていたパソコンや必要だと思われる物を段ボールに詰め昴の着替えも少しだけ俺のバックに詰め込んで残ったものは処分してもらう様に頼んだ。

「昴、そのカメラを取ってくれないかなあ」

「……」

昴の近くにあったカメラを取ってもらおうと声を掛けると昴が俯いて首を横に振っている。

出会って間もない所為か少しは慣れていたつもりなのに昴との距離を感じてしまう。

仕方なく立ち上がり自分で取に行き梱包する。

小さな島だけに家電などは直ぐに引き取り手が決まったようだ。

「おはよう、荷物は片付いたかい？」

「どうも。おはようございます。おかげさまで昼過ぎまでゆっくり出来ました」

「今日はどうするんだい？」

「殆ど島を見ていないので島内を見て回ろうかと」

「そうかい。じゃバイクを貸してあげるから昴ちゃんに案内してもらいな。昴！ おじちゃんのバイクの鍵を持ってきた。沢渡さんに島を見せてあげるんだよ」

「はい！」

威勢のいい近所のおばさんに圧倒させられる。

昴が元気よく返事をして近くの民家に飛び込んでいく、それを見計らっておばさんが話しかけてきた。

「こんな事を私が言うのは変かもしれないけど、本当のところ宗さんには本土に家族が居るんだろ。お願いだから昴ちゃんを泣かせる様な事はしないでくれ。私達も薄々は気づいていたんだよ、でも昴ちゃんには宗さんしか居ないんだから、本当をお願いだよ。あん

な良い子の泣き顔なんて2度と見たくないんだ」

「自分出来る事なら精一杯しますよ。ただ今言えるのはこれだけです。でも、昴の事を一番に考えてやりたいと思います」

「そうだね。そうだよね。家族が居るのな難しいよね」

そこに満面の笑顔でぶかぶかのヘルメットをかぶりバイクの鍵を差し出している昴が駆け寄ってきた。

「ほら、あそこのバイクで行ってきな。遠慮なんかしたら承知しないよ」

「それじゃ遠慮なくお借りします。昴、行くぞ」

「うん！」

昴からヘルメットを受け取り頭に乘せてバイクのエンジンをかける。

「ヘルメットのひもはちゃんとしなないといけないんだよ」

「はいはい」

「もう、おへんじは1回でしょ。それとサンもいつしょ」

「へいよ」

注意する時の昴の口調は几帳面で生真面目な兄貴そのものだった。

昴がサンを連れて来たので片手で掴んで持ち上げサンの顔を見た。

「しかし、子犬の癖に目つきの悪い犬だな」

「かわいいの」

「はいはい」

サンをバイクの前に付いているかごに入れリードを手に巻きつけてハンドルを握る。

「乗れ、行くぞ」

「うん」

俺の後ろに乗るのかと思えば昴が俺の腕をくぐりステップに立ちハンドルに手を置いた。

「いかないの？」

「行きますか」

道なりに進んでいると昴が進むべき方向を示してくれる。

一言で言うつと海と山しかない島で僅かな海岸線に集落がへばり付くように点在している。

手付かずの自然と言う物なのだろうか。

流石、小笠原ブルーと絶賛されている海は澄んで綺麗だった。

半日もバイクで走ると島中を見て回れてしまうほど小さな島でのんびりするには良い所なのかもしれないし、一度来てしまえば1週間は帰れない島なのだから。

眼下に広がる海に太陽が沈んでいく。

見晴らしのいい展望台には心地良い風が吹いていた。

サンと言えば大人しく昴の横で伏せている。

珍しい事にサンが鳴いたのを聞いたことが一度も無かった。

「昴、島に残りたいか？」

「わかんない。でも、おじさんはパパににているけどパパじゃないんでしょ」

「どうしてそう思うんだ？」

「タバコのおいがするから」

「そうか、一緒に東京に行ってみるか」

「うん。とうきょうってここよりのしい？」

「昴、次第かな」

情けない事に6歳の女の子にそんな返答しか出来なかった。

とりあえず東京に戻りこれから先の事を考えてやらなければならぬのは確かだけど俺だけで決める事も出来ず。

荷物を後日送ってもらう為の段取りを決めて俺の連絡先と住所を告げて島を離れた。

サンは連れて行く訳にも行かず近所の人が預かってくれる事になった。

いざ島を船が離れていくと昴に気付いたサンがキュンキュンと必死に鼻を鳴らしていたが昴は泣き出す事もなくジッとサンの姿を見つめて何かに耐えている様だった。

やくそく

昼過ぎに島を出て翌日の夕方に竹芝桟橋に到着する。

お袋の話では美紀さんが落ち着いてから葬儀をしよう事になっていて兄貴を家に連れ帰るのが最優先だからと言われていた。

昴は船の中でも旅行を楽しむかのようににはしゃぎ回っていたが能登島の表札がある兄貴の家の前に来ると俺のズボンを掴んで俯いてしまった。

この場に連れて来るべきか迷ったが俺には昴を預かってもらえるような場所など思いつかないし昴自身もそれを望まないだろうと思った。

「戻ったぞ」

「ご苦労様。大変だったでしょ」

「まあな、色々と疲れたよ」

「典ノリ、その子は？」

「とりあえず座らせてくれ。お袋、美紀さんは？」

「奥よ、大分落ち着いたわ。こればかりはね」

「そつか。行くぞ、昴」

落ち着いたと言うより実感が無さ過ぎてどうして良いのか判らず数日が過ぎてしまったのだろう。

離れてい暮らしていた家族にはあまりに突然でなんと酷な事だと思ふ。

すると幼馴染で従妹の春菜がひょっこり顔を出した。

春菜もショックを受けているに違いないのに普段と変わらないように見えるのは気を張っている所為なのだろう。

「お帰り、典兄」

「春菜か、久しぶりだな」

「まあね。その子って典兄の彼女の訳ないわよね」

「あんな、俺にはそんな趣味はねえよ。丁度いいや、春菜。可奈と

上で遊んでいてくれないか美紀さんとお袋に大事な話があるんだ」
「うん、判った。可奈ちゃん、お姉ちゃんと上で遊ぼう」

「はい」

春菜が手伝いに来てくれていて丁度良かった。

可奈と春菜が階段を上がっていくのを確認して昴の手を取り美紀さんが待つているであろうリビンググに向かった。

「兄貴を連れて帰ってきたよ」

「ありがとう、典彰君」

美紀さんに兄貴を手渡すと愛しそうに奥の部屋に運んで行った。

その間にお袋が冷たい麦茶を入れてくれた。

何から話せば良いのか戸惑うがここまで来たら話すしかない事で、包み隠さず俺が知りうることをきちん伝えてこれからの道筋を立てるしかない。

ソファーに腰を下ろすと昴が俺の横に座り俺のシャツを掴んで俯いている。

「典彰君、その子は誰なの？」

「美紀さん、お袋。この子は島で兄貴と暮らしていた能登島 昴だよ」

「の、典はこんな状況の時に何を言っているか判って言っているの？」

「こんな時じゃなきゃ何時話せば良いんだよ」

「あんたって子はどうしてそんな子を何の相談も無しに連れて帰ってきたの？」

「それじゃ、どうすれば良いんだよ。昴は兄貴と2人暮らしたったんだぞ」

「だからって何も。美紀さん、大丈夫？」

お袋が心配そうに美紀さんを気遣っている。

「典彰君、それは本当なの？」

「昴が能登島の姓を名乗っていると言う事はそういう事です。でも、

本当の事は現状では兄貴以外に知る人はいません」

「宗と2人暮らしてこの子の母親はどうしたの？ 可奈と同一年ぐらいの子を置いていくなんでどうせロクな母親じゃないでしょうけど」

「お袋、昴の前でそんな事を言うのは止めてくれないか。何も判らない今はそんな事は問題じゃないだろ」

「何で典彰君がこの子を庇うの？ この子は私と可奈が知らない所で一緒に暮らしていたんでしょ！ 私と可奈がどんなに寂しい思いをしてきたか…… そんな時にこの子は！」

無意識に隣に座っている昴の頭を抱える様に抱きかかえていた。

グラスが割れる音がしてテーブルに真つ赤な血が数滴落ちて白いレースのクロスに沁み込み赤く染めていく。

それはダムが決壊するかのように美紀さんが堪えていた感情を爆発させた瞬間だった。

『この子は』に続く言葉は感情に吞まれて何を言っているのか判らなかった。

昴は俺のシャツを握りしめてジツと何かに耐えている。

流れ出る血が左目に入り目を開けていられない。

美紀さんの声とグラスの割れる音に驚いて春菜が2階から駆け下りてきて、俺を見るなり直ぐにタオルを持ってきてくれた。

「可奈ちゃんは上に居なさい。降りてきちゃだめよ。典兄、大丈夫そうじゃないわよね」

「平気だ、ただのかすり傷だよ。夜だし切った場所が場所だけに血が止まりづらいだだけだ」

「とりあえず病院にね」

「そうだな、昴は……」

俺の腕の中に居る昴を見ると小さく怯えながら首を横に振っている。この場に置いていくのは難しそうだ。

美紀さんはお袋に抱きかかえられて泣き崩れている。

「典……」

「おふくろ、俺の事は気にしないでいい。義姉さんを頼む。泣きただけ泣かせてやれば少しは落ち着くだろう。一応病院に行つてここに戻つてくるから」

「判つたわよ、勝手に帰るのは無しよ」

春菜が持つてきてくれたタオルで傷口を押さえタクシーで病院に向かう。

「お大事に」

目の上、丁度眉毛の辺りを切り4針縫われてしまった。

驚いた事に消毒も無ければガーゼも傷口に当てず、流水で傷口を綺麗にして麻酔をして縫合したらフィルムの様な物を張られ『いらな』と思うけど』一言付で包帯を巻いてくれた。

更に驚いたのは風呂に入つて髪の毛を洗つても良いらしい。

医療の進歩と言う奴なのだろう。

診察室に入ろうとした時に昴が俺から離れずに愚図り看護師さんが宥め賺してくれた。

治療を終えて診察室を出ると看護師さんが昴に付ききりで居てくれたようだ。

「有難うございます。お手数をおかけしました。ほら、昴。看護師さんにお礼を言つて」

「ね、パパが戻つてきたよ。もう大丈夫だからね」

看護師さんのお姉さんが優しく声を掛けたのに昴の瞳からは大粒の涙がこぼれた。

「ノンも、しんじやうの？ あたまからいっぱい血がでてしんじやうの？ いなくなちゃうの？」

昴がしゃくり上げながら泣きじゃくっている。

迂闊だった病院に連れて来た事をこの時ほど後悔した事は無い。

無理にでも春菜に預けて来るべきだった。

もしかして昴は事故現場か事故後の兄貴の姿を見ていたのかもしれ

ない。

「大丈夫、パパは死んじゃったりしないからね」

「だって！　パパはあたまからいっぱい血をだしてなくなっちゃったんだもん！」

看護師さんが昴を安心させようと声を掛け、昴の言葉に事情を知らない看護師さんは動揺を隠せないで俺と昴の間を視線が泳いでいる。ゆっくりとしゃがみ込み昴の涙を指で拭う。

「昴、俺は死なないよ」

「ほんとう？」

「ああ、死なない。それと絶対に昴を置いていなくなるなら、約束する」

「やくそく？」

昴の小さく細い小指を俺の小指に絡める。

「ゆびきりげんまん　嘘ついたら絶対はりせんぼん全部飲んでやるゆび切った」

指切りをした瞬間に昴の小さな体が両手を広げて俺の中に飛び込んできた。

薄暗い病院の廊下に昴の泣き声だけが響き渡った。

こんな小さな体にどれ程の哀しみを押し込めていたのだろう。

突然、目の前からいなくなってしまった父親。

可愛がっていたサンとの別れ。

そして大好きな島の人がない孤独。

昴を抱きしめる手に力が籠った。

兄貴の家に戻ると美紀さんと可奈は既に泣き疲れて床に入っていた。そして昴も俺の背中では泣き疲れぐっすりと眠っていた。

昴をリビングのソファに寝かせその横に腰を下ろす。

目の前には思案顔のお袋が暗い影を落としている。

「で、ノリは昴ちゃんをどうするの？　可哀想だけど施設に入れた方が」

「いや、俺が昴と暮らす」

「そんなに簡単に決められる事じゃないでしょう」

「簡単だよ。昴と約束したんだ、俺は何処にも行かないって」

「あんた、子育てをなんだと思ってるの？ 簡単な物じゃないのよ」

「やってみなきゃ判らないだろ」

「やってみて駄目だからなんて訳には行かないのよ」

「それじゃ、お袋が預かってくれるのか？」

「む、無理に決まってるでしょ」

「絶対に施設なんかには渡さないし、昴の母親を探してみる」

「あんたね」

「おばさん。こうなつた典兄は梃子でも動かないわよ」

春菜が俺とお袋の間に入ってくれる。

昔から春菜はこんな感じの役柄だった。

「典兄は直観重視の結果オーライの野生児で宗兄は何事も計算ずくで結果を導き出す学者肌だったからね」

「俺は猛獣か何かか？」

「だって何とかなるって思っているんでしょ？ それに典兄の頭の中には保育園なんて頭にないでしょ。典兄が仕事の時に昴ちゃんはとうするの？」

春菜の言葉に返す言葉も無い。

「これから探すさ」

「あきれた。それで良く昴ちゃんを育てるなんて言えるわね」

お袋が叩き込みにかってくる。

ぐうの音も出ない俺に春菜が何かをプリントアウトした紙を俺の目の前に突き出した。

「どうせそんな事だろうと思っていたわよ。はいこれ、とりあえず典兄の近くの緊急一時保育をしている所だよ。それと私に約束してきちんと役所に相談に行つて保育園を決める事。出来る？」

「ありがとう。悪いないつも」

「素直で宜しい。『ありがとう』って直ぐに言えるのは典兄の良い所だからね」

「しょうの無い子だね。何かあったら必ず連絡するんだよ」
何も変わらない昔からの構図がそこにあった。

緊急一時保育は保護者の都合つまり出産や病気などで保育できない時に一時的に預かってくれるシステムらしい。

とりあえず一時保育で昴の面倒を見てもらっている間に正規の保育所を探さなければならぬ手の掛らない宗一に比べ俺は周りに迷惑ばかりかけて生きてきた。

でも、春菜はどんな時でも手を差し伸べてくれてお袋も嫌な顔をしながらでも必ず助けてくれた。

朝、目が覚めてあんな事があった家にいる事が判れば昴は怖がるだろうし、今の状態では美紀さんの精神的にも好ましくないだろう。

心根は本当に優しい人だから時間だけが何とかしてくれるだろうが

兄貴の葬儀が一段落するまでは無理だと思う。

昴を一番に考えてやる事しか俺には出来ない。

だから俺の家に昴を連れて帰る事にした。

アジ、アジ。サンマ〜

「ノン、おきて。おなががすいた」

「ノンってばあ」

小さな手で誰かが俺の体を揺り動かしている。

「ん？ 昂か？ おはよう」

「ノン、おながすいた」

「あいな、昂。最初が肝心だから言っておくけど俺は典彰という名前でお袋たちからは『ノリ』って呼ばれているけど『ノン』じゃなくて『ノリ』だ」

「だって。ノンとゆびきりした！」

昂が口を尖らせ顔がどことなく寂しげに見える。

「ん〜 そんな顔をするな。好きなように呼べ。もうノンで良いから」

「うん！」

一気に昂の顔が明るくなり、内心わざとやっているのかと思っってしまった。

嫌いじゃないが基本的に子どもが苦手で、女なんて何を考えているのか判らない生き物だと思っている。

そんな俺の隣には最強な生き物が居るのかもしれない。

「朝飯か、何にもないな」

1週間ほど家を空けて小笠原から帰ってきた翌日に冷蔵庫の中の食材が生きている筈もなく、どうするか考えてしまう。

近くのコンビニかそれとも駅前早朝営業しているファーストフードか……

時計を確認すると10時を回っている。

俺も昂も余程疲れていたのだろう。

昂はそんな事はものともせず俺の家の中を探検し始めた。

「うわあ、きのお家だ。ん〜ん、ノンひらかないよ」
「ほいほい」

縁側にある大きなガラス戸を小さな昴が必死になって開けようとしていた。

俺の住んでいる家と言うのは、今は亡き爺ちゃんが晩年暮らしていた家で木造平屋建ての一応庭付きの一軒家になっている。

間取りは2DKと言った所だろうか独り暮らしには十分な広さだった。

手直しをしながら暮らしているので所々にコツと言う物が必要になっていった。

鍵を開け窓の棧を持って軽く持ち上げるようにして開けると軋みながら窓が開き朝とも昼ともいえない太陽が顔を出している。

「うわあ、パパのお家みたいになにがある」

「まあ、猫の額ほどだけだな」

「あれはなあに？ ブロックじゃないの？」

「ああ、生垣だよ。ここじゃ小笠原みたいに年に何度も台風が来ないからな。それに生垣の方が風通し良くて涼しんだよ」

「ふうん。あ、ノンけいたいになってるよ」

「おう」

携帯を手に取り見ると春菜からだった。

寝起きの頭にハイテンションな春菜の声が響く。

「典兄、おはよー。久しぶりにデートしよう」

「デート？ あんな、彼氏の海自のタフガイはどうした？」

「昨日から訓練でしばらく会えないんだもん。もう駅前で待ってるから」

「はあ？ おい！ 切りやがった」

昴を着替えさせ俺もジーパンにパーカーを着てと思っていると昴がきちんと正座をして何かを見ていた。

「ノン、これなあに？」

「それは音楽を聴く機械だよ。俺の爺ちゃんが大切にしていたレコ

ードを聞くんだよ」

「ノンのおじいちゃんのだいじ？」

「そう、だから触るなよ」

「うん」

興味津々で正座までして昴が見ていたのは真空管アンプとレコードプレーヤーだった。

それにしても昴はきちんとしていると言うかとてもしっかりしている。

兄貴と暮らしていた所為だろうか。

駅前に着くと春菜がトレーナーにサブリナパンツ姿で手を振っている。

そしてあろう事か春菜に隠れるように可奈が一緒だった。

「春菜、何を考えているんだ、頭が痛くなってきたぞ」

「ええ、典兄を買物に誘うっておばさんに言ったら可奈ちゃんも連れてけて。どうせ遅かれ早かれ顔を合わすんだからって、悪いのは宗兄で子どもたちに罪はないからって」

「どう説明するんだよ。腹違いの姉妹なんだぞ」

春菜に小声で言うのと直ぐに切って返してきた。

「典兄に任す」

「丸投げかよ！」

「とりあえず、可奈ちゃんも私も朝ご飯未だなんだよね」

「そつくりそのままお返しするよ」

「どうせ典兄の事だから近くのコンビニか朝マックで済ませる所だったんでしょ。食べるなら可愛い女の子に囲まれての方が美味しいでしょ」

「俺、女苦手だしって。痛っ！」

春菜と昴に絶妙なタイミングで脛を蹴られた、それを見て可奈が笑っていた。

早朝から開いているファーストフードで朝飯にする事にした。
駅前の立ち食いソバを押してみたが3人に速攻で却下されてしまった。

まあ、弱冠1名興味を示した小さい奴が居たけど春菜に丸め込まれた様だった。

事情を知らない可奈が同い年ぐらいの昴の事が気になるらしい。

「ノリ、その子って一緒に可奈のおうちにきた子でしょ」

「そうだよ、可奈。可奈とは凄く近い親せきになるかな。同い年だから双子の姉妹みたいな感じかもな。苗字も同じだし」

「そうなんだ。私、可奈。よろしくね」

「うん、私は昴だよ」

「へえ、変わったなまえだね」

「星のなまえなんだよ」

「ふうん」

昴はとても感が良く頭の良い子だった。

昨日の時点で何かを感じ取っていたのかもしれない。

子どもは難しい事を説明する言葉は知らないけれど噛み砕いて教える事でちゃんと理解してくれる。

俺ら大人が考えている以上に色々な事に気づき考えているのだろうと昴と一緒に過ごした僅かな時間ですらそんな事を感じ取る事が出来た。

島育ちの昴が恐らく初めて見るマフィンサンドを不思議そうな顔をして見ていると可奈がお姉さんぽく食べ方を教えている。

子どもってつくづく凄いと思うってしまう。

「で、買い物デートなのか？ 子連れ同士で」

「それじゃ典兄は昴ちゃん洋服のサイズを知っているの？」

「宜しくお願いいたします。春菜様」

「苦しゆくない、良きに計らえ」

「まあ、たまには春菜の服でも買ってやるよ。それが本命なんだろ」
「やったー」

従妹の春菜は宗一と俺にとって幼馴染だったがそれ以上に妹の様な存在だった。

そんな兄と慕っていた片割れの宗一が未だ30にしてこの世を立つてしまった、春菜も寂しくないはずがないのは俺が一番判る事だった。

4人で駅前にある大型衣料品店に向かう。

仕事柄で言えば敵に塩を送る様な感じになるが背に腹は代えられず俺が普段着にしているのも殆どがこの系列会社のカジュアルウェアだった。

「春菜、洗濯が面倒だか多めに選んでくれよ」

「はい」

春菜・昴・可奈が楽しそうに洋服を取っ替え引っ替え選んではかごに入れている。

実際問題としては昴と2人で来ていればこうはならなかっただろう。昴と可奈は本当に姉妹の様にはしゃぎ回っている。

大きくなって本当の事を知っても仲良くしていてくれる事をただ願うしか今は出来なかった。

春菜にワンピースを買ってやり女の子が好きそうなカフェに来ていた。

昴と可奈は楽しそうにお喋りしている。

都会を殆ど知らない昴にあれこれと教えてあげていると言う感じが本当に姉妹の様だった。

「凄いね、子どもって」

「そうだな、だけど本当の事を知った時にはどうなるのかな」

「それは私達次第じゃない。まあ、美紀さんによる所が大きいと思うけど」

「それは心配ないと思うぞ」

「何で典兄がそんな事を言いきれなの？」

「あん？ だって宗一が選んだ嫁さんだぞ」

「そっか、そうだね」

「しかし、居づれーなここは」

「うふふ、ノンちゃんだもんね」

「うるせえ」

まあ、後日何で俺がノンなのかなんとかなく判るのだが……

パステルカラーで統一されたような店内で春菜とチビ2人は問題ないが体の大きな俺が浮きまくっていた。

「そう言えば昴ちゃんはお家で何をして遊んでいるの？」

「んと、えほんをよんだりぬいぐるみであそぶの」

「へえ、本が好きなんだ」

「うん」

俺の殺風景だった部屋には昴の荷物として送った本や小物が彩りを添えはじめていた。

春菜と可奈と別れて昴の布団を買ってとりあえず自宅に戻り荷物を部屋に放り込む。

「疲れた」

「ノン、おながすいた」

「つて、おい。昴。さっきあんなにパフェやら何やら食べてただらう」

「だってあれはご飯じゃないもん」

「判ったよ、そんな顔するな。冷蔵庫には何も無いから買い物に行くぞ」

「うん！」

駅前まで再び出る事になった。

家から出ると昴が俺の手を掴んだ、何でも外は危ないからと春菜に教わったらしい。

俺が危ないのか？

駅前のスーパーでとりあえず野菜などをかごに入れる。

「なあ、昴は何が食べたいんだ？」

「おさかな」

「へえ？ 魚？ ハンバーグとか鶏のから揚げとかじゃなくて」

「うん、おさかながいい」

昴のリクエストに答えて鮮魚コーナーに行くと言の魚からお刺身まで色々と綺麗にパック詰めされて並んでいる。

「どれが良いんだ？」

この時期で言えばサンマか、アジの開きなんかも良いかもしれない。しばらく昴がショーケースの中を覗き込んで少し残念そうな顔をした。

「いない」

「はあ？ 魚が良いんだろ」

何も言わずに昴が小さく頷いた。

仕方なく今日のメインになるであろう魚以外の買い物を済ませて駅前通りにある商店街に向う。

確かここに魚屋があつたはずだ。

ガラスのショーケースの前に発泡スチロールに氷が入れられ沢山の魚と値札が付い並んでいる。

それを見た途端に昴の目が輝き始めた。

それは決してスーパーの鮮魚がどうと言う意味ではなく。

多分、島ではこんな感じの新鮮な魚を食べていたのだろう。

「どれにする？」

「え？ わたしがえらんでいいの？」

「良いよ、昴が食べたいんだから」

昴が魚を覗き込むように見ていると店主らしき人が出てきた。

「らっしゃい。へえ、お嬢ちゃんが目利きをするのかい？ 今日の良いサンマが入ってるよ」

昴が俺と同じ年くらいの店主の声なんか耳に入らないくらいの勢いで魚を覗き込んでいる。

「これが良い」

「へえ、感心するね」

「だってこのこたちが一番きれいだもん」

「よっしゃ、とっておきの天日干しのアジの開きなんかどうだいって、お嬢ちゃんが買う訳じゃないか」

店主がバツの悪そうに頭を掻いて俺の方を伺っていた。

「それじゃ、昴が選んだサンマを2尾とお奨めのアジの開きを2枚、お奨めなんですよね」

「当然でしょ。こんな目利きのできるお嬢ちゃんに嘘は付けないよ。脂がのっついてサンマもアジも最高だよ」

「それじゃ、帰ってから七輪で焼こうか」

「へえ、今時七輪なんて風情があるね」

「サンマは七輪でしょ。まあ、死んだ爺さんの受け売りだけどね」
魚屋の店主が腕組みをしてしきりに感心していた。

だいぶ日が傾いてきたので早めに帰る事にする。

「アジ、アジ。サンマ、サンマ、サンマ。アジ」

「そんなに魚が好きなのか」

「うん、おさかなはね たべるとあたまがよくなるんだよ」

「そうなんだ。まあ、何事もバランスが肝心だからな」

「ふうん」

「昴はサンマの苦い所とか大丈夫なのか？」

「うっ、ちょっときらいだけどおばさんやパパがちゃんと食べなさ
いって」

「そっか、じゃ今日は苦いの抜きで。俺も苦手だし」

「ほんとう？」

「本当、本当」

家に着くまで昴はアジとサンマの歌が何かをずっと口ずさんでいた。

爺さんが使っていた七輪を縁側にひっぱり出してきて炭に火をつけてみる。

まだ、現役でバリバリに使えそうだった。

俺が台所で食事の支度をし始めると昴が隣から覗き込んでいる。

今までは時々だが独りで作っていたので何だか昴の視線がこそばゆい。

サンマの頭の所にぐるつりと切り込みを入れ、中骨を切りエラの下も切っておく。

そしてお尻の穴の手前にも切り込みを入れて頭を引っ張ると頭と一緒に内臓が綺麗に出てきた。

「うわあ、すごい」

昴が驚いた様に感心している。

たしか何とか家の食卓が何かでやっていた裏ワザだか何だかだと思う。

「昴も手伝ってみるか？」

「ええ、いいの？ パパはまだ小さいからダメだつて」

「まあ、包丁や火は危ないから駄目だけどそれ以外なら大丈夫だろ」

「うん！」

物置に七輪と一緒に置いてあった踏み台を持ってきてサラダ用のレタスを千切ってもらう。

「できた」

「それじゃ、トマトとキュウリを洗って」

「うん」

今は俺に出来る事を最大限してやるしか無いようだ。

これからは昴が居るのだし食事もきちんとしたものを食べさせてやりたい。

お袋がたまに顔を出してその度にきちんと食べなさいと、乾物や日持ちのするカボチャやジャガイモなどの野菜を置いていくので取り敢えず鍋で出汁なんかを取ってみる。

「昴。焦げてないか？」

「うん、だいじょうぶ」

昴は縁側でサンマの番をしている。

七輪には少量の炭しか入れてないので脂がたれて火がついてもサンマが焦げる様な事は無いはずだし、昂にも絶対に覗き込むなと教えてある。

「ちゃんと見ておかないとサザエさんの歌になっちゃうからな」
「うん」

「どれ。おお、良い感じに焼けてるじゃんか」
「おいしそうだね」

「絶対に美味いぞ」

晩飯はメインがサンマの塩焼きでかぼちゃの煮物とサラダ。それに味噌汁とご飯になった。

「いただきます」

「ああ、ノンはちゃんと手をあわせないとダメなんだよ」

「はい、すんません。まるでお袋みたいだな」

「ひじもついちゃダメ」

「重ね重ね、すんません」

子どもの頃を思い出す。

宗一と暮らしていた昂を見る限り宗一はお袋の言いつけを忠実に守って生きてきたようだ。

それに対して俺は反抗し続けてきた。

そんな俺が昂を育てていけるのか一抹の不安が過った。

サンマの身を開いて小骨と中骨を取り除いてやると昂は器用に箸でサンマを小さな口に運んでいる。

昂は凄くしつかりしている子なんだと実感した。

昂と風呂に入り髪の毛を乾かしてやって寝かしつける。

自分の布団がよほど嬉しいのかはしゃいでいたが横になると遊び疲れたのか直ぐに小さな可愛らしい寝息をたて始めた。

昂が寝たのを確認してパソコンで春菜からもらった紙を見ながら緊急一時保育を行っている所を調べ始める。

はつきり言うとなさしいし迷ってしまう。

近くの場合は時間がきつちりしていて融通があまり聞かず。

融通が利く場所は職場から遠回りになる場所だった。

しかし、現時点で俺は残業が殆どないと言つかしなので近くの保育園にお願いする事にした。

その方が昴にも俺にも良いだろう。

あの出勤ラッシュに昴を巻き込むことを考えただけでぞつとしてしまふ。

おにぎり

「ノン、おきて。おくれちゃうよ」

「ふあい、ありがとう」

いつもより1時間早い朝だ。寝ぼけ眼を擦りながら洗面所に向い顔を洗う。

「昴？ 何してるんだ？」

「おにぎり！」

「ふえ？」

台所を覗くと昴が小さな手で形は色々で大きさも区々だけど一生懸命におにぎりを作っている。

「あのね、島のおばさんがおしえてくれたの」

「そっか、じゃ卵でも焼くか。目玉焼きと卵焼きはどっちが良い？」

「たまごやき」

昨夜の残りの味噌汁を温めなおして卵を割りほぐして卵焼きを作る。

これからはこれが日常になっていくのかななんて思ってしまう。

そんな事を考えながら朝飯を食べてスーツに着替える。

昴は既に着替えが済んでいた。

「なあ、昴。お前ちゃんと自分の布団で寝てた？」

「ねてたよ」

「おかしいな、子猫かなんかと寝ている夢を見たよ」

「ねてたもん。おくれちゃう」

急に怒りだして体を上下にゆすって早くと体で表現している。

「はいはい」

「「返事は1回！」」

急いで連絡を入れておいた保育所に向かう。

保育所に近づくにつれて子ども連れのお母さん方の姿が目につく。目の当たりにすると異世界に迷い込んだような感覚に陥る。

俺が知る筈も無い世界の雰囲気呑み込まれて途方に暮れそうになった。

「ノン、おくれちゃうよ」

「ああ、そうだな」

すると若い保育士の女の子が声を掛けて来てくれた。

「おはようございます。能登島 昴ちゃんですよ」

「あ、はい。宜しくお願いします」

「じゃ、昴ちゃん。お部屋に行こうか」

「う、うん」

昴が不安そうな顔をして俺の顔を見上げている。

「そんな顔をするな。時間には迎えに来るから。約束したろ」

「うん！ ノン、いつてらっしゃい」

「じゃな」

昴の頭をなでてやると嬉しそうに手を振って見送ってくれた。

何だか新鮮な気持ちにさせてくれる。

その反面、不安が過る。

皆と仲良くできるのか？

苛められたりしないだろうか？

泣いたりしないよな……

仕事中も昴の事が頭から離れなかった。

今日は朝一で営業ミーティングがある日だった。

「沢渡君、大丈夫かね」

「ご迷惑をおかけして申し訳ありませんでした」

「まあ、その分は営業成績でカバーしてもらえばいいから」

「はい」

直ぐに営業成績の報告書を各自が提出して部長が目を通している。

俺に対する視線は相変わらず冷ややかで営業成績ですら今回も冷ややかな結果になっているに違いない。

「野田と沢渡は何とかならないのか？ 野田は新卒とは言え半年が

過ぎようとしているんだぞ。それと沢渡。お前も相変わらずだな」
周りから失笑が漏れている。

野田は今年の大卒の新入社員で営業成績が伸び悩んでいる。
下手をすればこのまま辞めてしまいかもしれない状況なのは俺が見ても判る状態だった。

午前中はお得様回りをして会社に戻り社員食堂で昼飯を食べ、喫煙
コーナーでコーヒーを飲みながら煙草を吸うのが習慣になっていた。
煙草を咥えライターを手に取ると昂の顔が浮かんできた。

昂の事を考えると俺がこんな体たらくで良い訳がない。
が、成績を上げようとすれば必然的に仕事量が増え相手先との付き
合いも増える事になる。

そうなれば残業をし時間外で接待せざるおえなくなる。

子育てと仕事の両立がこんなにも大変だなんて考えた事すらなかつ
た。

皆どうやって生活しているんだ？

「パパとは匂いが違うか……」

昂の言葉が脳裏をかすめる。

咥えた煙草を口から外し残りの煙草と一緒に捻りつぶしてゴミ箱に
投げ捨てコーヒーを口にする。

「どうしたの？ 沢渡君。煙草なんて捨てちゃって」

「ああ、熊谷さん。俺、煙草を止めようかと」

「ええ！ 本気なの？ お兄さんの事でかな？」

「まあ、それもありますけど。事情があって6歳の女の子と暮らす
事になったんですよ」

「ええ！ それって沢渡君が育てるって事？」

「まあ……」

熊谷さんは俺ら営業の先輩にあたる女性で、小柄な体に似合わず女
なんて感じさせないくらい男に負けじと営業に駆けずり回り俺ら後
輩の面倒も良く見てくれた。

でも、子どもが生まれたのを機に営業から外れ今は契約社員として営業部のサポートとして事務処理などをしてきている。

熊谷さんが営業部を離れる時には結構な騒ぎになり。

サポートならと条件付きで契約社員として復帰してくれた。

俺も入社したての頃には良く尻を叩かれたもんだった。

「で、いきなり壁に突き当たったって顔をしているよ」

「熊谷さんには敵わないな。一緒に暮らす事になった子は昂って言うんですけど。昂の事を考えるとこのままじゃいけない気がするんだけど、営業をがんばれば残業や接待が増えてくるわけだし。そうすると昂に寂しい思いをさせる事になるしお互いに何かを我慢して犠牲にしなきゃいけないのかなんて」

「そうだね。でもそれじゃ子育てなんて出来ないと思うよ。我慢や犠牲を続けたらお互いにつぶれてしまうと思う。その為にはパートナーが必要なんじゃない？」

「パートナーですか……熊谷さんは知らない訳じゃないですよ」

「うん、知っているよ。沢渡君の成績が芳しくない理由も恋人も作るうとしない理由もね」

「じゃあ」

「だから仕事のパートナーを作りなさい」

「仕事のですか？」

「そう、居るでしょ。入社したてのあなたにそっくりな男が。あなたが変わったのは誰のおかげなの？」

「それは中田先輩が俺を」

「でしょ、中田君はもういないけどその思いや考え方は沢渡君が受け継いでいるんじゃないの？ 周りを変える事は難しい、でも自分を少しずつ変える事は出来る。そうすれば自然に周りも変わってくと思うけどな」

「少し考えてみます」

「悩んでも何も変わらないぞ。行動あるのみそれが沢渡典彰の信条じゃないの。頑張れ！ 私はいつでも君の味方だからね」

「ありがとうございます。それとこれから相談に乗ってください。子育ての事とか」

「あはは、任せなさい」

熊谷さんが腕を腰にあてて豪快に笑っている彼女には凄く安心感がある。

それは公私ともに充実しているからなのだろうか。

定時に上がろうとすると声を掛けられた。

「沢渡さん。飲みに行きませんか？」

「今日もか？ 悪いがしばらく飲みに行くのは無理だな」

「ええ、断る事を知らない沢渡さんが飲みを断るなんて」

営業なんて仕事は目に見える成績で優劣がつけられてしまう。ある意味学校と同じような場所だと思う。

そして学校と同じように成績が良いだけで人を見下す奴もいればそうでない奴もいる。

成績が冷ややかな俺にでも成績を抜きに付き合ってくれる仲間がいる。

「そう言えばお前の所って2人目が産まれるんじゃないのか？」

「ええ、もう直ですよ。だから母ちゃんに尻を叩かれまくりですよ。成績を上げるって、生命保険やらなんやら結構大変すから」

「生命保険か」

「それに学資保険もね」

「それって進学の時とかにつて奴か？ まだ小さいのに」

「あのね、沢渡さん。小さい時からじゃなきゃ意味がないんですよ」

「大変だな、パパになるのも」

「でもね、子どもの笑った顔を見るとそんな事なんて一発で吹き飛ばしますよ」

「そっか、悪いが先に帰るぞ」

「お疲れ様です。飲むときは声を掛けてくださいよ」

「おう」

嬉しそうに目を細めて子どもの話を話す同僚の笑顔が頭に残った。
そんなあいつからは我慢や犠牲なんて全くと言って良いほど関係ない言葉に思えた。

保育園に昴を迎えに行くとき直ぐに昴が飛び出してきた。

「大人しそうだから少し心配していたけど良い子でしたよ。でも、お父さんと一緒にいる時の笑顔が一番だね」

「昴、帰ろうか」

「うん！」

若い女の保育士さんの言葉が何だかむず痒かった。

熱

翌日、思い切って水野課長に声を掛けた。

「課長、野田を俺に預からせてください」

「おいおい、どう云う風の吹き回しだ」

「実は……」

昴の事もこの際だから全て話しておいた方が良いと判断した。

会社には昴を扶養家族として既に届を提出してある。

遅かれ早かれ聞かれるはずで早いうちに聞いておいてもらった方が何かと都合が良いし、水野課長は俺が一番信頼している上司だし今まで俺の事を庇い続けてくれた人の1人だ。

「そうか、そんな事が」

「はい」

「本気なんだな」

「中途半端な気持ちであいつを育てようなんて思っていません」

「そうか、部長には俺から事情を説明しておくよ」

「ありがとうございます」

「でも、これだけは言っておく。今まで沢渡がしてきた事に対して営業部内に反感を持っている奴も少なくない。直ぐに協力なんてしてくれないだろう。それだけは肝に銘じておいてくれ」

「判りました」

俺は野田を連れて営業に回った。

朝のミーティングで営業部内に俺が野田と組むことが全員に伝えられた。

課長の言葉通り良い感情を持っている奴は殆ど居ないようだ。

それも当然の事と言えばそうに違いない。

窓際の俺と新人の野田は営業成績ではワーストワンかツーを行き来していたのだから、そんな2人が組んで今更どうするくらいにしか

思えないのは仕方がないのか。

そんな営業部の中でも課長だけはこんな2人にも期待をしている様だった。

野田に聞かれた質問には答えるけど何かを教える様な事はしない。中田先輩も同じように俺を営業に連れ回し、先輩の全てを曝け出してくれた。

そこから何を学ぶかは本人次第だ。

野田の事も分け隔てなくバックアップしていた熊谷さんの言葉が俺を後押しする。

そしてそろそろ昴の保育所を決めなきゃいけない日が近づいてきた。何故だか昴が朝から俺にべったりと纏わりついていていた。

「昴、早く支度しろよ」

「うん」

「どうしたんだ？ 何処か具合でも悪いのか？」

俺の問いに昴は首を横に振った。何処となく昴の瞳が潤んでいて顔が少し赤くなっているのを朝の忙しさで見落としてしまった。

午後からの営業回りの予定を野田に説明している時に携帯が鳴った。

「沢渡先輩、どうしたんですか？」

「保育所からだ」

「へえ？ 保育所？ 先輩って子持ちだったんですか？ たしか独身じゃ」

そんな野田の言葉が吹き飛んだ。

昴が熱を出したらしい。

子どもの平熱は基本高いほうで午後になると更に高くなるので少し様子を見ると伝えられ、更に熱が上がれば直ぐに連絡するとの事だった。

心配で仕方なく仕事に身が入らない、営業にとってそれは一番いけない事なのだが流し仕事しか出来ていないのを自分自身が一番感じた。

野田には申し訳ないが事情を説明している余裕なんて今の俺には何処にも無かった。

定時に帰社して翌日の予定は連絡するからと報告書を野田に丸投げして保育所に向かった。

「遅くなりました。昴は」

「ああ、昴ちゃんのお父さん。少し熱が下がったみたいなので連絡はしませんでしたけれど一応病院にお願いしますね」

「判りました。昴、帰ろうな」

「うん」

昴が力なく俺の脚にしがみ付いた。

「子どもは体調を崩すと普段甘えない子でも甘える事がありますので見逃さないで上げてくださいね」

「すいませんでした」

「昴ちゃん、またね」

「うん、バイバイ」

病院に昴を連れていくと軽い風邪だろうと医者に言われ薬を受け取って家に戻ってきた。

消化に良い物と思ってウドンと昴が好きな魚をと思いカレイの煮つけを作ったけれど箸が進まないようだった。

「ゴメンね、このへんがへんで…… ゲホ」

いきなり昴が喉の辺りを触り食べた物を吐き出してしまった。

慌てて汗を拭いていたタオルで受け止め慌てて風呂場から洗面器を持ってきた。

「ノン……」

「気にしなくても大丈夫だよ。薬、飲めるかな？」

「のみたくない」

「でも、少し飲んだら楽になるからね」

「うん」

医者が出してくれた飲み薬を飲ませるが直ぐに戻してしまう。

どうしていいものか困り果ててお袋に電話すると何でもつと早く連絡しないのかと激怒されてしまった。

それでも子どもの頃の俺たちにしていた事を教えてくれた。

「薬はジュースに混ぜたらあんた達は飲んでくれたわよ。それと温かくして寝かせなさい」

「判ったよ」

やっとの事で薬を飲ませ昴を寝かしつける。

顔は赤くなり息苦しそうに呼吸をしている。

冷やしたタオルで顔を拭いてやるくらいしか出来ない自分が情けなかった。

久しぶりの本格的な営業回りを始めたばかりで俺自身も疲れていた様で、気づかない間に昴の横で寝てしまったようだ。

どれだけ時間が過ぎたのだろう。

まるでストーブや焼けた炭を抱いているような感じがして目が覚めた。

目の前の昴がとても苦しそうにしている呼吸は浅くそして早い。

体を触ると信じられないくらいに熱くなっていてぐったりとして力が無い。

掛け布団で昴の体を包み込み、気付くと家を飛び出していた。

携帯でタクシーでも呼べば数分で来てくれるだろうが気が動転してパニックになり、大通りに向かって走っていた。

大通りまであと少しと言う所で前方の暗がりですの罵声と女の叫ぶ声が聞こえてきた。

「金だよ、金をよこせ」

「駄目よ、これは大事なお金だから」

「うるせ！ 旦那が渡せと言っているんだ。サッサと渡しやがれ！」

犬も食わない夫婦喧嘩なんかに係わりあっている暇はない。

昴を病院に連れて行くのが最優先だ。

通り過ぎようとした瞬間に男が拳を振り上げた。

女の体が俺の方に倒れる様に崩れ、思わず女の体に手を回して支えてしまった。

すると殴った男が俺の顔を見て顔を引き攣らせている。

「な、なんだ貴様。ただの夫婦喧嘩だよ」

そう言つて後ずさりをしながら路地に走りだして姿が見えなくなつてしまった。

俺が支えている女の格好は流石にここ数日の晩は冷えると言つのに薄手の紺色のワンピース姿だった。

泣きつ面に蜂とも言ふべきか右手には苦しそうな昂が、そして左手には気を失っている見ず知らずの女が……

途方に暮れそうになると大通りから空車のランプをつけたタクシーが俺たちのいる路地に入ってきた。

大通りで客をおろしＵターンしようとしていたのかもしれないが女を引き摺るようにしてタクシーに縋り付いた。

「どちらまで」

運転手が怪訝そうな顔でミラー越しに俺を伺いながら声を掛けてきた。

当然と言えば至極当然の事だろう。

夜遅くに意識の無い女と布団に包まれた子どもを抱いてタクシーに乗ろうとしている人間なんて世界広しと言え映画の世界じゃあるまいしあり得ないのだから。

行先を告げようとした時に女が気づいた様だった。

女の顔を覗き込み俺は息をのみ胸の奥が締め付けられるような感覚になるが、直ぐに腕の中の熱が俺を現実に戻してくれた。

「あの、大丈夫ですか？」

「あなたは誰？ 私を何処に連れて行く気なの？」

「勘違いするな、俺はただ」

女と目が合つと狭い車内で女が後ずさりをして逃げ出そうと慌てた。

すると運転手が強張った顔で無線機を手にした。

ここで警察なんか連絡されたらとんでもない事になってしまう。そんな状況で俺が大声を上げれば収拾が付かなくなるのが目に見えた。

「頼むから病院に行ってくれ。その後なら警察なり何処にでも行く。頼む」

「病院？」

懇願するしかなかった。

俺の言葉に女が直ぐに反応して俺の腕の中で苦しそうにしている昴に気付き昴の首筋に手を当てた。

「凄い熱じゃないの、直ぐに病院に。運転手さん早く」

病院に着くと女が俺の腕を掴んで病院の緊急窓口に行き子どもの急患だと告げる。

診察室に入れられ状態と経過を説明させられた。

軽い脱水症状があり直ぐに点滴が投与され、体を冷やすために腋の下や首筋にタオルで包まれた氷嚢が当てられている。

何もかも初めての事で戸惑いどうして良いのか判らず落ち着いている事なんて出来ない。

しばらくすると昴がうつすらと目を開けた。

「昴、大丈夫か？」

俺の声が聞こえた為ではなく投与されている薬が効いてきているのだろう。

力なく再び目を閉じてしまった。

呼吸はいくらか楽になったのか小さな寝息が聞こえる。

それだけで全身が脱力してしまう。

「ちよつと、来なさい」

「な、何を」

女が俺の腕を掴み昴が寝ている処置室からひんやりとした廊下に引っ張り出されてしまった。

「あなたがあの子の親なんですよ」

「まあ、一応」

「一応ってあなたね！」

「それぞれの家には事情つてもんがあるんですよ。あなたが旦那に殴られたように」

頭に血が上っていたのに彼女の顔を見てクールダウンして一気にマインスの世界まで落ちてしまった。

「すみません、言い過ぎました。それこそ事情って奴ですよね」

哀しそうな彼女の顔が少し落ち着きを取り戻している。

「私こそごめんなさい。でも伝えておきたい事があって。子どもに何かあった時は大人が狼狽えちゃいけないんです。落ち着いて大丈夫だからって言うてあげないと」

「無理す。あんな昴を見たのは初めてで」

「大丈夫、出来ます。子どもは本能的に誰が助けてくれるか判るんです。これは弱い子どもが生き抜くために持っている力だと思えます。昴ちゃんでしたっけ、昴ちゃんはあなたに助けを求めているんです。そんなあなたが狼狽えていたら昴ちゃんは不安になるばかりじゃないですか。違いますか」

「はい」

「私もあなたの家庭の事も事情はよく知りません。でもあなたが昴ちゃんを病院に連れてきたと言う事はそう言う事なのでしょう。だったら尚更です、昴ちゃんにはあなたが付いていてあげれば大丈夫なんです」

「ありがとう御座います」

「それともう一つ。熱が体にこもって何も受け付けない時はスポーツドリンクを凍らせて小さく砕いて食べさせてあげると良いですよ。ただし体が驚いてしまうので少しずつね」

彼女が言う所の俺が昴を病院にと言うのは恐らく母親がいらないと言う事をさすのだろう。

しかし、見れば見るほど彼女は彼女に似ていた。

すると看護師さんが彼女に声を掛けた。

「さあ、次はあなたの順番よ」

「え、私は別にどこも悪くないです」

「その顔の傷はどうしたのかしら？」

「これは、その」

彼女が思わず口ごもってしまった。

看護師や医者に『不注意でぶつけた』と言い訳しても直ぐに見破られてしまう事を知っているのだろう。

すると看護師の矛先が俺に向いた。

「まさか、つて事は無いわよね」

看護師の冷たい視線が俺に突き刺さる。

思わずホルドアップして首を横に振るしか出来なかった。

「彼はただの行きずりの人よ。旦那に殴られたところを助けてくれたの。この際だから診てもらって診断書でも証拠にもらっとくわ」

彼女が静かにそう言いながら看護師さんと診察室に入っていく後姿を見送った。

家に帰って来る頃には日付が変わっていた。

教わった通りにスポーツドリンクを製氷皿に半分くらい流し込んで凍らせる。

「ノン」

「台所だよ」

昴が弱弱しい声で俺を呼ぶ声が聞こえて部屋に行くと薬が効いて少し眠れたのか顔の赤みも少し冷めている様だった。

布団の横に腰を下ろすと昴が小さな両手を広げて俺の顔を伺っている。

横になると昴が抱き着いてきた。

「ノンがつめたくてきもちいい」

「うわぁ、俺つてこのまま……」

今更ながらスエットにＴシャツ姿で夜中に駆けずり回っていた事に

気付いて凹んでしまう。

そりゃ、タクシーの運転手があんな顔をする訳が理解できる。

昴の体は心なしが熱が取れて温かく感じる。

それでも波の様に何度となく熱が上がり水分を補給した為か汗をかいてその度に洋服を着替えさせ凍らせたスポーツドリンクを与える。そんな事を一晩中繰り返した。

熱を出しただけで小さな子どもの体力はあっという間に消耗してしまふ。

そんな昴を見るたびにどうして俺じゃないんだと辛くなる。

翌日になると口数も増え食欲も出て来たようだ。

心配性のお袋に連絡を入れると食欲が出てきたら安心だけど油断は禁物だと釘を刺された。

おかゆや消化に良い物を食べさせ薬を飲ませて昴と共に横になる。

すると昴が俺の左目の上にある傷跡を触ってきた。

「いたい？」

「もう治ったから痛くないよ。それにこれは昴の所為じゃないだろ」

「でも」

「でももへつたくれもないの。この傷は誰も悪くないの。いいね」

昴と兄貴を連れ帰った日にグラスで出来た傷は思ったより早く抜糸が出来て、その後は消毒すら必要ないからと言われた。

新しい傷の所為か時々痒くなる時がある、当然の事だけど痛むことは無かった。

会社にはもう一日休む事を告げて野田には何かあればいつでも連絡する様に伝えてある。

まだ覚束ないが大丈夫だと思う、これから俺も野田も正念場だと思いいな。

流石に寝不足が続き、いつの間にか寝入ってしまったようだ。

昴の声が遠くから聞こえる。

「ノン、あさだよ。おくれちゃうよ」

「ふえい？ 昂、大丈夫なのか？」

「うん」

「どれどれ」

昂のおでこを触り首筋に手を入れて体温を感じようとすると昂が怒り出した。

「もう、そんなにさわらないで。お腹がすいたの！」

「ごめんな」

「ノン、はやくごはん」

「はいは一回だな」

「うん」

こんな小さくても女の子は女の子なんだと実感する。

ベタベタと男の俺に触られるのが恥ずかしかったのだろう。

「ノンのかお。きたない」

「き、汚い？」

「うん、おひげがはえてる」

手で顎を触ると無精髭が伸びている。

昂に汚いと言われ衝撃を受けながら洗面所に行くと鏡の中に濃いおっさんの顔があった。

「ノン、朝ごはん」

「はいはい」

「もう、はいは一回でいいの」

ふおっとけーき

一時緊急保育の期限内に何とか保育園が見つかり昴と実家に向かっていた。

「ノン、パンケーキが食べたい」

「パンケーキ？」

「うん、みっちゃんがおやつに食べておいしかったって」

「みっちゃんって保育園の？」

「うん」

みっちゃんは保育園で仲良くなった女の子らしく昴との会話の中で時々名前が出てきた。

「パンケーキってホットケーキの事だぞ」

「ふおっとけーき？」

「そつ」

確かホットケーキを綺麗に焼くにはフライパンを温めてから濡れ布巾に置いて一度温度を下げて焼くのがコツだったはずだ。

ホットプレートがあれば楽なのだが家にそんな物は存在しなかった。実家が兄貴の家にならあるのを憶えている。

お袋がたまには帰って来いとうるさいく言つのを思い出し実家に向かう事にした。

島育ちの昴は電車が珍しいのか電車に乗るのを楽しみにしている節がある。

兄貴と昴を島から連れて帰ってきた時も確かそうだった。今も俺の隣で窓の外を流れる景色を楽しそうに見ている。

「なあ、昴。保育園用のお弁当箱とかを買わないといけないのだけどの熊のキャラクターで良いのか？」

「くまじゃないもん、ねこだもん」

「ええ、その昴が持っているぬいぐるみって猫なの？ どう見ても

目つきの悪い熊にしか見えないぞ」

「ねこのマノンだもん」

「ま、マノン？」

「うん、くろねこのマノン」

「じゃあ、俺は？」

「ノン」

「そいつは？」

「マノン」

「それって可愛いのか微妙だな」

「かわいいの。ほら」

昴がマノンを俺の顔の前に突き出すのではなく顔の横に見比べる様に突き出した。

子どもって純粹で残酷な生き物だ。

俺と目つきの悪い熊ぬこのぬいぐるみとを一緒にしないでくれ。

そしてある共通点に気が付いた。

昴が大好きなぬいぐるみは目つきの悪い猫のマノン。

昴が可愛がっていた目つきの悪い犬がサン。

昴が懐いたのが目つきの悪い俺、ノン？

本気で凹む……

「ただいま。昴を連れて来たぞ」

「電話くらいすれば車で迎えに行ったのに。昴ちゃん、いらっしやい」

実家の玄関をくぐるとお袋が出迎えてくれた。

するとそれまではしゃぎ回っていた昴が俺の後ろに隠れてズボンを掴んでいる。

「このくらいの距離なんて島育ちの昴ならなんて事は無いよ。ほら、

昴。俺の母ちゃんだ挨拶くらいしろ」

「こんにちは」

昴の声は蚊の鳴く様な声だった。

「あらあら、緊張してるのかしら？」

「お袋、親父は？」

「ボウリングに行ったわよ」

「ボウリングって玉を転がしてピンを倒すあれ？」

「そうよ、最近はサークルに入って暇さえあればボウリング場通いよ」

親父の奴、逃げやがった。

昔から面倒事が嫌いな親父は事ある毎にお袋に問題を丸投げして行方を晦ます悪癖があった。

「さあさあ、上がった。お菓子も買つてあるのよ」

「昴、ほれ」

「う、うん」

居間に行くとお袋が俺にはお茶を昴にはオレンジジュースとお菓子をを出してくれた。

昴は俺の服を掴んだまま俯いている、そんな昴を見てお袋が声を掛けてくれる。

「どうしたのかな？ お菓子は嫌い？」

お袋の問いにも昴は小さく首を振るだけだった。

そんな状況を打破するかのように玄関から春菜の声が聞こえてきた。

「おばさん、昴ちゃん達来てる？ ああ、昴ちゃんの靴を発見！」

ドタドタと板張りの廊下を走る音がして襖が勢いよく開いた。

「昴ちゃん、おひさー」

「あのな、春菜。俺に挨拶は？ それと何で昴達なんだよ」

「もう、細かい事を気にすると大物になれないよ」

「あのな、お前こそそんなに大雑把だとタフガイに嫌われるぞ」

「大丈夫だよ。彼は私にぞっこんだから彼女すら出来ない典兄になんて言われたくないよ」だ。昴ちゃん、お庭で遊ぼうか」

「うん」

春菜が昴に手を差し出すと嬉しそうに昴が春菜の手を握って2人で庭に飛び出して行った。

「ノリ、昴ちゃんは普段からあんな感じなの？」

「いや、島育ちで色々な人の中で育っているから物怖じしない方だと思う。ここに来るまでは俺の家族に会えるのを楽しみにしていたみたいけど、いざ来てみたらあんな事があつた時に居た人が居た訳だ。春菜もあの場に居はしたけど後で一緒に買い物したりしたかな。これで美紀さんでも居たらもつと怖がるかもしれないけどな」

「美紀さんも可奈ちゃんと後から来るわよ。昴ちゃんが来ることを話したら可奈ちゃんが昴ちゃんに会いたがつて」

胃の辺りがキュンと締め上げられる。

親父がケツを捲る筈だ。

可奈は春菜と一緒に昴と買い物に行つて楽しかったのでまた遊びたかつたのだろう。

「時期尚早なんじゃないのか」

「遅かれ早かれの問題でしょ。絡まつた糸は早い時期に解いてしまつた方がよいのよ。無駄に時間が経つと解けるものも解けなくなつてしまう時があるの」

「時間だけが解決する事だつてあるだろう」

「一応、四十九日も終わつたんだし良い時期だと思うの」

「そうだな、兄貴が見初めた美紀さんだもんな。だけど」

「お母さんだつて判っているわよ。昴ちゃんの事を一番にでしょ」

兄貴を連れ帰つてしばらくして葬儀が執り行われた。

それは美紀さんの達での願いで、離ればなれで暮らしていたのだから最後の時は家族だけでと内々で執り行われた。

俺自身も参列すべきだったが昴が混乱しないように何事も無かつたかのように過ごした。

兄貴なら絶対に判つてくれると信じているから。

そして四十九日の法要で分骨され本骨は美紀さんの元に、兄貴が焦がれた星が降る小笠原に分骨は埋骨される事になり天文台の同僚に託された。

今日、美紀さんと可奈が実家に来るのは可奈が昴に会いたがつてい

ただけじゃないのが俺には判った。

それは俺自身が美紀さんに頼んでいた事があるからだろう。

「昂、買い物に行くぞ」

「え？」

「ホットケーキの材料を買いに行こう」

「うん！」

「典兄、私も」

昂と春菜の3人で実家の近くにあるスーパーに歩いて向かう。

昂は見慣れない場所だからなのか春菜と手をつないでキョロキョロしながら歩いている。

「ノン、あそこの山みたいなのは、なに？」

「あれは土手だよ。あの向こうに大きな河が流れてるんだ」

実家の側には大きな河が流れていて土手の向こうの河川敷は公園や野球場になっている。

小笠原にも川はあるが大きな河は無く河口から1キロも遡上すると川幅も2〜3メートルになりそれ以上カヌーですら遡上できなくなってしまう。

昂とバイクで島を回った時に見たところ所々手が加えられ護岸で整備されていたけれど木々が水際まで生い茂りまるでアマゾンの源流の様な様相だったのを憶えている。

「行ってみるか？」

「いけない、はやくおかいものしよう」

昂なりに気を使っている気がしてならない、子どもは素直で無邪気な物だと勝手に思い込んでいたようだ。

春菜と顔を見合わせると春菜自身も気が付いているようだ。

「よし、河原まで競争だ」

「典兄なんかに負けないから。よいい、ドン！」

ライニング気味に春菜が駆け出す。

キョトンとした昂を抱き上げ肩車をして後を追いかける。

「ちゃんと掴まってる」

「うん！」

春菜の背中がどんどん近づいてくる。

「ノン、もつとはやく！」

「よし！」

更に加速して土手の階段を2段抜かしで一気に駆け上がると広い河川敷とゆつくりと流れる河が見渡せ、心地良い風が吹き抜けている。

「うわぁ、おおきな川だね」

「気持ち良いな」

春菜が息を切らして土手を上ってきた。

「やっぱり典兄には敵わないや」

「まだまだ、負ける気がしないよ」

「そんなつよがりを言って、本当は息も切れ切れの癖に」

「まあな」

「昴ちゃん、下に行ってみよう」

「うん」

土手の斜面に体を投げ出すと抜ける様な秋空に雲がゆつくりと流れている。

冷たくなってきた風が頬をすり抜け気持ちが良い。

昴は春菜と土手の下でしゃがみ込んで何かを探している様だった。

しばらく風に吹かれていると昴の嬉しそうな声が聞こえてきた。

「あつた！ はるなお姉ちゃんあつたよ」

「本当だ、凄いね」

「えへへ、それもふたつ。おおきいのとちいさいやつ」

ゆつくりと土手を下りてしゃがんでいる春菜と昴を覗き込む。

「へえ、シロツメクサか」

「えっ、ノン。クローバーだよ」

「クローバーはシロツメクサの別名なの」

「わかんない」

「で、何を見つけたんだ？」

「えへへ、よつばのクローバー」

昂が満面の笑顔で両手に大きな四葉のクローバーと小さな四葉のクローバーを俺の目の前に差し出した。

「はるなお姉ちゃんがおしえてくれたんだよ。しあわせになれるんだって」

「そっか」

「もう、典兄は素っ気ないんだから」

「買い物に行くぞ。可奈たちが来るって言ってからな」

「えっ、可奈ちゃんが来るの」

「そうだ、だから早く買い物をしてホットケーキを作ろう」

「うん！」

「典兄、それじゃ美紀さんも」

「大丈夫だよ」

春菜が心配そうに俺の顔を見る。

確信はないが俺は兄貴と同じように美紀さんの事を信じている。

あの時は仕方がなかったんだ、そう言い聞かせて。

クローバー

買い物を済ませて実家に戻ると玄関にパンプスと小さな靴が綺麗に並べられていた。

「どうやら美紀さんと可奈が来ているようだ。」

玄関の引き戸を閉めると可奈が嬉しそうに居間から飛び出してきた。

「昂ちゃん！」

「ああ、可奈ちゃんだあ」

昂と可奈が両手をつないで嬉しそうに飛び跳ねている。

まるで双子の姉妹のようだ。

双子ではないが異母姉妹には違いなかった。

そこに美紀さんが申し訳なさそうに顔を出すと美紀さんの顔を見た瞬間に昂の動きが止まった。

すると美紀さんから血の気が引いていくのが見て取れた。

春菜がこの場に居れば何とか助け船を出してくれるかもしれないが、昂が見つけた四葉のクローバーを持って自分の家に戻ってしまっている。

「可奈、昂と台所にこの荷物を持って行ってくれないか」

「うん、昂ちゃん行こう」

「うん」

可奈に言われて昂がスーパーの手提げ袋の片方を持って2人で走り出した。

「卵が入ってるからな」

「「はい」」

2人の姿が見えなくなると美紀さんが深々と頭を下げた。

俺に怪我を負わせてしまった事を気に病んでいるのだろう。

「典彰君、本当にごめんなさい」

「あんな物、高校の時の俺にすればただのかすり傷だよ。気にすん

な」

「でも」

「でももへつたくれもねえの。義姉さんがそんなんじゃ、可奈も昂も気にするだろうが」

「まだ、義姉さんって呼んでくれるんだ」

「たりめえだろ、ばーか」

高校時代からの付き合いで兄貴と美紀さんの3人であの頃は良く遊びに出かけた。

俺が道を外れそうになると必ず美紀さんは叱ってくれて本当の姉の様な存在だった。

それでも俺は兄貴とは正反対の道に落ちていった。

親であるお袋と親父ですら手を焼いていたのに、そんな俺を美紀さんは見捨てないでいてくれた。

無意識に美紀さんの頭に手を置いて髪の毛をくしゃつとしていた。

すると、美紀さんの瞳から涙がこぼれた。

「泣くな。可奈が居るんだぞ」

「うん、ありがとう。典彰君は優しいね」

「そんなんじゃねえよ」

「昔から優しい子だったよ。宗一さんは包み込んでくれる優しさで、典彰君はしっかり繋ぎとめてくれる優しさ。だから昂ちゃんも典彰君をあんなに信頼しているんだね」

「で、どうするんだ？」

「ちゃんと可奈には話す。2人が異母姉妹だって」

「そうか判った。俺もそれに従うよ」

「ありがとう」

「ノリ！」

「ノン！ 早く！」

「今、行くよ」

居間ではお袋がホットプレートを準備していてくれた。

美紀さんと一緒に居間に行くと微妙な空気が流れた。
するとお袋が動き出した。

「そつだ。昴ちゃんと可奈ちゃんに良い物をあげる」

「ええ、なあに？ お婆ちゃん」

可奈は直ぐに反応するが昴は可奈の後ろで様子を伺っている。

そんな事を気にせずにお袋は2人に小さなエプロンをつけた。

昴のエプロンは薄い黄色で黒猫のアプリケが付いていて名前が刺繍されている。

可奈の方はピンク色で可奈の好きなティベアのアプリケが付いて名前が同じように刺繍されていた。

「これっておばちゃんが作ったの？」

「そつよ、可愛いでしょ」

「うん、ありがとう」

「嬉しいわ、昴ちゃんが喜んでくれて」

昴が照れているのを見てお袋は目を細めて喜んでいる。

俺にはどう見ても黒猫とティベアの違いが良く判らない、するとお袋に睨まれてしまった。

台所に向かうとエプロン姿の昴と可奈がまめまめしくお手伝いをしてくれる。

そんな所に逃げ出していた親父がボウリングから帰ってきた。

可奈がいち早く気づき玄関に向かって走り出した。

「みてみて、お爺ちゃんにもらっちゃった」

「つて、親父。まだ2人には早くないか？」

可奈が持っているのはカラフルな箱に入った子ども用の包丁だった。親父を睨むと親父はバツが悪そうに頭を掻いている。

「そ、そつかなあ。2人ともお手伝いが好きだって聞いたから」

「ありがとう御座います。お義父さん」

「美紀さん、そんなに気を使わないでおくれ家族なんだから」

「はい」

今の俺達に出来る事は自然にふるまう事だけだ。

「テレビでも小さな子が料理をしているんだから昴ちゃんも可奈ちゃんもやってみたいよね」

「うん！」

お袋の一言で居間のテーブルに小さなまな板を置いて昴と可奈の料理教室が始まっている。

2人は恐る恐る半分に切られたリンゴを切ろうとしている。

俺と親父はハラハラしながら見ているがベテラン主婦のお袋と美紀さんがついていれば安心だろう。

2人の嬉しそうな声がぎこちなかった空気を解していく。

ホットケーキを焼きはじめると春菜が再びやってきた。

「うわぁ、典兄のホットケーキなんて久しぶり」

「あのな、誰が作ってもミックス粉で作るんだから同じだろう」

「それが全然違うんだな典兄が作ってくれたホットケーキは世界一美味しいんだよ。そうだ昴ちゃん、これ。可奈ちゃんにはこっちな」
春菜が昴と可奈に渡したのは本に挟む栞だった。

昴の栞には昴が見つけた大小の四葉のクローバーと黒猫のマノンやきらきら光るハートや星がラミネートされ穴があけられシンプルなリボンが付いている。

可奈の方にはデイベアと董が何かの押し花がラミネートされ同じようにきらきらと光っている。

「ありがとう、はるなお姉ちゃん。たいせつにするね」

「ママ、みてみて」

「綺麗だね、春菜ちゃんありがとう」

昴は大切そうに栞を胸に抱きしめ、可奈は嬉しそうに美紀さんに見せている。

お袋も親父もそして春菜も昴や可奈の事を気にかけてくれているのがとても嬉しく感じた。

高々ホットケーキを昴が食べたいと言っただけで大騒ぎになっている。

ホットプレートで俺が小ぶりのホットケーキを焼き上げると端から春菜・可奈・昴の3人が持つて行き、定番のメイプルシロップやバターにチョコレートソースをかけて口に運んでいく。

そして用意した生クリームや缶詰のフルーツを使って楽しそうにデコレーションしている。

「ノン、リングはどうするの？」

「そのままでも良いけどこうしてホットプレートで焼くんだよ」

昴と可奈が切つて芯を取り除いたリングをホットプレートで焼くとしんなりして焼きリングになっていく。

砂糖を加えなくても旬のリングは酸味と甘みが良い感じで生クリームやメイプルシロップとの組み合わせも抜群だった。

「でも、典兄つて何処でこんな事を知っているの？」

「あのね、春菜ちゃん。実は宗一さんの代わりに時々可奈に焼いて食べさせてくれてたの。でね」

「ああ、義姉さんは余計な事を言うなよ」

「良いじゃない。可奈の喜ぶ顔が見たかったんでしょ」

「まあ、放蕩兄貴があんなだからな。時々俺が兄貴の代わりに遊んでやらないとな。俺なりに考えて必死だったんだよ」

「そうだったんだ。でも宗兄も典兄に『放蕩』なんて言われたくないと思うけどな」

「あのな」

居間から笑い声が絶えない。

そんな雰囲気の中、昴からはすっかり固さが取れ美紀さんとの距離も少しだけ近づいた様に感じていた。

「疲れた」

「はい、お疲れ様」

お袋が缶ビールを持ってきてくれて、つまみを作り台所に戻って行った。

昴は可奈ちゃんと一緒に美紀さんが寝かしつけてくれている。

可奈が昴とお風呂に入りたがったが流石にそこまで昴は美紀さんに心を開いてなくて、いつもの様に俺が風呂に入れて髪の毛を乾かしてやった。

今は春菜が泊まる気満々で風呂に入っている。

久しぶりに俺が実家に帰ってきたのでゆっくり秋の夜長に募る話でもしたいのだろう。

すると親父が口を開いた。

「典彰、お前。最近営業回りしているらしいじゃないか」

「まあ、思う所があつてな」

「大丈夫なのか？ 母さんが心配してたぞ。昔のお前は夜遅くまで接待や挨拶回りをしていたじゃないか」

「一応、ちゃんと考えているよ。後輩をつけてもらって仕事を教えている途中だよ。だから後輩に接待なんかは任せてあるし何かあれば俺がケツを拭くよ」

「そうかお前は偉いな」

「普通だろ」

そこに春菜が風呂から出てきた。

「やっぱり、ここのお風呂は広くて気持ちが良いや」

「古いだけだよ」

「もう、うちのシステムバスなんかと比べて風情があつて良いじゃん」

「古いタイル張りの風呂なんて掃除が大変なんだぞ」

「そつか、典兄の家もシステムバスじゃないんだっけ。そう言えば煙草吸わないね」

「止めたんだ、煙草」

春菜と親父は俺の言葉を聞いて瞬間冷凍されたマグロの様になり、お袋が炙ったスルメを驚いて床に落としそうになった。

「そんなに驚く事じゃないだろ」

「驚くわよ。ノリ、あんた熱でもあるんじゃないの？」

「あるか！ 俺は至って健康だ」

「大きな声を出さないの。昴ちゃんと可奈ちゃんが起きちゃうでしよ」

「お袋が変な事を言うからだ」

「本当に驚きばなしよ。昴ちゃんと暮らすなんて言い出すし。仕事も再始動したんでしょに。その上にあれほど止められなかった煙草を止めたなんて信じられる訳ないじゃい」

「俺、昴と暮らし始めて今のままじゃ駄目だって思ったんだ。俺自身がちやんとしていないといけないんだって。だって俺が駄目駄目なら昴が笑われるだろ、そんな事は俺自身が許せない。まあ、朝は昴に起こされるしまだまだけどな」

「あきれた。相変わらず手の掛る子なのね」

「でも、昴の事なら俺は何でもできるし腹をくくれると思うんだ。だから昴が俺と居るのが嫌だと言うまで離れる気はないし離れるつもりはない」

「大丈夫よ。昴ちゃんが典彰君を嫌う訳ないじゃない。あんなに信頼しているのに」

「義姉さん。2人は？」

「手をつないで寝たわよ」

昴と可奈を寝かしつけた美紀さんが居間に顔を出した。

静かな時間が流れる。

庭で鳴いている秋の虫の声だけが聞こえる。

俺が缶ビールを煽るとお袋が静かに話し始めた。

「どうするの？ 可奈ちゃんと昴ちゃんの事」

「義姉さんは覚悟が出来ているんだろ。なら本当の事を話すだけだよ」

「ノリ、大丈夫なの？ 2人はまだ6歳なのよ」

「だから余計だろ。大きくなって関係が拗れれば修復は難しくなる。そう言ったのはお袋だぞ。幸いと言つべきか可奈と昴は打ち解けて仲が良い。アルバムなんかを見れば何れお互いの関係に気付く。そ

の時じゃ遅いんだよ。俺が明日、2人に話すけど良いかな？ 皆の了承が欲しいんだ」

「典彰の思う様にして見なさい。僕は家族なんだから」

親父の言葉に美紀さんもお袋も頷いた。

春菜に至っては涙を零していた。

「春菜は相変わらず泣き虫春菜だな」

「馬鹿っ」

俺は美紀さんに頼んでおいたことを聞いてみた。

「義姉さん、例の方はどうだった？」

「何も見つからなかったわ」

「そうか」

「ノリ、あんた何を美紀さんに頼んだの？」

「ああ、昴の母親の手掛かりが兄貴の荷物の中にないか探してみてくれて頼んだんだ。やっぱり見つからなかったか」

兄貴の遺品とも言うべき荷物はいったん俺の家に届いたが俺が開けて良いものではなく、そのまま美紀さんの元に送り届けた。

荷物自体は俺自身が梱包したのだから何が入っていたのか知っている訳だけど全てを調べた訳ではなくそんな時間も無かった。

その為に改めて美紀さんには酷かもしれないが美紀さん以外に頼める人はいないのが現状だった。

「本なんかも全部見てみたけど何も、でも宗一さんの使っていたノートパソコンだけは宗一さんが勝手に触られるのを嫌っていたから怖くて触ってないの」

「で、そのパソコンは？」

「ここに持ってきてみたわ。典彰君が調べてもらえないかしら。それと昴ちゃんのアルバムも、これは流石に持っているのが辛いから」
「判った、預かってパソコンは中を見てみるよ。アルバム、ありがとう」

もしかしたらと言う気持ちも多少あったが昴のアルバムは処分される事は無かったようだ。

翌朝、春菜は一旦自宅に戻り直ぐに俺の実家に顔を出した。

すると可奈と昴が春菜を誘って土手に行って四葉のクローバーを探すと言いだした。

昴を俺が、そして可奈を美紀さんが居間に連れて行くと居間には親父とお袋が神妙な顔をして気まずそうに座っている。

春菜がケツの座りが悪いのか立ち上がろうとしたのを俺が止めた。可奈と昴は場の空気を感じとり不安そうな顔をしている。

そんな2人の前にしやがみ込んで2人の頭に手を置きゆつくりと2人に判る言葉で話し始めた。

「昴と可奈に大事な話があるんだ」

「今は全部判らなくても良いから俺の言う事をきちんと聞いて欲しい。良いかな」

「うん」

昴と可奈が小さく頷いてくれた。

一息ついて昴と可奈を真っ直ぐに見て2人に同時に同じ事を聞いた。

「2人のお父さんの名前を教えて欲しい」

「「の」とじま　そういち」

「えっ？」「あれ？」

昴と可奈が驚いて顔を見合わせている。

「お父さんの顔ってどんな顔だった？」

2人が同時に俺の顔を指さし再び顔を見合わせた。

「あのね、実は昴と可奈は本当の姉妹なんだ。父親は俺の兄さんの能登島　宗一。でも、2人のお母さんは別の人だけだね。可奈が7

月生まれで昴が9月生まれだから可奈が少しだけお姉さんかな」

「昴ちゃんはおわたしの妹なの？」

「同じ年だから。俺と兄貴みたいに双子って感じかな」

「ノン、ほんとうなの？」

「俺が昴に嘘をついた事があるかな？　無いだろ」

「うん」

昴と可奈が手をつないで照れくさそうに笑っているがそれは姉妹だと言われて嬉しかったのだろう。

恐らくそれがどんな意味なのかなんて6歳では理解できないだろう。

「昴ちゃんのママってどこにいるの？」

可奈の言葉にその場に居た全員が凍りついた。

そこまで考えが及ばないと言うかまだ何処の誰かさえ判らない状況で名前すら判っていない。

思わず心の中で頭を抱え込んで『しくった！』と絶叫している俺が居た。

親父とお袋それに春菜まで俺に冷たい視線を浴びせている。

昨夜の親父の『家族なんだから』と言う言葉に頷いていたのは嘘だったのかと思ってしまう。

「わたし、ママなんて居ないよ。パパだけだもん」

昴の真っ直ぐな言葉で凍りついた空気がゆっくりと動き出した。

「昴ちゃんってパパとママと暮らしていたんじゃないの？」

「判らない。パパだけだもん」

それだけを言うと昴は俯いてしまった。

美紀さんが昴に聞いた質問は俺には怖くて昴に聞けなかった事だ。今まで聞けなかった事を後悔しても仕方がないがもっと早いうちに聞いておけばよかったと思う。

それに小笠原の兄貴の家で見たアルバムには兄貴と昴の写真はあったが昴の母親らしき影は何処にも無かった。

それはアルバムを見たであろう美紀さんと同じ認識で間違っていないだろう。

「昴ちゃん。ママがいなくてさみしくないの？」

「えっ、へいきだよ。だってわたしにはノンがいるもん」

可奈の直球に再び凍りつきそうになるが、そこには昴の嬉しそうな笑顔があった。

昴と可奈の前にしゃがんでいた俺は腰が抜けた様にその場に座り込んだ。

心の底から笑いが止めどもなく笑いが込み上げてきて腹を抱えて笑
っていて。
そして目からは熱いものがこぼれていた。

鳴海涼子

昴の母親の手掛かりを探すために実家から帰ってきたその日のうちパソコンを調べる事にした。

もちろんそんな事は昴の目の前で出来る訳もなく昴を先に寝かしつけてから。

まあ、危うく俺も一緒に寝てしまう所だったが。

兄貴のパソコンは俺が梱包した時と同じようにパソコンケースに入ってたままだった。

パソコンをケースから取り出すと手帳か何かがパソコンの間から落ちた、手に取るとそれは昴の母子手帳だった。

そして同時に昴の母親の名前が判った瞬間だった。

「しくった。何で島に居る間にパソコンを出して見なかったんだ」後悔先に立たずとは正しくこの事だ。

母子手帳を開けて見ると健診の結果や昴の予防接種の履歴などが書き込まれ。

昴の成長の様子が綺麗な字で細かく書き込まれている。

その履歴は初めのうちは都内の病院になっていたのに途中から小笠原の診療所に変わっていて小笠原で暮らしていた事が見受けられる。そして生まれたばかりの昴の写真があった。

眠っている時の口元がそっくりで自然に笑みがこぼれた。

「鳴海 涼子ってどこかで聞いたか見た覚えがあるな」

それが昴の母親の名前だった。

パソコンの電源を入れて立ち上げる。

しばらくすると画面にパスワードの文字が浮かび上がった。

兄貴と美紀さんの誕生日・携帯番号・昴や可奈の誕生日や名前を組み合わせ。

自分が思いつくだけのパスワードを入力するがロックは解除できな

い。

時間だけが無意味に過ぎていき畳の上に体を投げ出して伸びをする。「駄目だ。一卵性双生児の兄貴の事だから大概は判ると思っていたのに。それに電話して来た時にパスワードくらい教えておけよ。こんな事になるんなら今更だろうが。パスワード、暗号か……合言葉？ まさか」

それは俺と兄貴の2人にしか通じない言葉だった。

言葉と言ってしまったって良いものかと思うような子どもの頃に発していた音の羅列だった。

起き上がり音の羅列を口ずさみながら入力するとロックが解除された。

デスクトップにあるファイルを見てみるがどれも星の画像や天体観測や天体ショーの記録ばかりだった。

「まさか隠しファイルに」

オプションを開くと隠しファイル及び隠しフォルダーを表示しないにチェックがついている。

それを全てのファイルとフォルダーを表示するにチェックをして念のために再起動させる。

すると隠れていたファイルが姿を現した。

『プレアデスについて』と言うファイルをクリックする。

昴と言うのはカタカナで書くとか外来語の様な感じがするが牡牛座の中にあるプレアデス星団の和名の事だ。

そのファイルの中には昴と昴の母親である鳴海涼子について書かれていた。

涼子とは小笠原に転勤になった時に知り合った。

妊娠の所為か小笠原に着いた時にトラブルを起こし俺が身元を引き受ける事になった。

「って、おいおい」

涼子は昴に対して愛情がなかった訳ではなく表現の仕方が不器用だ

っただけで、それについては俺自身も彼女の性格に時々困惑する事がある。

その為か昴自身も涼子に対して心を開かなかった。

そして涼子と言う人は何度も小笠原と都内を行き来して都内で昴を産んでしばらくは都内で暮らしていたらしい。

それは母子手帳からも判る事だった。

その後の文章は殆どが昴についての事だった。

パツと見ただけでも昴の母親の連絡先などは一切書かれておらず判るのは名前だけだった。

「結局、判ったのは名前だけか。ん？ 待てよ」

涼子は写真を撮られる事を心底嫌がっていたが写真を撮る事は好きなようでコンテストなどには時々応募していたようだ。

そしてある日、涼子にかかってきた電話を境に涼子は昴の前から姿を消してしまった。

これを読んでいるのは恐らく典彰だろう。

どうか昴の事を頼む。

「馬鹿野郎！」

思わず時間を気にせずにテーブルに拳を叩きつけ叫んでしまう。
すると昴が起きてきてしまった。

「ノン、どうしたの？」

「起こしてしまってゴメンな、寝ような」

「うん」

昴を隣の部屋に連れて行き寝かしつける。

自分の布団があるにもかかわらず昴は俺の体にぴったりと寄り添うに寝るようになってしまった。

子どもの体温は高くかなり温かい。

まあ、これからの時期はお互いに寒くなくていいかもしれないがだ。
それにしても昴の母親の鳴海涼子って……

写真？ カメラ？

そこで兄貴の荷物を整理している時に見かけた写真集が浮かんでき

た。

その写真しゅうは沖縄の風景や町の人の何気ない普段の表情や笑い顔を撮影したものだったと思う。

写真集にあった名前が鳴海涼子だった気がする。

昴が再び寝付くのを待つて美紀さんに電話をしてしまった。

「義姉さん、こんなに夜遅くゴメン。探してもらいたいものがあるんだ」

「典彰君の頼みなら私は何時でも構わないけど、どうしたの？ そんなに慌てて」

「兄貴の荷物の中に写真集があったよね。その写真集を探してほしいんだ」

「ちよつと待つてちようだいね。宗一さんの部屋に片づけたばかりだから直ぐに取って来るわ」

「頼む」

電話口の向こうから美紀さんが動く気配がして小さなもの音だけが聞こえてくる。

そして『あつた』と言う美紀さんの声が聞こえてきた。

「あつたわよ、鳴海涼子さんって人が撮った写真集みたいだけど」

「やっぱり」

「典彰君まさか昴ちゃんの？」

「うん、多分間違いないと思う。それとこれは美紀さんの胸の内にしまっておいて欲しいんだ。実は……」

「そう、判ったわ。ありがとう」

自分のノートパソコンでネットを開いて鳴海涼子を検索すると都内のギャラリーでしばらく個展を開いている様だった。

どうすれば一番いいのか判らないが一つだけ言える事がある。

彼女が昴の母親かも知れないが俺は昴を置いて行った彼女の事を許す事をとうてい出来ないと言う事だった。

昴を保育所に送り届けて会社に行く途中でお袋に電話した。

「お袋か、実は昴の母親の事が判った」

「ええ、本当なの？ で、あんたどうする気なの？」

「あのな、殴り込みに行くとも思っているのか？ 何をしているのか判っただけで連絡先なんかはこれから調べるんだ。週末に実家によって昴を預けてからだな」

「判ったわ、ちゃんと報告しなさいよ」

「ああ、それじゃな」

お袋にそう言ったものの俺自身の中では踏ん切りがつかないままだったし、仮に個展に行ってもそこに必ず彼女が居るとは限らないからだ。

仕事モードに切り替え野田を連れ回って定時過ぎに退社して昴を迎えに行く。

最近では昴が何をしているのか気になりだして完全に親視線にシフトしてきている自分が怖い。

最近日は沈むのが早くなっている。

急いで昴を迎えに行く。

「昴ちゃん。お迎えが来たよ」

「はい、バイバイ」

最初のうちは俺の事をなんて呼んでいいのか保育士さん達も困惑気味だった。

『お父さん』『おじさん』『能登島さん』『沢渡さん』

どれもしつくりせずには最近では大人の対応らしくお迎えが来たとか言わないようになっていく。

周りに気を使わせているのが良く判るが現段階では現状維持でいるしかないのも確かだった。

「それじゃ、また明日ね」

「先生、バイバイ」

「失礼します」

昴と手をつないで保育所を後にする。

「昴、友達は出来たか？」

「うん。あっちゃんにまみちゃんにせいじくん」

「おお、せいじくんって男の子か」

「うん、ちよつとらんぼうだけど、はしるのがはやいんだよ」

「へえ、そうなんだ」

平静を装うけど乱暴な事をされていないかが凄く気になる。

まあ、何かあれば保育士さんから連絡がある訳だし気にするほどの事じゃないのかもしれない。

「あのね、せいじくん。おとうさんの事がきらいなんだって」

「どうしてだ？」

「よっぱらってぶつつていつてた」

世の中には女子どもに手を上げる男が居るのは事実だ。

だけどそれは家庭の事情ってやつで俺みたいな部外者が首を突っ込んで良い問題じゃない。

許しがたい行為だけど他人には全くの無力な世の中だった。

昴の母親を確かめに行くべきか悩んでいる間に週末は目前に迫っていた

2度

「昂ちゃんっていつもパパがお迎えに来るよね。ママは？」

「ママはいないよ。それにノンはパパじゃないもん」

「ええ？　じゃだれなの？」

「ノンはパパのおとうとで。でもママは知らないけどパパがおなじお姉ちゃんがいるよ」

「ええ、どういことなの？　パパもママもひとりだよ」

「ほんとうだもん」

そこに男の子が近づいてきた。

「ばーか、俺なんかとーちゃんいらねえもん」

「せいじくん、そんな事をいつちゃだめなんだよ」

「うるせ！　昂いくぞ」

「え、せいじくんってば」

そこに保育士さんが宥めに入るが保育所の庭は喧々囂々として収拾がつかなくなり保育士さんが頭を抱えていた。

「せいじくん、なんでパパなんかいららないの？」

「だってあいつは俺もかーちゃんもなぐるんだぞ」

「いつもなの？」

「ときどきだけだな。だからきらいだ」

パートナーの野田の失敗をフォローしていて普段より少しだけ昂のお迎えが遅れてしまった。

「はあ、はあ。昂、ゴメン。遅れた」

「おそいよ！」

「すいませんでした」

保育士さんに頭を下げると笑顔で迎えてくれる。

子どもが苦手な俺からすればまるで天使の様な人達だと思う時がある。

「まだ、聖司君のお迎えがまだなので、それにまだ時間内ですから」
「ありがとうございます。昴、帰ろう」
「うん」

俺達が帰ろうとした時に入れ違いでグレーのスカートスーツの上に
ベージュのコートを羽織った小柄な女の人が走り込んできた。

「すいません、遅くなりました」

「聖司君、お母さんがお迎えに来たよ」

「おせえよ、かーちゃん」

「ゴメンね」

「昴、いっしょにかえろっぜ」

「ノン、良いでしょ」

やんちゃそうな男の子の手を引いている女の人の顔を見て固まって
しまった。

彼女も俺の顔を見て顔を強張らせている。

俺が見間違えるはずがないし彼女の反応からも間違いないだろう。

昴が熱を出した時に旦那に殴られて気を失って一緒に病院に行った
彼女だった。

「ああ！」

「ええっ、あの時の？」

気まずい雰囲気と俺と彼女の間を漂っている。

昴と聖司は手をつないでお喋りをしながら俺達の前を歩いていた。

「あの治療費とタクシー代はお返しますから」

「えっと、別に良いですよ」

「良くありません。私は物乞いじゃありませんから」

「別にそっいう訳じゃ」

逃げ出したい、それが本心だった。

あの時は2度と会う事なんてないと思っていた。

それに大事なお金を旦那に持ち去られたのを俺はこの目で見ていた
ので治療費と僅かなタクシー代を会計係の人に託した。

そんな2度と会わないと思っていた彼女に昴が通う保育所で再会してしまふなんて。

それにどうやら彼女の息子の聖司君と昴は仲が良いらしい。

ドラマなら運命的な出会いなんて言うんだがこれから俺はどの顔で会えば良いんだ？

「でも、聖司がいつも楽しそうに話す昴ちゃんのお父さんがあなただったなんて思いませんでした」

「まあ、俺は父親ですらないですから。昴は兄貴の子どもです」

「えっ？ お兄さんの？」

「ええ、9月に事故で他界しまして」

「9月ってこの間じゃないですか」

「まあ、そうですね」

「それであんなに慌てていたんですね」

「あ、あの時は本当にありがとうございました。何だかお礼を言いそびれちゃって」

気まずい雰囲気の中、立ち止まって誠心誠意頭を下げた。

「ノン、おいていくよ」

「先に行け、昴なんかに置いて行かれるほど遅くないよ」

「なあ、昴。なんでノンなんだ？ あいつ」

「あれ？ ノンってなまえなんだっけ？」

「あのな、昴。俺の名前を忘れた訳じゃないよな」

「えへへ、ノンのなまえは『さわたりのりあき』だよ！」

昴の言葉で今度は彼女が立ち止まって俺の顔をまじまじと見上げていた。

「あの、俺の顔に何か付いていますか？」

「え、だって昴ちゃんの苗字って確か能登島じゃ」

「ええ、兄貴は婿養子と言う形で結婚して姓が変わりましたから。

元は俺と同じ沢渡ですよ」

「そっじゃなくて。あっそれで私の顔を見たとき驚いていたんですね」

「はあ？」

「加賀谷 早苗」

彼女の口から飛び出した名前を聞いて俺の思考も体も止まってしまった。

そして2度と思い出したくない悪夢がフラッシュバックする。

彼女の口調が途端に硬くなった。

「な、なんでその名前を？」

「私の旧姓は入江です」

「まさか……」

「そのまさかだと思います。早苗ちゃんが良く話してくれていた沢渡典彰さんがあなただったなんて。確かに話に聞いた通り電信柱みたいに背が高くて目つきがちよつと悪いですけど。可笑しなものですね。でも、私はあなたを許せませんから」

「そうですか。あなたが早苗の従妹の未来さんでしたか。どうりで良く似ていると思いました」

「早苗なんて呼び捨てにしないでください！」

未来さんが憎しみを露わにして声を荒げた。

「かーちゃん、腹へった」

「ノン、はやく帰ろう」

「歩きながら話しませんか？」

俺と未来さんが立ち止まっているのにしびれを切らして聖司と昴が声を掛けて来てくれた。

それは俺にとつてありがたい助け舟だった。

「どうして早苗ちゃんに会いに来てくれなかったんですか？」

「言い訳にしか聞こえないと思いますが。あの事故から半年間の記憶が俺には無いんです。実はあの電車には師と仰いでいた先輩も乗っていて彼女と同じように帰らぬ人になりました。母から聞いた話ですが精神的な事から来る一時的な記憶喪失だろうと」

「大切なものを失ったショックで……」

「はい、半年ほどして記憶が戻った時には既に取り返しのかからない

事になっていましたよ。彼女の両親からは罵声を浴びせられ線香すらあげる事も許されず。彼女が眠っている場所を知ったのは1年くらい前の事です。会社でも自分が開拓した営業先は全て同僚に引き継がれていました。昴と会つまではそれこそ営業部のお荷物扱いですよ」

「私、何も知らなくて。ただ早苗ちゃんの婚約者が最後のお別れにも来ないって教えられて悔しくて」

「そう思われても仕方がない事です。全ては俺自身の弱さが引き起こした事ですから」

「昴ちゃんと会つまではって言っていましたよね」

「ええ、昴と暮らすようになってちゃんとしないとなんて今更ながら思ひまして。まあ再起動って感じですかね」

「大丈夫です。昴ちゃんを見ていればあなたがどれだけ頑張っているか良く判ります。親は子どももの鏡なんです。それに聖司も昴ちゃんと仲良くしてもらっているみたいだし」

「それはお互い様ですよ。昴は島育ちだからこっちの事は良く知らない事が多いんですけど色々と教えてもらっているみたいで」

「ええ？ 聖司にですか？ あんなに落ち着きがなくて手を焼いているのに」

少しだけ彼女の空気が和らいでいくのを感じる。

その落ち着きのない原因は父親にあるのではないかと思つたが、それは俺が口を出して良い様な事じゃないと飲み込んだ。

ただ、彼女が早苗の従妹だと判つた今は何かあれば力になりたいと思つた。

それが多少なりとも罪滅ぼしになればと。

「せいじ君、お母さんきれいだね」

「ええ、家じゃ。くそうるさいばあだぞ」

「もう、聖司！」

「また、げつようびだね」

「おう」

家の近所で未来さんと聖司と別れる。

あの時もこの先で出くわしたのだから彼女たちの家も近所なのだろう。

「ノン、せいじ君のおかあさんしっているの?」

「ああ、昴が熱を出した時に助けてくれたんだよ。聖司のお母さんだつて言うのは今日わかったけどな」

「ええ、おれいしないと」

「子どもがそんな事を気にしなくて良いの。俺がちゃんと言ったから」

「ああ、せいじ君のおかあさんきれいだもんね」

「あのな、あの人は結婚しているだろ」

「あつ、そうだ。でも、せいじ君おとうさんきらいだつて。ときどきぶたれるつていつてたよ」

「そうか、あいつも大変なんだな」

週末、俺は昴を両親に預けて都内のギャラリーの前に来ていた。

親父とお袋に行つてくると啖呵を切ったものの、いざ目の前になると流石に腰が引けてくる。

それに昴には何で休みの日にスーツ姿なのか突っ込まれてしまった。

「ねえ、ノン。デートなの?」

「でーと? そんな言葉どこで覚えて来るんだ?」

「保育園だよ。みーちゃんのおかあさんとおとうさんがデートしたんだつて」

「あのな、意味が分かつて使っているのか?」

「ええ、男の子と女の子がいっしょにでかけるのをデートってゆうんでしょ」

「まあ、広い意味じゃまちがってねえけど」

「ノンにはかのじょいないの? けっこんしないの?」

「いねえし、そんな予定はありません」

「なんだつまんないの」

「つまんない言うな！」

むきになっているとお袋に子ども相手にと窘められてしまった。昂に言われると何故だかマジで凹む。

それに万が一にでも彼女が出来たらそうするんだろう、俺。

モノトーンだった俺の家は徐々に昂カラーで浸食されつつあった。今じゃ台所には可愛らしいグラスや食器があり。

昔の木の踏み台もお袋が買ってきた可愛らしい水色の折り畳み式の踏み台に取って代わられ。

居間ですら昂が大好きな絵本や小物が増殖しつつある。

まあ、彼女なんて生き物が現れる気配なんて皆無で心配なんてする必要すら無用だ。

俺の人生にとってギャラリーなんて無縁の場所だと思っていた。

そんな俺が真つ白な壁に展示された写真を見ている。

このギャラリーに展示されている写真を撮った本人は居ないようだった。

俺自身、彼女の顔も知らないしネットで調べても兄貴が残したファイルに書いてあったように写真を撮られるのが嫌なのだろう本人の画像が皆無で何も判らず仕舞いだった。

しかし、こんな綺麗な写真を撮る事が出来る人が昂の母親だなんてどうしても思えなかった。

日本には同姓同名なんて何人いるかすら判らないのだから人違いであつて欲しいと願った。

「へえ、なんだか真つ直ぐに訴えかけてくる写真だな」

それは『ワラビー』と言う題名が付けられた沖縄の子どもの自然な笑顔を切り取った写真だった。

その時、出入り口の辺りで雑誌か何かが落ちる音がする。

ギャラリーで写真を見ていた数人が音をした方に視線を向ける。

俺もその内の一人だった。

すると床にパンフレットの様な物が散乱して近くにいた人が拾い集めている。

そんな事を気に留めないかのように1人の小柄な女性が立ち尽くしていた。

そしてその女性の顔が見る見る歪んで泣きそうになる。

その顔はまるで小笠原に着き船から降りた時に泣きながら走り寄ってきた昴の顔と重なった。

「宗一さん？」

そう聞こえた気がする。

次の瞬間には女性は毅然とした表情になりパンフレットをかき集めている人に『後はお願い』と言って俺に向かって歩いてきて突然俺の腕を掴んで外に連れ出した。

俺の顔を見て驚き、次にとった行動から彼女が昴の母親に間違いがないと確信した。

ギャラリーから少し離れた喫茶店に連れ込まれてしまった。

「ご注文は？」

「俺はブレンド」

「同じ物を」

「畏まりました」

店員が会釈をして下がっていくと彼女が不機嫌そうにいきなり切り出した。

「あなたはいつたい誰なんですか？」

「能登島 宗一の幽霊でも現れたと？ 俺は宗一の双子の弟ですよ」

「えっ、弟さん。宗一さんが確かそんな事を」

「あなたが昴の母親で間違いありませんね」

「は、はい。一応」

一応って何だ？

自分がお腹を痛めて昴を産んだのじゃないのか？

「実は今、昴は俺と暮らしています」

「そうですか、で生活費でも出せと」

「そんなつもりはありませんよ」

「それじゃ何で私の前に現れたりしたですか」

「あなたの口ぶりだと兄が亡くなった事を知っていますよね。昴の事をどう思っ言っんですか？」

「私は島を離れた時点で母親失格だと思っっていますし、あの子も私に心を開いてくれなかったからあの子にも会わない方が良く」と
何だろっこの感覚。

違和感と言っか昴がこの人と暮らしていたイメージが全く湧かない。イライラすると言っか無性に腹が立つ、兄貴が書いていた性格に困惑するとはこの事なのかもしれんない。

大人の様な発言をしたかと思っくと急に子どもじみた事を言い始める。そして時々自分の親指の爪を噛む癖があるようだ。

「昴の事が嫌いなんですか？ 大切じゃないんですか？」

「そんな事を言われても判りません」
判りませんってどういう意味なんだ、理解不能な言葉が彼女の口から紡ぎだされる。

見せるべきか悩んでいた昴の写真をテーブルに置いて彼女の前に押し出した。

「これ、最近の昴の写真です。俺の実家で遊んでいる時の」

「へえ、大きくなってる」

もうどうでも良くなってきた。

こんな人が昴の母親だったなんてこの場から一刻も早く逃げ出したかった。

昴の事を一番に考え母親の元に返すべきじゃないかと考えていた。しかし、こんな人ならちよっこの事で狼狽えている俺の方がマシに思えてきた。

急速に熱が冷めていくと完全に裏営業モードになっていた。

「あの、一つだけ確認させて下さい。俺が昴と暮らしていくことに異存はないんですね」

「構わないです。私は仕事の為に子どもを投げ出した女ですから」それは母娘に対する罪悪感が吹き飛んだ瞬間だった。

女子どもに手をあげる男は人間の屑だと思っ生きてきたが、この時ほど目の前の女を張り飛ばしたい衝動を抑えるのが大変だった。それと同時に俺が昴を育てていこうと決心した瞬間でもあった。

「最後にお願したい事が」

「まだ、何かあるんですか？ 忙しいのに」

「連絡先だけでも教えて頂けませんか。恐らく2度と会う事も無いと思いますし、子どもを投げ出すような人間に昴を会わせるつもりは毛頭ありません。でも一応あなたが昴を産んだ人ですから」

「判りました、これ」

彼女が1枚の名刺を取り出した。

それを受け取り俺の名刺をテーブルの上に置いて伝票を持って立ち上がった。

「貴重な時間を浪費させてしまつて申し訳ございませんでした。これで失礼させていただきます」

店内で暴れなかっただけで及第点だろう。

会計を済ませて一刻も早く彼女から離れたかった。

同じ空気を吸っていると思っただけで嫌悪感を覚え、喫茶店を後にしようとする後ろから2度と聞く事は無いと思っった声でした。

「あの、あの子の苗字はどうなるんですか？」

「はあ？ 昴が望まない限り能登島のままです」

「それじゃ可哀想じゃないですか。これから小学校に言つて保護者と違う苗字だったら虐めに遭うかも」

「俺は昴の事を一番に考えていきたいと思つています。だから昴が望まない限り変えません」

「そんな、まだ6歳の子どもに決めさすなんて」

「もう、6歳ですよ。大人と比べれば語彙が少なく上手く説明する事が出来ないけれど言葉を選んでゆつくりと丁寧に話せば伝わるんです。それに子供なりに心の中では結構難しい事を考えていたりす

るんです。だから俺は昴の気持ちを尊重したいと思うし大人の考えを押し付ける様な事はしません。子どもは親を選べないですから」

そう言い切って駅に向い歩きはじめ振り返る。彼女は背筋を伸ばして何かを振り切るかのように颯爽と歩く後姿が目に入った。

実家に戻り皆で食事をし昴を風呂に入れて寝かしつける。

台所の冷蔵庫から缶ビールを持って居間に向かった。

「ご苦労様。で、どうだったの？ 会って来たんでしょ。どんな人だったの？」

「母さん、そんなに矢継ぎ早に聞いたら典彰が答えられないだろう」
堪らず機関銃の様に質問攻めにするお袋を親父が制した。

「良く判らないって言うのが本当かな」

「そうよね。大体、あんな可愛い昴ちゃんを置いていく人だもんろくでもない人に決まってるわ」

お袋たちには悪いがあまり詳しい事を話さない方が良い気がした。

「一応、昴の事は心配していると云うか」

「男でも出来て逃げ出したに違いないわ」

「それは違うと思う。多分、俺の勘だけど」

「ノリに何が判るの？ 本人に聞いた訳じゃないんでしょ」

「まあ、そうだけど。俺だって営業で飯を食っているんだ。人を見る目はある方だ」

「そうね」

「それと昴の苗字をどうするのか聞かれたよ。小学校に行くようになった時に保護者と同じ方が良いんじゃないかって、そうしないと虐めとかって」

「それはお母さんもそう思うわよ。だって女の苗字なんて結婚すれば変わるのだから」

「ええ、そんな物なのか？」

「当然じゃない」

そついう事を彼女も言いたかつたのだろつ、まるで子どもの様に語彙が足りないのか。

「まあ、兄貴は結婚して男なのに苗字が変わつたけどな」

「驚いたのよ、いきなり宗つたら婿養子になつたつて言いだして」

「はあ？ 聞いてなかつたのか？」

「ええ、あんた知つていたの？ 何で教えなかつたの」

「まあ、兄貴もそのつもりだつたんだろ。教えれば反対するだろ」

「当然でしょ」

「向こつうの家が猛反対だつたからな、自分の両親にまで反対されなくなつたんだよ」

「あの子は優しいからね」

「悪かつたな、優しさのかけらも無くて」

「でも、あんたも丸くなつてきたわよね」

「歳だ、歳の所為！」

これ以上この場に居たら次に何を言われるのか目に見える。ビールを一気に煽つて昴が眠っている部屋に向かつた。

次から次へ

年末が近づいてくると営業部内も慌ただしくなってくる。

それは何処の会社も同じようなものなのだろう。

そして野田の営業成績は目に見えて伸び始め、それに追隨する様に俺の営業成績も上向きに方向修正出来てきた。

すると見下していた奴等が慌てだし課長からも発破をかけられ導火線に火がついたかのような感じだった。

中田先輩から見れば俺もまだまだひよっこ扱いされてしまうだろう。そんなひよっこが今や後輩に仕事を教えている。

何だか笑ってしまう。

そんな俺にはまた1つ悩みが……

「ん？ 昴。今日はどうしたんだ？ いつもくっ付いて寝ているお前が」

起きると昴が自分の布団で丸まる様にして寝ている。

体を起こして布団に手をつくると冷たいものを感じ布団をめくると世界地図が布団に書いてあった。

「うお、俺じゃないよな」

すると昴が起きだして俺の顔を睨みつけている。

流石の俺でもどんなに小さくても女の子にお前がしたのかなんて聞けるような心臓は持ち合わせていない。

「汗だな、汗。布団を干すから手伝え」

「汗なのに？」

「汗だからだよ」

渋々、昴が布団からシーツを外すのを手伝った。

ある晩は目を覚ますと昴が着替えをしていて、布団には世界地図が広がっていた。

理由が判らずネットで調べても諸説書かれていて意味が判らず困惑

気味だった。

社食でランチを食べていると熊谷さんが俺の前に座った。

「流石、中田仕込みの沢渡君は違うね。野田君の成績も上向きだし自信が顔に現れてきたよね」

「そうすか？ 元々あいつには力があつたんですよ」

「またまた、謙遜しちゃって。で、どうよ」

「まあ、ぼちぼちですよ。まだ何もかも始まったばかりで。そう言えば熊谷さんちのお子さんっておねしょしますか？」

「うん、まだ小さいからね」

「そうですね。実は昴もするんですよ、最近。本人も気にしているし調べても判らないことだらけで」

「そうだね。子どもって驚くくらい寝汗をかくけどこの時期には流石に無いわね。その分トイレの回数は増えるけど」

「あつそうか。俺も子どもの頃良く言われてました『寝る前にトイレに行けって』寒さの所為かな」

「着実に沢渡君も親になつてくね」

「まだまだすよ。それに時々夜中に夢を見たのか泣いてい時があるんです。そんな時はなんだか無力に思えて」

「そつか、お互いに大変だね。そんな時は優しく抱きしめてあげな、嫌な事が夢に出て来たのかもしれないから。それにさ、最初から親の人なんて何処にもいないんだから」

熊谷さんに言われて気付かされる。

親が子どもを育てる様に子どもが親を育て一緒に大きくなっていくんだと。

「そう言えば忘年会はどうするの？」

「無理すね、昴が居るから」

「もしかして煙草も止めてあれから飲みにも行っていないの？」

「ええ、もっぱら家飲みです」

「ええ、忘年会に参加しようよ。私も子どもを連れて参加するから」

さ。そうだ今年から子連れ忘年会にしよう。私が幹事に提案しておくから」

「それって熊谷さんが飲みたいだけじゃ」

「良いから良いからね」

熊谷さんが席を立つと入れ替わりに野田と野田の同期の奴が現れた。

「あの、今良いですか？」

「どうした」

「実は営業で困っている奴がいてアドバイスをもらえたらと」

「一応、聞いてやるけどトラブルは自分で何とかしろよ。そうしないと同じ事を繰り返すぞ」

「はい」

最近野田からの質問も増えたが他の営業から相談されることも増えてきた。

それはきつと良い方向に向いてきているのだろう。

「昴、寝る前にトイレに行って来いよ」

「行っただよ」

「あんな、す。あつ」

昴の髪の毛をドライヤーで乾かした後につでに自分の髪の毛もスリッパを入れた瞬間にブレーカーが落ちたのか家の中が真っ暗になった。

元々、爺さんが1人暮らしをしていた家でアンペアが少ないのか配線が古くなっているのか大雨が降ると時々落ちる事があったが気にしないで暮らしていた。

昴と暮らし始めて生活が変わってきているのを感じる。

「んー 一度調べてもらうか。昴？」

ブレーカーを上げに行くために立ち上がりうとして昴に声を掛けると無言のまま抱き着いてきた。

「昴、苦しいよ。もう少し離れる」

「いや！」

首に思いっきり抱き着かれたまま携帯の灯りを頼りに玄関先に向かいブレーカーを上げると直ぐに電気がついた。

「お前、暗いのが怖いのか」

「だって、まっくらでひとりはいやだもん」

目の前にいる昴が俺から視線を外して俯き顔が暗くなる。

兄貴は技師として天文台で働いていた、夜中に呼び出されて寝ている昴を置いて出る事があったのかもしれない。

それに近所の人に預けられた時も独りで寝ていた可能性もある。

そんな時に真っ暗な中で目が覚めたらどんなに不安になり心細いだろう。

「大丈夫だよ、俺が居るだろう」

「う、うん」

「それとお前、トイレに行つてないだろう。俺が使った時のままだったぞ」

「だって、こわいんだもん」

「毎日、俺がついて行つてやるから」

「う、うん」

「それとウソも無しだ。おねしょの事も気にするな」

「あ、あれは汗だもん」

「良いから聞け。昴はまだ小さいんだから気にする事は無い。まあ、体は大きいほうだけど可奈は昴より体が小さいけどもう大人の歯が生えてきている。皆と同じなんて事はないんだよ」

「ええ、おとなのはがはえるの？」

「そうだ、子どもの歯が抜けて」

「ええ！ はがぬけるの？」

再び昴の顔が強張った。

次から次へと色んな事が起き、その度に心が少し揺れる。

でも、こんな時は俺が落ち着かなきゃいけないんだ。

「ん」 体が大人になっていくつて事だよ」

「じゃ、わたしもノンみたいになるの？」

「ならねえよ。そうだな…… 昴は少しずつお姉さんになっていくんだ」

「ほんとうに？ おねえさんになるの？」

「ああ、遅いからトイレに行って寝るぞ」

「トイレにいつてもしちやったら？」

「乾かすだけだ。昴がおねしょなんてしなければ俺は殆ど布団なんて干さないからな」

「うわぁ、ばつちい」

「ばつちい言うな。干してるだろう」

「えへへ」

昴が笑顔になりその笑顔を見るとホツとする。

小さなボートで昴と2人でこれからも大小様々な色んな波をいくつも越えていくのだろうか。

いつも風通りの静かな海なんてあり得ない。

どこの世界だって同じようなものだ。

「沢渡さん、最近はどうですか？」

「ああん、変わらねえよ」

「沢渡さんじゃなくて昴ちゃんですよ」

昴の事を聞かれる度に営業部の雰囲気が少しずつ柔らかくなっていくのを感じる時だ。

家庭持ちの連中が昴の事を気にかけてくれている。

「大変だよ、おねしょしたり夜中に泣いたり」

「そつすよね。でもうちなんか英語を習わすって嫁が」

「はぁ？ お前の子ってたしか」

「日本語もまだ覚束ないんです。でも嫁がバイリンガルだって張り切っちゃって。昴ちゃんには何か習わせないんですか？」

「そう言えば何も考えてないっていつか考え付かなかったっていうのが本当の所かな」

「嫁曰く、習い事は早いうちからが良いらしいですよ」

「そう言うもんなのかね」

確かに保育所に迎えに行くと他のお母さん達が色々と話をしているのを聞く事がある。

ピアノだのダンスだの水泳とか。

そう言えば俺が子ども頃は習字とか算盤とかあった気がする。

昂に習い事ね、毎日が精一杯なのにこれ以上は無理かも。

正直、他の親はどうしているんだろう……

すると課長に呼ばれた。

「沢渡君、今ちよつといいかね」

「はい、なんですか？」

「ここじゃちよつと」

「はあ」

使っていない小会議室に連れて行かれてしまう。

「あの、課長？」

「沢渡君は社内の噂を知っているね」

「ええ、まあ」

それはガラの悪い連中が会社の周りをうろついているらしいと言うものだった。

直接、何かをされた訳ではないらしいけど。

「実はね。今日1人の女子社員が私の所に相談しに来てくれてね。どうやら君の事を聞かれたらしんだ」

「はあ？ 俺の事をですか？ また、何で」

「その子の話では結婚しているのかや家族の事を聞かれたらしい。まあ、その子は怖くなって逃げ出して何も言わなかったらしいが」

「はつきり言わせてもらえば俺自身にも意味が分かりません。最近変わったと言うのは昂と暮らし始めた事くらいで。あつ」

「何か思い当たる事でもあったのかね」

「別に」

「彼女には決して口外しないように言ってるから」

「ありがとうございます。何かあれば直ぐに報告しますので」

「頼むよ。君もやる気を出して来てくれた矢先だからね」

「少しかだけ気になる事があったが確信があった訳ではない。」

「現時点では言うべき事じゃないだろう。」

周到

昴を迎えに行くとそこに聖司君のお母さんつまり未来さんが小走りで迎えに来た。

「こんばんは、あれ以来ですね」

「ええ、普段は仕事を中々抜けられなくて」

敢えて何も聞かずに普通に接するのが一番だと思う。

俺なんかに内輪の話などしてくれるとは到底思えないし、それは仕方がない事なのだと自分に言い聞かせる。

「そう言えば聖司君は何か習い事とかはしていないんですか？ あ、あの。同僚が英語を習わすとか今日言っただけで、他のお母さんなんかも習い事がどうのって」

全然、普通じゃねえじゃんか俺。

そんな自分が情けない様な恥ずかしい様な。

「うふふ、何も習わせていませんよ。保育園だけで精一杯で」

「あ、うちもす。あの、俺が精一杯で」

何だか急に感じが変わった気がする。

柔らかくなつたかと言うか、壁が亡くなったと言つべきか。

基本、女の人が苦手な俺にとってこの距離感は嫌な意味じゃなくて恥ずかしい。

「それに私の仕事の所為で聖司には我慢ばかりさせていて、私達が悪いんですけど聖司も無愛想な子に育ってしまった。中々友達ができなくて。でも、家では元気で明るい昴ちゃんの事を良く話してくれるので」

「で、どんな親なのかですか？」

「すいません。私ったら」

「構わないですよ。俺は親ですら無いですからね」

「そんな事はありません。ちゃんとした家族にしか見えません。うちなんか……」

彼女の瞳に光るものが浮かんでいる。

グツとくるものを押さえて大人の対応を心がける。

「何かあったんですか？ 例えば旦那さんの事とかで」

「そうですね。あんな所を見られちゃったんですものね。隠しても仕方がないですね。実は私の旦那は定職にも就かず毎日の様にお酒とギャンブルに嵌まって、逃げ出す度に見つかってしまつて。遠くに逃げれば良いんでしょうけれど聖司の事を考えるとそれが出来なくて」

結婚していてもこの人は独りで子どもを育て、子どもの事を一番に考えているのがよく判る。

世の中には酒とギャンブルや女に溺れる定番みたいな男は何処にでも存在し家族を苦しめている。

「そうだったんですか」

「それが今度は話し合いをしようって言われたんです」

「話し合いですか？」

「ええ、これから先の事をつて」

酒とギャンブルに溺れて奥さんや子どもを感情に任せて平気で手を上げる様な男が何の話し合いだ？

旦那の直ぐ後ろに黒い影が動いている様な気がする。

大体、俺の姿を見て逃げ出すような男が考えつく様な事は、彼女の旦那の事を何も知らない俺にでも判る。

「で、会うんですか？ 会つてどうするんですか？」

「出来れば別れてくれるように」

「出来ますか？ あの旦那さんを相手に」

「怖いけどするしか。そうしないと前に進めないんです」

昴と聖司君を見ると少し前を楽しそうに手をつないでお喋りをしてる。

この世界を壊す訳にはいかない。

「俺も同席させていただけませんか？」

「それじゃ。沢渡さんに迷惑が」

彼女の瞳が不安で揺れている。

それは他人を巻き込みたくないと言う事なのだろう。
言うべきでないと思った事を敢えて口にした。

「実は俺の会社の周りをガラの悪い連中がうろついて俺の事を聞いていたそうです」

「それで」

「多分、俺には他に原因が思いつきません。恐らく旦那さんは俺が通りすがりの男じゃないと思っているのでしょう」

「そんな、でも」

「それじゃ、もし未来さんと俺が逆の立場だったらどうしますか？」

「昴ちゃんまで、判りました。宜しく願います」

皆まで言うまでも無く理解してくれたようだ。

未来さんが俺に深々と頭を下げた。

2人の前を何も知らないで楽しそうに歩く無邪気な笑顔が唯一の救いだった。

あの後、連絡先を交換して別れ。

携帯でやり取りをし離婚を本当にするのか確認を取った。

そして話を詰めていく。

恐らく相手側も用意周到に準備している筈だ。

それに立ち向かうにはこちらもそれなりの準備をしなくてはいい。
い。

場所と時間の指定、それに離婚するための書類作り。

それらを彼女に聞くと初めて聞いた言葉ばかりで戸惑っている様だった。

当然と言えば当然だろう。

離婚なんて結婚と同じで何度も経験する人なんて殆ど居ないのだから。

俺ですら兄貴が星になり昴と出会うまでそんな事は知らなかった。

養子縁組の仕組み。

親権とは。

それに至るまでの離婚の手続き等。

何に役立つか判らず漠然としながらも昴が大人になった時の事を考えて必死に調べた賜物だった。

神の思し召しか。

兄貴のおかげと言えば良いのか。

流石に今回は昴の友達とは言え男の子と一緒にお袋や親父に預ける訳にも行かず無理を言って美紀さんに預かってもらう事にした。

可奈も居る事だし何より昴が一緒なら安心だろう。

そして話し合いが拗れれば相手が暴力に訴え押し切られる可能性も否定できないと言うより相手は鼻からそのつもりなのかかもしれない。こちらでも対抗手段を講じなければ未来はないのだろう。

最悪の場合は昴にまで危険が及ぶ事になりかねない。

そんな事は絶対に許される事じゃないし俺が全力で阻止する。

携帯を取り出してこんな時には絶対に手助けしてくれる奴の番号をコールした。

「尚哉、久しぶり。若い奴の手を借りたい。数人で良いから。それとお前はいらないからな」

日時と場所を告げ近いうちに顔を出す事を約束する。

そして、彼女には決して感情的な発言をしない事。

俺に聞かれた事に対して明確に意思表示する事と念を押しておく。彼女が怯え取り乱せば相手の思うつばだと付け加えて。

こちらが指定した場所に時間どおりに向かう。

場所は自宅からは遠い郊外のファミレスだった。

駐車場は広いし何より見晴らしが良い。

天気も抜ける様な青空に真っ白い雲が流れている。

未来さんはお迎えの時にしているグレーのパンツスーツ姿でベージュのコートを着てこの間とは違う色のマフラーをしている。

俺もいつもと同じダークな色合いのスーツだが、弱冠ダークさをを

強調してみた。

そして俺のカバンの中には先日未来さんの診断書や数枚の書類と未来さんの署名捺印済みの離婚届が入っている。

未来さんの表情は緊張と恐怖心で強張ったままで仕方がないと言えはそれまでだった。

「大丈夫ですよ。聖司君のお母さん」

「はい」

「行きましょう」

俺まで緊張していれば話し合いどころではなくなってしまう。

笑顔で未来さんの肩を叩くと表情が緩やかになった。

ファミレスにはまだ先方は現れていないようだ。

とりあえず喫煙席に案内してもらった。

「どうして喫煙席に？」

「禁煙席は、ね」

広い店内の禁煙席を見ると週末と言う事もあって子ども連れの家族がランチを楽しんでいる。

最近はこの値上げや健康志向から年々喫煙率は下落していた。

それにファミレスでタバコを吸うのは外回りのリーマンが多い、俺もそうだった。

席についてしばらくするとあの晩に未来さんを殴り飛ばして金を持ち出した旦那と目つきの鋭いスーツ姿の男が現れた。

「ホットを4つ」

「ホットコーヒーを4つですね。畏まりました」

店員がハンディーに打ち込みをして復唱しお辞儀をして下がっていく。

「やはり、あなたが一緒でしたか。こちらとしても都合が良い」

それがスーツ姿のいけ好かない男の第一声だった。

「私は彼女のただの代理人みたいなもんですよ」

敢えて彼女の名前は口にしない。

見るからに裏の影をまとった男はこちらの口ぶりから2人の関係の近さを探ろうとしている。

「私はこう言うものです」

男が差し出した名刺にはコンサルティングやらいろいろな事が書かれているが、それを信用する訳がない。

「私の事はお調べになったみたいなので名刺を渡すまでは無いでしょう」

「さあ、何の事が判りかねますが」

「彼女の代理人の沢渡と申します。では本題に入りましょうか」
のらりくらりと核心を外しながら男が話を進めている。

要は旦那に多額の借金がありそれを肩代わりして高給な夜の仕事でもしてはどうかと言う事だった。

だがその実は彼女の骨の髄までしゃぶり尽くすのが狙いだろう。

今時にしては珍しい鉄板な話だった。

いかに相手が小物なのが良く判る。

しばらくすると喫煙席は見るからに強面のスーツ姿やジャンパー姿の男達で埋まっていた。

尚哉の奴、数人で良いと言ったのに恐らくお前はいらなと言った仕打ちがこれなのだろう。

その中には数人だけ見知った顔があるのを確認した。

周りの雰囲気は吞まれて未来さんがハンカチで額の汗を拭っている。見ると手が小さく震えていた。恐らく旦那の横にいる男の仲間だと思っっているのだろう。

そっと相手から見えないテーブルの陰で未来さんの手に手を当てる
と驚いた様な顔で俺をちらっと見た。

そしてこちらは相手の戯言を一切無視して一気に核心に向かって話を切り出した。

「彼女は借金を肩代わりする気など毛頭無いです。今日ここに来たのはそちらの旦那さんと離婚する為に出向いたのです」

旦那を見ると『えっ』と言う顔をしているがスーツ姿の男は全く動じていない。

当然、離婚の話になるだろうと踏んでいるのが良く判る。

「そんな事が簡単に出来る訳がないでしょ。ガキじゃあるまいし」「別に構いませんよ。裁判を起こしてもそちらに勝ち目がないのは火を見るより明らかですから。これが先日、あなたが彼女に暴力をふるい病院に行った時の診断書と医師の所見の証明書のコピーです。それと医師の話では複数回の暴力を受けた形跡があると言う事で警察にと言われましたが彼女が問題を大きくするのが嫌だと断りました。最近は何病もDVに対しては大変協力的ですから」

本当のところ俺は昂の治療が終わると会計を済ませて病院を後にした。

彼女を診察した医者は恐らく昂を診察した医者と同じだろうが、複数回の暴力をうんぬんと言う話は聞いていないと言うより聞く事なんて出来る訳がない。

相手を揺さぶる完全なブラフだが隣に座っている未来さんは当然俺の嘘に気付いているだろう。

「貴様は一体何者なんだ？」

「ただのリーマンですよ。まあ営業の仕事柄色々だね。それとこちらの書類は彼女が受けた身体及び精神的苦痛に対する慰謝料の金額と息子さんの養育費についての書類です。確認願いますか？」

旦那の目の前に2枚の書類を差し出すと旦那が書類に目を落とした、恐らく金額を見ているのだろう。

それもこちらの狙い通りだった。

慰謝料はDVで離婚する際の平均的相場の300万。

そして養育費は月々いくらではなく金額を大きく見せる為に大学を卒業するまでの総額をわざと記載してある。

「こんなに払えるか！」

「いえ、お支払いただかないと困ります。こちらが裁判を起こせば僅差なくこの金額が確定すると思えますが」

「一体、どこまで」

狼狽える旦那を横目に男にも動揺の色が伺える。

こちらの思惑に一気に嵌めていく。

「私は弁護士でもありませんから。法律等の事を調べるのにも限度がありますので離婚協議書にそちらのサインと判をいただいて公正証書の手続きを取るくらいしか出来ませんから。最初に申し上げたはずですよ。ただの代理人だって」

相手がど素人だと確信したのだろう男の口元が緩んだ。

それは型に嵌まった瞬間だった、お互いに。

「舐めた真似をしてくれるじゃねえか。こんな物に名前なんか書けると思ってたのか？ さっさとこちらの言うとおりにしていれば親子共々痛い目を見なくて済むと言うのに」

「親子共々ですか。見るとそんなあなたにも家族がありそうですね」「何だと俺の女房子どもは関係ネエだろうが」

「そうですね、そちらが暴力的に問題を収めようと言うのならこちらにも考えがありますから」

落ちた、男が言わなくても良い自分の家族の事を口にした。

大きく息をついて男が付き返した書類を両手で整える。

そして左手を軽く上げて手首を軽く振り合図をする。

周りに座っていた強面の男達が騒然とし1人の黒っぽいスーツ姿の男が立ち上がりこちらにゆっくりと歩いてきた。

髪の毛は綺麗に後ろに流しその目つきは日本刀の様に切れている。

「兄貴、お呼びですか？」

「周りの迷惑になる。表で待ってる」

「判りました」

スーツの襟元の金バッジが揺れて男が日本刀の様な目で合図をする
と騒然とした男達は波が引くように表に出ていった。

ファミレスの窓から外を見るとピカピカに磨き上げられたスモーク
張り的高级セダンが数台並んでいた。

それを見た男がガタガタと震えだした。

「た、瀧川がな、なんで」

「おや？ 連中がどこの者かご存知のようですね。俺はあいつ等の元締めと不思議な縁で杯を交わした仲なんだ。俺が言った『家族』の言葉の意味が判るよな」

その後の話は流れる様に進んだ。

慰謝料や養育費なんて酒とギャンブルに溺れる人間に支払い能力が無いのは一目瞭然で、尚且つ借金を抱えていれば尚更だろう。

それは初めから未来さんに確認はしてあった。

彼女の願いは旦那の暴力から逃れ、聖司君と2人で静かに暮らす事だけだった。

離婚届にサイン及び捺印してもらい誓約書を書いてもらう。

今後一切、彼女と聖司君に係わらない事。

親権の話も簡単にクリアーして署名捺印させる。

「それじゃああなたに連帯保証人になってもらおうか」

「な、なんで俺が」

「あんたがこの話を持ってきたんだろう。連帯保証人にならなくても今後何かあれば根絶やしになる事は覚悟しろよ」

俺の言葉に男が力なく連帯保証人の欄に署名捺印した。

これで離婚届を週明けに役所に提出して授受されれば離婚が成立して彼女に静かな暮らしがやって来る筈だ。

「帰りましょう。未来さん」

「は、はい」

ファミレスを出るとあいづらが車の前で待っているのが見える。

そして後ろから元旦那と男が出てきて逃げ出すように車に飛び乗って走り去ってしまった。

あの元旦那にはこれから生き地獄が訪れるのは確かだろう。

それは自業自得と言うやつだ。

「悪い、ついでに駅まで連れて行ってくれないか」

「うす！」

スーツ姿の男が後部座席のドアを開けて待っていてくれる。

「乗った、乗った」

未来さんの背中を押して車に乗るように促し俺が乗るとドアが静かに閉められ車が走りだした。

しばらくして駅のロータリーに着き車から降りる。

「尚哉によろしくな。約束通り後から顔を出すから」

「判りました」

男に声を掛けるとその顔に日本刀の様な鋭さなど微塵も感じられない。

走り出す車から数人が笑顔で手を振っている。

後から尚哉達に何を言われるのか容易に想像が付き肩を落とした。

未来さんを見ると疲れ切った表情をしているがどこことなく清々しいような気がする。

「疲れましたね。大丈夫ですか？」

「本当に驚きはなしです、あんなに用意周到に準備していたなんて何で最初から教えてくれなんですか」

「敵を欺くには身内からって言うでしょ。常套手段と言う奴ですよ。暴力に怯えていた未来さんが落ち着き払っていたら相手だって不審に思うでしょ。でも上手くいって良かったです」

「本当に怖かったんですから。強面の人達に囲まれて、皆さん役者さんかなにかですか？ 演技が上手でしたね」

「あれ？ 聞いていませんでしたか。昔、元締めと不思議な縁で杯を交わしたって。あいつらは本業ですよ」

「本業って？」

「俺に呼ばれて来たのは……組の若頭でって、未来さん？ うわあ。た、タクシー！」

俺が大きな声で言えないので耳打ちすると未来さんの体から力が抜けて思わず抱きかかえてしまった。

何だかとても柔らかく良い匂いがするがそんな事を気にしている場

合じゃなかった。

彼女をタクシーに乗せ昴と聖司の待つ美紀さんの家に向かう。

「またかい？」

見覚えのあるタクシーの運転手に笑われてしまった。

忘年

会社の忘年会の日がやってきた。

場所は会社から数駅離れた大きな駅の前だった。

この駅は私鉄や地下鉄それにＪＲが乗り入れていて俺もこの駅で乗り換えして会社に行っている。

結構、この駅を利用してゐる社員は多い筈だ。

「沢渡君、今日は当然参加だよな」

「あつ、熊谷さん。昂を迎えてから顔を出します」

「会場はばっちり私が選んだからね」

「ああ、子連れ忘年会会場ですか？」

「そう、皆喜んでくれてたよ。特に女の子はね」

今まで子どもが居る女子社員が参加する事は少なかった。

それは子どももの面倒を見ないといけない為とそういう場所に子どもを連れていく事を躊躇ってしまうからだ。

俺自身も実際のところ居酒屋なんかに飲みに行き子連れが居るとこんな所に子どもを連れて来る親の気持ち判らなかつた。

でも、親だつて時にはストレスを発散できる場所が欲しい筈だ。

それでも酔っ払いが居る場所に昂を連れて行くのは正直考えてしまふ。

「遅くなりました」

「おお、沢渡い！ 遅いよ」

「うわあ、寄るな酔っ払い。昂が怖がつているだろう」

案の定、昂は俺の脚の後ろに隠れてしまっている。

忘年会会場は人数の割には広い座敷になっていて確かに開いているスペースで子ども達が遊んでいてこれまでにない雰囲気になっている。

子どもたちが来ると言う事で誰かがおもちゃなんかを準備していた

みたいだ。

ねこ耳の力チューシャや小さなぬいぐるみなどで遊んでいるのが見える。

普段の飲み会には顔を出さない女子社員も楽しそうにグラスを傾けてお喋りに花を咲かせている。

すると熊谷さんが出迎えてくれた。

「昂ちゃん、初めまして。うお！ 何？ 何なのこの可愛さ加減は？ 本当に沢渡君なの？」

「あの、酔ってます？ 熊谷さん」

「素面よ、失礼ね。お世辞抜きにこんなに可愛い子だなんて思わなかった。昂ちゃん、こっちにおいで。ほら、沢渡君がエスコートしてあげなきゃ」

「あい、すみません」

テーブルに着くと俺の直ぐに目の前に生ビールが置かれ乾杯をする。

「お疲れ！」

「うーす」

「昂ちゃんは、オレンジジュースで良いかな？」

「はい、美味しいよ。たくさん食べてね」

「将来、有望だな。俺の息子の嫁さんに」

「コラコラ、沢渡君の顔が引き攣っているから」

水野課長は別格として家庭持ちの奴等は子どもの扱いが上手いのに気付く。

普段はギャルぽい格好をしている女子が昂に料理を取り分けてくれている。

何だか目から鱗って感じた。

それは昂が居なければ判らなかつた事だらけだった。

昂はと言えば一頻り料理を食べて小さな子ども達と遊んでいる。凄く微笑ましい姿に目に映る。

「おーい、沢渡君。お父さんの顔になってるよ」

「いや、なんだか保育園でもあんな風に遊んでいるのかなって」

「そっか、普段はあんまり保育所の生活って見ることが無いもんね。でも、昴ちゃんは小さい子が好きみたいだね」

「好きと言つか昴は小さな島で育ったからだと思います。島じゃ大きな子が小さな子の面倒を見るのが当たり前みたいなんだと。現に俺が島に行った時もそうでしたから」

「でも、お父さんが急に居なくなっただけ寂しくないのかな」

「それは寂しいと思いますよ。まして昴の父親と俺は瓜二つだし」

「そっか、でも昴ちゃんを見ているとそんな事を感じさせない沢渡君はもつと凄いとおもうよ」

「俺なんかまだまだすよ。戸惑う事ばかりで周りに助けられて。でもお蔭で視野が広がった気がします」

「よし！ それじゃ、その広がった視野でじゃんじゃん成績を伸ばしなさい」

「熊谷さんには敵わないな」

俺の背中をバシバシと叩いて他の席に移動してしまった。

宴もたけなわになっている、昴に声を掛けてから席を外す。

「昴、便所に言っただけ来るからな」

「もう、トイレって言っただけ。ノンのばか」

「すんまそん」

「あはは、沢渡が昴ちゃんに怒られてやんの！」

「うるへい！」

同僚にからかわられ睨みつけると周りがどつと沸いた。

そんな事すら少し前ならあり得ない事だった。

トイレを済ませ会場に戻ると会場の奥の方に暗雲が立ち込めていた。見るからに土砂降りの雨が降りそうだった。

「何だよ、沢渡ばかり」

「そっか、ちょっとばかり成績が上がったからって」

学校にもこんな奴らが居た気がする。

普段は成績の悪い奴を見下しているのに、そいつが上に上がってきて注目を浴びると嫌味を言う奴ら。

何も変わらずに大人になってきたんだと思う。

そしてそんな態度をとる人間を熊谷さんは1番嫌っていた。

「何なの？ あなた達は自分のケツに火が着いたからっていい加減にしなさいよね」

「俺らだって中田先輩についていれば」

「へえ」 中田君が怖いから厳しいからって逃げ回っていたのは何処の誰でしたっけ」

「それはあいつが」

「それ、本気で言ってたんだ。 あんた達」

熊谷さんの口調が変わった。

現役バリバリの頃の熊谷さんの口調だ。

それは女だからなんて言わせない、男になんて絶対に負けないと言う確固とした絶対に折れない真っ直ぐな芯からくるものだ。

それがあるからこそ周りの皆は一目置いていた。

「野田、ちよつと来な」

「は、はい」

熊谷さんに呼ばれ野田が恐る恐る腰を上げて席を立った。

「あんた達は1日どれくらい営業に回っているの？」

「アポなしを入れて15くらいですよ。先方と会っている時間と移動時間を考えたらそんなもんでしょ」

「野田、今日は何軒回った？」

「えつと23件です」

「聞いたか？」

「そんな無茶苦茶な」

「1日の目標をこいつらに教えてやれ」

野田が口ごもる様に渋々話をし始める。

「あの一応20件です。最初に回る順番を組んで移動中にも近くにある営業先に連絡を入れて顔をだして、アポが取れなくても出来る

だけ顔を出せつて先輩が。それと目標は無理だと思つても絶対に下げなつて」

「いい事を教えてやる。中田の出した1日の目標は30だ。お前らはある意味正解だよ、絶対に着いていけないし泣き言を漏らしていただろうよ。それともう一つ沢渡から引き継いだ営業先を返してみるか、あいつに？」

「何で今更そんな事をしなきゃならないんですか！」

「あの事故の後、とりあえず今は代理で良いから沢渡が復帰したら元に戻してくれて言つてきた取引先ばかりなんだ。それを復帰した沢渡が先方に頭を下げてお前らに引き継いだんだ。その上に胡坐をかいてきたくせに」

熊谷さんがヒートアップして言わなくても良い事を暴露してしまつた。

それは俺のためを思つての事だろうけどこのままじゃこの場が気まぐずい雰囲気呑みこまれてしまう。

仕方なく昴を呼んでねこ耳のカチューシャをつけてみた。

「おお、黒猫マノンの友達見たいだぞ。昴」

「ほんとう？ にゃん」

昴が嬉しがって手を丸めて猫の真似をしている。

少し色素の薄い昴の髪に茶トラのねこ耳が似合っていないかと言えば似合いすぎるほど似合っている。

『すまん、昴。出しに使つて』心の中で手を合わせ頭を下げる。

「ほら、熊谷さんに見てもらえ」

「うん！」

嬉しそうに熊谷さんに向かって昴が突進していく。

「進君のお母さん。にゃん」

「きゃーねこ耳、超可愛い！ 昴ちゃん。抱っこさせて。きゃー女の子って柔らかいし良い匂いがする。よーし飲み直すぞ！」

「熊谷さん、こっち向いて！」

「ああ、ずるい私も」

皆が携帯を取り出して昴を抱き上げた熊谷さんをカシャっていた。

「楽しかったね」

「そうだな、肩車してやろうか」

「ぶう、ノン。おさけくさい」

「そうかあ？」

「それによっぱらい。まっすぐあるかないとあぶないよ。て！」

「あーい」

あ後は昴のおかげで場の雰囲気は元に戻り良い感じでお開きになり2次会は昴が居るので遠慮した。

熊谷さんに叱責された奴らはどうするべきか自分で答えを出すだろう。

翌朝、二日酔いで俺が昴に叱責される羽目になってしまった

サンタ

街中はクリスマス一色に染まっている。

イルミネーションが光りクリスマスカラーの緑や赤のリボンが風に揺れている。

昴との初めてのクリスマスだと言うのにあまり普段と変わらなかった。

とりあえずクリスマスケーキなるものは予約してありプレゼントも隠してある。

昴を抱っこしながら昴が島に居た頃のアルバムを見ていた。

「これはね。 なっちゃんだよ。 でね、ここがジョンビーチ」

「へえ、綺麗だな」

しかし、何処を見ても母親の影すらない。

いや、待てよ写真を撮るのは好きだって兄貴は書いていたなって事はまさか。

「なあ、昴。 この昴と兄貴の写真を撮ったのって誰なんだ？」

「りょうこさん」

やっぱり、母親の写真が無い理由を今理解した。

慌てず普通に、あくまで普通にだぞ、俺。

「なあ、りょうこさんってどんな人だった？」

「んと、いつもこわいかおしておこっているの。 でね、ときどきふねにのってしらないところに行くの。 パパとっしょがいいのに。 だからりょうこさんはきらいなの」

彼女も昴が心を開いてくれないと言っていた。

一体なにがあっただんだ？

昴の問題か、または彼女自身の問題か。

考えられるのは後者の問題だろう事は直ぐに見当がついた。

それが不憫で兄貴は……

今となつては知る術も無かった。

「なあ、昴。今日はクリスマススイブなんだって、何が食べたい」

「チキン！」

「はあ？ チキン？」

「うん、あけてあるやつ」

「あ、ああ。テレビでやってる奴か。白いおじさんが出てくる奴」

「うん。せいじくんのいえもきょうはチキンって言ってたもん」

俺はアジの開きとかサンマの塩焼きって言われたらどうしようか
りアクションに困っていてホツと胸を撫で下ろした。

定番のチキンで良いのならお安い御用だった。

昴と買い物に行き予約したケーキを持って帰ってきた。

テーブルの真ん中にはケーキにフライドチキンが並びサラダや煮魚
と一緒に並んでいる。

未来さんも聖司と2人でクリスマスなのだろうか。

春菜はタフガイとデートだろう。

可奈は美紀さんと変わらずなのかな？

親父とお袋はクリスマスって柄じゃないか。

それぞれの家庭に楽しそうな明りが灯っているのを感じる。

そして今年からは俺の所にも。

しかし、殺風景な家の中だなツリーすら用意してやるのを忘れてし
まっていた。

それなのに昴の瞳はキラキラと嬉しそうだ。

「食うか」

「うん！」

ピンポン！

「誰だ？ チャイムの音なんて久しぶりに聞いたぞ」

小さな古い家なので玄関先で呼べば聞こえないなんて事はまずいな
い。

だから、俺の家に来る連中はチャイムなど鳴らさずに声を掛ける。

玄関に向かうとすりガラスの向こうに大きな赤い生き物が蠢いているのが見える。

思わず玄関に有った傘を握りしめ鍵を開ける。

「どちらさま」

「メリークリスマス！」

「うわぁ、何だ？」

俺より背は少し低いが横幅は倍以上もあるサンタクロースが現れた。

「だ、誰だ、お前」

メリークリスマスの声を聞いた昴が出てきてしまった。

「ああ、サンタクロースさんだ。あつ、はるなお姉ちゃん」

「えへへ、来ちゃった。典兄、脅かしてゴメン」

「春菜か。と言う事は…… サンタはタフガイが可哀想に」

サンタの陰からミニスカサンタの格好をした春菜が現れ、俺の言葉を聞いたサンタが目を拭っている。

来てくれた事に感謝はするがタフガイが不憫でならない。

不規則な勤務体制でデートすらままならず折角のクリスマスイブにこんな所にサンタの格好をさせられ連れて来られてしまっている。

2人きりでデートのプランでも考えていただろうに春菜に却下されたに違いない。

「ゴメンな、春菜が昴に会いに行くって言い切ったんだろ」

「……」

「ビールでも飲むか」

「はい」

「サンタクロースが泣くな。しゃんとしろ。それと、春菜もつとタフガイを大事にしろよ。折角のイブなんだぞ」

「その言葉をそのまま典兄にお返しします。ツリーも無いイブなんて信じられない。昴ちゃんをもっと大事にきなさい」

「すんまそん、来年は」

「来年じゃ遅いの。今年のイブは今日だけなんだから」

「あい」

するとタフガイが大きな体を丸めながら白い袋の中からクリスマスツリーを取り出して組み立て飾りつけを始めていた。

「うわあ、クリスマスツリーだ。サンタさんありがとう」

「くうっ、話には聞いていたけどめっちゃ可愛い。かなり来るかも」

「来るじゃないでしょ。昴ちゃんも一緒に飾り付けしよう」

「うん！」

昴マジックと言うべきかタフガイが知らない間に笑顔になってまんざらでもなさそうな顔をして、昴と春菜の3人で一緒に飾り付けをしている。

すると再びチャイムが鳴った。

「何なんだ今夜は」

玄関に向かうと昴が後ろからついて来て今度は小さな赤い生き物が玄関先で蠢いている。

「今度は誰だ」

「メリークリスマス！」

「親父なのか？」

「あ、おじいちゃんにおばあちゃん」

「昴ちゃん。はい、クリスマスプレゼントだよ」

「うわあ、ありがとう」

「あら、先客が居るの？」

「ああ、大きなサンタと小さなミニスカサンタが来ているよ」
居間に集まると異様な感じがする。

大きなサンタに小さなサンタ。

そしてミニスカサンタまで居る、どんだけ世界中にサンタクロースが居るんだよ。

「馬鹿だね。相手を思いやる気持ちの数だけサンタクロースは居るんだよ」

「それを俺は子どもの頃に聞きたかったよ、お袋」

「あら、そうだったの？」

「そうだったじゃねえだろ」

「変ね、のっぽのサンタさんが居てもおかしくないのにね」

「ええ、もう1人サンタさんがいるの？ おばあちゃん」

「居るはずよ。ね、ノリちゃん」

「お袋にちゃん付けで呼ばれたら俺がチキンになるわ！」

小さな家に大きな笑い声が上がった。

「す・ば・る・ちゃん」

「ああ、可奈ちゃんの声だ」

昴が玄関に飛び出して行き、小さな小さなミニスカサンタが美紀さんを連れてきた。

「ああ、サンタクロースがいっぱいだ」

「ごめんなさい典彰君。可奈がどうしても行くって聞かなくて」

「気遣い無用で。大勢の方が楽しいし、俺もどうして良いのか判らなかつたから」

「ありがとう」

皆からクリスマスプレゼントをもらった昴は大はしゃぎだった。

プレゼントはダブらない様に前もって俺の所に皆から連絡が来ていた。

「それじゃ」

「メリークリスマス！」

クラッカーが鳴り、何もなかったクリスマスが盛大なクリスマスになっちゃった。

これも全て昴のおかげなのだろう。

もしかしたら星の上の兄貴からのクリスマスプレゼントなのかもしれない。

翌日、昴が目を覚ますと枕元にリボンが付けられた大きな黒猫のマノンのぬいぐるみがあった。

「ノン、おきて。たいへんなの」

「あ、何が大変だった？」

「みてこれ」

昂が嬉しそうにマノンのぬいぐるみを俺の目の前に突き出している。

「あん？ サンタが来たんだろ」

「どうして、わたしが欲しいものがわかるんだろっ」

「さあな、サンタクロースだからだろ」

「ノンのところにはなにもないね」

「俺の所には来ないよ。俺は大人だもん」

「ええ、おとなになるとサンタさんこないの？」

「んゝ ちよつと違うかな。来る人もいるか。でも俺の所には来ないの」

「ええ、ノンがかわいそう」

「可哀想言っな」

「じゃ、わたしがあげる。チュッ」

突然俺の頬に柔らかい何かが当たった。

頭の中が真っ白になりそのまま布団の上に倒れ込んだ。

いつの間にか俺の所にもサンタは来ていた様だった。

ランドセル

正月は実家に集まるのが沢渡家の習慣になっていた。

兄貴ですら島に転勤してからも必ず正月は戻ってきて美紀さんと可奈を連れて実家に行っていた。

それと春菜に至っては自分の家にいるよりも俺の実家に居る確率の方が高かった。

そんな場所に例年なら俺の姿は無かった。

それは正月に出かける奴らの気がしれないからで、それは実家に戻る事ばかりではなかった。

「今年は帰って来るんだろうね。昴ちゃんを連れて戻ってきなさいよ」

「ええ、しんどいから良いよ」

「何を言ってるの、あんたは本当に親不孝だね」

「悪かったな」

そんな俺が今年に限り実家に向かう電車に乗っていた。
まんまとお袋の策略に嵌まったからだ。

「ノン、おじいちゃんとおばあちゃんちに行こう」

「ええ？ 正月に？」

「うん、おいしいおまめやおもちがあるって」

「行きたいのか」

「うん」

食べ物に釣られた昴に押し切られてしまった。

「ノン、みぎだよな」

「ああ」

「はやく、はやく」

実家の門が見えてくると昴が俺の手を振り切って走り出した。

「昴、時々車が来るんだぞ。走るな」

「はい、おばあちゃん、おじいちゃん」

「あら、あら。昴ちゃんよく来たね。あら？ ノリは」
「あそこ」

ため息を付くと昴に指を差されてしまった。

「そんなに嫌ならあんただけ帰りなさい」

「良いのか？ 帰って。知らねえぞ昴に嫌われても」

「そ、それは困るわね」

街よりも数段寒い気がして居間の炬燵に入り体を丸め暖を取る。

街の方が温かく感じるのはヒートアイランド現象の所為だろうか、そんな事を考えていると首筋に冷たい物が押し当てられた。

「うわあ、な、何だ」

「えへへ、ノン。ミカン」

「あのな、心臓が止まるかと思っただろ。最近は情け容赦ないなあ」

昴が俺の横で炬燵に潜り込みミカンの皮をむき始めた。

「ほら、貸せ」

「うん」

蒂の付いた方からミカンの皮をむき始める。

確かこうすると白い奴があんまりくっつかないはずだ。

「ほれ、むけたぞ」

「ありがとう」

「何だか仄々するね」

「何を親父は爺くさい事を言っているんだよ」

「何をつて現に爺ちゃんだからね」

「まだまだボウリングなんかして元気なくせに」

「まあ、可奈と昴が大きくなるまではね。そう言えば昴と可奈は春には小学生だね」

「先の話だよ」

そこにお袋が料理をしていたのか、ひと段落ついたお袋が現れた。
「何を言っているの。ランドセルとかは決めたの？」

「いや、未だだけど」

「あんたね、早くしないとブランド物なんかは無くなっちゃうんだよ」

「ブランドって普通ので良いだろう」

「駄目よ、女の子なんだから。昂ちゃんはどんなランドセルが良いんだい？」

「らんどせる？ わかんない」

「もう、ノリがちゃんとしなから」

「へいへい」

「お父さん、パソコンを持ってきてちょうだい」

「はあ？ パソコン？」

お袋に言われた親父がいそいそとノートパソコンを持ってきた。どうして実家にパソコンが？ 実際のところ誰が使うんだ？

「お父さんがねボウリング場の予約とかサークルの仲間とかの連絡に使っているの」

「信じられん、携帯すら使いこなせてないのに。この型の古いパソコンは何処から？」

「春菜ちゃんが使ってないパソコンがあるからって。全部やってくれたの」

「まあ、見たところ中身が殆ど空だからネットやメールだけなら十分だと思うけど」

「ほら、ノリ。ランドセルよ、ランドセル」

「ハイハイ」

ネットを開いて人気のランドセルを調べてみると確かにブランド物が存在するようだ。

俺らの時代は色も赤と黒の2色だけでかなり重かった記憶がある。

時代が変わるところも変わるものなのかと実感しきりだ。

色もカラフルで無い色は無いんじゃないかと思える。

中には花柄のランドセルまであった。

「最近は色が選べてオリジナルっぽい奴まであるのか。ブランド物はつて9万？ 原付が買えるぞ」

「うわぁ、かわいいのがいっぱいあるね」

そこに美紀さんと可奈がやってきた。

「今年もよろしく願います」

「はい、はい。堅苦しい挨拶は抜きにして楽にしてね」

「昂ちゃん、なにを見ているの？」

「ランドセルだよ」

「わたしも見たい」

「それじゃ、可奈がここに座れ。でこれでこうしてここを押すんだ。判ったな」

「「うん」」

横にずれて可奈を座らせ昂にマウスの使い方を教えると直ぐに使いこなし始めた。

いつもながら子ども吸収力には驚かされる。

まるで水を吸収するスポンジみたいだ。

「昂ちゃんも小学校なんだね」

「まぁ、まだ先ですけどね」

「でも典彰君もすっかり板についてきているみたい」

「それもまだまだすよ」

結局、昂と可奈のランドセルはお袋達が買ってくれることになり早々と2人を選ばせてネットで注文を済ませてしまった。

どんな物が届くかは教えてもらえなかった。

届いてからのお楽しみだそうだ。

喪中と言う事でお節は無いが煮豆や餅を用意してくれている。

それと兄貴と俺が好きだった豆腐を焼いて甘辛く味付けをしたものがあつた。

「うわぁ、懐かしいな」

「あんたが毎年顔を出さないからでしょ。毎年作って待っているの

に」

「年末年始くらいのにびりさせてくれよ」

「会社でもものんびりしているくせに」

「もう違うよ。お蔭でボーナスもそこそこあったからな。少しは生命保険の事とか考えないとな」

「あんた、未だそんな事を言ってるの？」

「俺だって忙しいの。色々あんだよ。だけでもう無茶は出来ないよな、昴が居るんだし」

「そうね、ちゃんとしないとね」

「典彰君はちゃんとしていますよ。いつも一番に昴ちゃんの事を考えているし、それにね」

「ああ、あの人は違うから」

「そうなの？ うふふ」

美紀さんが言っているのは未来さんの事だろう。

誤解されると困るので釘を刺しておく、お袋が勘ぐっていたが強引に振り切った。

「ノン、なんだか歯がいたい」

「歯が痛い？ どこだ？ あーんして」

昴が口を開いて指で奥歯を触っている。

「良く判らないな」

「どれどれ、おばちゃんに見せて」

「うん」

美紀さんが俺の代わりに見てくれた。

「虫歯じゃないみたいだけど、一番奥の歯に固い白い物がついてるの。それが歯茎に当たって赤くなっているみたい」

「ノリ、大丈夫なのかい？」

「俺に聞いても判らないよ。正月明けに歯医者に連れて行くよ。昴、そんなに痛いのか？」

「ゆっくりかめばへいき」

「それじゃ、後で歯医者に行こうな」

「う、うん」

まあ、実家に来ればそれでんびり出来るのだが決まって結婚だの孫だの言われるのがどうにも苦手で遠のいてしまっていた。

つい缶ビールに手が伸びると昂の冷たい視線が注がれる。

「まだ、2本目だ。正月休みなんだから飲ませろ」

「3ばんまで」

「へーい」

これではどちらが大人か子どもか判らない。

「そう言えば春菜はどうしたんだ？」

「あら、今年は未だね」

「電話してみるか」

「春菜ちゃんだって忙しいのよ」

「毎年顔を出していたんだろ」

「まあ、顔を出してくれなくなったらそれはそれで寂しいけれど」

「だろ」

春菜に電話すると喪中と言う事を気にしていたようだ。

直ぐに玄関が開き居間にやってきた。

「ああ、可奈ちゃん達も来てたんだ。早く来ればよかった。今年もよろしくね」

何だか普段よりテンションが高い気がするが敢えて聞かない。

春菜ももう子どもではない。

大人になれば大人なりの悩みがあるのだろう。

寄りかかってきた時に手を差し伸べてやれば良い。

クリスマス同様、賑やかになりそうだ。

正月が開けて直ぐに歯医者に行くために半休を取った。

これから行く歯医者は周りの連中に色々話を聞いたうえで決めた、子どもに優しい歯医者だと評判の所だった。

しかし、歯科医院に入るとあの特有の匂いがした。

「ノン、いたくない？」

「少しは痛いかもしれないけどずっと痛いままじゃ嫌だろ」

「う、うん」

「大丈夫だ、俺がついている」

昂にそう言ったものの目の前で昂の歯を削られたら見てられないかもしれない。

誰も一度は経験しているあの痛さが蘇り背中がゾクゾクする。

何だか俺の方が緊張してきた。

「6歳臼歯に腐骨が付いているみたいですね」

「腐骨ですか？」

「ええ、顎の骨ですよ」

先生の言葉を聞いただけで血の気が引いていく。

「麻酔をして取り除きましょう」

「お、お願いします」

昂が握っている手に力が入る。

先生がピンセットで小さな脱脂綿何かをつまんで昂の口に入れ薬を塗っているようだ。

そして治療が始まる。

「取れましたよ」

「は、はい？ 昂、痛くないか？」

「うん、ぜんぜんいたくなかった」

あまりにも呆気なかったので気が抜けてしまう。

昂の口の中を見せてもらうと奥歯の歯茎に小さな穴が開いていて少しだけ血が出ているが問題ないと言われてしまった。

「自然に穴は塞がりますし腫れも引いてくるはずです。それと6歳臼歯はこれから他の乳歯が大人の歯に生え変わる為に非常に大事な歯ですからお父さんがきちんと歯磨きチェックをしてあげてくださいね」

「あの。もしもですよ虫歯になったりしたら」

「最悪な場合は歯並びが悪くなります。もし時間が御有りになるの

ならこの後に歯磨き教室があるので参加されてみてはどうですか？」

「宜しく願います」

受付で待っていると数組の親子が現れて歯磨き教室が始まった。

最初はいかに歯が大切かと言う事を子どもにも判るように絵を見せながら説明してくれる。

そして歯磨きのポイントを細かく教えてもらった。

「昂ちゃんには虫歯は無いようですから気を付けてあげてくださいね」

「はい」

「ノン、おわりなの？」

「終わりだよ。夜ご飯も少し柔らかい物にしような」

「うん」

その晩から昂の歯磨きチェックが始まった。

昂が磨き終わった後で磨き残しが無い様に俺が磨いて仕上げをする。

何だろうこの感覚はくすぐったい様なそれでいて寂しい様な。

今まで感じた事のない感覚だった。

これが普通の親が感じているものと同じなのだろうか。

今はとても愛おしく感じるが成長すれば必ず親から離れていく寂しさを同時に感じてしまうのかもしれない。

春菜

昴と出会い一緒に暮らすようになって半年が過ぎようとしていた。お袋にせつつかれて昴と2人で昴の勉強机もとい学習机を見に来ていた。

「うわぁ、かわいいのがいっぱいだね」

「昴が選ぶんだぞ」

「わたしがえらんでいいの？」

「良いよ、だって昴が使うんだから」

「どれにしようかなぁ。まよっちゃうね」

「時間はいくらでもあるからな」

そして財布の中もいくらか余裕があった。

それはお袋達が昴のランドセルを買ってくれたからで、ボーナスもそこそこだったの少しは貯金してもまだ余力があった。

目移りしていた昴の動きが止まり机の引き出しを開けたりしている。それは白とピンクを基調とした女の子が好きそうなデザインで、所々にキラキラ光るビーズがあしらわれていた。

どうしても子ども目線で選ぶとこのラインになってしまつのだろう。親達としてみれば長く使える物を選びたいのが信条だろう。

大人まで……魔法の言葉を口にしてみる。

「なぁ、昴。もう少しお姉さんみたいなやつが良いんじゃないか？」

「ええ、おねえさんみたいなのやつ？」

「そう、あっちにある白木ぽいのとか」

「みてる」

俺が指差すと昴が一目散に走り出しゆっくりと後を追いかける。

「走るなよ」

「うん」

すると落ち着いた感じの木で作られたシンプルな机の前に昴が立っていた。

「このクローバーのがいいな」

「ん？ クローバー？」

見ると背板の真ん中が四葉のクローバー型にくり抜かれていた。引き出しの数や大きさも良い感じだし、大人の俺が手について揺らしてもしつかりとしたつくりになっている。

それだけに値段もそれなりにだけど中学・高校と使えたら安い買い物なのだろう。

「これで良いのか？」

「うん、これがいい！」

「しかし、クローバー大好きだな」

「うん」

店員を呼ぶと取り寄せの商品で少し時間がかかると言われてしまうが昴が選んだものが1番良いのは変わらないので購入を決める。この時期の商品なのだから小学校の入学までには届くだろう。

「アジ、サンマ、クローバー。アジ、アジ、サンマ、クローバー」

昴が嬉しがってあの歌を歌っているがクローバーが増えている。

それは俺の実家に行った時に四葉のクローバーを見つけた時からだった。

「昴、はやく帰らないとあれが始まるぞ」

「ええ、ノンいまなんじ？」

俺が時間を言っていると俺の手を掴んで引つ張って歩きだした。

「はやく、おわっちゃうよ」

「へーい」

急いで家に帰る。

でも何で毎週欠かさずにしなければいけないのかが俺には理解できなかった。

「ノン。はやくかぎあけて」

「そんなに急かすなよ。ん？」

その時、庭の方から歌が聞こえた気がした。

「庭に誰か来ているのかな。あつ昴！」

俺の制止も聞かずに昴が庭を覗き込んだ。

「変な人だったら」

「あ、はるなお姉ちゃん」

「えへへ、来ちゃった」

庭でしゃがんで何かを覗き込んでいたのは春菜だった。

「ああ、ノン。いそいでいそいで」

「へいへい」

「何をそんなに急いでるの？ あ、トイレでしょ」

「ちがうもん！」

玄関のかぎを開けた瞬間に昴が家の中に飛び込み、テレビのリモコンを手にとってスイッチを入れてチャンネルを変えている。

丁度番組が始まった所の様だ。

「ねえ、典兄。何かあるの？」

「あれだよ、春菜も見た事がある筈だぞ。みんなといっしょ体操」

「みんなといっしょ体操？」

「ノン、はやく！」

春菜に説明をしていると曲が聞こえてきてテレビの前に行き昴の横に並んだ。

曲に合わせて前ならえをして向きを変え同じ動きをする。

昴が手を横にするのを俺がしゃがんで避ける。

今度は俺が手を横にすると昴が頭を抱えてしゃがんだ。

そして手を叩きあい、腕をぶつけ合って深呼吸をする。

「みんなといっしょたいそう。おわり」

昴の掛け声でホツとため息を付いて腰を下ろすと昴は直ぐに手を洗いにいきうがいを始めた。

「ノンもだよ」

「へい」

「それじゃ、お姉ちゃんも」

3人並んでうがいを始める。

ガラガラ

コロコロ

カラカラ

3人3様の音がする。

体操をして保育園で言われている帰ったら手洗いとうがいを済ませると昴はテレビを消して絵本を読み始めた。

春菜が勝手知ったる我が家と言う感じで手際よくお茶を入れてくれて2人でお茶を飲み始めた。

「典兄もすっかりお父さんだね」

「そうか。昴の事はなんとなく判ってきたけど他の子どもはちょっとなあ」

「でも、昴ちゃんは凄いな。ちゃんとテレビを消して本を読んでる。それに庭のあれってなあに」

春菜が庭にある小石で丸く囲ってある所を指さした。

「ああ、あれは昴が種を蒔いてるんだよ」

「種？ 何の？」

「桃とか梨とかブドウもあったかな。最近、昴のお気に入りの八百屋を見つけて時々果物を買って来るとその度に『芽でるかな』って自分で埋めて毎日水をやってるよ」

「凄いね昴ちゃんって」

「そうだな。昴は少し何でも自分でしなきゃって言う気持ちが強い見たいだからな。島で育った所為か兄貴が忙しく働いていた所為か」

「典兄も忙しそうだもんね」

「あのな、俺はバタバタしているだけだよ。それと来る前に電話くらいしろ」

「だって、家出してきたんだもん」

「家出？」

「声大きいよ。昴ちゃんに聞こえちゃうでしょ」

「あのな、6歳児に家出なんて難しい言葉が判る筈ないだろう」

「まあ……」

それっきり春菜は湯のみを両手で持ったまま俯いて何も言わなくなつてしまった。

「しょうもない奴だな。しばらくここに居ろ。どうせ俺の所に来たと言ふ事はタフガイは勤務なんだから」

「うん、他の基地で訓練だつて。こんな時には傍に居てよね、馬鹿」
「で、家には？」

「置手紙してきた。しばらく帰らないつて」

「そつか、仕方がない晩飯の買い物にでも行くか」

「うん。昴ちゃん、3人でお買い物に行こう」

「ええ、3にんで」

「そつだよ」

「いく！」

駅前のスーパーに向かう。

近くにもスーパーがあるのだが品揃えが全く違うし、駅前の方が近くに色々な店があるので都合が様くこの界隈の人はたいいてい駅前まで足を延ばしている。

自宅から歩いて15分ほどなので運動にも丁度いいかもしれない。

スーパーの籠を持ち何にするか考えながら歩くが何も浮かんで来なかった。

いつもなら昴に何が食べたいか（主菜はほぼ魚）を聞いて決めるのだが今ここに昴はいない。

春菜と2人で店内を探検に行つてしまった。

そして主婦もどきの格好で主婦が毎日頭を悩ませる事と同じ事を考えていた。

後ろの方から昴の声がした。

「はるなお姉ちゃん。どうしたの？」

不思議に思い振り返ると春菜が慌てふためいて俺に向かって昴の手を引きながら向かつてきた。

「何をそんなに慌ててるんだ？」

「あ、あの、ね」

「落ち着いて話せ。幽霊か何かでも見たのか？」

「そ、それぞれ」

「アホ、未だ外は明るいんだぞ」

「だ、だつて」

「沢渡さん」

聞き覚えのある声があると春菜の体が角材みたいに硬直してギリギリと音を立てながら振り返った。

「ああ、未来さん」

「この間は本当にありがとう御座いました。おかげさまで無事に」

「そうですかそれは良かったですね」

何故だか凄く輝いて見える。

それは身の回りが落ち着いて安心して過ごせるからなのだろうか。

何はともあれ一段落と言う事なのだろう。

「ああ、ノリ。けっこうんしたのか？」

「するか！ こいつは従妹の春菜だ」

未来さんの後ろから顔を出した聖司が大声でとんでもない事を叫び、それを打ち消すくらいの声で否定すると周りの視線を浴び失笑されてしまう。

「ノン、はずかしい」

「す、昴まで……」

昴にまで冷ややかな視線を浴びせられている。

「あ、あなたがもしかして妹分の春菜ちゃん？ 私ってそんなに似ているのかしら。だから私の顔を見て逃げ出したのね」

頭が落ちてしまうのではないかと思うくらいブンブン音を立てて春菜が頭を縦に振っている

「あのな、春菜。頼むから恥ずかしい事をしないでくれ。お前ももういい大人なんだから」

「私は加賀谷 早苗の従妹にあたる入江未来 いりえみらい です」

「ええ、早苗さんが話してたそっくりな従妹って」

「私です。そう言えば沢渡さんも私の顔を初めて見た時に驚いた顔をしてましたもんね」

「すみません」

未来さんが笑いながらそんな事を言う。

思わず頭を掻いてしまった。

すると未来さんが春菜に何かを耳打ちしている。

「典兄ですか？ 私の正義のヒーローです」

「かーちゃん、めし」

「はいはい。それでは失礼します。 昴ちゃん、バイバイ」

「バイバイ。せいじくんまたね」

「おう」

未来さんが頭を下げ聖司と一緒に歩き出した。

昴が腰の所で恥ずかしそうに手を振っている。

「綺麗な人だね。早苗さんにそっくりで」

「何が言たくて、誰が正義のヒーローなんだ？」

「別に」

「彼女はそんなんじゃないよ。旦那と離婚したばかりだよ」

「そうだったんだ。それにしても未来さんってスタイルが良いんだね。子どもが居るなんて信じられない」

「そうか？ 普通じゃないのか？」

「もう、典兄は女の人になると鈍感なんだから。女の目は鋭いもんなんです。間違いなく子どもを産む前と同じ体型を維持しているね」

「俺の事は放っておけ。それより誰かさんは甘酸っぱいやつ見たいだぞ」

「え、ええ！」

俺が昴を見ると春菜が驚いてしゃがみ込み昴の肩に手を置いた。

「昴ちゃん、あの男の子の事が好きなの？」

「うん、すき。はしるのはやいから」

「うわぁ、今時の子って典兄の頃と大違いだね。誰かさんなんて好きな子の背中に虫を入れて苛めてたもんね」

「男は大体似たようなもんだ」

「そうなのかなぁ」

「タフガイに聞いてみる」

「え、う、うん」

俺が彼氏の事に触れると途端に春菜の顔が曇った。
今夜は長くなりそうだ。

「典兄の肉じゃがが食べたい」

「肉だな、よし！」

春菜の一言に思わずガッツポーズをしてしまった。

「まるでお肉を食べさせてもらってない子どもみたい」

「肉ねえ」

遠い視線になつてしまう。

「まぁ、昼は極力肉系で行くけどな。夜のメインは魚だからな」

「ええ、ずっと」

「まぁ、毎日？」

「信じられない健康体じゃん」

「やっぱ肉だよな」

「おさかながいい」

「行くか」

「うん！」

スーパーで買い物を済ませ駅前商店街の昴御用達の魚屋にむかう。

と、遠くから店主が手を振っているのが見える。

「どんだけお得意さんなの？」

「まぁな」

「おっ、今日も可愛いね昴ちゃん。今晚はどれにする」

「きょうはどの子にしようかな」

昴が氷の上に綺麗に並べられた魚達を真剣な表情で見ている。

「あの子！」

「鰭かい？ 痺れるね昴ちゃんの目利きには。今日一番の上物だよ」

「それじゃ3切れね」

「ええ、あ、昴ちゃん、誰？」

店主が俺の横にいる春菜に気付き俺に聞かずに昴に小声で聞いていた。

「あのね、はるなお姉ちゃん」

「ええ、お姉ちゃん？ 若いのに大した」

「従妹です」

「なるほどね」

拳を掌に落とす店主を見て春菜が横でクスクス笑っている。

昴御用達だから来るけど1人じゃ絶対に来たくない店ナンバー1になった。

春菜が娘に見える俺って……

家に帰り夕食の準備をする。

七輪に火を入れその間に魚の下ごしらえをする。

酒・しょうゆ・みりんと魚屋でもらった柚子の輪切りを入れたタレに鰭を漬け込む。

その間に肉じゃがを作り始める。

「鰭はどうなるの？」

「幽庵焼きだな」

「へえ、典兄って料理出来るんだ」

「まあな、独り暮らしは半端無いくらい長いからな」

横では踏み台に乗って昴がサラダを千切っている。

「昴ちゃんもお手伝いするんだ」

「うん、ノンがしてもいいって」

「へえ、上手だね」

「えへへ、ノンはもつとじょうずだよ。ノンのつくったごはんおいしいよ」

春菜に鍋を任せ七輪で鰯を焼き始める。
しばらくすると春菜が声を掛けてきた。

「典兄、出来たよ。そっちは？」

「もう少しかな」

何度かタレを付けながら裏返す。

縁側には良い匂いが立ち込めている。

「寒いから中に入ってる」

「う、うん。グリルで焼けば良いのに」

「その魚のプリンススがそんな事を許すと思うか？」

「本当に昴ちゃんが1番なんだね」

「当たり前だろう」

「そっか」

春菜が呆気なく部屋に戻っていくのを思わず目で追ってしまう。

「うわぁ、焦げた！」

「いただきます」

3人で手を合わせてご飯を頂く。

食事はテレビをけして必ず家族で話をしながら食事をする。

それが昴流と言うか兄貴の流儀だった。

「おいしいね」

「うわぁ、本当に美味しい」

「あのな」

「だってグリルだって同じだと思っていたんだもん」

「まあ、遠火の直火で焼くからな。ふつくと焼き上がるんだよ」

「へえ」

春菜が感心しきりで鰯を口に運んでいる。

「ノリ、これもおいしいね」

「あのね昴ちゃん。典兄の肉じゃがは絶品なんだよ」

「そうなの？」

「うん、これを食べたら他の肉じゃがなんて食べられなくなっちゃ

「うから」

「褒め過ぎだ。何も出ないぞ」

「私は食に関して嘘は付きません」

「まっ、良いだろ」

「うわあ、反応薄っ！」

わいわいと食事をして春菜が昴を風呂に入れてくれた。
お蔭で久しぶりにゆっくり風呂に浸かれた。

俺が出てくると昴は眠そうな顔をしていた。

「はるなお姉ちゃん、おやすみなしゃい」

「うん、おやすみ」

部屋で昴を寝かしつける。

昴が寝てからもしばらく傍に横になって春菜の事を考えていた。

「寝た？」

「ああ、昴の机を買いに行ったから疲れたんだろ」

「典兄もご苦労様」

「そんなたいそうな物じゃないよ。俺のは」

「それが普通なんだね」

「それと家に電話しておいたからな」

「何でそんな事をするのよ。折角……」

「折角なんだ？ 両親に心配かければお前はそれで良いのか？」

「だって」

春菜が頬を膨らませ不服そうな顔をして俺を見上げている。

「それにおじさんやおばさんが俺の事をなんで信用してくれている
と思う」

「そっか、そうだよな。何かあった時は必ず典兄が父さんか母さん
に連絡してくれたもんね」

昴を寝かしつけて部屋の戻ると春菜は台所の入り口に腰を下ろして
いた。

まだ炭が燻っている七輪を持ってきて炭を突つつくと直ぐに赤くな

った。

何も無いよりは少し暖かいだろう。

七輪が目の前にあるのだからと冷蔵庫からシシャモを取り出して網の上に並べると香ばしい匂いが立ち込める。

仕舞ってあった日本酒をグラスに注いで春菜の前に突き出す。

「私は……」

「良いから、氷を入れるか？」

「いらない。典兄は日本酒のロックなの？ 水ぼくなっちゃうよ」

「良い酒は氷を入れても美味いんだよ」

「あれ、凄くこの日本酒って喉越しが良いよ」

「良い酒だって言っただろ。課長からもらった極上ものだよ」

「そうなんだ」

春菜と俺の間に沈黙が流れる。

何も春菜が言わなければ俺にはどうしてやる事も出来ないし、俺からはどうしたんだとは聞かない。

自分の中では答えが出ている筈だ。

それでもどうしようもない事の方が多い。

「美味しい物なんて時々少しだけで良いんだよ。人生だってそんな物だ。時々感じる幸せがあるから歩いていける。常に美味しい物を食べ続ければ更に上のモノを望む。今まで美味しいと感じていた物に慣れてしまう。幸せだってそう、慣れてしまえばそれが平坦な日常になってしまう。そして失った時にしか気付くことが出来ない。美味しかったんだ、幸せだったんだと。爺さんの受け売りだ」

「典兄……」

「おじさんとおばさんにタフガイとの結婚を反対されたな」

「どうしてそんな事？」

「正月に紹介したんだろ。でも両親は良い顔をしなかった、違うか？」

「お見通しなんだ」

その後の言葉を飲み込んだ。

横に座る春菜の瞳からは光るものが止めどなく溢れ出していた。

「何がいけないの？ 何の仕事なら安全なの？ 海自は危険だからって、もしもの事があつたらって。そんな所に嫁には出せないって私…… 典兄…… 悔しくて、何も言い返せない自分が悔しくて……」

春菜が俺の胸に顔を埋めて泣き崩れてしまった。

今は優しく抱きしめる事しか出来ない。

どれくらい泣いていただろうしばらくするとフツと春菜が顔を上げた。

「何だか泣いたらすすきりした」

「そうか、明日俺がおじさんに話をしてみるよ」

「ありがとう」

細い指で春菜が涙を拭っている。

すると後ろの引き戸が開いて昴が眠そうに目を擦りながら起きてきてしまった。

「ノン、おしっこ」

「ほいほい」

昴を後押しする様にトイレに連れて行く。

戻ってきて春菜の横に座ると昴が部屋に戻ろうとしなかった。

「昴、寝ないと起きられないぞ」

昴が首を横に振って愚図り始めてしまった。

「仕方がないな、ここに来い」

「うん」

昴を抱っこして足の間に座らせると俺の方に顔を向けて丸くなり寝息を立てだした。

「うふふ、昴ちゃんの寝顔って可愛い。それにどれだけ典兄を信頼しているのかが良く判る」

「まあ、俺は夫にも父親にもなったことが無からな。でも何とかなるもんだって思うよ。まだまだこれからだけだな」

「大丈夫、典兄なら」

「その自信はどこからくるんだ？」

「あつ、もし彼女が出来たらバツイチでもないのに子連れ結婚になるのか」

「あんな春菜それだけは言わないでくれって言うより昴の事で精一杯で彼女とかなんて考えられねえよ」

「うわあ、30にして枯れちゃってる」

「それに昴と飯食ってた方が楽しいしな」

「既に終わってるよ」

「枯れてるとか終わってるって言うな」

「だって昴ちゃんが成人したら典兄は」

「……泣きそうだから言わないでくれ」

久しぶりの春菜とのお喋りは夜更けまで続いた。まるで高校時代に戻った様だった。

「ノン、おきて。けいたいがなってるよ」

「あい。頭痛つ、飲み過ぎた」

「けいたい」

「はいよ」

昴が目の前に突き出している携帯を見ると春菜の親父さんからだった。

大きく息を吸ってから携帯を受けとり通話ボタンを押した。

「おはようございます。春菜ですか？ここに居ますよ。多分まだ帰らないと思います。どうしてって言われても原因はおじさん達が一番判っているんですよ。僕の話聞いてからもう一度考えてください。早苗は会社員だったのに電車事故に遭って帰ってきませんでした。兄貴は技師だったのに足場の下敷きに遭い帰らない人になりました。海自は危険な所ですか？サラリーマンなら安全なんですか？どんな仕事をしていても先の事なんて誰にも判らないんです。だからこそ今の幸せを大切に歩いていくんじゃないんですか？このまま彼のもとに行き春菜が帰ってこなくても良いんですね。」

今の僕ならそうさせます。春菜には愛する人と幸せになつて欲しいから」

電話口の向こうでは春菜の親父さんが黙っている。

そしてもう一度会うからと言ってくれた。

一息ついて携帯を切った。

「春菜、タフガイに電話してもう一度おじさんとおばさんに会わせろ。あいつだつてそう簡単にお前を手放すような男じゃないだろ。思うがままに前に着き進め」

「うん！　ありがとう」

春菜は一頻り泣いた。

それは昨夜の悔しい涙とは明らかに違うはずだ。

俺はそう信じてる。

「やっぱり典兄は私の正義のヒーローだよ」

そう言い残して一段と輝きの増した笑顔で帰って行った。

太刀魚

やっと昴の保育所に慣れたと思った端からお袋にやいやい言われ小学校に上がる準備をさせられ。

1月には就学通知書なるものが届き入学説明会と物品購入の案内が書かれていた。

そして半休を取って昴の入学説明会に行こうとした矢先に大事な取引先から電話が入った。

こんな時に限って野田は見当たらなかった。

「くそ、野田の奴。しごき倒してやるからな」

駅から保育所まで全力疾走を余儀なくされた。

「すうー はあー すうー はあー 昴ゴメン、遅れた」

「おそいよ、みんないつちやったよ」

「ノリ、かーちゃんが」

「は？ 未来さんもまだなのか？」

「うん」

そこにタクシーが滑り込んできてドアが開き未来さんが叫んでいた。

「沢渡さん、早く子ども達を」

「は、はい。急いで乗れ！」

「はい」「うおー」

未来さんが乗ってきたタクシーに乗り込み一息ついた。

「助かりました」

「もう、ノリもタクシーでくればいいのに」

「ソリー」

学区内の小学校の正門に着き急ぎ足で説明会に向かう。

昴と聖司の新生は先生達と上級生が出迎えてくれた。

保護者は色々な書類を受け取り延々と説明を受ける。

まるで長い社長の訓示を聞いているようだが聞き逃さない様に周り

はメモを取りながら集中している。

そんな中には余裕綽々としている人が居るが恐らく上の子が既に小学校に通っているのだろう。

「ええ、登校では集団登校・集団下校を実施しておりまして……」
俺らが小学生の頃には登校時は上級生と集団登校していたが帰りはバラバラだった記憶がある。

そして安全と言う言葉が多用されている。

何度となく学校で起きた事件がニュースで取沙汰され問題になり学校側もそれに配慮しての事なのだろう。

人を信じる事よりも人を疑う事から教える学校とはどんなものなのだろう。

それほどに犯罪が多様化していると言う事なのだろうか。
持ち物すべてに名前を、ただし登校時に見えないところにつて厄介極まらない。

それと学童保育の申し込みもか。

小学校は早く終わるし昴だけで留守番なんてさせられない。

俺が心配でしうがなくなつて仕事の手が着かないだろう。

予防接種つて母子手帳のあれを書けばいいんだよな。

相変わらずの手探り状態で気持ちが悪くなる。

必要と思われる所だけ聞き逃さないようにする、大体は配られた書類を読み上げているのと変わらないだろう。

「それでは体育館で学用品の販売をいたします」

それを聞いた瞬間に全てが終わった気がしてしまった。

「長かったですね」

「まあ、無駄な会議より幾分ましでしょう」

「そうですね」

「あつそうだ、予防接種つて母子手帳ので良いんですね」

「はい」

「ありがとうございます。何だか毎回の様に手探り状態で」

「子育てなんて皆同じだと思いますよ。特に1人目の子は」

「そうですね。最初から親の人なんていないんですもんね」

「うふふ、そうですね。まるで沢渡さんって子育ての達人みたい」

「いやいや、そんなもんじゃないですよ。両親に助けられ。兄貴の奥さんに教えられ。幼馴染に励まされ。なんとかやっつとです」

「私も沢渡さんのおかげで聖司と心機一転です。これから宜しくお願いします」

「とんでもないです。こちらこそ宜しくお願いします」

未来さんに頭を下げられると何だか困ると言うか照れてしまう。

それは決して彼女に似ているからと言うものではないのがはつきり自覚できる。

体育館に行くとそこでは大量の学用品が販売されている。

見ただけで帰りたくなるが昂の為だと言い聞かせた。

「凄い数だな。これに全部名前を書くのかよ。名前シールでも買うかな」

「えっ、名前シールですか？」

「ええ、大小様々なサイズのシールに可愛いイラストと名前をプリントしてくれるらしいです、会社で教えてもらったんです」

「そんな物があるんですね」

「まあ、手書きに越した事は無いんでしょうけど張るだけでも時間が掛るから悩み所です」

「そうですね。私も欲しいかも」

「それじゃ一緒に発注しておきます。何か聖司君の好きな物があれば」

「昂ちゃんはどんなものが？」

「四葉のクローバーですかね。他にはアジとかサンマとかは無いだらうし」

「アジとサンマですか？」

「ええ、あいつチビなのに魚が大好きで毎晩魚です」

「聖司はお肉オンリーですね」

「俺も基本は肉ですけどね。並びますか」

「はい」

一通り買い揃え終わる頃には両手で抱えるほどの荷物になっていた。自分が子どもの頃の事なんて想像もつかないお袋もこんなに大変な思いをしていたのか？

「想像以上の数だな」

「すみません、聖司の分まで」

「気にしないでください。仕事柄荷物を運ぶのは慣れていますので」と前から昴と聖司君が歩いてくるのが見えた。

「ノン！」

「あ、ノリとかーちゃん」

「もう典彰さんでしょ」

「ええ、ノリがノリで良いって」

「駄目です」

未来さんが聖司を怒っている。

「あ、構わないですよ。ノリって呼ばれた方が気が楽だし俺は気にしませんから」

「でも……」

「ノリで良いです。沢渡って苗字でサルワタリって言われて喧嘩した事があって」

「そうなんですか」

「ええ、だから未来さんもノリで構わないす」

「え、ええ。典彰さんで良いですか？」

「はい」

改めて未来さんに下の名前で言われるとケツの辺りがこそばゆい。すると昴と聖司が同時に話し始めた。

「あのな、同時に喋るな。俺は聖徳太子じゃないんだ」

「しょうとくたいし？」

「なんだそれ、食いもんか？」

聖司の言葉に未来さんがこめかみを押さえている、胸中をお察しし

ます。

「食いもんじゃねえよ。小学校の社会で勉強するはずだ。偉い人で10人が一度に喋る事を全て判ったって言われてるんだ。俺は2人でも無理だ」

「かーちゃん、昴のうちにあそびにいつてもいいか？」

「ええ、これからじゃ遅くなるから駄目です」

「いいじゃんか、けち」

「あのな聖司。お母さんにそんな事を言うな。男は女を守る為に生まれて来るんだ。だから力も強いんだぞ。それとうちなら構いませんよ。どうせ昴と飯を食うだけですから」

「ノン、せいじくんがあそびにきてもいいの？」

「良いよ、昴の大事な友達なんだから」

「うん！」

「それじゃお言葉に甘えて」

「せいじくん、いっしょにごはんたべよう」

「いいのか？」

「だいじょうだよ、ね。ノン」

「そこまで甘えられません」

「未来さん、子どもが楽しいと思う事が最優先じゃないんでしょ言うか」

「はあ、重ね重ね宜しくお願いします。聖司、一度帰るわよ」

「ええ、めんどくせええな」

「今日のうちの飯はカレーだからな」

昴がそわそわしながら待ちわびている。

俺の家族以外がこの家に来ることは滅多にないしましてや昴の友達が遊びに来るのは今日が初めてなのだから昴の気持ちが悪く判る。

未来さんと聖司は買い物までして来てくれた。

「お邪魔します」

「ああ構わずに上がって下さい。狭苦しい所ですけど」

「そんな事は無いです。うちは団地ですから使い勝手が悪くて」

「せいじくん、あそぼ」

「お、おう」

聖司が少し緊張していて笑ってしまふ。

昂に手を引かれて聖司が持ってきたゲームをして2人で遊んでいる。

「今日はありがとう御座います。私の仕事の所為で聖司には我慢させっぱなしで、こうしてお友達の家に遊びに行かせてやれなくて」

「俺も一緒ですよ。でも昂がどう感じているかは別だと思っています」

しばらくすると昂の少し怒った様な声が聞こえた。

「せいじくん、それはノンのおじいちゃんのことだからさわっちゃだめ」

「ええ、なんでだよ」

「聖司、人の家の物を勝手に触らないの」

「うへ、ガミガミかよ」

「あら、これって」

聖司が触ろうとしていたのは昂も興味を示したアンプとレコードプレーヤーだった。

男の子だから機械に興味を示すのは俺自身が一番わかる。

俺も良く爺ちゃんに叱られた。

「典彰さん、お爺ちゃんの大事って。まだ綺麗だし」

「ああ、それは爺さんが残してくれたレコードを聞きたくて俺が買った奴です」

「レコードですか？ 懐かしいです」

未来さんが俺らと同じ世代だと感じる。

今の子はレコードすら見た事も無い子の方が多いだろう、昂もそうだった。

「何か聴いてみますか？ ジャズとかボサノバとか」

「それじゃボサノバを」

押入れを開けるとそこには沢山のレコードがラックに入っている。その中から一枚を取り出してプレーヤーにセットする。ボタンを押すとプレーヤーのアームが静かに動き出す。

4人で思わず目で追ってしまふ。

ジリジリと音がして曲が流れ始めアンプの真空管が優しい光を放っている。

「いいか、レコードを聴いている時は静かにするんだぞ。それに聖司が暴れたらこの家は古いんだから潰れるかも知れないからな」

「う、うん」

聖司が首をブンブンと縦に振っている。

「せいじくん、ほんをよもつ」

「うん」

これで少しは大人しくなるだろう。

「うふふ、典彰さんって子どもの扱いが上手ですね」

「そうですか？ まあ義姉さんの所の可奈とはよく遊んでましたから。でも、他の子はちよつと苦手です」

「まあ、最近は大人子どもの親御さんも多いから。でも綺麗な音です。ね艶があつて」

「でしょ……」

俺のうんちくを未来さんは嫌な顔をせず聞いてくれる。

うんちくと言つても爺さんに聞かされた事が殆どでそれに色を付けただけの話なのだが。

「昴、始めるぞ」

「うん！」

「あの何を？」

「そろそろ飯の準備を」

「それなら私も」

台所はそれほど広くないし未来さんはお客さんなのだからと言うと押し切られてしまった。

台所で俺と未来さんと昴が立っている。

狭いし近い……

普段は昴と2人なのであまり気にしなかったが俺と肩が触れる距離に未来さんが立っていて何だか良い匂いがする。

「あの、今日はカレーだつて聞いたのでポテトサラダでもと思って」

「あ、はい。鍋はここで調味料はつて、ああ」

「もう、ノンは。ここだよ」

「ありがとう、昴ちゃん」

俺が鍋を落としそうに慌てて掴むと昴がフォローしてくれた。

「それと昴ちゃんお魚が好きだつて聞いたのでこんな物を」

「おつ、太刀魚じゃないですか」

「うわあ、綺麗なお魚だね。美味しそう」

とても身が厚く綺麗な銀色をしている。

太刀魚は塩焼きに限ると俺の心が叫んでいる。

俺以上に昴の目が輝いている。

「ノン！」

「おう！ 昴、炭！」

「はい」

昴が台所を飛び出して行く。

突然何が始まったのか判らず未来さんがオロオロしていた。

「ノン、炭」

「よし！」

昴が持ってきた木炭を入れた炭熾し器をコンロに掛け縁側に七輪を準備する。

そして太刀魚に粗塩を振りかける。

「今時、七輪って典彰さんってお爺ちゃんみたい」

「そうですか？ でもガスより断然七輪の方が美味しいと思うし」

「さあ、私はポテトサラダでも」

未来さんがジャガイモを取り出しているので昴に良い事を教えてやると耳打ちする。

「ノン、ほんとう？」

「俺は嘘をつかん！」

炭が熾きたのを見て七輪に移し火を安定させる。

台所を覗くと俺に言われたとおり昴が自分の包丁でジャガイモにぐるりと切れ込みを入れている。

それを未来さんが不思議な顔をしながら昴と同じようにしてジャガイモを鍋に入れ湯がき始めた。

俺は太刀魚を七輪で焼き始める。

台所からは楽しそうな声が聞こえてきて何だかこんな感じが本当の家庭なのかと思ってしまう。

そう言えば昴の母親は……

彼女からは家庭の温かさと言うか母親らしさと言うものを一切感じられずそれが違和感の正体なのかもしれない。

そんな事を考えていると未来さんが呼ぶ声がした。

「聖司、ちよつと魚を見ておいてくれないか？」

「ええ、どうすんだよ」

「猫が来たら追い払うだけで良いから」

「わかった、めんどくせえな」

「面倒言っな。お前らの晩飯だろ」

「ええ、おれさかなきらいだもん」

「そんな事を言ってる昴に嫌われんぞ」

「うっ」

聖司が俯いてしまう。

その表情から聖司も昴の事を悪く思っていないのが伺える。

「あの。だしの素とか」

「ああ、味噌汁ですか。出汁は冷蔵庫の中に」

「ええ？ 冷蔵庫ですか？」

「あ、俺んちは粉末のを使わないんでもっばらこれです」

俺が冷蔵庫から取り出したのはお茶などを冷やしておくクーラーポ

ツトだった。

その中には鰹節と昆布を切った物を出汁パックに詰めて水に漬けて
あり良い感じの出汁が出来上がっている。

出汁を鍋に注ぎ火にかけイリコを一掴み鍋に放り込んだ。

中火でゆつくり沸かし湧いたらアクを取りイリコを取り出した。

「あら？ 何だか簡単ですね」

「まあ、粉末より手間はかかりますけどね。お袋が煩くって昂には
ちゃんとした物を食べさせろって」

「あの、作り方を」

「ノリ！ こげる」

聖司の声で慌てて七輪の太刀魚をひっくり返す。

焦げてはいないようだ。ただ魚の脂が落ちて火が上がったので聖司
が驚いたのだろう。

「凄い、昂ちゃん！」

今度は台所から未来さんの驚く声が聞こえてきた。

「ノン、みんなでたべるとおいしいね」

「そうだな」

4人で食卓を囲む。

傍から見れば家族団らんに見えるのだろうか。

まあ、俺と未来さんじゃ釣り合いが取れていないのは誰が見ても判
るだろう。

「あの、出汁は」

「ああ、前の晩にカツオ節と昆布をパックに入れて水に漬けて置く
だけです。出汁を冷蔵しておけば二日くらいは普通に使えますよ。
それと残ったイリコや出汁を取ったやつはまとめて冷凍しておいて
後でふりかけやつくだ煮にしています」

未来さんがメモ帳に俺の説明をメモしながら真剣な顔で聞いている。
「凄いですね」

「いや、捨てたら昂にももの凄い勢いで怒られて渋々です。でもカル
シウムも摂れるし昂の体の事を考えると苦じゃないんですよね」

「それにしても典彰さんってお料理が上手なんですね」

「ああ、大学の頃は居酒屋のキッチンでバイト三昧でしたから。その親父が厳しい人で色々と教わりましたよ。そんな事が役に立つとは思ってもみませんでした」

「それとこのカレー……」

未来さんがスプーンに乗っているしらたきを不思議そうに見ている。

「ああ、すんません。実は残り物の肉じゃがにカレーのルーを入れた手抜き料理です」

「ええ、肉じゃがだったんですか？」

「まあ、昴と2人じゃ残るし飽きるんで」

「それとジャガイモの皮があんなに簡単に？けるなんて思ってもみませんでした。昴ちゃんは『ノンは魔法使いだから』なんて言うし」

「ああ、あれは裏技のテレビ番組で知っただけで」

「へえ、テレビ番組で」

「ええ、ニユースでやる事故とかは昴が怖がつたりするんで消去法で選ぶと動物とか裏ワザとかの番組になるんです。それで」

「もしかして」

「たぶん、兄貴の事がトラウマになっているんだと思います」

「本当に今日はありがとうございます。聖司のあんなに楽しそうな顔を見たのは久しぶりで」

「まあ、昴も喜んでいますし。時々遊びに来てください」

「今日は無理を言って会社に半休をもらってよかったと思います」

俺のトラウマと言う言葉に未来さんは話題を変えてくれた。

それでも未来さんの言葉に嘘は無いと思う。

この人も今までもこれからも独りで頑張って行くのだろう。

いつか彼女の横にも……今は考えるのを止めよう。

聖司も昴に教わりながら太刀魚に挑戦している。

まあ、殆どの骨は俺が取ったし太刀魚は食べやすい魚だと思う。

半分は昴に嫌われたくないのが聖司の顔に見え隠れする。

だいじ

3月の半ば。

昴の卒園式の日がやってきた。

4月からは昴もピカピカの小学校1年生だ。

俺が寝坊したせいで慌てて準備する羽目になってしまった。

まあ、毎日が似たようなものだったが今日は違った。

俺の所為で朝から土砂降りの雨が降ってしまう。

迂闊だった、その一言に尽きる。

「昴、そのカメラを取ってくれ」

そのカメラは兄貴の荷物の中に有ったもので美紀さんから形見分けと言つ事で譲り受けたものだった。

美紀さん自身は使い勝手のいいデジカメを持っていて一眼のカメラは使い方が判らないからといわれ、使い方なんて簡単だからと言うと俺に持っていて欲しいと言われ持ち帰ってきて置いてあった。

そんなカメラを使う機会なんてそう多くないので今日は使ってみようと昨晚からバッテリーを充電して準備してあった。

しかし、昴からは返事はなくその代りに昴の瞳から涙が流れ小さな拳を握りしめて何かに耐えていた。

「昴？」

「さわつたらだめなの。りょうこさんのだいじだから。さわるとこわいから。りょうこさんおこるから。あ、あれは、りょうこさんの

……」

「昴、これは昴のパパのだからね」

昴が泣きだしてしまった、俺の完全な失態だった。

島で俺が昴にカメラを取ってくれと行った時の事が蘇り、今更ながらその理由が判った気がした。昴の母親である彼女は写真家になっている。

そんな彼女の一番大事は仕事道具でもあるカメラなのだろう。

幼い昴が母親の使っている物に興味を示すのは至極当たり前で、触る事を拒絶された昴は母親である彼女に拒絶されたと思い込んでしまったのかもしれない。

それが咄嗟の事であろうと大人が感情に任せてしまえば子どもには恐怖心を植え付けることなど容易い事だ。

そんな事を繰り返せばどうなるか子どもは本能的に自分を守ろうと心を閉じてしまうだろう。

俺が抱きしめても昴は泣き止んでくれなかった。

それでも保育園に向かう頃には何とか落ち着いてきていた。

保育園に着くと未来さんと聖司が歩いてきた。

「おはようございます」

「おはー」

「おはよう。ほれ昴も」

「……」

昴は何も言わず俯いたまま鼻を嚙っていた。

「昴、げんきねえな」

「あら、昴ちゃん目が。それに」

未来さんが心配そうにしゃがみ込んで昴の顔を覗き込んでから俺の顔を見上げた。

昴の目はかろうじて泣き止んではいるけれど潤んで真っ赤だった。

「まさか昴ちゃんに」

「えっ？ ああ。違いますよ怒って手を上げたとかそんなんじゃないくて」

慌てて言わなくていい事を口走ってしまう。

すると周りのお母さん達から副音声が駄々漏れになった。

『お父さんに叩かれたんですって』

『ええ、それって虐待ってやつ？』

うお、一気に周りの温度がマイナス方向に降下していく。

「昂、いくぞ」

聖司が気を使つてか昂の手を引いて引つ張つていく。

「大人には子どもに触つて欲しくない物つてあるじゃないですか」
「触つて欲しくない物ですか？」

「ええ、例えば仕事道具とか」

「あつ、ありますね」

「多分、昂の母親が触つて欲しくないのはカメラだったんです」

「カメラですか？」

「はい、もし子どもがそんな大事な物を触ろうとしたら怒りますよね。昂の母親は上手く感情を表現できない人だったのかもしれない。感情に任せて昂を叱ったんだと思います。島で兄貴の荷物をまとめていた時も昂にカメラを取つてくれって言つたら黙り込んでしまつて。で、今朝同じ事を昂に言つたら」

「泣きだしてしまつた」

「はい、俺には抱きしめるしか出来なくてそれでも泣き止んでくれなくて」

未来さんが何か考えてから口を開いた。

「聖司なんか私の仕事道具のパソコンをおもちゃにして怒るけど全然言つ事を聞いてくれなくて」

「あはは、男の子つて皆そうなのかもしれません。俺なんか兄貴が大事にしていた望遠鏡を触つて何度も怒られました。でもそれが面白くなくてある日兄貴の望遠鏡を家の屋根の上に持ち出して遠くの家やビルを見てたら思いつきり親に殴り飛ばされましたから」

「殴り飛ばされたつて」

「え、俺らの頃はそれが日常でしたよ。まあ、兄貴は大人しくつて勉強ばかりしてまいしたから。もっぱら怒られるのは俺で」

「何だか想像がつきます」

「ええ、あつ。急ぎましょう」

「あ、はい」

聖司に呼ばれると俺と未来さんだけが取り残されていて慌てて教室

に駆け込んだ。

教室に入ると凄い様相だった。

三脚にビデオカメラをセットしていたり場所どりに目の色を変えていたりしている。

お母さん方の気合の入りが違う。

それは未来さんも同じ事だった。

腕を引っ張られ教室の真ん中に陣取る事が出来た。

背の高い俺なんか端の方が邪魔にならないんじゃないか？

そんな事を考えていると式が始まった。

園長先生のお話があり、卒園する昴達のお遊戯が始まる。

園児がふざけているのか舞台の幕が揺れている。

幕が引かれると園児たちが並んでいるのが見える。

一斉にカメラが向けられフラッシュが光ると母親に向かって手まで

振って合図する園児が居て笑いがこぼれる。

そんな中で昴だけが俯いて動かなかった。

音楽が奏で始められると舞台の袖から昴を心配する先生の声が聞こ

えて演奏が止まってしまった。

園児たちがキョロキョロし始め、お母さん方も心配そうにしている。

聖司が昴に何かを言ってるけど昴は下を向いたままだった。

「すいません、カメラをお願いします」

未来さんにカメラを渡すと無意識に舞台に向かって歩き出していた。先生が舞台上で昴を宥め賺しているが昴はただ首を横に振っているだけだった。

「昴！」

俺が声を掛けると昴の顔がくちやくちやになり泣きだして両手を広げながら俺に抱き着いてきた。

昴の顔がよく見える様に昴の肩に手をやって真っ直ぐに泣いている昴の顔を見た。

「昴、良く聞けよ」

「う、うん？」

言い聞かせるようにゆっくり何処までも真っ直ぐに昂に向き合い昂の涙を指で拭う。

「俺の一番大事は昂なんだ」

「昂が泣いていると俺も哀しくなる」

「ゴメンな。だからもう泣かないでくれ」

「昂がノンのだいじなの？」

「そうだ。俺の一番大事な昂」

そう言つて昂のおでこにキスをした。

パチパチと小さな拍手が聞こえた瞬間に我に返った。

俺、今とんでもない事をしたような気が……

油の切れたおもちゃのロボットの様にぎこちない動きで振り返るとそこには指で涙を拭いながら拍手をしてくれている未来さんの姿があつた。

未来さんの拍手は周りのお母さん方に伝染し中には泣いている人もいる。

舞台を見ると先生も拍手をしながら泣きそうなのを我慢している。

堪らず教室の後ろに向い歩き出す。

「ノン、だいすき！」

昂の大きな声が教室に響いて一気に頭の先から湯気が噴出した。

「とても素敵でしたよ。典彰さん」

「い、いや。何と言うか街中で思わずプロポーズしてしまった様な気分です。お恥ずかしい」

「良いじゃないですか。周りのお母さん方も心を打たれたみたいですし。何より忘れられない卒園式になりましたよ」

「お願いです。忘れてください」

その後の事はあまり覚えていない、カメラのメモリーには沢山の写真があるからちゃんと撮つてはいたようだ。

「4月からは小学校だな」

「うん！」

昴のご機嫌は良くなっていると言つか前以上に俺にくっ付いている。

「昴、聖司と歩け」

「いや。ノンのだいじ」

「へいへい」

昴が恨めしそうに俺を見上げている。

こんなにチビなのに女はあくまでも女なのか……

思わずとは言えしくった気分が満載だった。

「未来さん、この後は？」

「えっ、あ。別に」

「俺、何か変な事を言いましたか？」

未来さんに落ち着きがなくなり俯いてしまった。

「いつも下の名前で呼んで下さるんですね」

「ああ、すいません。つい癖で」

「癖ですか？」

「はい、子どもの頃からの癖です。今でこそですけど自分と容姿や顔がそっくりで違うのは性格と頭の違いだけで。そんな兄貴といつも一緒に居たんで子どもの頃は苗字と呼ばれると2人して返事をしてしまつて。だからお互いに下の名前で呼ばれないと返事をしないと宣言したんです」

「それとこれと？」

「変かもしれませんが俺も相手を下の名前で呼ぶようにしたんです。もし未来さんが嫌なら入江さんと」

「あつ、それで春菜ちゃんも名前で」

「あれ？ そう言えば春菜の苗字って上杉だったかな？」

「かなって酷い事を言っんですね」

「すみません。でもお袋が言っていたけど結婚すれば女の人は当然ですけど中には男でも兄貴の様に苗字が変わるじゃないですか。でもどんなに苗字が変わっても春菜は春菜だし未来さんは未来さんです」

「そんな事を言っていると勘違いされちゃいますよ」

「へえ？ 何をですか？」

「もう良いです。バカ」

聖司は昴と遊びたがっていたが今日はお袋に呼ばれていた。

何でも昴と可奈の卒園祝いをしてくれるそうだ。

これだけは喪中だけど譲れないと言っていたので実家に行かないと言う選択の余地はなかった。

新人生・新人

桜の蕾が膨らみ始め。

頼んであったランドセルも机も無事に届いた。

ランドセルを見て初めは驚いた。

チョコレート色と言うのか茶色だった、確かにピンク色のステッチは可愛いらしいけど。

そして中を開けて再び。

「うわあ、すげえ。クローバー柄じゃん」

「うん！　せなかとよこにも」

ランドセルの背中が当たるところと横にも四葉のクローバーらしきステッチがあった。

そしてランドセルの内張りが四葉のクローバー柄になっているのに驚いてしまった。

この時期に入学式を控えている家庭では何処でも見られる光景なのだろう。

昴がランドセルを背負って真新しい机の椅子に座って満面の笑顔でこちらを見ている。

本当はあり得ない格好なのだがそれがまた嵌まっている。

いつまでこの笑顔を俺に向けてくれるのだろうか。

そう思うと涙腺が緩みそうになった。

小学校は春休みに入っているが学童は始まっており昴を毎日学童に送り届けて会社に向かった。

そして入学式の日には門の前でお決まりのポーズで昴と2人で未来さんに写真を撮ってもらった。

昴の苗字だが難しい問題だけどあまりにあっけなく問題は解決した。案ずるよりと言う奴らしい。

昴自身が兄貴と同じ能登島のままが良いと言ってくれた。

その時点で俺が昴を養子にして俺が昴の戸籍上の父親になる事は無くなった。

もしそんな事になればまた別の厄介な母親との問題が出てくるので胸を撫で下ろした。

昴の小学校生活が始まる。

楽しそうに昴が準備をしているのを見ると自然に顔が緩んでしまう。完全に親馬鹿の域に達していのだろう。

その反面、不安が無いと言えば嘘になる。

俺が子どもの頃に通っていた小学校なんて凄く遠かったけど1人で登下校していたし自転車で遠くまで遊びに行っていた記憶がある。それにしても防犯ブザーを常に身に着けるってどんな世の中になったんだ。

確かに何度となく世間やニュースを騒がせる学校がらみの事件が多くなってきた。

その度に色々と言われるけど要は世の中が無関心になってきていると言う事だろう。

大人だってトラブルに巻き込まれるたくないから見て見ない振りはするけどそんな大人の責任の方がはるかに大きいかもしれない。学校や至る所で防犯ブザーが鳴っているのが簡単に想像つくが抑止力という観点から言えば完璧でないにしろ無意味じゃないのだろう。「ノン、じかんわりあわせをして」

「あいよ」

時間割表を見ながら持ち物検査をする。

それは事前に渡されたプリントに書いてあった。

1年生の間は毎日親御さんがお子さんと一緒にじかんわりの確認をしてください。

って、俺が経験した事の無い事ばかりだった。

時代が違うつて奴なのだろう。それに昴は俺がガキの頃と比べればもの凄くしっかりしている方だ。

女の子と男の子の違いなのだろう。

翌朝、その答えが判った気がする。

昴より少しだけ早起きして食事の支度をするが流石に眠い。
毎日は出来そうにないが出来るだけ……

なるべく……努力します。

「昴、早くしろよ」

「うん、どうしたの？」

「俺もやるときはやるんだよ」

朝飯を食べていると聖司の声がする。

時計を見るとまだ学校に行くには早すぎるくらいの時間だった。

「す・ば・る・ちゃん！」

「早すぎだろ」

「ノン、けいたいがなってる」

携帯には未来さんの文字が……

「おはようございます」

「すいません、朝早くに。聖司が」

「ああ、来てますよ」

「重ね重ねすいません」

「そんなに気を使わないでください。ちゃんと昴と学校に行かせますから」

未来さんの口調から何も言わずに家を飛び出してきたんだろう。

それにしても新しい運動靴は泥だらけで洋服には草の種が付いている。

未来さんの悩みの種なのが良く判る。

「聖司、お前。お母さんに黙って出て来ただろう」

「だって、かーちゃんうるせんだもん」

「今度勝手にでてきたら家には入れないからな」

「う、うん。ノリもかよ」

「心配だから言ってたんだ。昴の準備ができるまで上がっておけ。それと洋服に付いてる草の種は自分で取ってから上がれよ。面倒とか

「言うなよ」

「うん」

渋谷聖司が自分で服に付いた種をとっている。

その間に俺も会社に行く準備を始める。

「あつ、それと防犯ブザーをって鳴らすなよ。本当に怖い目に遭った時に誰も助けてくれねえぞ」

「うっ、わかった」

目を離れた隙に聖司が防犯ブザーをいじっていた。

正しくそれは俺がガキの頃と一緒にだった。

そしてお袋には散々叱られた。

男の子は精神年齢が低いつてこの事を言うんだなと実感した瞬間だった。

「いつてきまーす」

訳が判らず心配で学校までついていきたい。

いつかこの感覚にも慣れてくるのだろうか。

その時に俺は…… そんな事を打ち消すように着替えをして昴と聖司の後を追う様に家を出た。

しばらくすると道の向こうに大きな犬が見えてその前に聖司が立ち後ろに昴が隠れる様にしていた。

「何やってんだ？」

犬の首輪にはリードが付いていて確かに飼い犬なのが判るし、尻尾を振っているから遊んでほしいのだろう。

それでも聖司が必死にあつちに行けと足を繰り出している。

子ども目線で見ればかなり大きな犬で怖がるのが普通なのだろう。

「大丈夫か？」

そう言つて犬のリードを持つと犬がお大人しく座りをした。

「ノリ……」

「ありがとうな、昴を守ってくれたんだな。これから頼むぞ。これで俺も少しは安心だ」

「すこしかよ」

「小さいんだから仕方がないだろ」

「ちいさくねえよ」

「ほら、遅れるぞ」

「お、おう」

昴と聖司が手をつないで通学路を走って行くのを見送る。

直ぐに犬の飼い主が現れ頭を下げてくれた。

頼りなさげでも男の子が傍に居てくれるだけで少しか肩の荷が下りた気がする。

春が来て小学校が始まるのと同じくして我が営業部にも新卒の新入社員が研修の名目で配属されてきた。

ピカピカとはいかないかもしれないが初々しさだけは持っているようだ。

一応、配属先の希望は聞いているが希望通りに配属になるかはまた別の話だった。

「沢渡さん、私にも営業のノウハウを教えてください」

「はあ？ 君の指導係は俺じゃないから。野田、行くぞ」

「は、はい」

そして、1人の研修生の女の子に付き纏われてはつきり言えば閉口していた。

課長に相談しても指導係ととの一点張りだった。

「しかし何で俺なんだ？」

「ええ、だって沢渡さんは伝説の人なんですよ」

「あのな野田。あれは偶然だ。運が良かったただけだ。そうか」

「どうしたんですか？」

「俺がおっ立ててしまった営業成績を越す奴が現れば良いんじゃないか。簡単な事だ」

「簡単じゃないですよ。そんな難攻不落な成績を越す事出来る人なんていないですよ」

「いるじゃんかここに」

「ええ、勘弁してください。これ以上は無理です」

「無理言うな。自分で限界を作るな。泣き言も許さねえからな」

「八つ当たりですよ！」

彼女の様な研修生を熊谷さんが許すはずもないが子どもと旦那さんが熱を出してしばらく休みを取っていた。

それ故に俺自身で打破をつて野田には発破をかけたが一番苦手なタイプだった。

押しが強くその上にマイウェイ（自己中）な女子……

数日は外回りで振り切ったが営業とは言え内勤も必要不可欠でサポーターの熊谷さんが居ないので内勤率は格段に飛躍している。

「何で私の指導が沢渡さんじゃないんですか？」

「俺に言われても困ります。上の方針ですから。それと俺には野田

が居るのでこれ以上の指導は俺自身のキャパを超えているんで」

「ああ、つまんないの。凄い人に教えてもらえると思ったのに」

くそ、彼女の指導者は何をしているんだ。

心底腹が立ってきたのを億尾にも出さず営業顔でやり過ごす。

そんな事は長くは続かなかった。

数日後、彼女の指導係が音を上げて上司に直訴し彼女の研修先を変えるか指導係を変えるか揉めていた。

これは聞いた話だが彼女はしょっちゅう他の部署にも顔を出して問題視されていたらしい。

実際として彼女の希望通り俺にも打診が来たが丁重にお断りした。上もそれだけは避けたかったらしい野田の営業成績は今やトップに手が届くくらい伸びているのに途中で担当を変える事は避けたかったらしい。

「あの、もしよければ仕事の後で色々教えて頂きたいんですけど」
「何度も言っけど俺は君の指導係じゃないから。それに」

「それに何ですか？」

あまりこんな無神経な人間に昴の事を話すのが嫌だった。

俺自身の事は何と言われても構わないけど昴だけは別だった。

もし昴の事を馬鹿にする様な発言をされた時に堪える事が出来る自信が無かった。

「俺、子どもと暮らしているんです。だから時間外は無理です」

「ええ、独身って聞いたのに」

「独身ですよ。でもね君が考えているほど世の中は単純に出来ていないんです」

「そんなあ」

「野田、行くぞ」

「はい、昴ちゃんの為にもがんばりましょう！」

「おう！」

野田のこう言う所は嫌いじゃなかったあまり前に出たがらない性格だが場の空気を読んで反応してくれる。

すると周りからも『昴ちゃん、命！』なんて冷やかしが上がる。

片手を上げて声援に応えて営業部を飛び出した。

昼前に営業部に戻ると雰囲気が一転していた。

その中に遅れて出勤してきた熊谷さんの姿を見つけるが俺に向けられた視線が徒ならぬ事を告げている。

旦那さんの熱が下がり今日は念のためもう一日大事を取って息子の進君を診ているとの事だった。

昼休みになると俺の襟を熊谷さんが鷲掴みにした。

「沢渡、飯に行くよ」

「熊谷さん？」

「水野課長もよ！」

直ぐに彼女の事だと察しがついた。

社食に行くと皆と少し離れた場所に陣取った。

こんな事をしなくても熊谷さんは社内でも知る人ぞ知る俺なんか足

元にも及ばない人で、中田先輩と金字塔をぶち立ててしまった張本人だった。

そんな熊谷さんの機嫌の悪さを察すれば何人たりとも近づいてくるような輩はいなかった。

「沢渡、カツ丼」

「課長は何にしますか？」

「ん、僕はさっぱりと鉄火かな」

「判りました」

俺は親子丼を頼み3つの丼物を熊谷さんと課長の待つテーブルに運ぶ。

課長が俺に助けを求める様に見ていた。

黙々と会話も無く食事が始まる。

程なくして熊谷さんが口火を切った。我慢の限界だったのだろう。

「課長、あの女の子は何なんですか？ 傍若無人にも程があります」

「申し訳ない。上とも協議したんだけどね」

「本当に腹が立つ。やっと旦那と子どもから解放されたと思ったのに、少し遅れて出勤したら『契約社員は良いですよ』って何が良いんだつつつの」

彼女は決して踏んではいけない地雷を踏んでしまったらしい。

その後の会話は聞かなくても何となく想像がつく。

「で、課長。彼女は？」

「気分が悪くなったからと早退してしまつて」

悪態をついた相手が俺以上の伝説の人間だと知れば無理もないだろう、そんな人に完全にそっぽを向かれる発言をすればいくら頭が緩くつても気づくはずだ。

「課長がもつとしつかりしないから沢渡にまで迷惑がかかるんですよ。成績が落ちたら課長の責任ですよ」

「いや、俺はそこまでは無いと思うけど。最近の女子は扱いづらいですね」

「しいー。沢渡君、声が大きいよ」

「え？ 良いじゃないですか。誰にも聞こえませんよ」

「本当に何をびくびく顔色を窺ってあんな女の相手をしてたんですか？」

「熊谷さんも。滅多な事を口にしないで」

「私も沢渡に同感です。女の私が言うんだから間違いありません。

私が言えばセクハラにもパワハラにも当たらないでしょ」

「はあゝ また髪が抜けそうだ」

その後、彼女が出勤してくる事は無かった。

他の部署には彼女に貢いだ愚かな男も居たらしい。

双方ともに良い薬になってくれれば良いのだが『馬鹿は』と言つ言葉どおりなのかもしれない。

なつやすみ

小学校になると色々な行事などがあり、それなりに親も大変になってくる。

家庭訪問や授業参観などがそれで周りに助けられながら何とかやっている。

そして昴も学校に慣れ毎日楽しそうに聖司と通っている。

そんな2人の服装もだいぶ薄着になってきた。

そして夏が来る。

夏が来れば兄貴の新盆があるが俺は出席しない事を美紀さんにも俺の両親にも告げてある。

それは昴の事を思つての事でそれが一番良いと俺が判断した。

今日は再起をして動き始めて丸々の査定をくぐり抜けたボーナスの日だった。

野田はと言うと嬉しさを隠せないでいるようだ。

恐らく野田を馬鹿にしていた同期の奴等の中では恐らくトップだろう。

でも、それはこれからの事を暗示している。

これ以上落ちずに維持しつつ成績を保っていくのは上にあがれば上がるほど難しくなっていく。

後は努力と運任せのな事が交錯する。

「野田、嬉しそうだな」

「はい、沢渡さんのおかげです」

「ばーか、お前の頑張りだよ」

「1つ聞いて良いですか？ 沢渡さんの全盛期にはどのくらいあったんですか？」

「ボーナスか？」

「はい」

「そうだな、全額おろしたら横には立つたぞ」

「凄い！」

「まあこんな感じでな」

明細を半分に折って机の上に立てると野田がむきになった。

「もう、それじゃ判らないですよ」

「お前がトップで居続ける事が出来れば判るよ」

「くそ！ やってやる」

デスクに居る熊谷さんと目が合うと『グッジョブ』と親指を立てウインクしていた。

後輩の起爆剤になるのも先輩の役名なのだろう。

営業にはとにかく辛い夏がやってくる。

特にアパレル関係は季節が少しずつれているので余計かも知れない。それは季節を先取りして売り込みをしないといけないからだ。

だけど守るものがあれば頑張れる事を俺は昴と暮らし始めて再認識した。

小学校は夏休みに入るが毎日弁当を持って昴は学童に通っている。

8月になると会社の夏休みの長期休暇が目前に迫っていた。

「昴、夏休みだし海にでも行くか？」

「海？ いきたい！」

「でも島みたいに綺麗じゃないぞ」

「いかないとわかんない」

「そうだな」

仕事を終えて学童に迎えに行くと担当の先生が昴を呼んでくれた。

「昴ちゃん、お迎えだよ」

「はい」

帰り支度をしている昴より先に聖司が学童から顔をだした。

「未来さんは未だなのか？」

「うん、このごろおせえし」

「そっか、仕事が大変なんだな」

「そーだ。ノリ、海にいくのか？」

「昂に聞いたのか？」

「うん。おれもいきてえな。いつしよにいったらだめか」

「それは未来さん次第だな。俺には彼女の休みなんて判らないし」

「じゃ、かーちゃんがいつていえばつれていつてくれるのか？」

「まあ、良いけど泊りがけだぞ」

学童から出てきた昂が聖司との話を聞いて瞳を輝かせている。

「ノン、せいじくんもいつしよにいくの？」

「まだ判らないよ」

「ええ、いつしよに海であそびたいなあ」

そこに息を切らしながらノースリーブのシャツにスカート姿の未来さんが駆け込んできた。

未来さんの姿を見ると聖司がムスツとし始めた。

「ゴメン、聖司。あつこんばんは」

「きょうははやかっただな」

「おい、聖司。お前は誰に悪態付いてるんだ。お前の為に働いているんだぞ」

「ゴメン、かーちゃん」

「えっ？ ええ！ 聖司が謝ってくれた」

「はあゝ どんだけ苦労を掛けてるんだ？」

俺が聖司の顔を見ると気まずそうにしている。

「昂、おれもかえる」

「それじゃ、はやくじゅんびして」

「うん、わかった」

「ええ？ あれがああ聖司なの？」

人の家庭だけど無性に心配になってきた。

でも聖司は俺が叱ると素直に言う事を聞いてくれるし昂が話してくれる学校での話でも先生の言う事には反抗的だけど昂の言う事は聞いてくれると言っていた。

もしかしたら甘えたい感情の裏返しなのかもしれないし聖司なりの

サインなのかもと思う。

それとも少し早い反抗期か？

昂に反抗期が来て『嫌い・臭い』なんて言われたら打ちひしがれて立ち直れないかもしれない。

そんな事を想像しただけで気が滅入ってしまう。

「どうしました？ 典彰さん。暗いですよ」

「ああ、昂が反抗期になったらって考えたら、ちょっと」

「ええ、昂ちゃんなら平気ですよ」

「でも同僚に聞くと凄いらしいじゃないですか」

「まあ、それは親離れだと思えば仕方がない事ですよ、いつかは離れていくものだし。うちなんか男の子だから後数年もすれば一緒に買い物なんかに行ってくれなくなると思いますよ」

「親離れか」

「そう言えば私も父の匂いが嫌いになつて悪態を。あつ、ごめんなさい」

未来さんの繰り出したクリティカルヒットが決まり、思わず頭を抱えてしゃがみ込んでしまい頂垂れてしまった。

長い長い導火線に火が灯った瞬間だった。

「ノン、どうしたの？ あたまがいたいなの？」

「ん？ 平気だよ。昂に嫌われたくないからな」

「ええ、へんなの。きらいになんかならないよ」

思わず昂を抱きしめなくなる感情を抑えるのに必死だった。

「なあ、かーちゃん。海にいききたい」

「ええ、ゴメンね。仕事が」

「もうすぐ、なつやすみだろ」

「そうだけど……」

昂が俺のズボンの裾を引っ張っている。

屈んで昂の顔に近づけると昂が俺に耳打ちをした。

「ノン、せいじくんと海」

「ええ、俺が言うの？」

「だって……」

「そんな顔をするな」

未来さんに声を掛けようとすると俺より早く聖司が海の話を持ち出した。

「ノリがかーちゃんがよければ海につれていってくれるって」

「ええ、そんな事。駄目よ迷惑がかかるし。それに」

それに続く思いに気付く前に口を挟んでいた。

「うちなら構いませんよ。どうせ会社の保養所だし昴も聖司が居てくれた方が楽しめると思いますし」

「でも、そんな会社の保養所なら尚更じゃないですか」

「最近海外や沖縄なんかに行くのが殆どですからね。俺みたいに伊豆の保養所に行こうなんて奴は殆ど居ませんよ。総務に言ったら大喜びで自由に使ってくれて言っていましたし。休みが合うなら一緒にしませんか？」

「良いんですか？ 本当に私なんか一緒に」

「遠慮はいらないですよ」

未来さんに聞くと俺の会社と殆ど同じ日が夏休みにあてられていた。それを聞いて昴と聖司が両手をつないで飛び跳ねて大喜びしていた。直ぐに計画を練り直す事になった。

昴と2人なら電車で行く方が楽しし昴もその方が喜ぶと考えていた。それに交通費も安くつくはずだ。

しかし4人になれば電車より車の方が交通費の負担を減らせるはずだ。

その代り運転手である俺の負担は計り知れないものになる。

特に夏場の行楽地に向かう道路はともかく混む。

それはたとえ伊豆だろうと例外は無い。

少し早めに出ないとキツイかな、幸いと言えば俺の家と未来さん達の家が近所であると言うことぐらいだろう。

時間が早くても多少は融通が利くはずだ。

車は実家の車を使う事にした。最近では親父ですら車を使う機会が

減り宝の持ち腐れ状態になっている。
時々使ってやらないと車が可哀想だ。

車を実家に取りに行くとしてもない物を渡されてしまった。

「ど、何処でこんなもんを……」

「あら、可愛いじゃない」

「いや、無理だし。俺が」

「あらそう」

やけにお袋が引き下がるのが早いと思った瞬間にお袋が昴を呼んでいた。

「昴ちゃん。良い物をあげるからいらっしやい」

「きたねえぞ、お袋」

「あんたが着たがらないなら昴ちゃんにあげるのよ」

お袋に呼ばれて昴が満面の笑顔で飛んできた。

「なあに、おばあちゃん」

「このワンピースなんだけどどうかしら？」

「うわぁ、もしかしてノンといっしょなの？　かわいい」

「ほらね、昴ちゃんはこんなに喜んでるのに。あんたは着たくないのよね」

「ええ、ノンはきかないの？」

お袋の後ろで悪魔が微笑んでいるのを生まれて初めて見たきがした。昴にそんな事を言われれば嫌でも着ない訳にはいかない。それを知っていてお袋は昴に声を掛けたに違いない。

うみ

海に行く早朝に昴が拗ねていた。

「ノン、きらい」

「嫌い言うな」

「だって、わたしとおんなじがいやなんですよ」

「ああ、もう着ます着れば機嫌が直るんだな」

「うん」

本当に女って…… 昴相手に本気で思ってしまう俺ってもしかして

……ロリ？

嫌、断じてそんな事はないと思う。

荷物は前の晩に車に積んであり着替えを済ませて未来さんと聖司を迎えに行く。

未来さんと聖司が住んでいる団地は家から数分の所にあった。

団地に着くと昴が呼びに行くと言って飛び出して行った。

「あれ？ 昴って来た事があるのかな？」

そんな疑問が浮かんでくる。

眠気を覚ますために車から降りて思いっきり伸びをして深呼吸すると頭の中がはつきりしはじめる。

階段を下りる足音と話し声が聞こえてきてどんな顔をしていて良いのか判らず仏頂面になってしまう。

「昴ちゃん、可愛いワンピースだね」

「うん、ノンとおそろい」

「ええ？ 典彰さんと？」

「うん！」

未来さんが涼しげでシンプルなブルーのワンピース姿で降りてきて聖司は普段着に近いシャツに半ズボン姿だった。

因みに昴はノースリーブのワンピースを着ている。

「おはようございます。宜しく願いします」

「おはようございますって堅苦しいのとか遠慮はこの際抜きにしましょう」

「そうですね。良くお似合いですよ」

「あの？ 本気で言っています？」

「ええ、お世辞抜きで。それに良く見ると四葉のクローバー柄なんですね」

それがどうにも許せなかった。

お袋は昴の大のお気に入りが四葉のクローバーだと知っていて昴にワンピースを見せたという確信犯だから。

俺は昴のワンピースと同じ柄のＴシャツを着ているモダン柄と言えば良いのか、グリーンや黄色のグラデーションを効かせた四葉のクローバーが重なり合うような柄になっていた。

「行きましようか」

「「しゅっぱつしんこう」」

車に乗り込むと昴と聖司が後部座席で声を上げた。

自然と未来さんが助手席に座りシートベルトをしている。

何だか緊張してしまうがとりあえず大きく深呼吸した。

「どうかしましたか？」

「いえ、別に。行きますか」

「はい」

深呼吸して思わず項垂れてしまった。

何でこの人は良い匂いがするんだろう、そんな匂いを思いっきり吸い込んでしまった。

窓を開けたいがそうもいかず、運転に集中することにする。

早めに出たのでスムーズにいけば４時間弱で付きそうだった。

それにしても伊豆はアクセスが悪いと言うか遠すぎる。

朝早かったので初めは後ろではしゃいでいた昴と聖司は仲良く夢の中の様だ。

「典彰さんのお兄さんってどんな方だったんですか？」

「兄貴ですか？ 俺と正反対でしたね、何もかもが。頭もよかったです誰にでも優しくって人気者でしたよ。俺が兄貴に勝てたのは運動くらいですよ」

「典彰さんも十分優しいと思いますよ」

「でもね、会う人が皆兄貴の方が優しそうだって言うし。性格が顔に出るのか俺は目つきもあまり良くないし」

「私はお兄さんに直接お会いした事が無いんで判りませんが早苗が。あつ、ごめんなさい」

「気にしないでください。昔の事だって言ったら早苗に怒られるかもしれませんがそう言う事です。俺の中では踏ん切りが付いているので」

「それなら何故？」

「恋人ですか？ 何ででしょうね。出会いが無かったか俺にその気がなかったか。もし恋人がいれば昴を引き取るうなんて思わなかもしれないし」

「そう言えばお兄さんのお子さんなんですよ。昴ちゃんは」

「戸籍上はそうですね」

「えっ？ 戸籍上ですか？」

「ええ、未来さんには話していませんでしたっけ。兄貴には美紀さんと可奈って言う出来た奥さんと可愛い娘がいるんです」

「それじゃ何で」

「はつきりした事は言えませんが兄貴が優しすぎたんですよ、多分。それに兄貴自身もこんな事になるとは……」

「どうかしたんですか？」

「いや、兄貴が残した唯一の昴に関する事の中に昴を頼むって」

「それって遺書なんじゃ」

「いや、几帳面な兄貴の事だから万が一の時の事を常に考えていたんでしょう。兄貴は事故でしたから。遺書ではなく偶々そう言う物になってしまっただけだと思いますよ」

「今日はお墓参りも兼ねているんですよ」

「ええ、昴を連れて親せきが集まる新盆に出る訳にはいきませんから」

「でもそれじゃ典彰さんが」

「俺の事は何とでも言わせておけば良いんですよ。反抗期と重なって捻くれた俺は親に迷惑ばかりかけて来たんで親戚縁者からは良く思われていないし。それよりも昴の事を悪く言われたら俺我慢できる保証がないですから」

「そんな」

それは俺の本心だった。

昴と暮らし始めて昴が本当に俺の大事になっていてだからこそ彼女とか結婚とかは考えなくなっている。

そして昴がいてくれれば十分に満たされている気がしてならない。それは親としての感情なのかもしれないが昴の親は兄貴だけで俺は親にすらなれないのかもしれない。

いつか昴が俺の事を父親だと認めてくれる日は来るのだろうか。

そんな日がたとえ来なくても昴の幸せが一番なんだと思う。

「本当に典彰さんは正義のヒーローなんですね」

「ああ、春菜が言っていた奴ですか。あれはそんなに格好の良いものじゃないですよ」

あれは俺が高校の時代に道を外れてグレていた時の事だった。

毎日の様に喧嘩に明け暮れて一端に自分は強いと思い込んでいた。

周りの学校にも相手になる奴は殆ど居なくなっていたしそれなりに怖がられているのも事実だった。

そんな俺に春菜だけは何も変わらず話しかけてくれて幼い頃に引き戻される事があった。

それが嫌だった訳ではないが照れくささと周りからの冷やかashiで輪をかけて春菜の事を避ける様になっていた。

ある日の事、学校から家に帰る途中で春菜が数人のガラの悪い男に絡まれているのが見えた。

粹がっていた訳じゃなく単純に春菜を助ける事しか考えていなかった。

無我夢中で力の限り男達に向かって行き、春菜に絡んでいる男を殴り飛ばした。

「それで相手が逃げだして」

「いえ、ボコボコにされたのは俺の方でした。気が付くと見知らぬ部屋に寝かされていて春菜が寝ている俺の横で泣いていて。そりゃそうですよ高校生が本業に敵う訳がないんです。本当の所は春菜が絡まれていたんじゃないくて春菜と一緒に居た同級生が拉致される所だったんです。警戒をして近くに居た若頭達が助けに来なければ俺は死んでいたのかもしれない」

「若頭ってまさか」

「瀧川直哉が春菜の同級生です。あいつの家は代々極道で次期当主になる尚哉を潰しにかかった所に何も知らない俺が飛び込んで暴れ回った拳句に伸されて。ヒーローなんてとんでもない話ですよ」

「うふふ、ヒーローじゃないですか。もし典彰さんが乗り込まなければ春菜ちゃんだって危なかった訳だしその同級生だって」

「俺は役に立たなかったんですよ、現に近くには警戒していた若頭がいたんですから」

「春菜ちゃんは典彰さんが助けに来てくれたのが嬉しかったんですよ。たとえばボコボコにされたって春菜ちゃんにとっては正義のヒーローなんです。でも杯って」

「ああ、実は話には続きがあつて尚哉の家は正統派と言うか恩義を重んじる家系で尚哉の親父さんに甚く気に入られてしまつて休みの度に尚哉の家に通い続けたんです。夏休みなんかの長期の休みはそれこそ毎日の様に」

「そんなお家に何で？」

「俺自身が許せないと言うかもっと強くなりたくて若頭や若い衆に稽古をつけてもらったんです。まあ、稽古と言っても実戦重視のガチ稽古ですよ。指すら動かせなくなるくらいまで投げ飛ばされ殴ら

れて。親父さんも数日で音を上げるだろうと思っていたのに俺は通い詰めた。そんなある日親父さんに呼ばれて尚哉と杯を交わしたんです。あれは真似事だったんだと思います。でも尚哉はそう思っていなかった。街で出会うと俺を本当の兄の様に慕ってくれた。春菜に聞いた話だと家柄の事でかなり学校であつたらしいですから」

「それって暴れてですか？」

「逆です、虐められてです。尚哉達は決して堅気には手を出しません。それが家訓ですから。だから余計なんでしょう。堅気の俺が極道の尚哉を助けたそれだけで十分だったんです。だから俺は尚哉を虐めている奴を見つけたらそれこそですよ。堅気の俺が堅気の奴を蹴散らすのに理由なんていりません。それ以降、俺も大人しくになりましたよ」

「どうしてですか？」

「気づいたんです。俺が尚哉や春菜を守りたいと思っている以上に尚哉も春菜も俺の事を守りたいと思ってるって」

「やっぱり典彰さんはヒーローですね。そのお蔭で私も自由になれたんだし」

未来さんにまで私の正義のヒーローなんて言われたら困るので思わず車をコンビニの駐車場に居れてしまった。

「少し休憩。良いですか？」

「あつ、はい」

後部座席で重なる様に寝ている昴と聖司を起こしてトイレに行くように促す。

俺はコンビニで缶コーヒーを買って煽る様に飲んでいた。

昴はトイレを済ませ店内で聖司と未来さんと3人で楽しそうにお菓子か何かを選んでいて俺の出る幕はなさそうだ。

少しして3人がコンビニから出てきた。

「ノン、あのね。おみせのひとがノンとわたし、おにあいだって」

「へえ、そうか。じゃこんな事をしたらもつと格好良いかな？」

片手で昴を抱き上げると昴が俺の首の後ろに腕を回して何かを指さした。

その瞬間に目の前でフラッシュが光り未来さんがカメラを構えていた。

「うわぁ、勘弁してくださいよ。恥ずかしいじゃないですか」

「ベストショットです」

「消去ですよ」

「あら？ この際遠慮は無しなんですよね」

「あつ、はぁ。そういう事でOKです」

出発して3時間が過ぎようとしていた。

だいぶ日も高くなってきた真夏の太陽が本気を出し始めている。

途中で花屋を見つけて昴に兄貴への花を選んでもらうと昴はトルコ桔梗を選んだ。

白い奴で花弁の縁が紫色の可愛らしい花だ。

兄貴が眠っている場所は美紀さんの地図通り海が見渡せる場所にあった。

そこからは遠く伊豆諸島の島々が薄らと見えて夜になれば街灯も町明りも無く満点の星空が見えるのだらう。

まあ場所が場所だけに星が見える夜にこんな所には来たくは無いです。

兄貴の墓前に来てみると線香が供えてあり墓石も僅かに湿っている。

そしてフィルムケースに小石と水が入られトルコ桔梗の花が風に揺れていた。

「ああ、りょうさんのケースだ」

昴の言葉で俺は立ち上がり辺りを見渡すが人影は見当たらない。

それにこれだけ見晴らしがよければ誰か先客がいれば気づいていたはずだ。

危うくばったりと出会う所だった。

それにしても昴が選んだ花と同じものを選ぶって事はやはり母娘なのだろうが、それとも単純に兄貴が好きだった花を選んだだけなの

か俺には判断のしようが無かった。

それとこの時期にだからなのか他に理由があるのかも。

お墓の周りは綺麗にされて草なんて生えていなかった。

もつとも兄貴がここに来たのは1年前だし、ここの施設は真新しく出来たばかりだと美紀さんも言っていた。

墓石に水を掛けて線香を供え花を手向ける。

兄貴も好きだったお袋の豆腐の煮つけを墓前に供え昴と並んで手を合わせる。

『兄貴、見えるかな。昴だよ、大きくなっただろ。子どもってすげえなっと思うよ。また来るからな』

目を開けると昴も丁度目を開け俺と目があつた。

すると昴の表情が緩み俺に微笑みかけてくれてホッとする。

昴も兄貴の事を受け入れられてくれたような気がした。

「昴のとーちゃんなのか？」

「そうだよ。ここに眠っているんだ」

「昴、さみしくないか？」

「なんで？ ノンがいてくれるもん」

「そうか。まあ、おれはとーちゃんのこときらいだかな」

「まあ、聖司が親になった時に判る事だ」

そう言つて聖司の頭をなでると未来さんが目を細めて俺と聖司の事を見ていた。

宿泊先の保養所は兄貴の所から遠くない場所にあつた。

波の音が聞こえるくらい海が近かつた。

最近は大手の保養所も会員になると一般の人も格安で利用する事が出来る場所が多くなっている。

それは運営していくのが年々厳しくなり苦肉の策として一般の人にも開放しているのだろ、それに利用客に喜んでもらい利用数が増えれば会社のイメージアップにつながると言う利点があるのかもしれない。

俺が勤めている会社の保養所も同じ事を展開している。

一般の利用客が数組泊まっている事は前もって知っていた。

駐車場に車を入れて部屋に案内してもらう。

部屋はリビングが真ん中にあり両側に和室の部屋がある一番良い部屋の様だ。

窓からは目の前に海が見渡せる。

「広い部屋ですね」

「まあ、バブルの頃に建てられた保養所ですからね。それなりに古くはなっていますけどその分安いですし海は近いし言う事は無いですよ」

ソファーに体を投げ出して伸びをする。

本当の所は久しぶりの車での遠出でこのまま眠りたかった。

「ノン、おなががすいた」

「飯にしますか」

「おれもはらぺこだぞ」

「もう、聖司ったら」

朝飯はコンビニで済ませたので昼はしつかりと食べたかった。

宿のスタッフにお勧めの店を聞いて車で移動する。

昴と2人で電車に乗って来ていればこんな事は出来なかっただろう。

伊豆ならではの美味しい魚を食べられて昴は満足そうだった。

それに魚があまり好きじゃない聖司は寿司を注文して美味そうに頬張っていた。

休憩を兼ねて水着に着替えてビーチに行くことにした。

パラソルと小さなスコップを借りてロビーで昴と2人で待っている
と聖司がハーフパンツの水着で駆けてきてその後ろを未来さんが歩いてきた。

少し派手目のパレオを巻いて羽織っている白いシャツが眩しかった。
昴はシンプルな水着を着ていたセパレートになっていて下はスカートみたいになっている。

一見するとワンピースに見えるけど時々可愛らしいおへそが見えたりする。

って……俺ってヤバいかな？

俺は聖司と同じようなハーフパンツでＴシャツを着ている。

「お待たせしました」

「行きますか。って昴！ 聖司！ 危ないから走るな！」

聖司が昴の手を取って猛ダッシュで駆けだしていく。

ビーチは弓なりに細かい砂で出来た砂浜が続いていて遠浅になっているらしい。

かなり沖の方まで人影が見える。

泳ぎに来ている人は少なくないがこの時期の湘南の様な芋洗い状態ではなく程よい感じだった。

ビーチの近くには売店もあり飲み物も容易く買う事が出来そうだ。

「ノリ、およいでいいか？」

「まだ、だよ。これでここにパラソルを立てる穴を掘るんだ」

「ええ、めんど……うん」

両手に荷物を持っている俺を見て聖司が昴とかわりばんこに穴を掘っている。

文句を言ったら叱ってやろうと思ったのに張り合いの無い奴だ。

それとも子どもらしくなったと言えば良いのか、どちらにしても飯を食って直ぐに泳がす訳にはいかないのが本心だった。

パラソルの支柱が4分の1ほど埋まりそうな穴を2人が汗だくで掘ってくれた。

その中にパラソルを立てて砂を穴に埋めなおしてパラソルを開く。

レジャーシートを敷いて荷物を置いて準備完了だ。

「準備体操をきちんとしろよ」

「まだ、およげないのかよ」

「文句の多い奴だな。遊んでやらねえぞ」

「いいもん。昴とあそぶから」

「この野郎、そんな事は俺が許すか！」

逃げ出す聖司を追いかけて回す。

そんな事をしている俺と聖司を尻目に昴は未来さんに日焼け止めを塗ってもらっていた。

聖司を仕留めて小脇に抱えてパラソルに行くと水色のビキニ姿の未来さんが恥ずかしそうにしていた。

「あの、恥ずかしいからそんなに見ないでください。水着だって買う時間が無くて聖司が産まれる前の古い物ですから」

「いや全然ですよ。似合ってると思いますよ」

「もう、怒りますよ」

春菜の言葉が脳裏をかすめた。

聖司が産まれる前の水着と言う事はそう言う事なのだろう。

それと未来さんが言おうとした『それに』に続く言葉は私が恥ずかしいからだったのかもしれない。

それ以上に俺の方がそこまで頭が回らずに恥ずかしかった。

が、来てしまった以上。楽しまなければ損だと思う。

「昴、泳ぐぞ」

「うん」

「私はここから見えていますね」

「ういす」

聖司を小脇に抱えたまま海に向かって歩きだし浮き輪を抱えている昴の手を引いて海に入っていく。

夏の日差しで火照った体に海の水がクールダウンしてくれて気持ちが良い。

「おろせよ、ノリ」

「ああん、良いんだな」

「あ、バカ。海の……」

ドボンと音がして聖司が沈んでいき慌てて浮き上がったきた。

「やりやがったなあ」

「おう、やれるもんならやってみろ」

聖司が俺を倒そうと向かって来るが尽く海に投げ飛ばす。

昴は浮き輪に掴まって笑っているばかりだった。

「ノン、すごい！」

昴の言葉で聖司がむきになっている。

それを見てますますからかいたくなってきた。

「まだまだだな。俺に勝てたら何でも言う事を聞いてやるよ」

「ほんとうだな」

「俺は昴にも聖司にも嘘は付かないよ。聖司がその気なら昴と結婚させてやつても良いぞ」

「ぜったいだな」

「おう。絶対だ」

「せいじくん、がんばって」

俺と聖司の掛け合いが聞こえてか昴が聖司に声援を送っている。

俄然やる気になった聖司を海に思いつき投げ飛ばした。

水しぶきが上がり聖司が歯を食いしばって向かって来る。

そんな聖司を見ていると俺が尚哉の家に通い詰めていた時の自分自身の姿とオーバーラップした。

『そうだ、どんどん強くなって俺を追い越して行け。その時は昴をお前に託してやる』

流石に水の中で暴れ回っていると息が上がってくる。

「少し休憩だ」

「にげるのか？」

「逃げたりしねえよ。いつでも掛って来い。その代り男なら正面から来いよ」

「やくそくだぞ」

「ああ、忘れねえよ」

俺が海から上がると聖司が追いかけて来た。
今度は波打ち際で鬼ごっこが始まる。

「はぁ、はぁ。流石にきつい」

パラソルの近くで寝転んで空を見上げ、太陽の光が目に入り思わず手で遮った。

昴と聖司は波打ち際で砂の山を作って遊んでいる。子どものタフさには目を見張るものがあつた。

力では敵わないけど持続力なら子どもの方が数段上かもしれない。

まあ、聖司には当分負ける気がしないので安泰だ。

すると俺の頬に冷たい物が当てられた。

目を開けると顔の上に未来さんの顔が見えウェーブの掛ったミドルヘアが潮風に揺れている。

「はい、冷たい飲み物」

「ありがとうございます」

起き上がり缶ジュースを受け取り昴と聖司に目をやる。

大きな麦わら帽子をかぶった未来さんが俺の横に腰を下ろして膝を抱えた。

腰にはパレオが巻かれているが上はビキニのままだった。

「良いんですか？ 聖司とあんな約束して、典彰さんは本気なんですよ」

「俺は子どもだからなんて思っていますし本気ですよ。初恋が叶うかどうかは本人達しだいですよ。もし聖司が昴を泣かすような事があれば全力で阻止します。それでも聖司に負けてしまった時は昴を渡すつもりです。その時こそが俺じゃ昴を守れなくなつた証拠ですから」

「本当に子どもみたいなんだから」

「今は今ですよ。今楽しいと思える事が大切なんです。一寸先は闇誰にも数秒先の事なんて判らないんですから」

「そうですね。典彰さんはそういう事を乗り越えて来たんですものね」

「未来さんだって同じじゃないですか。辛い事を乗り越えて今があるんじゃないんですか？」

「それは私が典彰さんと出会えたからで」

「俺は昴と出会えて救われたんだと思います。だからこそ出来る限りの事をしてやりたんです。それが昴の為になるのなら何であれ」
「それは親代わりとしてですか？」

「当然です。でも時々俺ってヤバいのかなって思う時があります。俺はノーマルだしそう言う趣味なんて無いのに」

「それって口……」

「皆まで言わないでください。そんな訳ないじゃないですか昴は兄貴の子ですよ」

「本当にやけちゃいました。これを持っていってください聖司達と遊んできます」

未来さんの顔が少し怒った様な顔になって俺の頭に腰に巻いていたパレオを掛け、麦わら帽子を載せて海に向かってすたすたと歩いて行ってしまった。

女の子も女の人も苦手なのを実感した瞬間だった。

腰に巻いていたパレオを俺の頭につて何の嫌がらせなんだ？

それに日に焼けて何で怒るんだ？

その晩は未来さんの機嫌が直らずに食事をして早々に寝る事になった。

俺にとつては疲れていたし有難い事だけど聖司には『かーちゃんになにをした』と突っ込まれるし訳が判らないが、昴の横で仰向けになつて考えているといつの間にか眠ってしまった。

抱っこ

翌朝は未来さんの声で起こされた。

「典彰さん。昴ちゃん。朝ご飯にしましょう」

「うっ、早いつすね」

「ほら、しゃんとして。昴ちゃんも」

眠い目を擦りながら足元を見ると俺の来ている浴衣を掴みながら昴も眠たそうに目を擦っていた。

「本当に親子で同じ格好をするなんて、それと寝癖凄いですよ」

「ふあゝ」

俺が大きな欠伸をして口に手を当てると昴も全く同じ事をしていた。

朝食を済ませ車で観光する事になっていた。

なっていたと言うのは『折角の夏休みだし海ばかりじゃ面白くないから何処かに行きましょう』と言う未来さんの提案でと言うか既に決定されていた。

俺と昴が寝ている間に保養所のスタッフに近郊にある観光スポットを教えてもらい地図までもらっていた。

「まずは竜宮窟に行ってみましょう」

未来さんの一言で車に乗りこみ観光地巡りがスタートする。

「何でも豚が主人公のアニメの秘密基地みたいな場所らしいですよ」

「ああ、豚は生きる狼はって言う奴ですか？」

「それを言うのなら狼は生きる豚はでしょ。それに違います」

「すんません」

未来さんが俺と同年代なのを感じる。

「わたししってる。そらとぶブタはただのブタだっけ」

「ええ、昴。ただの豚は空とばねえぞ」

「あれれ、おかしいな」

「おかしくねえよ。『飛ばねえ豚はただの豚だ』だよ」

「典彰さん、知っててやってますね」

「うへえ。聖司。お前のかーちゃんに怒られたぞ」

「ばーか」

駐車場に車を入れて看板の下から続いているコンクリートで作られた階段を聖司と昴が駆け下りていく。

「おーい、転ぶぞ」

「だいじょうぶ」

そんな声が周りの岩に反響しながら聞こえてくる。

「すごい」「すごい」

昴と聖司が上を見上げている。

つられて見上げるとぽっかりと穴が開いて空が見え海に続く穴からは水平線が見えた。

「へえ、凄いな。本当に秘密基地見たいだ」

「ノン、海にはいつてもいい」

「足だけだぞ。洋服を濡らしたら車に乗れないからな」

「うん」

昴がワンピースの裾を前でたくし上げて片手で掴み静かに海に入っていく。

聖司は恐る恐る昴の様子を見ていて海には入らなかった。

男の癖に怖いのか？

「ああ、ソラスズメダイ！」

「ん？ ああ、青い魚か。この辺りは黒潮の関係で暖かい海水が流れ込んでいるからな」

「どれだ。みえねえ」

「お前も入って来い」

「ええ！」

仕方なく聖司を小脇に抱えると魚を指さした。

「ああ、にげた」

「本当に綺麗な魚ね」

不意に良い香りがしたと思ったら俺の横で未来さん昴と同じように

ワンピースをたくし上げて屈むように海を覗いている。

風にそよいだ未来さんの髪の毛が腕にかかりくすぐったい。
家族旅行ってこんな感じなのかと思ってしまう。

「どうかしましたか？」

「いや、別に。次、行きますか」

「変な典彰さん」

急に未来さんが俺の顔を見上げ咄嗟に顔を背けてしまった。

「昂ちゃん、何処に行きたい？」

「うーん、どうぶつえん」

「それじゃ、宜しくね」

「はあ」

アニマルキングダムと言う所について昔のバイオパークじゃんか。

確かに昔も動物は沢山いたけど……

「人が少ないですね」

「まあ、リニューアルしたとは言え俺が子どもの頃にあった施設ですからね」

「ええ？ 典彰さんは来た事があるんですか？」

「まあ、子どもの頃ですよ。動物に追いかけてあんまりいい記憶は無いですね」

「それじゃ、いきましようか」

何の嫌がらせか？

何かしましたか？ 俺。

なんて聞ける訳もなく昂と聖司は動物を見て大はしゃぎだった。

ふれあい広場に行くと子どもたちが色々な動物を抱っこして写真を撮っていた。

「うわあ、ノン。あれ？」

「んーアルマジロだな。敵に襲われると体を丸めて身を守るんだ」

「じゃ、あれは」

「ハリネズミかな？」

人気者のはずのモルモットやウサギも居るが微妙に影が薄い。

アルマジロやハリネズミなんて他の動物園ではなかなか触れないからかもしれない。

昴や聖司も動物を抱っこして未来さんに写真を撮ってもらっていた。そして俺はカピパラに興味をひかれた。

何とも間が抜けた顔にゴワゴワに見える毛は意外と柔らかかった。

「うふふ、ノンみたい」

「はあ？　これが俺？」

「うん、ねてるときのノンにそっくり」

「マジで？」

「うん！」

俺ってこんな間抜け面して寝ているんだっけ、違っただろ！
突っ込みを入れるとそこに昴の姿は無かった。

近くにはインコやフクロウが展示されている。

そしてナマケモノに触れらるコーナーらしいが今日はかなり高い場所
で木にぶら下がっていた。

いくら寝てばかりのナマケモノでもそうそう人に触られたら嫌になる
だろう。

そんなへそ曲がりの事を考えていた。

「今日は高い所に居るんだって、残念だね」

「うん、さわりたいのに。あっ！」

「ん？」

昴が何かに気付いたのか俺のジーンズを掴んで引っ張った。

「あのね」

「ええ、本当にやるの？」

「うん」

周りに聞こえない様に内緒話的な話で、何で小声なのか意味が判らない。

そう言えば小学校に入学してから寝る時も俺の方に寄ってきて自分

の布団のギリギリの所で寝ているし、縁側で新聞を読んでも足の間に座る事もなくなってきた。

昴が成長した証なのだろうか？

「これで良いのか？」

「うん、とどかない」

昴を肩車するがまだナマケモノには届かないようだ。

「昴、俺の肩の上に立て」

「ええ、危ないですよ」

「大丈夫ですよ」

「でも怪我をしたら」

未来さんが昴の事を心配している。

そんな事を気にせずに昴は俺の頭を掴みながらゆっくりと立ち上がる。

落ちない様に俺は昴の足を掴んだ。

「うわぁ、なんだかフワフワだよ」

「もう良いのか？」

「うん」

「下ろすぞ、せーの」

「「えいっ!」」

昴が両手を広げ俺の肩から飛び降りる。

落ちてくる昴の体を難なく受け止めると昴が俺の首に腕を回した。

「たのしいね」

「ええ、昴ちゃん。楽しいの？ 怖くないの？ おばさん驚いちゃ

った」

「うん、だってノンがちゃんとしてくれるもん」

「聖司もやるか？」

俺が聖司の顔を見ながら言うと聖司がブンブンと首を横に振っていた。

その後に見た鳥の展示も猿のトンネルも言葉少なに通り過ぎる。

プレーゾーンに行くのと更に人影がなく閑散としていた。

「何だか場末の遊園地見たい」

「俺が来た時より施設は減っているし夏休みにこれじゃ」

「ノリ、ゲーセンにいこうぜ」

聖司の提案でゲームセンターに入るけれど。

そこには古いゲーム機が展示されていた。

「展示じゃないです」

「まあ、そうでしょう。古いなあ、しかし。聖司、やってみるか？」

「ええ、つまんなさそう」

「だらうな世代の俺ですらやろうと思わないからな」

「ノン、あれなに？」

「えっ、ボールプール？」

昴が指差す先にはカラフルな案内看板があって『ボールプール』と書かれていた。

「あれですよ、アスレチックみたいになっていて中にボールが入っているプールがある遊具です」

「へえ、それじゃ未来さんも」

「私はスカートです。できません」

「ええ、スカートじゃできないの？ ノン」

「大人はな」

「行くぞ聖司」

「おう！ しょうぶするか？」

「今回はそういうの無だ。昴も居るからな」

「ちえ」

ボールプールの中は面白い造りになっていた。

足場の悪いクッションのスロープがあつたり左右に揺れ動くサンドバックの間をすり抜けたり。

そして網梯子やチューブ状のトンネルまである。

名前の由来のボールプールには結構高い台があつてそこから子どもがボールプールに飛び込んで遊んでいた。

「しかし熱いな」

多少空調が利いているとは言えこの季節は汗だくになっている。

昴や聖司も髪の毛が汗で顔に纏わりついて気持ち悪そうだ。

「やっぱり夏は海だな！」

「「おー！」」

昨日遊んだ保養所の近くの海に来ていた。

昴と聖司は相変わらず何が楽しいのか砂山遊びをしている。

俺は足を投げ出して砂の上に座り子どもたちを何となく見ていた。

「典彰さんと昴ちゃんの絆って凄いですね」

「俺と昴ですか？」

「はい、昴ちゃんは凄く典彰さんを信頼している。それは初めて出会った時よりはるかに確りしてきています」

「俺にはそう言う事は判らないですね。ただ毎日が精一杯でそんな中でも昴が一番で。それに昴と出会ってからもう直ぐ一年ですけどまだ一年なんだなって」

「未来さんと聖司が積み重ねてきた時間には敵わないですよ」

「そうかしら。私はそうは思わないです。時間の問題じゃなくお互いの問題だと。だってどんなに長い時間を一緒に居ても分かり合えない家族だって居るじゃないですか」

「そうですね。まあ先の事は置いておいて今を楽しみましょう」

「そういう典彰さんは嫌いじゃないです」

「俺も好きですよ。あつ。いい加減な自分ですよ」

立ち上がり昴と聖司の居る場所に歩き出す。

後ろから『本当に馬鹿』と聞こえた気がしたが空耳だろう。

昴と聖司に混ざって砂山を弄る。

何だか子どもの頃を思い出す、兄貴と海に来ると砂山で城を作ったけ。

「よし！ お城にしよう」

「ええ、ほんとうに」

「できるのか？」

昴からスコップを受け取って砂山を固めていく。
土台をしっかりと固め上物を作っていく。

ここの砂は細かく適度に湿り気があって手で固めると直ぐに形にな
つてくれる。

城と言っても日本の天守閣とかじゃなくて西洋風のお城のあれだ。
スコップの先を使って石垣なんかの模様をつけて出来上がりだ。

「どうだ」

「うわあ、すごい」

「すげえぞ、ノリ。かーちゃんしゃしんとって！」

未来さんに写真を撮ってもらう。

最初は昴と聖司の3人で。

次に親子2人で最後は4人で海に遊びに来ていた人にシャッターを
押してもらう。

「1+1は？」

「にー！」

「うわあ、おしろが」

シャッターが下りた瞬間、大きな波が打ち寄せて城の土台を削り取
り城が崩れていく。

「こわれちゃったね」

「だな、また来年な」

「うん！」

昴と笑顔でハイタッチする。

いつまでこうして一緒に海に来られるかは判らないけど、これから
も昴と同じ時を過ごせたら。

そう思うだけで俺はなんだか落ち着けるし幸せだった。

最後の夜は食事をして浜で花火を楽しんだ。

今は部屋で缶ビールを飲んでいる。

窓からは波の音が聞こえ心地良い風が入ってくる。

俺の前では浴衣姿の未来さんが缶ビールに口をつけている。そして聖司が未来さんの膝枕で小さな寝息を立てている。

大人の俺と海で取っ組み合いをして流石に疲れたのだろう。

昴はと言うと俺の横に座りジュースを飲んでいる。

この昴との微妙な間って何なんだ？

俺に凭れかかるでもなくコブシーつ分の距離は何かの遠慮か我慢か？

「昴、捕まえた」

「もう、ノンだめなの」

昴を抱き上げ膝の間に座らせると口を尖らせ俺を見上げて抗議している。

「何が駄目なんだ？」

「お姉さんになったらだっこはきんしで。だめなの」

「何だそれ。大人だって抱っこするし抱っこされたい時だってあるのに」

「ええ、ほんとう？　なんで？」

「ん？　理由は……判らん」

「じゃ、だっこはいいの？」

「良いさ、昴が嫌だって言うまで抱っこなんかしてやるよ」

「ほんとう？」

「本当だ」

「せいじくんのお母さんもだっこされたいの？」

「うふふ、私には聖司がいるから」

そう言って未来さんは聖司の頭を優しくなでていた。しばらくすると昴の寝息が聞こえてくる。

安心からか疲れたのか俺のシャツを掴んで寝てしまった。

「昴ちゃんのお父さん。そろそろ休みましょう」

「えっ？　はい。おやすみ」

「おやすみなさい」

聞こえなかった事にしよう。

俺には昴が未来さんには聖司がいてそれぞれが家族なんだ。
生きる道はそれぞれだけど今はそれで良い気がした。

帰りの日も寄り道をして帰る。

シャボテン公園に寄る事になった。

ここはシャボテン公園と言うけれどメインはやはり動物だった。
チンパンジーのショーは大人でも楽しめるほどで結構笑える。

しかし展示されている猿の種類が多い気がする。

駐車場にはリス猿が車の上で遊んでいたし。

ペリカンも居るが大きな鳥が放し飼いにされて大人でも少し怖い。

その他にもアフリカハゲコウなどの大きな鳥が園内を闊歩している。
サボテンも色々な種類に目を見張るが俺の気持ちは別の所にあった。
地球環境館だかの休憩所を覗いた時に心臓が止まるかと思った。

人が殆ど居ない休憩所には写真が展示されていて昴の母親である鳴
海涼子の名前が掲載されている。

恐らくこの展示の為に彼女は伊豆に来て兄貴の墓参りに行ったのだ
ろう。

何処かで出会ったりしないかそんな事ばかりが気になって他の物は
殆ど目に入ってなかった。

幸いな事に昴は聖司と未来さんと一緒に行動してくれていた。

これからもこんな事が度々あるのだろうか。

しゅくだい

子どもにとっては長い夏休みが終わる。

夕飯を済ませテーブルで俺はデジイチで取った写真をパソコンに取り込んで写りの良い物をファイルに選別していた。

昴は俺の横で夏休みの宿題を見直している。

「クジャクの顔入れ写真はなしだな」

「ええ、ほんとうだ。せいじくんおかしい」

「そう言えば聖司の奴は宿題終わったのか？」

「ぜんぜん。がくどうでもあそんではっかりなんだもん」

「うわあ、1年生からそれじゃ厳しいな」

そんな事を話していると玄関のガラス戸を叩く様な音がした。

「ノン、だれかきたみたいだよ」

「風じゃないのか」

「ちがうよ」

「嫌な予感がするからって出ない訳にいかないよな」

重い腰を持ち上げて玄関に向かうとすりガラスの向こうに人影が見える。

馴染みの連中なら何かしら声を掛けるはずで、声を掛けて来ないと言う事は馴染みの奴らじゃないと言うのが直ぐに判った。

セールスか何かか……溜息をついて投げやりな気持ちで口を開いた。

「どちら……」

「すみません、入江です」

「えっ？ 未来さん」

「はい、夜分に申し訳ないと」

「ち、ちよつと待つてください」

未来さんの声が聞こえた瞬間にテンパってしまった。

俺の格好はパジャマ兼部屋着のTシャツに半パン姿で腹をボリボリ搔いていた。

着替えには時間がかかるしこのまま出るには恥ずかしい。

すると微かに鼻を吸る様な音が聞こえた。

それは聖司だと容易に想像がついた。

「今開けます」

鍵を開けて引き戸を開けると涼しげなワンピース姿の未来さんと俯いたままの聖司が立っていた。

俺は未来さんに向かわずしゃがみ込んで聖司の顔を覗き込んだ。

「夏休みの宿題で怒られたんだろ」

「う、うん」

聖司がしゃくり上げながら返事をした。

「男ならしゃんとして。自分のケツは自分で拭け。どうして欲しいか自分の口で言え、いいな」

「な、なつやすみの、しゅくだいを、おしえてください」

「言えるじゃんか。昴、聖司に宿題を見せてやれ」

「え、せいじくんなの？」

「男が泣くくらいなら最初から全部やらないくらいの根性でいろ。

早くしないと終らないぞ。ほれ」

俺が聖司のケツを叩くと聖司がトボトボと情けない後姿で居間に向かって歩いて行った。

「本当にすいません。何だか甘えてばかりで」

「そんな事はないですよ。お互い様です」

「ありがとうございます。他に頼れる人もいなくて」

「まあ俺も聖司と似たようなもんでしたから。どうぞ中に」

「はい」

居間に行き4人でテーブルを囲む。

聖司の宿題の進行具合は……

「絵日記だけですか？」

「はい、それだけは海に行った時の事を描いていたんですけど。他は殆ど」

「昂、聖司に教えなるんじゃないやなくて昂のを写させろ」

「ええ、ずるはダメなんじゃないの？」

「ずるかも知れないがだ、今日中に終わると思うか？」

「ぜったいにむり」

「俺が許す」

「はい」

残すは自由研究のみだがそれが一番問題だった。

因みに昂は自分が植えた果物の種の観察をしてノートに書いていた。基本、自由研究なんて植物の観察や昆虫の観察が定番と言えば定番なんだろう。

それにまだ1年生だからそれほど難しい事をやっても途中でギブアップする事が多い。

今から聖司が興味のある事を調べるのは不可能だった。

「すいません、本当にご迷惑を」

「それより宿題を片付けましょう」

「自由研究ですよ。私もどうしたら良いのか判らなくて」

「あつ、確か」

兄貴のパソコンを取り出して立ち上げる。

そして綺麗に整理され羅列されているファイルの一つを開いた。

「あつた、これだ」

そのファイルの中には小学校低学年から始まって中学以上までの天体に関するカリキュラムが細かく書かれてある。

これを使えば1年生の宿題に応用できるはずだ。

そして兄貴の低学年のファイルには結果が大切ではなく『何故？』

が大切だと書かれている。

それはどうしてなんだろうと言う事を書いていけば大丈夫だと教えてくれた。

その中でも聖司が興味を持ちそうなものをピックアップして必要な写真は兄貴の撮った物をプリントアウトして流用する。

一旦、写すのをを止めさせて自由研究から終わらせる事にした。

「なあ、これをうつしていいか？」

「それは駄目だな著作権があるからな」

「なんだそれ？」

「人が書いたものや写真にはその人の物だと言う権利があるんだよ。例えば聖司が描いた絵日記には聖司に著作権がある。それを誰かがそっくり丸写しされたらどうする？」

「ええ、むかつくからなぐる」

「だろ、そう言う事だ。だから自分で思った事を書けば良いんだ」

「んん、わかった」

聖司が写真をノートに貼りながら自分が思った事を書きこんでいく。使っているノートは大学ノートと昔は呼んでいた奴だ。

かなりページが残るが次の自由研究として続けられるはずだ。

まあ、それには聖司が興味を持つかは別の話だし、今は宿題を消化するのが先決だ。

「おわった！」

「あのなら、まだまだ残ってるだろ」

「ええ、もういいよ」

飽きて面倒になってきている聖司にデコピンを喰らわすと聖司が涙目になって両手でおでこを押さえた。

「い、いてえなあ」

「たりめえだ、誰の為に俺も昴もお前のかーちゃんも頑張っていると思ってるんだ」

「うつ、ごめん」

聖司がしょぼりして宿題を開いて写し始めた。

そんな俺と聖司のやり取りを見ていた昴がとんでもない事を口走った。

「うふふ、ノンってせいじくんのお父さんみたい」

「な、何だつて？ そ、そんなんじゃないよ」

「ああ、ノンがあかくなつた。あつ、せいじくんのおかあさんまで」
子どもって素直で残酷だ。

未来さんが慌ててコンビニにジュースと缶コーヒーを買いに行ってしまった。

買ってきてくれたジュースや缶コーヒーを飲んで少し休憩を挟んで再開する。

俺は肩肘をテーブルに付いて必死に昴がやった物を写している聖司の手元と言うより鉛筆の先を何気なく見ている。

未来さんはそんな聖司を真剣な表情で見ている。

「あれ？そこ違うぞ」

「ど、どこが？」

「あのな聖司、丸写するんじゃないかって少しは考えながら写せよ」

「ああん、うつせていったのノリだぞ」

「確かに言っただけど少しは考えながら写せ」

「ノン、どこがちがうの？」

「えつとここかな。多分答えはこっち」

「あつ、ほんとうだ」

聖司が写している物を指さすと昴が慌てて自分の物を書き直し始めた。

今度は眠そうにしていた昴が真剣に間違いを探し始めた。

「お前らは授業だけはちゃんと出るよ。それで出来れば授業中に教えてもらった物を理解して判らなければ先生に聞け。授業さえ聞いているれば学校のテストなんて簡単に出来るはずだ」

「ええ、じゅぎょうだけでいいのかよ」

「良いんじゃないの、そのかわりテストの成績が良ければだぞ」とすると未来さんが困ったように俺を制した。

「あんまり変な事を教えないでください」

「まあ、あまり進められる事じゃないけど突き詰めれば世の中は数字でしか判断してくれないと言う事です。過程が大事だとかゆとりだとかを学校で推進しても社会ではそんな事は通用しないそれが現実です。数字や成績を上げれば誰も文句は言わないでしょ」

「子どもには」

「夢をですか？」

「はい、私はそう思います。聖司には幸せになって欲しいし私が出来なかった事をしてもらいたいです」

「俺だつて昴にはそう思っていますよ。でも夢を持って突き進んでいく奴なんて一握りだと思います。兄貴がそうでした。夢に向い勉強して夢を叶える為に大学に行きそして夢を叶えた。大好きな星に係われる天文台で働くと言うね。一方の俺は自分の夢すら判らずに適当に学校に行っていた。そして志望大学を受験しようとした時に思い知らされたんです。倍率があり得ない数字でした。もつと勉強しておくべきだったと気づいてからでは遅いんです」

「だから、常にですか？」

「ええ、僕はそう思います。今は可能性を広げる為には何が必要なのかだと思えます。一つの事に特化していれば夢は叶うかもしれない、でも他の教科もレベルが上がっていればより夢が叶う率は飛躍的に上がる筈です」

「典彰さんって昴ちゃんを見ていると感じないけれど現実的な方なんですな」

「まあ、営業の仕事柄ですかね。でも、生きて居さえすれば何度でもやり直しは出来る、おつ死んだら終いと言う事ですかね。ああ、もう今はそんな事より宿題です。すいません暗い話で」

「いいえ、私もそう思いますよ」

「聖司と昴が必死になっている。」

「未来さんは疲れが溜まっていてのか眠そうにしている。」

『横になって良いですよ』とは敢え口にしない。

「俺が言えば気を張るばかりだろう限界を超えるの待つ。」

「先に限界を超えたのは昴だった。」

「俺の横で体を丸めてまるで子猫の様に眠っている。」

「部屋に行き昴の体に掛けるバスタオルを取ってくると未来さんが限界を超えて横になっていた。」

もう一度隣の部屋に行きタオルケットを未来さんに掛けて昂にはバスタオルを掛けてやる。

テーブルを見ると聖司が限界なのだろう船を漕いでいる。

「おーい、もう少しだ。頑張れ」

「う、うん」

時計の針は疾うに日付が変わった事を告げている。

気が付くとテーブルに両手をつけて頂垂れたまま意識が飛んでいた。車のエンジンなら完全にノッキングしそうな回転数で頭を上げると聖司が宿題を枕にして力尽きていた。

それでも見る限り何とか終わっているようだ。

外を見ると白み始めている。

俺は男だし何とかなるが未来さんは流石にこのままじゃまずいだろう。

とりあえず未来さんを起こす。

「未来さん、自宅に戻られた方が」

「ええ、あつ、私。本当にすいません」

「いやいや、そんなに畏まらなくても」

未来さんの肩をゆすると目を開けた未来さんがいきなり飛び起きて正座したかと思うと髪の毛を撫でて深々と頭を下げた。

起こした俺の方が驚いてしまった。

「聖司は俺が連れて行きますのでね」

「そんな、それじゃ昂ちゃんが」

「大丈夫ですよ。ぐっすり寝ているし直ぐに戻ってきますから」

「それじゃ、お願いします」

聖司を担ぎ上げると未来さんが手際よく宿題を片付けてカバンに詰めている。

2人を送り届けると明るくなってきた。
仕方なく朝飯の準備を始める。

昴は布団で気持ち良さそうに寝息を立てていた。回転数が上がり切らない頭で昴と朝飯を食べる。

「きょうはノンのほうがはやおきだったね」

「まあ、たまにはな」

「でも、いつもとかわからない眠そうなかおだけど」

「すんまそん」

寝ていなくても寝ても同じ俺の顔って……

そんな所にハイテンションで聖司がいつも通りやってきた。

「ノン、すげんだぞ。ねておきたらしゅくだいがおわってたんだ」

「あんな、まさか覚えてないのか？」

「なにを？」

「せいじくん、さいてい」

昴が冷やややかな視線を聖司に浴びせている。

俺は久しぶりに本気で殴りたい衝動を抑えた。

人の気も知らずに聖司は美味そうに俺と昴の朝飯を摘み食いしていた。

ほぼ完徹で出勤すると後輩の野田に尻を叩かれる羽目になってしまった。

「流石に歳かな」

「もう、沢渡君は夏休みボケなの？　まるで徹夜で宿題を終わらせた子どもみたいな顔をしているよ」

「まあ、熊谷さんの想像は当たらずも遠からずです」

「ほら、沢渡先輩。営業に行きますよ」

「ふあい　すんまそん」

大あくびを咬ますと野田に引き摺られる様にして営業部を後にした。もう来年は勘弁してくれよ聖司……

がくしゅうはっぴょうかい

昴と聖司が通う小学校に来ていた。

「がくしゅうはっぴょうかい？」

「うん、これる？」

「それって何をするんだ？」

「ん〜と、えとかがきょうしつにはってあってね。げきをみたりするの」

「ああ、文化祭みたいなもんだな」

「うん、にちようびだからせいじくんのおかあさんもくるって」

「未来さんが来るのなら行こうかな」

「ああ、すけべ」

「スケベ言うな。たく学校でなんの勉強をしてるんだ。知らない人はつかだから学校って苦手なんだよ」

冷やかな視線を昴に浴びせられてしまう。

まあ、子どもの頃から先生に叱られてばかりだった学校は嫌いだった。

「すげえ、最近の小学校ってエアコン完備なんだ。と1ー2はどこだ？」

「ノン、こつちだよ」

キヨロキヨロと拳動不審にしていると、先生より早く昴が俺の事を見つけて駆け寄ってきて腕を引っ張って教室に案内してくれた。

「これがわたしのかいた絵だよ」

「へえ、上手いじゃん」

砂のお城の周りに俺達4人が上手に描かれている。

夏休みに海に行った時の絵だと直ぐに判った。

「えへへ、でももつとじょうずな子がいるから」

「まあ、昴は昴で良いんじゃないねえの」

「うん！」

そこに数人の女の子が集まってきた。

「すばるちゃんのおとうさん？」

「えっ、ノンはおとうさんじゃないよ」

「ええ。じゃあ、だれなの」

「昴のパパのおとうとでおいさんかな？」

「ふんそうなんだ。それじゃおかあさんは？」

「ママはいないもん。でもね、おかあさんがちがうおねえちゃんが
いるんだよ」

「わかんない」

まるでドロドロの昼ドラの設定の様な事が可愛らしく聞こえてくる
から不思議だ。

それでも流石に周りのお母さん方はちょっと引いている。

「さっちゃんのお父さんはこないの？」

「ええ、お父さんさなくさいから。きらい」

そこにTシャツにカーゴパンツ姿の肩ががっしりとした人が現れた。
あれ、どこかで確か……

「おとうさん、おかあさんは？」

「あん、店番だよ店番」

「ああ、魚屋の！」

「ああ、魚好きの昴ちゃんの。やっぱり同級生だったんだ。いや娘
から昴ちゃんって言う可愛い子と仲良しになったって聞いては居た
んですけどね」

「そうなんですか」

「いや、参った。娘共々宜しく願いますね」

「こちらこそ」

いつもは頭にタオルを巻いて長靴にお店の前掛け姿だから良く判ら
なかったけど、流石に客商売で話がこなれていると言つか地のまま
なのに驚いてしまった。

「なんでおとうさんなの」

「咲羽さわ。そんな事を言うなよ」

「だってさかなくさいんだもん」

「だから今日はちゃんとしてきただろう」

一体、普段はどんな格好をしているのだろう。

でも、俺もあまり他人ごとではなく周りはそれなりの格好をしているのにジーパンにロンTって……

「さっちゃんのおとうさんってノンとおなじとしだよ」

「ええ、本当すか？」

いきなり西暦・年号・干支まで聞かれてショックからなのか真っ白になったのは咲羽ちゃんのおとうさんだった。

いや、俺からしてみれば皆年相応だと思いがそうではないらしい。

今度は少し小柄だけど20代にしか見えない人が教室の入り口から顔を出した。

この人にも見覚えがある。

営業職の記憶力は伊達じゃない筈だ。

「あ、角の八百屋の」

「まいど」

顔の横にヒョイツと手を上げていつもの挨拶をしてくれる、相変わらず店に行く時と一緒に面白い人だった。

「やあ、磯っち」

「おう、木梨。こいつとは家が近所で腐れ縁のって奴ですよ。隣に咲羽と一緒に息子が居て親子そろって同級生ってやつです」

「ええ、この人も同級生なんですか？」

今度は俺が驚いた。

見た目ははっきり言って20代にしか見えないし八百屋の店主じゃなくて喫茶店とかの方が似合っている気がした。

「あ、八百屋が似合わないとか思っていたでしょ。実は八百屋は嫁の実家で僕はマスオさんなんです」

「ああ、そうだったんですか」

「でも、僕としてはカフェとかやりたいんですね。実は隣の店舗

が空く事になつて借りようか悩んでいるんです」

「へえ、そこでカフェを？」

「まあ、夢ですよ」

「良いじゃないですか。新鮮な野菜を使ったサラダとかフレッシュな果物を使ったフルーツサンドとか」

「フルーツサンドですか？」

「あつ、生クリームとかでフルーツを挟んだサンドイッチですよ。

俺結構好きで」

「ちよつと楽しそうかも」

凄く楽しそうだし仕事柄色々と知つていそうだからなんて言われて3人でアドレスを交換してしまった。

これが俗に言う『パパ友』と言う奴だろうか。

なんだか学校も良いかもなんて思えてしまうから不思議だ。

昴達と別れて隣の教室を覗くと未来さんが壁に貼られた絵を見上げていた。

「こんにちは」

「あ、典彰さん。こんにちは」

「へえ、これつて聖司が描いた絵ですか。上手いじゃないですか」

「そうですか？」

「上手いですよ。ちよつと意外ですけど」

「うふふ、やつぱりそうですよね」

聖司が描いた絵も昴と同じ砂の城と4人の絵だった。

男の子らしい力強さが絵にもはつきりと出ている。

未来さんと廊下に出ると聖司が走ってきた。

「きたのかよ」

「聖司、お前な」

「もう、汗だくじゃないちゃんと拭きなさい。風邪ひくでしょ」

「うるせえなあ」

文句を言いながらもカーちゃんは嫌いじゃないのが良く判る。

それは暴れたり逃げたりせずじっとして汗を拭いてもらっている姿から見えてくる。

甘えたいけど男の子だから恥ずかしいのdarou、特に同級生の前じゃ。

俺だったらお袋の手を払いのけていたはずだ。

「せいじくん、たいいくかにしゅうこうだよ」

「おう、いく！」

昂に呼ばれて聖司が廊下を走り出した。

「聖司！ 廊下を走るな！」

「本当に手の掛る子なんだから」

「何だか変な感じです」

「変ですか？」

「ええ、夏休みの宿題もそうですけど。俺なんか夏休みが終わってから居残りで宿題をやっていましたし。廊下は全力疾走で階段では何段から飛べるか競ったり。牛乳の一气飲み、給食の早食い。何だか聖司と同じ匂いがして。そんな俺が聖司を叱り飛ばしているんですよ。変でしょ」

「ぶっ！ 典彰さんはそれを全部していたんですか？」

「そんなに可笑しい事ですか？ 男の子なら誰もが通る道だと思いますよ」

「いえ、夏休み前の家庭訪問で先生に典彰さんがやっていた事と全く同じ事にお叱りを受けて正直凹んでいたんです。でもそれを聞いて安心しました」

「ええ、安心つて。聖司が俺みたいになったらどうするんですか？」

「良いじゃないですか。素敵ですよ。昂ちゃんを見ていれば良く判ります」

「いやいや、俺には全然わからないすよ」

素敵なんて今まで一度も言われたことが無いので恥ずかしいやらで困ってしまう。

背が高いだけで態度がデカいだの目つきが悪いだのマイナス評価な

事を散々言われてきた俺には理解できない言葉だった。

「でも、また冬がやって来るんですね」

「そうですね」

寒くなり空気が乾燥して常に気を張っていないといけない冬がもうすぐ訪れる。

去年は小さなサインを見落として昴を辛い目に遭わせてしまった。

今年は見落とさない様にしないといけない。

でも、そのお蔭でこうして未来さんや聖司と知り合えたのも事実でクリスマスには周りの温かさに気付かされて。

まんざらでもないと思うけど少し前までなら俺も正反対の立場に居た人間だ。

インフルエンザが大流行した年には本当に閉口していた。

子どもが熱を出したと女子社員が休み。

次から次へと同僚達がインフルエンザに罹り。

始めは文句ばかり言っていたが終いには黙々と仕事を流すしか出来なくなっていた。

俺と熊谷さんと中田先輩で走り回っていた記憶がある。

情けない事に今年は風邪をひきませんようにと神様に祈る事しか出来ない。

俺は恵まれた環境に居るのかもしれないと思う。

昴の事を気遣ってくれる仲間がいて。

昴はききわけがよくて。

そう言えば去年は俺も聖司も風邪をひかなかった。

あれは風邪をひかないと言う事なのだろうか。

昴の誕生日にはケーキを買ってきて2人でお祝いした。

お袋は実家でと言われたけれど俺は昴と2人で過ごすと決めていた。これから何回こうして昴と過ごせるのかなんて誰にも判らないからこそ今を大事にしたかった。

バトミントン

最近、従妹の春菜の周りが慌ただしい。

結婚が近いのかと聞けば全否定されてしまった。

土曜日にバトミントンのセットを持って遊びに来たかと思えば夕方からの電話で『ゴメン、またね』と言い残してそそくさと帰ってしまった。

翌日、縁側に座って秋風を感じながら爺の様にまったりとしていると、昴が春菜の置き土産のバトミントンを手に持って何か言いたげな顔をして俺の横に座っている。

俺としては休みくらいになりたい、横目で昴の表情を伺う。

「もしかして、それやりたいの？」

何も言わずに『コックリ』と昴が頷いた。

「公園でやる？」

「うん！ はやくいこう」

「早！」

気が付くと昴に腕を掴まれて商店街の近くにある公園に向かっていった。

家の近くにも公園があるが本当に小さな公園で遊べるスペースが狭く、近所のママさんが小さな子どもを連れて集まる溜まり場になっていた。

そんな場所でバトミントンなんて出来る訳もなく広い公園に連れて行かれる所だった。

「そうだ、ノンけいたいをかして」

「まあいいけど。聖司も呼ぶのか？」

「うん、みんないたほうがたのしいもん」

最近、昴は俺の携帯で聖司と連絡を取って遊んでいる。

そして時々未来さんの携帯から聖司が電話してくることもあった。

「おかあさんとくるって」

「へえ、未来さんも来るのか」

「うん、そのほうがノンもたのしいでしょ」

何で俺が昂に氣を使われてるんだ？

すると自転車に乗って前から魚屋の磯正さんがやってきた。

魚屋の名前が磯正なのかと思ったたら苗字らしい事をつい最近知った。

「おっ、昂ちゃん。どこに行くんだい」

「ノンとバトミントンするのこうえんで」

「うちの近所の公園かい」

「うん」

「よし、俺も後から木梨を誘って合流するから」

「さっちゃんもね」

「おう！」

そんな事を言いながら自転車を立ち漕ぎしてももの凄い勢いで走り去って行った。

かなりの大所帯になりそうな気がした。

公園に着くと日曜日だけあって親子で遊んでいる人が結構いる。

そんな中に子犬を連れた親子の姿があり、子どもが子犬と遊んでいるのが見えた。

「サン、げんきかな？」

ポツと昂がつぶやいた。

色々な事があり、また機会が無く島に連絡をしていないのは確かだった。

携帯を取り出しアドレスを開きクリックする。

しばらくすると少し大きな声が携帯から漏れた。

「もしもし、沢渡です。その節はお世話になりました。ええ、元気ですよ。ちょっと待ってくださいね」

「ほれ、昂」

「えっ？」

昴が不思議そうな顔をして俺を見上げている。

そして俺が差し出した携帯を受けとって顔に近づけた。

「もしもし、おばちゃん！」

電話の相手は島でサンを預かってくれている近所のおばちゃんだった。

昴は頷きながらサンの事なんかを聞いているようだ。

しばらくすると昴が携帯を切って俺の顔を見上げた。

「サン、げんきだつて。おおきくなつたつて」

「そうか、良かったな。昴が大きくなつたら会いに行こうな」

「うん！」

休みの日に会いに行こうなと言つてやれないのが少し辛い。

いくら夏休みなどの長期の休みがあるとは言え小笠原までは遠すぎる。

気軽に行ける場所じゃないのは確かだった。

それに昴は島の話あまりしなかった。

俺に氣を使っているのか、思い出すと寂しくなるからしないのか。

「いつでもおばちゃんに電話していいんだぞ」

「うん、でもノンといるとたのしいから」

「そっか」

昴がそう言ってくれるのならそれでいい氣がした。

「すばる！」

「ああ、せいじくんがきた」

「かーちゃん、はやくしろよ。ノリにきらわれるぞ」

「せ、聖司。変な事を言わないの」

「あ、ノン。顔が赤い」

「んな訳があるか。太陽の所為だ太陽の」

最近の小学生は怖すぎる。俺らの時なんかとは大違いで戸惑う事が多い。

「ノリ、しょうぶしようぜ」

「負ける気しねえ」

「やんねえとわかんねえだろ！」

「ばーか、やる前に頭に血が昇っていたら勝てるもんも勝てねえの」
勝負を挑んできた聖司にきちんと答える。それが男の約束だ。

子ども相手に大人げないと言われるかもしれないけれどそれが流儀だし手を抜けば男として聖司に失礼だろう。

「ほれ」

「くそ」

聖司が必死にシャトルを追いかける。

俺は聖司が打ち返す角度を見極めて落下点に移動する。

「終わりか、ほら」

「負けねえ！」

そこに魚屋の磯正さんと八百屋の木梨さんが子どもを連れてやってきた。

「おお、やってるやってる」

「あ、さっちゃん」

「すばるちゃん！」

「こいつはサトルよろしくね」

「うん、せいじくんのともだちだよね」

「うん」

磯正さんが嬉しそうな顔をして木梨さんは息子を紹介しているようだ。

で、聖司はそろそろ限界かな。

「スマツシュ！」

「きたねえぞ、いままでてぬきただろ」

「あんな、俺が本気を出して聖司が勝てる訳がないだろ」

「やらねえとわかんねえったろう」

聖司がラケットを振り回しながら追いかけてくる、それをかわしながら逃げ回る。

「ノン、こどもみたい」

「うふふ、そうね」

「ノン、こんどはわたしのばん」

「ほれ、聖司。男なら」

「つぎはぜってえかつかな」

渋々と聖司が昴にラケットを渡した。

「おい、聖司君。バスケしようよ」

「うん」

木梨さんが聖司に声を掛けると直ぐに機嫌を直して聖司が走っていく。

磯正さんと木梨さん親子の4人で2on2をやるようだ。

「ノン、いくよ」

「はいよ」

昴がシャトルを下から掬い上げると綺麗な放物線を描きながら落下してくる。

それを今度は俺がラケットで掬い上げる。

聖司の時と違い凄くゆっくりな動きだ。

しばらくして今はさっちゃんと一緒に昴がバトミントンをしている。

「典彰さんって何でもできるんですね」

「いや、出来る事だけですよ。まあ、運動は嫌いじゃないって言うか運動だけが兄貴に勝てる唯一でしたからね」

「実は、私もバドだけは自信があるんです。高校の時はバド部で」

「そうなんですか。だから今日は」

「えっ、あっ、あの……」

スカート姿が多い未来さんが今日はズボン姿でスポーティーな格好をしている。

バトミントンと聞いて血が騒いだのかもしれない。

まあ、春菜が持ってきたバトミントンセットだからそんなに本格的な事は出来ないだろうが。

「それじゃ、やりますか？」

「はい」

未来さんのサーブから始まる。

シャトルが綺麗な弧を描きながら対角線上に飛んでくる。

それを打ち返すと鋭いショットが放たれる。

サイドハンドで打ち返す。

ラリーを繰り返しているうちに磯正さんや木梨さんがギャラリーになっ

「うわ、上手い」

「本当だ、入江さんなんか凄い様になってる」

「ノリ、がんばれ！」

「かーちゃん、まけるな」

昴や聖司の声援が耳に入ってくる。

すると未来さんが空いた手でバランスを取りながら大きくラケットを上げて振りぬいた。

バトミントンのスマッシュは初速が400キロを超えるほど早くギネスに認定されている。

「あつ、逆を突かれた」

「うお、凄い」

リーチの長さを利用して逆を突いてきたスマッシュを背中に手を回して打ち返した。

何とか打ち返したものを未来さんは冷静に俺の背後にシャトルを運ぶ。

「くそ！」

全身を伸ばしてハイバックで返す。

フラット上がったものを再びスマッシュされてしまう。

今度は俺の真正面に飛んできた。

何とか返すのが精一杯で次のショットは返す事が出来なかった。

「はあゝ 流石ですね。大会でも良い線いったんじゃないですか？」

「あ、あの。インターハイで地区代表に」

「無理、敵わないすよ」

「でも、典彰さんも凄い上手だと思いますよ。思わず本気になっちゃいました」

「ああ、俺は負けず嫌いで遊びでも負けるのが嫌でバド部に潜り込んで猛特訓しましたから」

「遊びでですか？」

「何にしてもですよ、男なんて基本そんなもんです」

すると木梨さんの声が聞こえる。

見ると子どもたちが駆けっこをしているようだ。

「もう直ぐ運動会ですからね」

「ああ、徒競走かぁ。懐かしいな」

「典彰さんは足が速そうですね」

「まあ、俺の唯一の活躍の場だったからね」

それにしても聖司は何か見れるけど残りの3人は何だかと言う感じだった。

磯正さんと木梨さんがアドバイスをしているが子どもたちは首をかしげていた。

「昂はもつと足を高く上げて、さっちゃんはもつと元氣よく足を蹴りだす。で、サトルは腕をちゃんと振ってバランスを取る」

俺が声を掛けてもやはり判らないのだろう不思議そうに首をかしげながら体を動かしている。

駆けっこ練習をしている所に向かう。

「ノン、わかんない」

「昂は体が大きいほうだからストライドじゃなくて歩幅を大きくした方が速く走れると思うんだ。だから腿を上を引き上げる様にしてごらん」

「うん」

喋りながら昂の足を動かして感じを掴んでもらう。

「さっちゃんはね踏み出した足を強く蹴りだしてごらん」

「こつ?」

「そうそう、そうすると前に足が出やすくなるから早く走れると思うよ」

「やってみる」

さつちゃんには隣に立って俺がお手本を見せながら教える。

「サトルは腕を横に振らないで前後に振ってごらん、腕の角度は90度くらいで」

「こんな感じ?」

「そうそう、リズムに合わせてね」

「最初はゆっくり歩きながら練習して少しずつ早くしていく練習だよ」

「こっちはいい」

子どもは吸収力が強いからポイントを教えるだけで直ぐに体が順応し始める。

それは大人と違って頭で考えすぎないからだろうと思う。

考えすぎればフォームが崩れてバランスが悪くなってしまふ。

1人ずつ横に付いて教えたポイントをきちんと体に教え込ます。

昂は腿が高く上がればそれだけ遠くに足を蹴りだす事が出来る。

さつちゃんは蹴りだすポイントが判ればそれだけ早く前に足が出ていくはずだ。

サトルは腕を横に振っていたから体の芯がぶれてバランスを崩している。

腕がぶれなければ体の芯がぶれる事もなくなる。

「凄いですね。ノリさんは」

「ええ、そうですか?」

磯正さんが感心しきりにそんな事を言っていて木梨さんはその横で大きく頷いている。

「典彰さんつてもしかしてイメージ通りに体が動く人ですか?」

「どうだろう。でもそうかもしれないです。動いている人を見てるだけで何処がいけないのか大体判りますから」

「入江さん、それって」

「うーん、例えば字を書くときに頭の中に字の形を思い浮かべますよね。それを手でペンを持って書くとうまい人と下手くそな人が居るじゃないですか。それと同じ事だと思うんです。頭の中に思い浮かべた字の形は殆どの人が同じ形を思い浮かべると思います」

「あつ、そうですね。絵を描いても自分のイメージ通りに描けないし。絵が上手な人はイメージ通りに描けているって事なんだ」

「たぶん、だから典彰さんは運動が得意なんですよ」

未来さんの言葉に磯正さんと木梨さんが納得顔で俺を見ている。

そして運動会までの週末は公園に集まる事が多くなってきた。

子ども達は目に見えて上達していくのが判る。

周りが上達しだすと聖司が焦り始めていた。

元々走るのが得意で教えてやれることは殆どない。

「なあ、ノリ。おれにもおしえろよ」

「聖司には特に教える事はないよ。お前早いじゃんか」

「でも」

「あんな、負けない勝負なんて無いんだよ誰にでも負ける時があるんだ」

「ノリもまけたことがあるのか？」

「あるさ、負けっぱなしだよ。だから負けない様に得意な事を頑張るんだ。まあ、負けた事も頑張らないといけないけどな」

「それじゃ、しょうぶしようぜ」

「駆けっこでか？」

「やくそくだろ」

「わかったよ」

一度、同じラインからスタートしてどのくらいの差が付くか見当をつける。

次からは差が開いた分だけ聖司にハンデをやればとんになるだろう。

「よい、ドン」

磯正さんの掛け声で駆けっここが始まる。

前を全力で走る聖司の背中がどんどん近づいてくる。

ゴールの手前で聖司を振り切ってゴールした。

「はあ、はあ。もう一回」

聖司の願いで同じようにスタートするけど結果は同じだった。

「はあ、はあ、もう無理。若くないんだから今日はここまでだ」

「かちにげするのか？」

「お互いがこの状態じゃ結果は変わらねえし、負ける気なんてこれっぽちもしねえよ。悔しかったら何度でも挑戦してこい。いくらでも相手にしてやるけど今日はもう無理だ。足があがんねえ」

磯正さんと木梨さんが何やら内緒話をしている。

そして『今年の運動会が楽しみですね』と言い残して子どもと帰って行った。

雨

運動会は雨天で順延になってしまった。

家でのんびりも良いもんだ。

昴のぬいぐるみを枕代わりにして寝転んでいるとお腹に軽い衝撃を受ける。

頭を少し持ち上げると俺の腹を枕代わりに昴が寝転んでいた。

「つまんない」

「しょうがないだろ、雨が降ってるんだから。来週は晴れるよ」

「ほんとうに？」

「まあ、多分ね」

「うそつき」

「嘘じゃねえよ。俺は神様じゃないけど週間天気予報では晴れだった」

「ああ」

軒下には昴が作ったテルテル坊主が申し訳なさそうに俯いてぶら下がっている。

しばらくすると俺の体の上で昴がゴロゴロし始めた。

「なあ、本でも読めば」

「ぜんぶよんだ」

「じゃあ、聖司でも呼ぶか」

「おかーさんとおでかけだって」

「ふうん」

「ねえ、ノン」

「家でのんびりしような」

「ぶう、つまんない！」

このまま昴に纏わりつかれても俺は構わないけど、昴の機嫌は天気と一緒に下り坂になるだけだろう。

少しはご機嫌でもとらないと後々で怖い事、例えばお袋に何処にも

行かなかった事を言われるとか春菜に……

「じゃ、何処に行く？」

「うん、どうぶつえん！」

「ど、動物園なの？ 雨が降ってるのに？」

「ああ、ノンがどこかにいくつていったのにい」

その小さな『い』は何？

その横目は一体、何？

昂に何処かに行くかと聞いたのを後悔した。

外は秋の終わりの冬の入り口の冷たそうな雨が降っている。

「だめなの？」

「駄目じゃないけどさ。行きたいんだ」

「うん、いきたい」

「行きますか」

「うん！」

昂に駄目なのかと言われれば俺にはそれを肯定する選択肢を持ち合わせていない。

昂にはお気に入りのクローバー柄の雨用のポンチョを着せて長靴をはかせて出かける。

まあ、俺はいつも通りのパーカーにジーンズ姿で大きめの傘をさして。

動物園の入り口に来て改めて後悔すると言うより、案の定とも言うべきか閑散としている。

いくら休日とは言え雨降りの日に態々動物園に来る人なんていないのが普通だろう。

それでも昂は広い動物園に目を輝かせていた。

特に大きな動物に興味をひかれて長い時間その場を動こうとしなかった。

ゾウ、キリン、カバ、サイetc

そのくせ自分が好きな猫科の動物にはあまり興味が引かれないよう

だ。

ライオン、トラetc

「ねえ、ノン。パンダってねこなの？」

「熊じゃないかなあ」

「ねこじゃないんだ」

「うん。パンダはパンダなんじゃ」

「へえ」

昴が判らないんだと言う目つきで俺を見上げている。

「そんな目で見るな。俺はあんまり頭がよくないから知らない事の方が多いの」

「なんだ、ノンにもしらないことがあるんだ」

「有ります。有り過ぎるほど」

「ねえ、あれなあに？」

「ええ」

昴が指差す方を見上げるとモノレールが動いている。

懸垂式で日本初のモノレールで世界でも2番目くらいに古い歴史のあるモノレールだと子どもの頃に兄貴に教えらた覚えがある。

「乗るの？」

「うん」

モノレール乗り場に行きモノレールが来るのを待つ。

周りは木々で囲まれ鬱蒼としていて天気が悪い所為で少し怖いくらいの雰囲気醸し出している。

そんな中からカラフルなモノレールが現れた。

モノレールに乗り込むとしばらくしてメロディーが流れそれが出発の合図なのだろう。

ゆつくりとモノレールが木々の中を進んでいく。

昴は嬉しそうに窓の外を見ている。

「そらをとんでるみたいだね」

「そうだな」

殆ど揺れる事もなく周りの景色だけが流れていく。

しばらくして木々が開けると池が見えて来てモノレールが大きくカーブしてながら進んでいくと駅に到着してしまった。

「おわりなの？」

「うん、終わりだよ」

「……」

俺も子どもの時は降りないと駄々をこねてお袋を困らせた事があった。

それでも昴は残念そうにしながらも大人しく降りて歩き出した。

普通の女の子が見れば嫌がる様な爬虫類や両生類が展示してある場所を見ているが昴の興味は他にあるようだ。

「もう一回歸りに、乗ってみようか」

「ほんとうに？」

「まあ、どうせ歸り道だし」

「はやくいこう！」

昴が俺の手を握って引つ張ってモノレール乗り場に歩き出した。

島で育ったからなのか。

まあ、俺ですらモノレールなんて出張で飛行機を使う時に空港までモノレールに乗るだけで普段は乗る事が殆どない。

そう言えば昴は飛行機にも乗った事が無いのかもしれない。

そんな事をモノレールから降りて園内を歩きながら考えていると写真展の案内が目飛び込んできて嫌な汗が流れた。

そしてその案内の中には数名の写真家の名前と共に彼女の名前もあった。

「昴、ソフトクリームでも食べるか？」

「うん」

しばらく休憩してどうすべきか考える。

歩いていてばったりなんて遭遇は出来るだけ回避したい。

寒空の下でソフトクリームはと思っていたが雨は上がり薄日が差し

始めている。

それでも風が冷たい事には変わらないが歩き回って温まった体には心地いい冷たさだった。

昴はチョコとバナラのミックスを美味しそうに舐めている。

俺はカップに入ったホットコーヒーを口に運んで思案する。

「なあ、昴」

「ん？ なあに」

「涼子さんってどんな人だったんだ」

「ん……わかんない」

「それじゃ、船で何処に行ったんだ」

「おぼえてない」

昴が涼子さんと別れたのはそんなに前じゃない筈だ。

それなのに昴から彼女の記憶がすっかり抜け落ちてしまっている。

それはまるで事故後の俺の様に。

「そっか」

そう言つて立ち上がり彼女から受け取った名刺にある電話番号をコールした。

「もしもし、沢渡です」

「えっ、ああ、はい。何か用ですか？」

「実は今、昴を連れて動物園に来ています。それで写真展の案内を見つけました」

「私も参加していますが何か」

「いや、何と言えば良いのか俺は昴をあなたに合わせるつもりはありません」

「そんな事は承知しています」

「それでも、昴の母親はあなたなのです。実は写真展に参加している方の中に昴が好きな猫の写真を撮られている写真家さんが居るみたいなので少しだけ覗いていこうと思います。そんなに時間はかからないと思います。こちらは勝手に見に行きますので」

「それはこちらの判断に任せると言う事ですか？」

「はい、遠くから見るとくらいなら構いませんが」

「判りました」

家に帰る前に写真展に向かう。

昴は自分が好きな猫の写真が展示されているのを教えると嬉しそうにしている。

不安が無い訳じゃない。

彼女の写真も展示してある筈でそれを昴がもし見た時にはと思うが深く考えずに写真展に足を踏み込んだ。

写真展の会場は色々なブースに分れていてこれなら彼女が展示しているブースに近づかなくて済みそうだ。

雨にもかかわらず見に来ている人の数が多く写真展の人気の高さを感じさせる。

昴の手を引きながら猫の写真を見に向かう。

「うわぁ、かわいいね」

「そうだな」

基本、美術館や写真展などは大人の目線で展示してある物が殆どで、子どもには見上げる形になってしまっているので昴を片手で抱っこしながら写真を見ている。

「ノン、あっち」

「はいよ」

昴が指差す方に向かおうとすると視線の先に彼女の姿が飛び込んできた。

何でそんな所に立っているんだ。

彼女の顔にも動揺が伺えるが俺が揺れる訳にはいかない。

ゆっくりと足を踏み出した。

「ノン、どうしたの？」

「えっ、どうもしないよ」

「あそこだよ」

「はいよ」

昴に言われ彼女の横を通り過ぎる。

大好きな猫の写真に夢中なのか、母親の顔すら忘れてしまっているのか。

恐らく後者だろうが昴の姿を間近で見た彼女の心境までは俺には推し量れなかった。

リレー

昴が待ち望んでいた運動会の日がやってきた。
天気は快晴。

風も弱くお日様がポカポカと気持ち良い。

俺は朝早くから弁当を作っていた。

「ノン、かみのけむすんで」

「あいよ」

昴に呼ばれ向かうと昴はテーブルに鏡を置いて座っていた。

「で、どうするんだ？ ポニーテールかツインテールか」

「じゃ、3つ」

「無理！」

「えへへ、2つ」

「了解」

朝パラからお馬鹿な会話が飛び交っている。

口にヘアゴムを咥えて櫛で梳かしながら昴の髪をまとめていく。

幼稚園の頃に何度となく失敗を繰り返し春菜や周りに教えられて何とか形にはなる様になってきたはずだ。

「こんな感じかな」

「うーん、へいき」

昴が鏡でチェックを入れる。

小さくても女の子は女の子なんだと実感する。

それは幼稚園の時から変わらない。

友達に可愛くないと言われ傷付き。

可愛くしてと懇願され頭を抱える事がなんかあった。

「よし、そろそろ来るぞ」

「そうだね」

昴と顔を見合わせると聖司の呼ぶ声がして昴が嬉しそうに飛び出して行った。

女の子は特に好きな男の子には一番初めに可愛らしい格好を見せたいのだろう。

そしていつか俺の手元から離れていく。

心に冷たい風が差し込むけれどそれが俺自身の願いなのだから。

運動会の場所取りなんて知らなかったけれどそれもクリアしている。

魚屋の磯正さんが仕入れの時に場所を確保しておくからと言われ未来さんも木梨さんも便乗させてもらう事にした。

その代わりと言ってはなんだけど交換条件として1種目だけ走って欲しいと言われ走るだけならと快諾した。

弁当とカメラを持って昴達の学校に向かう。

とりあえずスニーカーにジャージ姿で……

校庭はかなり広いほうだと思う、学童に迎えに来た時に見て居るはずなのに少し驚いてしまった。

それにしても保護者席には校庭に描かれたトラックの周りに3脚が乱立していて気合の入りが違うのが伝わってくる。

すると磯正さんが手を振って合図をしてくれた。

「おはようございます」

「まあ、堅苦しい挨拶は抜きで」

「あ、はい」

次々に校門から保護者がやってくる。

その中に未来さんを見つけた。

「入江さん、こっちです」

「あ、おはようございます」

「おはよう」

「典彰さんが入江なんて呼ぶから驚いちゃいました」

「いや、あの一応学校何で」

「あつ、すいません」

未来さんが何度も頭を下げている。

するといつの間にか現れた木梨さんと磯正さんに冷やかな視線を浴びせられてしまう。

「そう言えば、お2人は下の名前で呼び合っていますよね」

「あ、それは名前で呼ぶのが俺の癖で。みんな俺に双子の兄貴がいるのを知っていますよね」

「ああ、昴ちゃんの」

「そうです。それに未来さんの従妹は俺の古い知り合いですから」

「なあんだ、それじゃこれじゃないんだ」

磯正さんが小指を立てて突き出した。

「違います！」

2人同時に全否定してしまった。

そんな事をしている間に放送で運動会が始まる事を案内している。

児童全員で準備運動を兼ねたラジオ体操が始まった。

競技が始まると凄いの一言だった。

それは児童の競技ではなく保護者の殺気立ったような雰囲気と言うか姿勢にだ。

徒競走になるとゴール地点に我が子の勇姿をカメラに収めようと人だかりができていた。

そのの気持ちは判らないでもない。

何故なら俺自身も昴の姿を追いかけているからで。

それでも聖司やさっちゃんにサトルの姿を見つけるとシャッターを切った。

徒競走の結果は上々だったようだ。

昼休みになると子どもたちが走ってきた。

「昴、凄いじゃん」

「うん、いちばんだった」

「聖司もな」

「ええ、おれはいちばんじゃないし」

「でも、全力だったんだろ」

「う、うん」

「まあ、そんな時もあるさ」

聖司はスタートで躓いてそれが後を引き互角の子に負けてしまい悔しいのだろう。

さつちゃんは練習の時はいつもビリだったのが本番でビリじゃなかったのが嬉しいらしい。

サトルも順位が上がっていてご機嫌だった。

「おなかすいた」

「よし、弁当だ」

「いただきまーす」

皆と一緒に食事が始まる。

大所帯だけど磯正さんと木梨さんの所は奥さんが店番しているので来ていない。

サラリーマンの家庭の俺んちと未来さんの所はいつも通り2人ずつ。それが普通なのかもしれない。

それぞれに事情がありそれぞれが子どもの事を1番に思っている。

「うわ、典彰さんのお弁当凄い」

「ええ、そうですか？　って言うか普通の弁当ってどんなんだか判らなくて。昂は魚が好きであんまり肉とか食べないんで」

「うちとは逆ですね。聖司はお肉中心で」

「俺も基本はそうですね」

「それじゃ、お互いのを食べっこしましょう」

「そうですね」

シートの上に大きなお弁当箱を広げる。

未来さんが作ったお弁当は定番と言えば良いのだろうか。

鶏のから揚げや卵焼きにウインナーが彩りよく入っている。

「あら、これハンバーグ」

「ええ、イワシのミンチで作った見た目だけハンバーグです。それにメカジキの竜田揚げに出汁巻き卵にインゲンの胡麻和えと魚肉ソーセージのカレー炒めに俺んちでは運動会定番のイナリ寿司です」

「流石だね。七輪を使いこなす男は違うね」

「そんなんじゃないやなくて大学の頃に居酒屋でバイトしていたので料理はその時に」

「でも、凄いですよ。出汁だってちゃんと鰹節や昆布からだし」

「へえ、今時珍しい。だから色々と知っているんですね」

「ええ、木梨さんそんなじゃないですよ。俺だって昔は女の子と遊んでましたから、その時に色々ね」

皆にからかわれてしまう。

でも、こんな感じも良いかもしれない。

昴と出会わなければ今頃の俺は何をしていたんだろうと思う。

それに俺が女の子と遊び回っていた頃に、皆は子どもが生まれて子育てをしていたに違いない。

「俺なんか全然ですよ。皆の方が凄いと思います。俺が遊びまわっていた時には子育てが始まっていて。自分の時間なんて無かったんだろうし」

「そんな事は、ねえ」

「まあ」

「俺っちも」

「へえ？」

未来さんの言葉に磯正さんも木梨さんも同意と言つか顔を見合わせて笑っている。

この温かい笑顔は何だろう。

午後からの競技が始まり俺が走る競技を教えてもらった。

「PTA対抗のリレーだよ」

「リレーですか？」

「そうそう、PTA対抗って事になっているけれど実際は地区対抗で僕らの地区は連敗中なんだよ」

「で、韋駄天のノリさんに白羽の矢が立ったって訳」

「まさか、アンカーですか？」

「察しが良いね。流石、昴ちゃんのだよ」

「昴は関係ないと思いますけど」

「それじゃ昴ちゃんの期待を裏切ってみる？」

それこそ出来ない相談だった。

運動会に俺が出るのを知っただけで大喜びしていた昴の残念そうな顔なんて想像もつかないし、そんな顔にさせる訳にはいかない。

気合を入れる為にジャージのズボンを脱いでハーフパンツになり軽く体をほぐすために準備運動を始める。

リレーは大人が走る事もあってトラックを1周する。

地区対抗と異名をとるだけあって保護者席の応援もかなり盛り上がっている。

そして見るからに早そうな人が数人いる。

初めて出るリレーなのでアンカーまでどれだけ差がついているものなのかが全く予想がつかない。

俺等のチームのトップは磯正さんだった。

親指を立てて俺達に合図をしている。

スタートの合図とともにお父さん達が一齐にスタートし生徒や保護者から歓声上がる。

中盤の前と言った所を磯正さんがキープしながら走っている。

次々にバトンが渡され何とか中盤をキープして4位くらいだろうか。トップとはそんなに差は開いてないけれど追いつけるかは微妙な距離だった。

リレーゾーンのギリギリまで下がって走者を待つ。

バトンで何とか挽回しないと難しいだろう。

俺にバトンを渡すお父さんが走ってきて俺がスタートする。

スピードが乗った所でバトンの受け渡しができ、集団をすり抜けると順位が一つ上がっている。

前を走るのは2人。

それめかなり走り込んでいるのが判る。

コースを半周したところで2位を何とか抜いたけど1位の走者はまだ先を走っていた。

無理だ、そう思った瞬間に昴の声がした気がした。

こんな大きな声援の中で昴の声が聞こえるはずがない。

「ノン！ がんばれ！」

また、聞こえた。

不思議な感覚だった。

すると昴の笑顔が浮かんでくる。

体が軽くなり更に加速した。

全身で息をしてガクガクになっている膝に手をやり生徒席を見ると昴がさっちゃんと手をつないで大喜びしている。

にしても無理かも、来年は勘弁してほしい。

息も絶え絶えで居ると磯正さんが声を掛けてくれた。

「いや、参った。流石だよ」

「もう、無理すよ」

「来年も頼むよ」

そんな言葉を交わしながらハイタッチしてしまう自分が悲しい。

運動会が終わって家に戻っても昴はご機嫌だった。

「ノンってすごいんだね」

「凄くはないよ。少しだけ走るのが早いだけ」

「はしるのはやいひと、だいすき」

今一、昴の好きの基準がつかめない。

それよりも俺は未来さんや磯正さんと木梨さんに言われた言葉を思い出していた。

「ゆっくりしている時間は無いけれど仕事でも子どもとの時間も私の時間ですよ」

「まあ、楽ではないけど大変だとも思わないし」

「そうそう、周りを見てごらんよ」

顔を上げると周りではみんな楽しそうに家族でお弁当を楽しんでい

る。

「お父さん、お母さんなんて特別じゃなくて何処にでもいるじゃないか。それを普通って言っただろ」

「俺らよりノリさんの方が凄いのと思うけどな」

「そうだね、僕は真似できないや」

「私もそう思います。誰が見たって昴ちゃんは典彰さんの家族です。絆は確かなものだと思いますよ」

「俺も普通の仲間入りですかね。これから宜しく」

「はい」

「おう」

「そうだね」

これから小さなことで悩んでオロオロ狼狽えて生きていくに違いない。

でも、昴のおかげで俺の周りには沢山の仲間が出来た。

それを大事にしていけばきっと何とかなる気がした。

季節は巡る

そして冬が過ぎ、春が再び訪れようとしている。

まだまだ寒い日があるけれど確実に季節は廻っていく。

昴を連れて実家に来ていた。

「ノン、うえのはがグラグラ」

「あんまり触っていると血が出るぞ」

「う、うん」

「ノリ、大丈夫なの？ 見ている方が痛いわよ」

「大丈夫だよ。俺の時はそんなに心配しなかったくせに」

「だって、お前は男の子だから」

「この間、歯の健診にも行っただしその時も虫歯が無いつて褒められたんだから」

「ノンがまいにちみてくれるから」

お袋が心配するのも無理もないか。

可奈はとつくに歯が抜け変わって可愛いケースに綺麗に乳歯が入れられてあった。

昴にもケースを貰おうとお袋が言ってくれたけど昴は『上の歯は縁の下に、下の歯は屋根に投げると丈夫な歯が生えてくる』って教えた俺の言葉を信じて疑わなかった。

古風と言っかなんと言っか兄貴に似た生真面目とでも言えば良いのか。

上の歯が抜けそうなので少しだけ心配していた。

可奈は恥ずかしがって部屋に籠りつきりになったと美紀さんが教えてくれた。

聖司は論外か自慢げに見せて回っていた。

男の子と女の子の違いなのかもしれない。

実家で食事をして今日はお袋が昴を風呂に入れてくれていた。

「ノリ！ 大変よ！」

お袋の声で飲んでいた風呂上がりの缶ビールを噴出しそうになった。
「何が大変なんだよ」

「昴ちゃんの歯が抜けて」

「ああ、血が出てら。昴、大丈夫か？」

昴がタオルで口を押えながら頷いている。

「ほら、体をふくから。お袋は風呂に入っておけ。昴はもう出るんだろ」

「そうだけど、何でそんなに落ち着いてられるの？」

「普通の事だからだよ」

すると下着姿の昴が俺の肩を叩いて口を開き抜けた歯の所から小さなベロを出している。

「ぷっ、なんだその顔は」

「えへへ、ベロがでてる？」

「ああ、なんだかマノン見たいだぞ」

「ノン、かがみ」

「それより服を着ろ。風引くぞ」

「うん」

昴は俺の脚の間に座り手鏡を見ながら百面相をしている。

俺はそんな昴を見ながら昴の髪をドライヤーで乾かしていた。

子どもって不思議な生き物だと思う。

こんなに小さいのにちゃんと女の子で色んな事を考えて少しずつ成長していく。

中学になり高校生になって恋をしていつの日か俺の元を離れていく時が必ず訪れる。

それでも今は昴が高校生になってスイーツなんかを友達と食べている姿なんて想像もつかない。

寝て起きたら昴が高校生になんかになっていたたら。

俺はどんなおっさんになっているんだろう。

それは容易に想像がついて怖い気がした。

意味わかんない

「ノン、起きて。朝だよ」

「ふぁい、って誰？」

「何を寝ぼけてるの、朝ご飯だよ」

「昂？」

「朝から馬鹿な事を言っていないでご飯！」

「すんまそん」

それはいつもの光景だった。

そこは俺の部屋で。食卓には味噌汁が湯気を立てていて。

制服姿の昂が横で漬物を箸でつまんでいる。

「どうしたの？」

「いや、昂が小さい頃の夢を見てた」

「もう、本当に何年も寝てたような酷い顔をしてるよ」

「まるでお袋みたいだな」

「殴って良い？」

「そう意味じゃなくてしつかりすぎなんだよ。お前は。少し高校生らしくしろ」

「意味わかんない」

「まあ、昂は昂だからな。おっ、そろそろ王子様のお迎えか」

「本当に飽きないのかな」

「良いんじゃないねえの。俺としては安心だし」

「意味わかんない」

そこに聖司が遠慮なく顔を出した。

「おはー」

「よう、好青年。お迎えご苦労」

「おはよう、皆の王子様」

昂が営業スマイルで聖司に挨拶をしている。

「うわ、朝から修羅場か」

「そんなんじゃねえよ、ただ」

「ただ、誰かに告られたか」

「言うな」

「なんだビンゴか。俺のあてずっぽも捨てたもんじゃないな」

「あてずっぽかよ、そんなんで当てるなよ」

「早くしないとノンは遅刻するよ」

「走れば間に合うから、俺、足速いから。先に行け、ほれ」

「昴、行こうぜ」

「勝手にいけば」

昴が先に家を出ると聖司が追いかける様に家を出ていく。

本当に仲が良いんだか悪いんだか判らない2人だよ。

お前らだけは。

「何で毎日迎えに来るの？」

「ええ、ノリに頼りにされているから。それにノリの次に足が速いから」

「馬鹿じゃないの」

私を通う高校は数駅先の少し大きな街のはずれにある。はずれと言っても駅から歩いて15分くらいだから歩いても遠くないし丁度いい距離にある。

「おはよー、昴」

「おはよう、可奈」

「ああ、俺は？」

「あ、今日も一緒なんだ。努力の貴公子」

「可奈だって同じだろ。昴と同じ高校に行くために必死に勉強して」

「ええ、聖司程じゃないよ可奈は」

「残念でした。昴、課題合わせしよう」

「うん、じゃ教室で」

「俺は？」

「聖司はクラスが違うからクラスの女子に見せてもらえば。王子様」
「王子様言うな！」

異母姉妹の可奈も私達と同じ高校に通っている。
大きくなつて異母姉妹の意味が判ると戸惑う事もあつたけれど可奈のお母さんとノンのおかげで仲良しでいられる。

周りから見れば凄い事なんだって思う事も多々あるけれどそれこそ私達には関係ない事だと思う。

聖司のお母さんには聖司が私と同じ高校に入学できたことで感謝されるけど、それは聖司の努力があつたからだと思つし私は何もしてないから感謝されてもね。

「本当に昴はクールだね。聖司とはどうなの？」

「どうもないよ、ただの幼馴染だよ。ただ家族ぐるみだから一緒にご飯を食べる事があつたりするだけ」

「本当に付き合つてないの？」

「まあ、子どもの時は好きだったけどね」

「うわあ、聖司。報われない」

「そんな事を言っている可奈はどうなの？」

「ええ、私？ 全然。だけどママには彼氏がいるみたい。なんだか遠慮して隠しているけどバレバレなんだよね」

「うそ、美紀さんに？ ノンは何も言つてなかったよ」

「変だな、ノリは知っているはずだよ。多分ね」

「そうなんだ。でもノンには女の蔭も無いなあ」

「うわあ、可愛そう」

「私が邪魔なのかなあ」

「あのね昴。これだけは言っておく今度そんな事を言つてら絶交だからね。どれだけノリが昴の事を大事に思っているか知らない訳じゃないでしょうに」

「ごめん、中学の頃に色々あつたからね」

「そうなんだ、もしかして」

「うん、色々」

中学生になると色んな事が変わり始めた。

聖司も急に背が伸びて髪の毛もおしゃれになつて。

まあ、私も聖司には負けないくらい背は伸びたけど。

そして私が中学生になつた春に春菜お姉ちゃんが結婚した。

「綺麗だね、春菜お姉ちゃん」

「そうだな」

春菜お姉ちゃんに聞いた話なんだけれど結婚できたのはノンのお蔭だつて。

なんでも春菜お姉ちゃんの両親を説得してくれたんだつて。

それでも結婚式までには転勤やら色々な事が重なつてやつと結婚でるんだつて喜んでいた。

そんな春菜お姉ちゃんが真っ白なドレスを着て胸を張っている姿はとっても光り輝いていた。

旦那さんは海上自衛隊に努めている人で凄く優しい人だと思う。

教会で式を挙げてブーケトスになつた。

「花嫁からの幸せのお裾分けです」

司会者の言葉でお姉ちゃんの友達が待ち遠しそうに待ち構えている。私はまだ中学生だったから参加するつもりはなかったんだけどノンに言われて後ろの方に立っていた。

すると背を向けようとしたお姉ちゃんと目があつた気がしたの。

春菜お姉ちゃんの投げたブーケは大きな放物線を描きながら友達の頭上を越えて更に後ろに。

その瞬間に私の体がフワツと宙に浮いて手の中にブーケが。

気付いた時にはノンにお姫様抱っこをされていた。

「もう、恥ずかしいよ。スカートなのに」

「まあ、取れたんだから良いじゃんか。それに見えなかったよ」

「バカ！」

拍手が起こり皆の方を見ると一番喜んでいたのは春菜お姉ちゃんだつた。

披露宴会場に移動すると春菜お姉ちゃんがノンに抱き着いた。

「やっぱり、典兄は正義のヒーローだよ」

「そんなんじゃないよ。春菜の不安そうな顔を見れば判ったよ」

「ええ、何の話をしているの」

それはブーケトスの話だった。

春菜お姉ちゃんは最初から私にプレゼントするつもりでいたらしい。だけど友達に懇願されて仕方なくトスすることになってわざと誰も取れない様な所に投げたんだって。

青い薔薇と白い薔薇で作られたプリザーブドフラワーのブーケは今、私の手元に確かに届いていた。

「青い薔薇って不思議な色だね」

「元々はこの世に存在しない薔薇だからな。不可能を象徴するものだったんだよ。でも不可能を人間が可能にした今の花言葉は神の祝福や奇跡って言われてるんだ」

「素敵だね。それじゃ白は？」

「尊敬とか純潔かな」

「それと私はあなたにふさわしいって言うのもあるの」
お色直しをした綺麗なピンクのドレスを着た春菜お姉ちゃんが顔を出した。

「昂ちゃんにふさわしい人って誰なんだろうね」

「今から探すんだろ」

「幸せの青い鳥かも知れないよ」

「ばーか、タフガイの所にとっとと行けよ」

「はい」

私には春菜お姉ちゃんの言葉がピンとこなかった。

馬鹿

中学校では沢山友達も増えたけど一番変わったのは聖司かも知れない。

髪の毛を染めて茶髪になって女の子にキヤーキヤー言われて。

何が楽しいんだか判らなかった。

そして聖司と仲が良い私に対して明らかに敵対心を抱く女の子が現れた。

「ねえ、能登島さん。あんた聖司君とどう言う関係なの？」

「ただの幼馴染です」

「本当に？」

「嘘は付きません」

「でも、毎日一緒に登校しているじゃん」

「その理由は聖司に直接聞いてください。私は聖司とは付き合っていないさんから」

「それじゃ、何で呼び捨てなの？」

「幼馴染だつて言ったじゃないですか。そんなに聖司の事が好きなら告白でもすればいいじゃないですか」

何度説明しても同じ事を繰り返して聞かれてうんざりしていた。

すると段々と陰湿になって行き携帯に訳が判らないメールが届き始めた。

でも不思議とそれ以外は虐めに遭うような事はなかった。

それでも日に何十件と来るメールには嫌気がさして何度もアドレスを変えるけどメールは届いた。

友達との連絡にも支障をきたし始めていた。

「昴、またアドレス変えたの？」

「うん、ゴメン。変なメールがいっぱい来るからさ。用があるなら電話して」

「うん、そうだね」

「誰かに相談してみたら？」

「大丈夫、ノンには心配かけたくないし」

「ノンって叔父さんの事？」

「そうだよ」

時々聖司から電話がかかって来るけどギクシャクしてしまい何を話していいのか判らないし、メールの事も話せずにいた。

そうこうしている間に聖司が上級生と付き合い始めたと言う噂が流れて、その上級生のお兄さんが不良グループのヘッドだなんて話が聞こえてきて取り巻きの女の子は直ぐに離れてしまった。

それでも迷惑メールの数は増える一方で減る事はなかった。

聖司との事が決定的になったのは街で聖司と噂の先輩が一緒の所にばったり出くわした時だった。

「聖司、お母さんが心配しているよ」

「あんだ、何言ってるの。心配なのは幼馴染のあんだなんじゃないの？ 馬鹿みたい」

「もう、俺に構うなよ」

「そうだね、聖司の自由にすればいいよ」

「へえ、随分と大人しく引き下がるじゃん。猫でも被ってるんじゃないの」

「本当に馬鹿みたい」

その後は聖司の悪い噂ばかりが耳に入ってきた。

不良グループと遊び回っているとか女の子をナンパしてるとか。

夜に何度か聖司のお母さんから電話があってノンが探しに行くような事も何度かあったし、噂の一部は本当なんだって思う。

そんな聖司の事はどうでも良くなっていた。

でも流石に無言の圧力と言うか携帯に来るメールだけは我慢できなかった。

マナーモードにしても携帯が光るだけで気が滅入って行く。

ノン は 殆ど メール なん て し て こ な い か ら 良 い け れ ど こ れ 以 上 メ ア ド
を 変 え る の は 無 理 が あ る と 思 っ た 。

『 こ ん な 携 帯 い ら な い 』

そ こ ま で 思 い 詰 め て 学 校 の 帰 り 道 で 携 帯 を 捨 て よ う と し た 瞬 間 に 着
信 を 告 げ た 。

慌 て て 携 帯 を 開 く と ノ ン か ら だ っ た 。

「 の 、 ノ ン ？ ど う し た の ？ 」

「 何 だ 慌 て て 、 何 か あ っ た の か ？ 」

「 別 に 何 も な い よ 」

ノ ン の 声 を 聞 い た 途 端 に 心 臓 が す ご く ド キ ド キ し て い る 。

何 だ か 悪 い 事 を し て い る っ て 言 う か ノ ン に 嘘 を 付 く こ と が こ ん な に
苦 し い こ と だ っ て 思 わ な か っ た 。

「 今 、 何 処 に い る ん だ ？ 」

「 ん と 、 学 校 の 帰 り で 駅 の 近 く 。 こ れ か ら 買 い 物 す る と こ ろ だ よ 」

「 丁 度 い い や 、 ち ょ っ と 出 て こ い 」

「 何 処 ま で ？ 」

ノ ン が 来 い っ て 言 っ た 場 所 は お 家 と ノ ン の 会 社 の 間 に あ る 結 構 大 き
な 駅 だ っ た 。

指 定 さ れ た 場 所 で 待 っ て い る と 直 ぐ に ノ ン が い つ も の ス ー ツ 姿 の ま
ま 大 股 で 歩 い て き た 。

「 ゴ メ ン な 、 待 っ た か ？ 」

「 今 来 た と こ ろ だ よ 。 っ て 、 変 な の 」

「 何 が 変 な ん だ ？ 」

「 だ っ て デ ー ト で 待 ち 合 わ せ し て い る カ ッ プ ル の 会 話 み た い 」

「 ま あ 、 良 い ん じ ゃ ね え の 。 こ れ か ら 飯 を 食 い に 行 く ん だ し 」

「 本 当 に ？ 」

「 あ あ 、 そ の 前 に 行 く と こ ろ が あ る か ら 付 い て 来 い 」

「 う ん ! 」

連 れ て 行 か れ た の は 駅 前 の 大 き な 携 帯 シ ョ ッ プ だ っ た 。

少 し だ け 不 安 に な る 。

それはノンにばれているんじゃないかと言う不安だった。

「昂の携帯は俺のお下がりだからな。そろそろ新しい携帯にするか」
私は思い切り首を縦に振っていた。

「どれが良いかは自分で決めろ」

「うん」

どれにしようか、正直なところはどれでも良かった。

迷惑メールから逃げ出す事さえできれば。悩んだ挙句に選んだのは
ノンとお揃いで色違いの携帯だった。

「あんな、意味判らないですけど。新機種が出ているのにどうして
古い型を選ぶわけ？」

「ええ、でも古いつて言ってもひとつ前でしょ。駄目なの？」

「いや、昂に駄目なのって言われて駄目とは言えないけどさ」

「じゃ良いじゃん、ノンとお揃いで」

「まあ、良いけど」

携帯を使うようにして情報を写すのに1時間くらい掛るって言わ
れてノンは新機種を手にとってみていた。

その間に店員さんに頼んで色んな設定をしてもらう。

もちろん迷惑メールもそうだけど私の中で整理する事にした。

必要最小限の人からの電話とメール以外は必要ないと思ったし、こ
れからも教える事をするのを止めた。

もうノンに嘘を付くのも嫌だし心配もかけなくなかったから。

「へえ、新機種も使いやすそうじゃん。俺も変えようかな」

「駄目！ 絶対に駄目。私に駄目って言われた時はどうするの？」

「まあ、良いか。まだ使えるし」

「って答えてよ」

「判っててやっているだろう」

「判んない」

「携帯を取って来い置いていくぞ」

「待ってよ、お腹が空いたんだから」

慌てて笑顔で店員さんが差し出している携帯を持って店を出ていっ

たノンの後を追いかけた。
聖司もこの際だから消去しちゃお。

ノンが飯と言って連れてきたのは高級そうなフレンチのお店だった。
凄く落ち着いた店内でギャルソンがテーブルまで案内してくれる。
テレビ以外でギャルソンなんて初めて見た。

椅子を引いてくれてゆっくりと座らせてくれる。何だか凄く緊張する。

「ノン、どうしたら良いのか判らないよ」

「何事も経験だよ。経験だけは決して裏切らないからなつて言うのが俺の先輩の口癖だ。そろそろこういう場所も知つておいて損はないと思うからね。たまにはデートみたいで良いだろ」

「うわぁ、何だかノンじゃないみたい」

「それじゃ、飲み物だけで店を変えようか？ 確か今日はアカザエ

ビとアマダイのコース料理だけど」

「うっ、食べたいけど高いでしょ」

「あんな、子どもが遠慮なんかするな食いたければ食いたいやりた
い事があればやりたいつて言えばいいんだ」

「うん」

私と一緒に外で食事をするとき殆どノンはお酒を飲まない。

少しなら飲めばいいのにつて言うのに家で飲むからの一点張りだった。

今日なんかは白ワインとか……

でも、ノンには風呂上がり缶ビールが一番似合っているかも。

ノンは聞いたことが無い様な飲み物を頼んだけど出てきたのはミネラルウォーターだった。

ギャルソンがグラスに注いでくれて口をつけると少しだけシュワシ
ュワする炭酸水だった。

するとすぐにオードブルが運ばれてきた。

スモークサーモンと何とかつて説明してくれるけれど意味が良く判

らない。

「ノン、これなあに」

「あん？ スモークサーモンと何とかだろ」

ノンは早々と料理を口に運んでいる。

私も見よう見まねで一番外側に並んでいるフォークとナイフで料理を食べ始めた。

「ん！ おいひい」

「美味しくなければ連れてこないよ。そう言えば最近の聖司はどんななんだ？」

「ん」 授業には一応出ているみたいだけど問題を起こしては聖司のお母さんがしょっちゅう学校に来てる」

「相変わらずだな。痛い目に遭わないと判らないのかもな」

「痛い目って？」

「世の中には上には上が居るって事、そんな奴らに係われれば怪我じや済まないからな」

私は何も言えなくなってしまう。

でも私にはどうする事も出来ないし自分の事で精一杯だった。

「それと学校で何かあったのか？」

「え、別に何も無いよ」

「そうか。なら良いけど可奈が心配していたからな。アドレス変えたメールが何度も来るって」

「大丈夫だよ」

「まあ、良いや。子ども同士の事に親が首を突っ込むとロクなことが無いからな、それでもどうしようもない時はちゃんと言えよ」

「うん」

そっだよな。

私の周りには心配してくれる人がいっぱいいる。

可奈に春菜お姉ちゃんに可奈のお母さんの美紀さん。そしてお婆ちゃんにお爺ちゃんに……

私の事を一番心配してくれるのはノンだって知っている。

何時だつて手を伸ばせば届くところに居てくれる安心感。

逆に言えばそれが不安の元だったりするけど皆同じなんだと思う。

ノンって不思議。

家ではだらしがないのにかなりの心配性でだけどそれを見せようとはしない。

あつ、それって私と一緒になんじゃん。

アカザエビもアマダイも凄く美味しくて大満足だったけど凄くお財布の中が心配なんだけど。

デザートまで出てきてフルコースになっていた。

焼き立てのリングゴのタルトにアイスクリームが添えられていて甘さも控えめで凄く美味しい。

ノンはホットコーヒーを飲んでいる。

するといきなり声を掛けられた。

「あら、やっぱり居たの。何で本人じゃないのかしら」

「これからは若い奴等に頑張ってもいらわないとな」

「良く言うわよ」

背が高くてスタイルは抜群で女優さんみたいな顔をしていてちょっとだけ口調が怖そう。

そんな女の人がノンを見下ろすようにしている。

「で、どうなんだ？」

「とりあえずこれからね。実直な所だけは認めてあげる」

「そうか、ホツとしたよ」

「嘘ばかり。大事が変わったって事かしら」

「まあな」

私を一瞥して『おっさんの皮を被った狼には気を付けなさい』って言い残して出入り口に向かって颯爽と歩いて行った。

綺麗な女の人が言った言葉は良く理解できなかったけどノンにあんな綺麗な知り合いが居た事の方が驚いた。

「ノン、だ、誰なの？」

「取引先の超やり手の平坂 南女史だ」

「で、何の話をしていたの？」

「試験かな」

「ええ、判んない」

ノンが会計をしに行くのと店員さんが深々と頭を下げている。
どうしたのかと覗き込んでしまった。

「平坂様が一緒にと」

「はあ、判りました」

ええ、それってあの女の人に「ご馳走になったって事なの。
店を出てすぐにノンの腕を掴んだ。」

「ノン、どう言う事なの？」

「今晚、彼女は取引先の男と食事をしていたんだ。彼女に認められ
れば大口の契約が取れる」

「それって男の人が接待したって事なの？」

「まあ、形式上は接待だけど男の方が試されたんだ。本当に取引す
べき相手か」

「ええ、でも取引って会社対会社でしょ」

「基本はそうだけど人対人なんだよ、あいつは。本当に信頼できる
相手じゃないと相手と一緒に儲けなんて切り捨ててしまう。本来な
ら俺が出向くはずだけど後輩に託したんだ」

「ああ、それで心配になつて私を食事に連れて来るのを口実にでし
よ」

「まあ、良いじゃないか美味しい物をただで「ご馳走」になれたんだから」

ノンは後輩の人に大きな仕事を譲った。

自分が取れば凄い成績になる筈なのに。

『大事が変わったって事かしら』

私を見て女の人が言った言葉の意味が判った。

何だかこそばゆい。

でも狼って何だろう。

そんな事は気にせずにノンの腕にしがみ付いた。

でも、狼の意味するところが何なのか判る事件が起きてしまう。

昴とレストランで食事した翌日、出勤すると野田が慌てて俺の所に来た。

「野田、昨日はどうだった」

「そんな事より沢渡さんも居ましたよね」

「まあ、ちよつと気になつてな」

「誰ですか？ あのJKは？」

「JK？ ああ、次長課長の事か？」

「ケロロつて違いますよ。むしろそつちを知っている事に驚きです。女子高生ですよ」

「はあ？ 女子高生？ あいつは中学生だぞ」
「ち、中学生？」

野田が？マークを量産していると熊谷さんが首を突っ込んできた。

「野田、お前はアホだな。沢渡をJKやら中学生が相手にするはずがないだろう。一人娘的な昴ちゃんだよ」

「熊谷さん、マジですか？ メチャ可愛い女の子でしたよ」

「沢渡、今度会社に絶対に連れて来い。命令だぞ」

「嫌です。どうせ俺みたいなおっさんは若い子にモテませんから」

「みつともないぞ良い大人が拗ねてるのは」

「ほつといってください」

周りから失笑がもれ堪らず野田の首根っこを掴んで営業に出たのは言うまでもない。

ゴメン

「聖司君って能登島さんと付き合っているんでしょ」

「はあ、そんなんじゃないよ。ただの幼馴染だよ」

聖司が朝のホームルームをエスケープして渡り廊下に居るとクラスメイトが2人現れた。

「ええ、でもあんなに仲が良いのに？」

「でもさ、幼馴染なら2人っきりの時にさ、こう何とか」

「そうだよ、だって東中とんちゅうの暴れん坊將軍の霸王だもん」

「あのさ、それ凄い尾鰭ついてるから。確かにナンパなんかもしていたけど昴だけは無理」

「信じられないよ」

「あのさ、昴は叔父さんつまり父親の弟にあたる人と事情があつて暮らしてるの。そのおっさんが半端無いんだぞ」

「ええ、どんな人なの？」

「ただのリーマンなんだけど」

「ええ、サラリーマンってそこら辺のおっさんじゃん」

「リーマンだけどターミネーターみたいなおっさんなんだよ。背はやつと追いついたけど勝てる気がしねえ。まあ、おっさんに勝負を挑んで勝てたら昴と結婚できる約束をしてるんだけどさ。絶対に無理」

「それって、もしかして俺らにも挑戦権有るの？」

「でも、昴の事になると無鉄砲って言うかあれは鬼神だな。素手で極道が手を拱いている奴らに向かって行って潰しちゃうんだぞ」

「そ、それって北斗神拳？」

「ばーか、違うよ」

中学になると昴との間がギクシャクしてそれを埋める様に遊び始めた。

背が伸びてくると女の子から告られる事が何度かあっていい気になっていた。

夏休みが終わるころには上級生に交じって遊んでいてその中の1人と付き合い始めた。

相手からしたら都合の良い遊び相手だったのかもしれない。

それでも楽しかったし嫌な事も忘れる事が出来た。

何度となく夜遊びしていてノリに見つかって連れ戻されることが何度かあったけれど懲りる事はなかった。

天狗になっていたのかもしれない。

あるいは井の中の蛙だったのか。

外はだいぶ寒くなって日が短くなってきている季節だった。

部活で遅くなつて買い物をしている昴を見つけて声を掛けた。

「昴、こんなに遅い時間に何してるんだよ」

「遊び回っている聖司になんか言われたくない」

「何なんだよ」

「意味わかんない!」

昴が逃げ出すように走りだし人にぶつかって尻餅をついた。

「ごめんなさい」

「何だ、ガキじゃねえか」

「おや、そっちのガキはあいつんとこの」

そいつらは先輩に絶対に手を出さなつて言われていたグループだった。

「昴、帰るぞ」

「聖司」

「おい待てよ。遊ぼうぜ」

昴と2人して拉致られてしまった。

車に乗せられて連れてこられたのは近くの大きな駅から少し離れた所にある不良の溜まり場になっている立体駐車場だった。

下にあるボウリング場が潰れて駐車場として営業していたけれど不良が集まりだして誰も使わなくなり更に不良がたむろする場所になっていた。

ボコボコにされて、昴は後ろ手に掴まれて助けようにも何も出来なかった。

「そう言えばこいつの母親ってすげえ美人だって有名すよ」

「へえ、それじゃ遊んでもらおうか」

携帯を渡されてかーちゃんを呼び出すように言われた。

呼び出せばかーちゃんも昴も酷い目に遭う。

自分の未熟さが悔しくて涙が溢れてくる。

アドレスを開いてコールする。

「ゴメン、助・け・て」

「……何処だ？」

「……駅のボウリング場の駐車場」

「無事なんだな」

「う、うん。昴は何もされてない」

「直ぐ行く」

「ゴメン、俺の所為で」

「泣くな」

今の俺に出来る精一杯の事だった。

「チクショウ！」

そう言っただけで持っていた携帯を床に叩きつけた。

プラスチックの外装が砕け基盤がむき出しになり手から血が流れ出た。

痛みなんて感じなかった。

しばらくするとエレベーターが上がってきた。

ドアが開くとそこには下で見張りをしていた奴らが重なり合う様に倒れていて意識は無いようだった。

「な、何なんだ」

「待たせたな。おっさんに無理させやがって」

非常階段から現れたのはスーツ姿のノリだった。

今まで見た事の無い様な顔をしている。

その眼は獣の様だった。

一瞬だったような気がする。

空手でもどんな武術でもなくそれは喧嘩だった。

圧倒的な喧嘩。

気が付くと厳つい男に車に乗せられていた。それはまるで別の世界の話の様だった。

鬼退治

「ただいま」

「おかえり」「」

「可奈が来てるのか」

「うん。ご飯出来てるよ」

「先に食べばいいのに」

「皆で食べた方が美味しいでしょ」

「まあな」

高校になると可奈も昴と同じ高校に入学して時々こうして遊びに来ていた。

晩飯の時間まで居ると言う事は泊まっていくつもりなのだろう。

異母姉妹と言う事なんて微塵も感じさせず仲良くしている。

何だかホツとする瞬間だった。

「早くご飯にしよう」

「そうだな」

着替えをし始めると可奈が声を上げた。

とりあえずスーツを脱いでジーンズを穿く。

「ノリ、何処で着替えてんの？」

「はあ？ 毎日ここで着替えてるけど」

「信じられない、昴は嫌じゃないの？」

「別に普通でしょ」

「普通じゃないでしょ」

可奈がしょうがないって言う顔をして俺を見ている。

「あのな狭い家なんだから仕方がないの」

「はいはい」

「「返事は一回」」

「そう言う所はまるきり親子だよな」

食事をしていると可奈が俺の匂いを嗅いでいる。

「ん？ やっぱり臭いか？ 加齢臭とか」

「少し違うかもしれない」

「ああ、あれだ。父親の匂いがどうのって」

「ノリ、それなあに？」

可奈が俺の顔を不思議そうにみると昴が答えた。

「この間テレビでやってたよね。女の子が年頃になるとDNAが似ている人の匂いが嫌いになるとか」

「ええ、でもノリは…… あっそっかパパと同じだもんね。それじや昴はノンの匂いは嫌いじゃないの？」

「うん？ 汗臭い時があるけどそれは他の人も同じで気にならないけど」

「まあ、ひとぞれなんだろ」

食事を済ませると昴と可奈は一緒に風呂に入っている。

狭い風呂なのにのんびりできねえだろう。

俺は食器の後片付けをしていた。

昴は後からやると言うけれどこのくらいはなんてない事だった。

2人が風呂から出てきて髪の毛を乾かし合っている。

俺も風呂に入り日課の湯上りにビールを流し込む。

「んまい！」

「本当におっさん見たいだよ」

「あのもう40なんだから十分おっさんなの。それに1日の楽しみなんだ」

「本当におっさん臭い。そう言えばさ。どうして聖司って更生したの？」

「あんな、普通に戻っただけだろ更生って言っな」

「ヒーローがね、助けてくれたんだよね。ノン」

「そうだったな。腰にナイフが突き刺さったな」

「もう、バカ」

「ええ、何それ教えてよ！」

可奈が怖いもの見たさの様な顔をして体を乗り出している。

中学1年の夏休み明けにデビューして夜遊びしている聖司を何度か連れ戻しに行っていた頃の事だ。

秋とも冬とも言えない季節の変わり目だった。

俺は昴に門限を課さなかった。

なるべく早く帰る様には言ってあったけれど、昴も部活がある事だし煩く言えば反発するかもしれないと言う怖さがあったのかもしれない。

そんな心配をよそに昴は暗くなるころには家に居てくれた。

でも、その日は違った。

少し残業で遅くなり家に帰ると電気が点いてなく真っ暗だった。

「何で今日はまだ帰ってないんだ」

兄貴に似て生真面目な昴は遅くなるような事があれば必ず連絡を入れた。

だからこそ心配しても本人に任せていたのに携帯を見ると着信は無い。

溜息をついて床に座ると聖司がよく読んでいた週刊チャンペが目に入った。

聖司の仲間と一緒になんて事は無いよな。

すると手に持っていた携帯が着信を告げ聖司の名前が浮かび上がっている。

「ゴメン、助・け・て」

その声はまるで未来さんに助けを求めている様な声だった。

直ぐに何かに巻き込まれたのだと感じ、周りに声が漏れないように低い声で答えた。

「……何処だ？」

「……駅のボウリング場の駐車場」

「無事なんだな」

「う、うん。昴は何もされてない」

「直ぐ行く」

「ゴメン、俺の所為で」

「泣くな」

場所が場所なだけに相手の数が多いに違いない。

かと言って現状では俺に出来る対策なんてある筈も無く何より一刻を争う。

遅くなれば2人の身が危険なのは容易に想像が付いた。

今できる事をして向かうしかなかった。

家からなら駅に向かわず大通りに出てタクシーでも拾った方が確実に早い。

大通りに向けて走り出していた。

タクシーを探すがこんな時に限って空車のランプが見当たらない。

ジツとしている訳にも行かず大通り沿いを走り出した。

すると脇道から急に車が出てきた。

クラクションを鳴らされ車の前を転びそうになりながら何とか通り

過ぎると運転手が声を上げた。

「危ねえだろ！ あっ、兄貴じゃ」

肩で息をしながら振り返ると尚哉の所の若い奴だった。

「助かった。乗せてくれ」

「うす」

後部座席に乗り込むと助手席の奴が振り返った。

「兄貴、そんなに慌ててどうしたんすか？」

「悪い急ぎ、ボウリング場まで」

「はあ？ ボウリング場って立体駐車場の？」

「そうだ、急いでくれ」

「判りました」

基本、こいつ等は俺や尚哉の言う事に対して決してノーとは言わない。

それでも筋を通さないといけないのが物を頼む者の理だ。

運転している男が前を見ながら事情を聴いてきた。

「何があつたんですか？ あそこは俺等でも手に負えない餓鬼の溜まり場ですよ」

「鬼退治だよ。昴と聖司が持つて行かれた」

「無茶ですよ。兄貴１人じゃ」

「重々承知の上だ。尚哉に言つなと言つても無理だろう。手出し無用と伝えておいてくれ」

「判りました。判断はこちらに任せてもらえますね」

「ああ」

筋を通すと車が急加速した。

ボウリング場の前には車が数台止まっている。

多く見積もっても20人弱と言った所だろう。

俺が車から降りると静かに車が走り去った。

車の中であいつ等が教えてくれた情報を整理する。

上に行くためには今も生きている2階からのエレベーターを使うか非常階段またはスロープを上がっていくかのどれかだ。

エレベーターには恐らく見張りが付いて居るはずだが、とりあえず正面突破しかなさそうだ。

1階のスロープの出入り口に小柄で腰でズボンを穿いている男が立っていた、通り過ぎる振りをして口を押え鳩尾に拳を叩き込む。

気を失った男の襟首を掴んで引き摺ってスロープを上がりエレベーター前に行くと2人の男が向かってきた。

掴んでいた男を1人の男めがけて突き放す。

そして怯んだすきに蹴りを出すともろに入りエレベーターの壁に頭を打ち付けて崩れ落ちた。

もう一人の男が慌てて仲間に連絡しようとして取り出した携帯を持つ手を掴んで引っ張り、鼻っぱしに頭突きを叩きつけると白目をむいて意識が飛んだようだ。

鼻の形は変わり果て血が流れ出ている。

3人をエレベーターに放り込んで各階のボタンを全て押して非常階段に向かう。

非常階段を上がりきるとエレベーターの中を見て男が驚きの声を上げて聞いているのが聞こえ、倒れている仲間を引き摺り出している。

聖司を見ると腕を後ろ手にされて床に押さえつけられていて、遠くから見ても判るくらいに顔は殴られて腫れていた。

「待たせたな。おっさんに無理させやがって」

昴は口を押えられ後ろから拘束されている。

何とか無事のようだ。

数人の男が殴りかかってくる。

流石に複数を相手では無傷ではられない。

何発かは喰らってしまう。

体が条件反射の様に反応して何かに憑りつかれた様に動いている。

気が付くと男達は床に倒れて動かなくなっていた。

静かに歩きだし聖司の元に向かう。

恐らく聖司を抑え込んでいる男の横に立ってにやけている男がリーダーなのだろう。

柱の陰から次々と不意打ちを狙って出てくる男を潰していく。

それでも数が多く梃子摺ってしまう。

だが、尚哉の所で受けたガチ稽古より生易しく感じる。

そして昴の方に目をやった瞬間にコンクリートの床を金属か何かが擦る音がした。

「ノリ！ 後ろ！」

聖司の必死な声で振り返ると細身の鉄パイプか何かが振り下ろされる。

足をパイプ目掛け蹴り上げてパイプの軌道を逸らすが頭を掠め血が流れ出た。

パイプがコンクリートの床に振り下ろされ金属音を上げた瞬間に男の顔が歪み吹き飛んだ。

額から流れ出た血が床に点々と落ちる。

アドレナリンが放出している所為か痛みを全く感じない。

次に向かつてきたのはリーダーらしきにやけている男だった。

「凄いじゃん、おっさん。でもこれで終いだ」

男が振り上げた拳に光るものが見える。

恐らくナックルダスターを拳に付けているのだろう。

これは武道や格闘技ではなく喧嘩なのだから何でもありなのだろう。そんな事は鼻から分かってここに来ている。

咄嗟にしゃがみ込んで床に転がっているパイプを拾い上げてから空きの男の横腹を薙ぎ払う。

鈍い音がして男が歯を食いしばって片膝をついた。

丁度いい高さになった男の頭めがけて蹴りを繰り出すと腕でガードしたが堪らず吹き飛んだ。

後は聖司と昴を助け出ただけだが抑え込んでいる男の顔に余裕があるのが気に食わなかった。

持っていたパイプを聖司の事を押さえている男めがけて投げ飛ばし聖司に向かって叫んだ。

「聖司！ 走れ！」

男が怯んだすきに聖司が足を引き摺る様にして駆け出して昴の手を掴んで逃げ出そうとした。

次の瞬間、聖司の体が床に転がって呻き声を上げている。

そして柱の陰にずっと潜んでいた男が逃げようとする昴の首に腕を回していた。

「マジで使えない奴らだ。こんなおっさん相手に俺の手を汚れさすってあり得くない」

熱くなるのではなく温度は急降下していく。

見るからに女好きそうな優男で自分の手は汚さずに高みの見物とし

やれ込んだ居たのだろう。

格好がいけ好かない。

ブランド物で身を固めているのが遠目でもハッキリと判る。

最悪の場合は自分一人で逃げ出すつもりで居たのだろう。

奴から見れば多勢に無勢の俺は満身創痍に見えるのだろう。

そして昴を人質にして優位に立っていると思っている。

尚哉に言わせれば人間の屑で。

俺に言わせれば腐れ外道だ。

「おっと動くなよ。可愛い顔に傷が付いちゃうよ」

男が昴の顔にナイフを当てている。

そしてブレザーの下に着ているブラウスにナイフを引っ掻けブラウスを切り裂いた。

昴の顔が恐怖に歪み目を瞑り耐えている。

「ガキは俺の趣味じゃねえけどこの際だ。楽しんじゃおうかな」

温度が一気に絶対零度まで達した瞬間だった。

男を凝視し腕をだらりと落とすと男が口を開いた。

「素直じゃねえか。バカは死ね！」

その瞬間に左わき腹に衝撃を感じる。

見下ろすとリーダーだと思っていたにやけた男が低い姿勢で俺のわき腹にナイフを突き立てていた。

その顔からは笑みがこぼれている。

取ったと思った瞬間なのだろう。

「それがどうした」

「へえ？」

男の顔から笑みが消え恐怖に歪み始める。

そんな男の顔を驚掴みにして柱に設置されていた火災報知機に後頭部を今度は情け容赦なく叩きつけた。

男の体がビクビクと痙攣して壊れ掛けの火災報知機が鈍い警報音を立てている。

振り向くと昴にナイフを突きつけている男から余裕がなくなってい

く。

「どうしてくれるんだ？ 大事なスーツに穴が開いただろうが」

男に向かって踏み出すと男が明らかに怯えている。

それは当然と言えば当然かもしれない。

腰にナイフが突き刺さった傷だらけの男が平然として歩いてくるのだ。

過呼吸気味に息をし始めた男が叫んだ。

「く、来るな！」

「そこまでだ。動くな」

低い男の声がして昂を盾にしようとした男の体が硬直している。

そして後頭部に何かを押し当てられているのが見える。

男の背後のエレベーターから現れたのは尚哉だった。

グレーの三つボタンのスーツを着こなして手には拳銃の様な物が握られている。

火災報知機の音でエレベーターが動き出したのに男は気付かなかったようだ。

男が昂から手を放すと気を失っているのか昂の体が崩れ落ちそうになった。

それを横から走ってきて抱きかかえる様にして離れたのは聖司だった。

「典彰さんよ。あんたは無茶すぎだ。相変わらず無鉄砲で馬鹿だな」

「尚哉こそそんなもんを持ち出しているのか？」

「構うもんか、どうせこいつらがケツを拭くんだからな」

硬直したままの男の額から汗が流れだした。

「な、尚哉って。まさか。た、瀧川の？」

「だとしたら何だ。女たらしの兄ちゃんよ。で、どうすんだこいつ？」

「外道は外道らしくしてもらうさ」

そう言つて男の足の間に蹴りを叩き込むと何かが潰れたような音がして、白目をむいて股間を押さえる間もなく崩れ落ちた。

それを尚哉の後ろで見ていた舎弟達が顔を顰めて自分の股間を押さえている。

男にしか判らない痛みと言う奴で白目をむいている男には2度と味わえない痛みかも知れない。

「本当に典彰さんは鬼だな。その靴つてだろ」

「当然だろ、丸腰で敵う相手じゃないだろうが」

転がっているパイプを靴先で蹴り飛ばすと甲高い音がしてパイプが転がっていく。

最近の安全靴は昔のに比べてはるかに軽く履き心地も悪くない。それに雨の日などは革靴に比べて段違いに滑らないので重宝していた。

「安全靴で普通は蹴っちゃいけない場所だよな」

「これで女を泣かせることも2度とねえよ」

「それとナイフを何とかしてくれ。見てる方が痛い」

「ああ、これか。最近の週刊チャンペは最強だな」

ナイフを抜き捨てワイシャツを捲り上げると尚哉が呆れた顔をした。「アホだなまるで。漫画の世界じゃあるまいしそんな物をガムテープで体に巻きつけておくなんて信じられねえよ」

「命あつての物だねだからな。悪いけど送ってくれ」

「何かあつたら直ぐに呼べよ。義兄弟なんだから。まあ俺なんかに係わらないに越したことはねえけどさ」

「春菜でも連れて親父さんに会いにでも行くよ。春菜も結婚した事だしな」

「そっか、あいつ結婚したんだな」

「お前も早く身を固めろよ」

「あんただけには言われたくねえセリフだ」

そして昴と聖司の所に向かう。

本来なら最優先だろうがあれだけ動ければ聖司の怪我も大した怪我じゃないだろう。

そんな聖司は満身創痍で昴を守ってくれた。

「大丈夫か？」

「ノリ、ごめん。俺、俺」

「泣くな男だろ。歩けるな」

「う、うん。でも昴が」

「俺が抱いて連れて帰るよ」

上着を脱いで昴の体に掛けて気を失っている昴を抱き上げた。
後始末は尚哉の舎弟がしてくれるだろう。

「尚哉、あれ本物なのか？」

「あん。そんな訳あるか。今時そんな物を持ってたら親父に殺されるわ」

「まあ、そうだな」

尚哉が引金を引くと銃口に火が着いた。

それは良く出来た。ベレッタP×4のライターだった。

尚哉が直々に運転する車でとりあえず聖司の家に向かう。

タバスコ

尚哉達が聖司の住んでいる団地の下に車を付けてくれた。

車が止まった音で気が付いたのか未来さんが階段を駆け下りてきた。

「の、典彰さん……」

「ほれ、聖司」

未来さんが頭から血を流してボロボロの俺の姿を見て言葉を失っている。

俺の後ろに隠れていた聖司を引っ張り出した。

「かーちゃん、ゴメン」

「本当にあなたって子は！」

聖司が歯を食いしばり腫れた顔を硬直させて体を小さくした。

殴られると思ったのだろう。

だけど未来さんは優しく聖司を包み込んでいた。

聖司の泣き声が団地の間に響いた。

まるで小さな子どもの様に未来さんの懷で泣きじゃくっている。

「ほら、男の子なんだから。それより昴ちゃんは無事なの？」

「無事ですよ。気を失っているだけです」

「何を突っ立っているんですか？ 典彰さんも傷の手当てが先です」

「いや、掠り傷ですから」

「いけません！ ほら、聖司も立って傷の手当てをするから顔を洗いにいきなさい」

「う、うん」

聖司が階段に向かって足を引き摺りながら歩いていく。

母は強しと言う事をまざまざと見せつけられた気がした。

「典彰さん、こちらは？」

「ああ、尚哉ですよ。瀧川尚哉」

「えっ、この人が尚哉さんなんですか？ その節はありがとう御座

いました」

「いえ、僕は何も。ただ典彰に恩を返しただけですから」

「尚哉さんも優しい方なんですネ」

未来さんにそんな事を言われて尚哉の顔が赤くなっていた。

とりあえずスルーしておこう。

しばらくここに居るからと尚哉に言われとりあえず傷の手当てをしてもらいに行く。

成長期真っ只中の昴を抱いたままも結構辛いものがある。

キッチンのテーブルには救急箱が置かれ椅子に座らされ濡れたタオルで傷口に付いた血をふき取ってもらっていた。

聖司は殴られた顔を中にジェルが入っているアイス枕で冷やしている。

三日もすれば腫れも引くだろう。

「痛いですか？」

「いえ、痛みは殆どないですよ」

「そんな筈ないですよネ」

「俺が荒れていた頃はもつとひどい怪我をしていましたから」

「本当に無茶ばかりするんですね」

「俺の一番大事ですからネ」

「典彰さんに何かあった時はどうするんですか」

未来さんがいつになく真剣な顔をして真っ直ぐに俺を見ている。

瞬きを一回だけして微笑んで答えた。

「俺は死んだりしませんよ。昴との約束なんです。絶対に昴を置いていなくならないってね。昴と出会った頃の約束ですから昴が憶えているか判りませんが。それでも俺にとっては凄く大事な事なんです。保険みたいなもんです、だから限界を超える事はしません」

「飽きた人ですね。私から見ればとくに限界を超えています」

「少し尚哉と話をしてきます。後始末の事が気になります」

居た堪れずにそう言って立ち上がると未来さんが瞳を揺らしながら

俺を見上げた。

気丈な振りをしているが不安で押しつぶされそうなのだろう。

「心配しなくても平気ですよ。これ以上は何も起きません。尚哉は俺のダチですから。昴の事を頼みます」

ドアを出て階段をゆっくりと降りる。

尚哉を見ると車に凭れて携帯で何かをやり取りしていた。

「判った。完全に潰せ」

「どうなっただ？」

「あいつ等は俺達も手を焼いていたんだ。だからこの際に綺麗さっぱり消えてもらう。典彰が潰した男からバツクの奴等の情報を聞き出せたしな。後は俺らの仕事だ」

「悪いな」

「今度その言葉を言ったら殴り飛ばすからな。俺はあんたに命を救われたんだ。あの時にあんたが飛び込んでこなかったら俺は大事な友達も一緒に失っていたかもしれないんだぞ。だから俺は」

「判ったよ、ありがとう。感謝してるよ」

俺がそう言つと照れ隠しなのだろう尚哉が煙草を取り出した。

いつまで経つても変わらない奴だ。

何度も春菜を助ける為にと言つても頑として聞き入れてくれなかった。

そしていつまでも変わらない仲で居てくれるのだろう。

「俺にも1本くれ」

「止めたつて聞いたぞ」

「ケチケチすんな」

俺が差し出した手を見て煙草を俺の口に突っ込んでライターで火をつけてくれた。

一息つくと紫色の煙が闇に吸い込まれていく。

「どうすんだ、そんな手で。仕事にならねえだろう」

「字くらい書けるよ」

「はん、煙草もつかめねえくせに」

「お見通しか。何とかなるよ、今は後輩が付いてる」

「お、俺。そろそろ行くわ。後片付けが残っているからな」

「またな。何なんだあいつ。相変わらず……」

逃げる様に尚哉が車に乗り込み走り去って行くのを見送り、振り返ると尚哉が逃げ出した理由を理解した。

そこには俺が全力を出しても敵わない様な相手が両の手の拳を握りしめて立っていた。

「未来さん？」

「手を見せなさい」

有無を言わず未来さんが俺の傷だらけの右手を掴んだ。

「こんなになつてまで」

「腫れは直ぐに引きますよ」

「本当に！ バカ！」

未来さんが声を荒げると俺の胸に何かがコツンと当たった。

それは未来さんの頭だった。

俺の手を握りしめながら俺の胸に頭を当てている。

「不安で、怖くて、どうしたら良いのか判らなくて」

小さな肩が震えだし彼女が握りしめている俺の手に温かい物が落ちている。

こんな時は抱きしめてやるのが良いのだろう。

でも、どうして良いのか判らず天を仰ぎ煙草の煙を吐き出す。

啞えた煙草の先が仄かに赤くなり左手の指で辛うじて挟んで腕を下ろした。

「大丈夫ですよ心配はいりません。今日だって聖司が機転を利かせたお蔭で助け出す事が出来たんです」

「でも」

「大丈夫です。あいつはそんなに馬鹿じゃありません。これに懲りて元通りになりますよ」

「そんな事」

「未来さんを見ていれば判ります。親は子どもの鏡なんですよね」
『ばか』

何か聞こえた気がした。

「意地悪ですね。どうして抱きしめてくれないんですか？　こんな時だからですか？　私が」

「それは違います。未来さんは未来さんであって早苗ではない」

「嫌いですか」

「……………」

俺が答えないでいると未来さんが顔を上げてゆつくりと目を閉じた。星空から未来さんに顔を向ける。

時間が止まってしまった様な錯覚に陥り。

ゆつくりと頭を下ろす。

あと数センチで……

「かーちゃん！　昴が！」

聖司の叫び声で未来さんが慌てて離れた。

目が合い気まずいと言うより小っ恥ずかしい。

思わず笑いそうになってしまう。

「未来さんの大事が呼んでます。行きましょう」

「それってお互い様です」

それぞれの気持ちに蓋を閉めて今はそれぞれの大事に向かう。

未来さんと一緒に昴が横になつていた部屋に行くと顔を腫らした聖司が必死になつて昴を押さえていた。

「ノン！　ノンは？　ナイフで刺されて。ノンが……………」

「俺ならここに居る」

「ノン……………」

俺の顔を見た昴は力が抜けた様に女の子座りをした。

昴の前まで行きしゃがむと昴が凭れかかってきた。

「あっ！」

「へえ？」

「バカ！　こんな物で」

いきなり俺のシャツをたくし上げた昴が俺を睨みつけている。

「典彰さん、ナイフってなんですか？　刺されたってどういう事ですか？」

「あはは……」

背後から聞こえてくる怒気を含んだ未来さんの声に笑って誤魔化そうとすると聖司が未来さんに耳打ちした。

「ほとほと呆れちゃいました」

「本当に怖かったの。でも、ノンがナイフで刺されたのがもつと怖かったんだから」

「あのな、昴。そんなに暴れると見えちゃうぞ」

そう言った瞬間に俺のシャツを掴んで必死に俺に訴えかけていた昴は胸元を隠して真っ赤になった。

現に切り裂かれたシャツの間からは見えちゃいけない物が見えそうだった。

「み、見た？」

「見てない。白いレースなんて」

「ノンのバカ！」

実際としてそんな物は家に帰れば俺のシャツと一緒に干されているのだから見る見ないは関係ないと思う。

「それだけ元気なら大丈夫だな」

「う、うん。助けてくれてありがとう」

「たり前の事をしただけだよ」

昴の頭に手を置くと昴がいつも通りの素直な昴に戻った。

すると何処からか可愛らしい腹の虫の泣き声が聞こえてきた。思わず振り返ると聖司が首を振っている。

聖司の横にいる未来さんと目が合った。

「違います。私じゃありません」

昴に目をやると頬を赤くして俯いている。

「ノン、お腹が空いた」

「飯でも食いに行くか」

「うん！」

4人で大通り沿いにあるファミレスに行った。

聖司の顔を見たウェイトレスが顔を引き攣らせていたけど聖司はそんな事にお構いなく楽しそうにしている。

昴は未来さんにブラウスを借りて着ていた。

「本当に何処で漫画本を腰に巻きつけるなんて思いついたんですか？」

「えつと言わないって言うのは無しですか？」

「無しです」

「チャンペだよなノリ」

未来さんの問いに聖司が答えると未来さんが首を傾げ困った子を見る様な目で俺を見ている。

「あの、そんなダメダメな子どもを見る様な目で見なくても」

「本当に典彰さんは何歳なんですか？」

「すんません」

「凄く大人な人だなと思えば子どもみたいだし掴み所が無くて困ります」

「なあ、かーちゃん。何が困るんだ？」

聖司が無邪気そうに未来さんに突っ込みを入れた。

「聖司には関係ありません」

「未だ怒ってるのか？」

「少しは反省したのかしら」

「したよ。明日からは普通に戻るから。しつけないとノリに嫌われるぞ」

そう言いながら聖司が体をテーブルに乗り出して唇を突き出している。

それを見た未来さんの顔が赤くなっていく。

「お口にチャックだ」

そう言ってテーブルにあったタバスコを指で聖司の唇に塗った。
見る見る聖司の顔が真っ赤になって慌ててグラスの水を口に入れて
手で口を押えた。

顔が腫れるほど殴られて口の中や唇が傷ついている所にタバスコを
塗られ水で流し込めば痛いのが当たり前だ。

「で、聖司はあの派手なお女の子とはどうするんだ？」

涙目になり口を半開きにして聖司が何かを言おうとするけど言葉に
なってなかった。

少し顔を近づけると聖司がゆっくり音を発した。

「別れる」

「あん、あん」

聖司が首を縦に振った

「で、昴一筋で良く」

「ああん、ああん」

今度は必死に首を横に振っている。

「へえ、昴の事が嫌いなんだ」

「あう……」

意気消沈の聖司の前で昴がシーフードドリアを面白くなさそうな顔
で突っついている。

少し弄り過ぎたようだ。

拳が腫れて覚束ない手にスプーンを持ちピラフを口に運ぼうとする
と横に座っている昴の肘が当たりスプーンを落としてしまった。

すると昴がフォークにサラダに入っているトマトを突き刺して俺の
顔の前に突き出した。

「ノン、ああん。手が痛いんですよ」

「いや、自分で」

「ああん」

未来さんがテーブルに両肘をついて手の上に顔をのせて成り行きを
見つめている。

弄り過ぎた仕返しなのだろう。

仕方なく渋々口を開くと昴が頬の擦り傷にトマトを押し付けた。

「あ、ゴメン。間違えた」

「セリフが棒読みですけどって、痛い！」

トマトに付いているノンオイルの酸味が利いたドレッシングが傷口に沁みる。

思わず頬を押さえてしまった。

すると昴と未来さんが笑い出した。

遠くもなくかと言って近すぎない。

そんな距離が良いのかもしれない。

お互いに大事がある今。

今を大事にしたいと思った。

「昴、本当にチャンペでナイフが止まるの？」

「そんな訳ないじゃん。聖司が読んでるチャンペだよ」

「ああ、ノリと昴が担いだ。酷いよ」

可奈に本当の事なんて話せるはずもなく。

本当が半分、嘘が半分でこの話を終わらせた。

勝負

昴達の夏休みも残すところ僅かになっている。

流石に昴も高校生にもなると俺と泊りがけで出かける事は無くなった。

友達とプールに行ったり花火大会に行ったりしてそれなりに楽しんでいるようだ。

で、今日は恒例の夏休みの宿題を可奈も合流して片づけている。

「しかし、聖司は変わらないな。ガキの頃から」

「ノリだって似たようなもんだったんだろ」

「あはは、残念でした。俺には出来た兄貴がいたからな夏休みは遊び放題だったぞ」

「それって、パパのを丸写ししていたんでしょ。ノンが自慢する話なの？」

「でも、その気持ち私は判るな。だって昴が居てくれるもん」

「そっか昴と可奈は同じ年の姉妹だもんな。俺なんか一人っ子だしそんな話をしていると携帯が鳴って可奈が慌てて廊下の方に行ってしまう。」

すると直ぐに可奈が顔を出した。

「あのさノリ、島中君達が来たいって言ってるけど良い？」

「あん、良いんじゃないか。大勢の方が捗るんなら。狭いんだから3人くらいだぞ」

「うん。あ、もしもしノリが良いって。うん、待ってるね」

「可奈、誰が来るの？」

「えっと、島中君と宮里君だよ」

「あいつ等も俺と似たようなもんだからな」

「へえ、聖司が偉そうに。誰だっけ泣きながらーちゃんに連れられて『しゅくだいをおしえてください』って言ったの」

「の、ノリは何を言っちゃってるの？ あれは……もう良いよ」

聖司が頂垂れて宿題に手を付け始めた。

「そうだったね。絵日記しか描けてなくて私の丸写したもんね」

「でも、昴のだって間違ってたじゃん」

「とりあえず始めようよ」

「うん」

3人がやっている宿題を眺めても何をしているのかさっぱり判らなかった。

流石に高校生の宿題なんかはお手上げ状態だった。

俺の高校時代って……聖司以上に荒れていたもんな。

そんな昔の事を思い出していると玄関から声がした。

「こんちわ」

「あつ、来た」

可奈がいそいそと玄関に出迎えに行った。

「お邪魔します」

2人の男の子が立っている。

相変わらず余所んちの子は皆同じに見えてしまう。

「始めまして島中です」

「宜しくな」

「俺は宮里です」

「おう、宿題頑張れよ」

少し背が低い茶髪で大人し目の子が島中君で。

チョット背が高い髪の毛がツンツンのやんちゃそうな男の子が宮里君だった。

「島中、髪の色変えたんだ。デビューしちゃう?」

「そんなじゃないよ」

「夏休み明けデビューして冬前には不良グループにボコボコにされて泣きながら電話してきた聖司がそう言う事を言っな」

「もう今日は墓穴彫りまくりじゃんか、俺」

「「いつもじゃん」」

笑いが起こり聖司はシュンとしている。

あまり虐めると後が怖いので退散する。

「食い物と冷たい物でも買って来るわ」

「ノン、アイス！」

「まあ、この暑さでとけない様に対処します」

俺が部屋を後にすると後ろから声が聞こえてくる。

「聖司、あれがターミネーターなのか？」

「ただのリーマンだよ」

「ノリは怒らせるとメチャ怖いぞ」

「想像できないな」

「本当なの？」

今なら脅かすのは簡単だけど昴が怖いから突き刺すような太陽の下に出て買い物に向かった。

「しかし、暑いな……」

太陽に目を細めて昴と初めて出会った時の事を思いだしていた。

あの頃の昴は小さくてそれでもシッカリしている方で手が掛らなかつた。

今も手が掛らないどころか家事はしてくれるし俺よりはるかにシッカリしている所が多い。

でも、背も伸びて165センチは越している筈だ。

一緒に暮らせるのも後数年だろう。

大学に行けば独り暮らししてみたいだろうし。

もう結婚も出来る歳になっている。

まあ、保護者の同意が必要な歳だけど。

何時また独りになっても良い様にしておかないと。

そんな事を考える歳に俺もなつたんだと実感してしまう。

駅前でドーナツを大量に買い込んで近くのコンビニで飲み物と昴のリクエストのアイスを買って帰る。

「食い物買って来たぞ。休憩にしろや」

「うん、ありがとう」

「うわあ、すげえ。ドーナツだ」

「いただきます」

思い思いに飲み食いを始めている。

冷たいビールと行きたいけどこいつ等の手前コーラで我慢する。

「でも、本当に聖司君ってアウトローだったんだね」

「やっぱり東中とんちゅうの暴れん坊は本当なんだ。額に目印の傷跡もあるし」

「ええ、島中君。それってなあに」

「結構有名な話だね。僕らの隣の東中に茶髪で額に傷跡がある凄く怖い奴がいるって噂だったんだ」

「そうそう、その傷跡も乱闘で付いた傷だった」

可奈が瞳をキラキラさせて島中君の言葉を聞いている。

昂は呆れ顔で相変わらずのクールだった。

「違うよ、その傷はね」

「昂、喋るなよ。恥ずいだよ」

「もう、時効だし友達なんだから良くない？」

「う、うん。昂がそう言うなら」

「うわ。聖司君が尻にひかれてる」

「そんなんじゃないよ」

「ノン、こち」

「あん」

昂に近寄ると手で俺の前髪を上にあげて左の眉にある傷跡を指さした。

「このノンの傷跡はね私が小さい頃にノンが私を守ってくれた時の傷なの。でね、聖司がその話を聞いて俺だっって走り出した時に躓いてね」

「転んだ時の傷なの？」

「うん、当たり前」

「今日の聖司は形無しだな」

「もう宿題をするから放っておいて」

拗ねている聖司を見るとまだまだ子どもなんだなっと思う。

昴は小さい頃の事をどれくらい覚えていたのだろう。

俺の額の傷は昴と出会った時に付いた傷だ。

今日はそんな事ばかりが思い出された。

するとやんちゃそうな宮里君が声を掛けてきた。

「ノリさん。聖司に聞いたんですけど勝負に勝ったら昴ちゃんと結婚できるって本当ですか？」

「ええ、ノリって聖司とそんな約束したの？」

「したぞ。聖司がチビの頃に」

「マジなんだ。俺等にも挑戦権ってあるんですか？」

「まあ、勝負によるな」

「じゃ、アームレスリングで」

「腕相撲か、良いぞ」

「ノンの馬鹿！」

昴が真顔で怒っている。

俺が安易に了承したと思っているのだろう。

可奈が楽しそうにテーブルの上を片付けている。

急ごしらえで少し低いけれどテーブルで勝負する事になった。

「右でも左でも良いぞ」

「島中行け！」

「ええ、僕なの？」

宮里君に後押しされ先鋒は島中君らしい。

可奈がジャッジしてくれるようだ。

テーブルに肘をつき島中君と手を握り合い可奈の小さな手が2人の手の上に乘せられている。

「レディー、ゴー！」

島中君の腕に血管が浮かび上がり額からは汗が吹き出し始めている。

「島中君、ガンバ！」

可奈が声援を送るけど負ける気がなかった。
一気に腕を倒した。

「びくともしないよ」

「じゃ、俺が」

中堅の宮里君が立て続けに勝負を挑んできた。
手首を数回回して同じ様に手を合わせる。

可奈の掛け声と共に少し押される。

手首を返し始めると宮里君の腕に力が籠り震え始めている。
ゆっくりと宮里君の手の甲がテーブルに向かって行く。

「駄目だ。勝てる気がしない」

彼の腕から力が抜けて勝負がついた。

「その大將はどうするんだ？」

「2人立て続けに勝負したノリに勝っても意味ねえだろ」

「逃げんな」

「マジ、ムカついた。勝負だ！」

聖司の目が本気になって闘争本能をむき出しにしている。

先にテーブルに肘をついて聖司が俺を見ている。

指を組んで腕を伸ばして全身で伸びをして肩を回す。

そしてテーブルに肘をついた。

手を握り合うと聖司の手に力が籠る。

可奈が真剣な表情で俺と聖司の手の上に手を置いた。

昂は複雑そうな顔をしている。

「レディー、ゴー！」

聖司が一気に倒しに来たのを受けて立つ。

勝負は一進一退している。

テーブルの端を掴む聖司の腕に力が入り震え始めている。

流石にガチ勝負だけあって気合が入るし、まだ負ける訳にはいかな
い。

静かに息を吐き体の隅々まで酸素が行き届くように深く息を吸い込

む。

息を止めた瞬間に腕にありったけの力を込める。

筋肉が隆起して血管が浮かび上がり徐々に聖司を押し始める。すると聖司が歯を食いしばって持ちこたえようとしている。

腕の内側に痛みを感じ一気に捻じ伏せた。

「クソ！」

聖司が小さく声を上げると周りで見た居た奴等の体から力が抜けた。

「すごい！ 超かっこいい。俺、こんな親父なら良いかも」

「そうだね。自慢できるもんね」

「ノリって凄いんだね」

「ええ、でも家じゃだらしないよ」

「40代をなめんな」

立ち上がってトイレに向かった。

流石に3連発は危なかったかも……

晩飯を食って風呂に入り風呂上がりビールのビールを飲んでいると昴が風呂から出てきた。

昴は手に何かを持っていた。

「手」

「ふえ？」

「手を出して」

左手を上げると手を叩かれてしまった。

「そっちじゃない方」

「ハイハイ」

右腕を出すと昴がいきなり腕の内側に親指を押し当てた。

「痛いよ」

「何であんな無茶をするの？」

「成り行きかな。負ける気なんてしないし」

「で、腕を痛めてなんだ」

「痛めた訳じゃないよ。一歩手前」

「ああ言えばこう言うんだから」

昂が怒りながらも腕に湿布を張ってくれた。

「ありがとう」

「本当に負けたらどうするの？」

「負けないよ、まだな」

「未だなんだ」

「そう言えば可奈のお気に入りは島中君か。判りやすい奴だな」

「だけど、なかなか進展しないんだよね」

俺が話を挿げ替えると食いついてきた。

「まあ、可奈は可愛いから他の男から言い寄られたら島中君も焦るだろう。その時に可奈がどうするかだよ」

「ああ、話をすり替えたでしょ」

「ばれたか。俺が万が一負けた時は諦めてくれ。それより早く昂が認めた男なら俺は文句なんて言わないよ」

「そんな人いないもん」

「聖司じゃ駄目なのか」

「判らないよ。聖司はフラフラしているし直ぐに女の子が言い寄って来るし。聖司も嫌そうじゃないしさ。聖司を見ているとイライラするの。これって焼きもちなのかな」

「俺は聖司が良いと思うけどな。昂を大事にしてくれると思うぞ」

「心配じゃないの？ ノンは」

「もうガキじゃ無いんだから自分でケツが拭けるなら好きなようにしろ。もし拭けなかった時は俺が拭いてやるよ」

「ノンのばか。そんな事になる筈ないじゃん。ノンと遺伝子が近いんだから」

「ええ、それって俺がダメダメって事なの？」

「ダメダメじゃん」

「あいすいまそん」

「おやすみ」

「おやすみ、腹出して寝るなよ」

「出しません」

昂が自分の部屋に向かった。

いつか俺の昔話をする時が来るのだろうか。

まあ、その時には……ポジティブに行こう。

墓参り

9月の連休に兄貴に会いに来ていた。車ではなく昴と2人で電車に揺られていた。

「何だか久しぶりだね。ノンと出かけるの」

「昴が成長した証拠だろ」

「あのさ、ノンはそう言うのって寂しくないの？」

「他の親はどうか知れないけど、俺は嬉しいけどな。高校生の娘とべつたりの父親なんて見ている方が気持ち悪いぞ」

「でも、仲が悪いよりは良いんじゃない？」

「大切なのは距離感だろ」

「良く判んない私には両親が居ないからかな」

「あ、あのな答えに困る様な微妙で繊細な事をいきなり言うな」

「うふふ、ノンが動転してる」

「当たり前だろう。普通だ」

窓の外を見ると代わり映えのしない景色が流れている。

空澄み渡りは秋晴れの良い天気だ。

「ねえ、ノン」

「んん？」

「また、食べてる」

「駅弁は旅の醍醐味だぞ」

「そんなに食べるとお腹が出て来るよ」

「天高くおっさん肥ゆる秋ってか。んまいね、弁当も俺も」

毎年、兄貴に会いにこの時期には昴と2人で出かけるが年々思う事がある。

それは昴の母親の事だ。

これまで一度も昴は母親の事を俺に聞いたことが無い。

俺に気を使っているのかもしれないが、それすら昴の気持ちなんて

俺に判る筈も無いのが現状だったし俺からも話す気はしなかった。

終点駅に付きここからはタクシーで……

「バスで行こう」

「へえ？ バス？ 時間が掛るだろ」

「ええ、良いじゃんどうせ連休なら。泊まって行っても良いし」

「連休だから日帰りなんだろ」

「あっそうか、バスで行こう」

昂に押し切られ駅前でのバスが良いのか聞いてバス停で待つことにする。

「うわぁ、本数少な」

「乗り遅れたらアウトだね。お泊り」

「お泊りとか言うな。リーマンの記憶力を舐めんなよ」

バスに乗り込むとまだ紅葉には早い緑の中を進んでいく。

たまにはのんびりした旅も良いのかもしれない。

毎日時間と約束に追われている営業職にとっては心が休まる瞬間だ。去年と同じと言うか毎年昂はトルコ桔梗を選んでん買ってきている。

兄貴の眠る場所に付くと海からの風が心地よかった。

昂の長い髪が風に吹かれ昂が帽子を飛ばされない様に片手で押さえ片目を瞑っている。

「しかし、デカいな」

「これ以上は大きくならないし。やっと止まったんだからそれに170は無いよ」

「170超えると女の子としては微妙なのか？」

「当たり前じゃん。小さいほうが可愛く見えるし」

「昂は十分可愛いと思うぞ」

「ノンのそれは親馬鹿目線でしょ」

「まあな、出会った時はちびっこだったのにな」

「もう、10年なんだね」

「まあ、まだ10年だけだな」

兄貴の前にしゃがみ手を合わす。

『兄貴、デカくなつたる昴は。10年だぜ、手探りだったけど俺の手から離れていつても見守つてやってくれよな。昴の唯一のパパなんだからよ』

立ち上がると昴はまだ手を合わせたままだった。

「何を話しているんだ？」

「う、うん。パパにママの事を聞いてみたの。でも答えなんて帰つてこないのにな」

「会いたいのかな？」

「ううん、判んないつて言うのが正直な気持ちだよ」

「そうか、会いたくなつたら俺に言え」

「ええ！ ノンって私のママの事を知ってるの？」

「まあ、連絡先ぐらいはな」

「なんでって、そうか私がまだ子どもだったからだね」

「昴が会いたいと言うまで会わす気もないしな。昴にどう思われようが構わないけど俺は彼女を許す気にはならないからな」

「うん、ありがとう」

また、昴の頭の回転の良さに救われた。

本当に自分自身が情けなくなる時がある。

多少、昴との間がギクシャクしたが実家に寄るとそれも吹き飛んだ。

「あらあら、昴ちゃん。大きくなつて」

「えへへ、もうこれ以上はちょっとね」

「春菜ちゃんが菜々海ちゃんを連れて来てるわよ」

「ええ、本当に？」

昴は流れ星の様に瞳を輝かせ消えていった。

「本当に、小さな子が好きなのね」

「そつみだいな。電車の中でも近くに座った子どもをあやしていたしな」

「のり、どうしたの？ 何かあったの？」

「昴に母親の事を聞かれたよ」

「あ、あんたどうする気なの？」

「どうもしないよ、会いたければ俺に言えってそれだけだよ」

「そうよね、昴ちゃんも高校生なんだしね」

「それよつか、ビールでも飲ませてくれ。疲れたよ、昴は一切飲ま
せてくれねえし」

「当たり前でしょうに」

「へいへい」

昴は長い髪を纏め上げて春菜の娘の菜々海と遊んでいた。

春菜は菜々海の夜泣きが酷いらしく別の部屋で横になっていた。

「お疲れ様って一人で乾杯かよ」

「仕方がないでしょ。お爺ちゃんはボーリングだって」

「まだやってるのか？ いい加減親父も歳なんだから他の事をしろ
よ」

「ええ、盆栽とかウォーキングとか？」

「まあ、年相応のだな」

「でも、ノンには趣味とか無いの？ 運動もしないし体に悪いよ」

「毎日歩き回っているから平気だ。趣味はこの一本かな」

「うわあ、そんなんじゃ彼女も出来ないよ」

「彼女ね……」

「なんだか遠くまで来ちゃったみたいだよ」

「まあ、昴がおばさんになるまでは元気で居てやるよ」

「バカ！」

事故

学校では文化祭の準備が始まろうとしていた。

進学校だと熱が入らないでつまらない物になるって聞いてたけどここは違った。

皆の目つきが違う理由はただ一つ。

展示にしても模擬店にしても他校の教師や大学に行ったOBやOGが覆面審査員になって審査し優秀賞や各種の賞がもらえる。

そして最優秀賞に輝いたクラスからはかなりの確率で良い大学に行けるというジンクスがある。

だから熱気が違うんだと思う。

「ねえ、昴。何でそんなにクールで居られるの？」

「ええ、だって自分が頑張れば良い事でしょ。可奈だってその為に頑張ってるんだから」

「でも、験を担ぎたいじゃん。神頼み的な事だってみんなしてるし」「そうかなあ」

「もう、昴は頭が良いのに欲が無さすぎだよ」

「ええ、とりあえず進学校に入っただけど早く仕事したいし」

「マジで？ 大学は？」

「とりあえずって感じかな。行くかまだ決めてないし」

「そんなのノリが許す訳ないじゃん。大学に行かないかもってノリの事もあるんですよ。負担になるとか」

「う、うん」

「『うん』ってノリが一番嫌いな事だと思うよ。昴の負担とか足枷とか」

「でもさ」

その時、校内放送で呼び出された。

可奈が事務室まで付いて来てくれて事務所に行くと聖司が息を切ら

して走ってきた。

「あ、聖司だ。どうしたの？」

「ええ、可奈が一緒だったのか」

「昴が呼び出されたんで来てみただけだよ」

「やっぱり馬鹿だね」

「バカ言うな」

「能登島 昴さんね。熊谷さんから電話が入っています」

「熊谷さんから？」

「はい」

「昴、熊谷さんって誰なの？」

「えっとノリの会社の人だよ」

電話に出ると私の頭の中は真っ白になってしまった。

事故って何？

病院って何処の？

幼い頃のパパのことが頭に浮かび全身から力と共に血が引いていく。

「昴、どうしたの？ もう、受話器を貸して！」

可奈の声も上の空で受話器を取られた事さえ判らなかった。

「はい、はい。。。病院ですね。判りました。直ぐに向かわせますから」

「か、可奈。病院って？」

「あ、聖司。ノリが怪我をして病院に運ばれたみたい」

「ええ！ どうするんだ？」

「あんたが慌ててどうするの。昴を直ぐに病院に向かわせるから聖司は帰る時に昴の荷物をよろしくね。担任には私から説明するから」

「う、うん」

「昴、すっかりしな。ノリは怪我しただけだから」

可奈の声でやっと意識がはつきりした。

でも手がガタガタと震えてる。

もの凄く怖い……

『まあ、昴がおばさんになるまでは元気で居てやるよ』

数日前のノンの言葉が嘘みたいだった。

「可奈、どうしよう」

「いい加減にしな！ ノリには昴しか居ないんだよ。携帯と財布は持ってるね」

「うん」

「。。。病院にすぐ行く事。いいね」

「うん、判った」

私は財布と携帯を握りしめて学校を無我夢中で飛び出した。

タクシーの運転手さんに声を掛けられ病院に到着した事を告げられてタクシーを降りた。

鼓動があり得ないくらい早い。

怪我って外科だよな、そんな事を考えて窓口にノンの事を聞いた。

「ノンさんですか？」

「ご、ごめんなさい。沢渡典彰です。歳は40くらいで。ここに運ばれたって」

「その方なら多分あちらに」

振り返ると男の人と熊谷さんに付き添われてノンが金属製の杖を突いて立っている姿が見えてその場にしゃがみ込んでしまった。

ノンの姿を見て緊張の糸が切れて全身から血の気が引いて体に力が全く入らなかった。

「だから、昴には知らせるなって言ったのに」

「昴ちゃん、大丈夫？」

「は、はい」

しゃがみ込んだ私を立たせてくれたのは小柄な熊谷さんだった。

小さい頃に会った事がある人だった。

「もう、何をそんな所で大の男が突っ立っているの。昴ちゃんと私じゃ釣り合いが取れないでしょ」

「えっ、でも。あれっす。あんまりにも綺麗すぎて触れないって言

うか」

「本当に男はバカなんだから。こんな時じゃないと綺麗で若い女の子なんかに近づけないでしょ」

「あつ、すいません。もう大丈夫です。一人でも立てますから。ノンの姿を見たら安心しちゃって」

「ほら、沢渡君は言う事は無いの？」

「悪いな、授業をさぼらせて」

「バカ！」

病院にいる事なんて忘れて思わず叫んでしまった。

無性に腹が立ってきて心配していた事が馬鹿らしくなってきた。

本当にノンは人の気も知らないで無神経なんだから。

「流石だね。この男は全く呆れちゃうよ」

「何すか？」

「愛しい昴ちゃんの泣き顔なんて見たくないもんね」

「俺は思った事を言っただけで」

「まあ、そう言う事しておくか。昴ちゃんを呼んだのは私なんだしね。昴ちゃんが綺麗になった姿も見事できたし」

「つて、そっちが熊谷さんの本命でしょう」

「あははは、別に良いじゃん減るもんじゃないんだからさ」

熊谷さんの言葉に頭に上っていた血が急降下していく。

もしかしてノンは態とあんな事を？

「熊谷さん、指示通り会社のワゴン借りてきましたよ。って誰？」

「この綺麗な女の子は？」

「昴ちゃんだよ」

「ええ、沢渡さんのトコなの？ うちのガキにも爪の垢を煎じて飲ませたいわ」

もう1人会社の人が出てワゴンで家まで送ってもらえることになった。

ノンがゆっくりとワゴンに乗り込んでいる。

見るからに痛そうで……

「大丈夫なの？」

「大丈夫だよ。腰を強く打っただけだから」

「でも事故なんでしょ」

「まあ、事故と言えば事故だ」

家まで送ってもらう間にノンが事情を説明してくれた。

荷物の積み下ろしを手伝っている時に大量の段ボールを積んだ台車が向かってきて、咄嗟に避けたつもりだったのに避け場所が悪くて止まっていたトラックの荷台に腰を強打したらしい。

そこに台車に積んであった段ボールがノンの体の上に落ちて来たって。

「ゆっくりね」

「あいよ」

「沢渡お爺ちゃん、会社の方は任せてね。久しぶりに私も外回りしてみたいからさ」

「まあ、野田もいますしね。ゆっくりさせてもらえます」

「それと後から労災の申請書持ってくるね」

「頼みます」

家に上がるのも一苦労で手を貸そうかと言ったら怒られてしまった。

「バーカ、女の子にそんな事をさせられるか。潰してしまいそうで、そっちの方が痛いだろ」

「そうなんだ」

「何だ？ やけに嬉しそうだな」

「別に」

ノンに子ども扱いされなかったのが少しだけ嬉しかった『女の子』だって、うふふ。

でも、買い物から戻るとそんな気分は一転してしまった。

家に戻ると炭の匂いがする。

縁側を見ると七輪が置いてあった。

「ノン！ ノンはジツと……聖司？」

「おう、可奈に頼まれてカバン持ってきた」

「あ、ありがとう」

「聖司、運んでくれる？」

「ええ、聖司君のお母さん？」

「あら、お帰りなさい。ゴメンね勝手に上がらせてもらって」

「それは構わないですけど」

「久しぶりに仕事が早く終わって家に帰ったら典彰さんが怪我をして病院に運ばれたって聖司に聞いて大変だろうと思って」

「ありがとうございます」

「かーちゃん。魚どうするんだ」

「それは」

「ノンは動いちゃダメ！」

「へい」

動こうとするノンに釘を刺す。

七輪を準備していたのは聖司みただった。

ノンに使い方を聞いて準備したんだって。

で、今日は私が魚を焼く当番になってしまった。

炭で焼くと美味しいけど炭の匂いが髪の毛に付くのが嫌でいつもは

ノンが焼いてくれていた。

聖司はと言うとノンと2人でゲームをしている。

親子と言うよりは兄弟って感じかな。

あんなにベタベタしている父親と息子なんてちょっと引くかも。

聖司のお母さんが作ってくれたご飯はとても美味しかった。

でも、気になる事が……

ノンの事を甲斐甲斐しく看護している。

それにノン自身も遠慮はしているけど嫌そうな顔はしていない。

胸の奥がチクチクする。

それは聖司が他の女の子と楽しそうにお喋りする姿を見た時よりも

はつきりと感じた。

聖司と聖司のお母さんが帰った後もモヤモヤした物が体の中にあつた。

勉強に集中しようと廊下で物音がする、戸を開けるとノンが壁に手を当てながらゆっくり歩いていた。

肩で息をしていてとても辛そう。

「大丈夫？」

「大丈夫だ、腰を痛めたのは初めてじゃないしな」

「そうだけど」

「勉強しろ、それが昴の仕事だろ」

「学校でしてるもん」

「俺の事には構わなくていいから自分の事をしてくれ、その方が気が楽だからな」

ノンは私が小さい頃に風邪をひくといつも傍に居てくれた。

だからノンが動けない時は私がって思っているのに。

まるで私は必要ないって言われているみたいで胸が苦しくなる。

結構な時間が経ってから隣の部屋でノンが痛みを堪えながら横になろうとしているのが判った。

堪らず部屋を出てノンの横に正座した。

「なんだ？」

「私はノンにとって必要ないの？」

「そう言う意味で言った訳じゃない。昴はいつまで経っても俺の一番大事だ。でもな俺は昴の負担になりたくないだけだ。家事も全てしてくれているのにそれ以上の事は望まないよ」

「でも、ノンは私が子どもの頃は全部してくれていたでしょ。それに具合が悪い時はずっとそばに付いていてくれたじゃん」

「当たり前だ。俺は昴の保護者なんだぞ当然の事をしてきただけだろっが」

「でも、私だってノンの負担になんかなりたくないもん」

「あのな、これだけは言っておく。昴は凄く良くやってくれている。このままだと俺の老後まで面倒見るとか言い出しそうだからな。俺はそんな事を望んではいない、俺の望みはここから嫁に出す事だ。昴が選んだ奴にバトンタッチしたらお前らに面倒を見てもらう気はないよ」

「それってノンが聖司のお母さんにとって事なの？」

「だあ！ 何で未来さんなんだよ。痛っ…… 変な事を言うな未来さんに悪いだろう。俺には勿体無さ過ぎる人だよ」

「だって」

「だってもへつたくれもないの。俺が誰かと結婚してもしなくてもだよ。早く良い相手でも見つけて来い」

何だろうこの気持ち。

ノンが聖司のお母さんの事を話してもそれ程じゃないのに、私の結婚相手の事を話すと胸が苦しくなる。

それにノンは結婚する気なんかないみたい。

それってやっぱり私の所為なのかな？

私が側に居るからなのかな？

そんな事を考えると泣きたくなってきた。

「あのな、昴。お前にそんな顔をされたら俺はどうすれば良いんだよ。それと俺が結婚しないのはお前の責任じゃないからな。それだけにはつきりと言っておく」

「それじゃ、その理由を教えてよ」

「出来ない相談だ。お前にだって俺に言えない学校の事とかあるだろ」

「無くは無いけど言えなくは無いよ」

「言わなくていい。心配の種が増えそうだ」

「でしょ」

「判ったよ、困ったことがあれば昴に頼むよ」

「本当に？ って、ノンは私に嘘を付かないもんね」

「じゃあ聞くな」

「うん！」

翌日から聖司が家に来てくれてノンの事をみてくれている。

まあ、一緒にゲームしているんだけど男の人の方がノンも色々と頼みやすいみたい。

「ああ、何で勝てない訳？」

「へん、舐めんなよ。暇つぶしに散々やってたからな」

「でも、新しいのは出来ないくせに」

「やらないだけだよ。最近のは時間が掛り過ぎるんだよ。ちょっとトイレに」

「はいはい、お爺たん。ゆっくりですよ」

「殴って良いか？ マジで殴りてえけど」

「今ならノリに負ける気しないけどな。男らしくないけど」

「じゃいいわ。聖司には頼まないで昴を呼ぶから」

「まっ、タンマ。そんな恐ろしい事が良く平気で言えるな」

「どんだけ尻に敷かれてるんだよ。頑張れ王子様」

「殴りてえ、チクシヨウ！」

本当に親子って言うより歳の離れた兄弟みたい。

でも、もしノンが聖司のお母さんと結婚したら聖司とは同い年の兄弟になるんだよね。

何だかそれは嫌だな。

ノンが誰かと結婚するなんて……

これって変だよな。

祝福してあげるべきだよな。

でも何でこんなに切なくなるんだろっ。

翌日も聖司のお母さんが顔を出してくれた。

聖司はっと思ったら凄く大きな袋を持ってうちに来た。

「重てえ。俺の腰が」

「若いのにそんな事を言わないの男の子でしょ」

「若くても男でも重いもんは重いんだよ」

「買い物を頼んだだけでしょくに」

「そうだよな。かーちゃんの腕がこっつくなくてノリに嫌われたら嫌だもんな」

「聖司、もう一回言ってごらん。誰のおかげで聖司が2本の足で立っていられると思ってるの？」

「それを言っなよ。判ってるよ」

口では反発し合っているのに親子なんだなって思う。

安心感があるってこういう事を言っただろうな。

お母さんか……

次の日には寝てばかりで辛いからってノンは杖を突きながら会社に行ってしまった。

本当に無茶苦茶なんだから。

でもちゃんと病院には行ってきたみたい。

それと会社の人に聞いてマッサージみたいな事をしてもらってきたみたい。

杖なしで真っ直ぐに立って歩いて帰ってきた時は驚いちゃった。

種明かしはなんて事なく晒で腰を固定してただけだった。

それでも楽になったことに変わりなく病院に通いながら会社に行って数日もすると元通りに治っていた。

「昴、風呂に入れよ」

「あ、うん。今電話中だから」

「もしお袋だったら俺の事は言っなよ」

「ええ、何で？」

「お袋達を甘く見るな飛んでくるぞ」

「ゴメン、手遅れ」

「はあ？」

「事故して病院に運ばれて今はもう治ったって。だって治ったんだから良いじゃん」

「絶対に来るぞ、1時間半もしたら。電気でも消して居留守でも使うか」

「ええ、そんな事をお婆ちゃん達に出来ないよ」

「はあ、逃げ出したくなってきた。そうだ飲み」

「駄目！ あつ年頃の娘を独りにするんだ。お婆ちゃんに知れたら」
「すんまそん。それこそ病院送りにされるな、確実に」

ノンの言う通り1時間半すると玄關の硝子戸を叩く音が聞こえる。

「典彰、居るんでは」

「はい。お婆ちゃん」

「昂ちゃん、ノリは何処なの？」

「んと、部屋で正座しながら反省中……」

「ゴメンね、こんな遅くに」

「大丈夫だよ、お爺ちゃん。まだ寝るには早い時間だし」

「お邪魔するよ」

「うん、お茶を入れるね」

「ありがとう」

お婆ちゃんは疾うにノンのところに行ってお説教をしている。

外まで声が聞こえそうで少し心配になってしまふ。

お爺ちゃんはいつもマイペースでいつも『ありがとう』って言うてくれる。

そんなお爺ちゃんを見ているとノンが直ぐに『ありがとう』って言うのも頷ける。

お茶を入れてノンの部屋に行くとお婆ちゃんとお爺ちゃんが並んで座っていて、ノンはまるで大きな体をした子どもみたいになっていた。

「本当にあんたって子は、頭は大丈夫なの？」

「あのな、俺が怪我をしたのは腰だ、腰。頭は関係ないだろ」

「そうね、何もしなくても頭が悪かったものね」

「何もしないから悪くって、関係ない事を言うな」

「大丈夫そうね、頭も体も」

「だから、何でも言っているだろうが。もう帰れ！」

「はあ？ あんた誰に物を言っているの、このバカ息子が」

「痛っ！ んな物で殴るか普通？」

お婆ちゃんの手には聖司が置きっぱなしにしているチャンペが握られていた。

「バカね、手で殴ったら私の手が痛いじゃない」

「まあまあ、母さん。典彰もこう言ってるんだから」

「本当に宗のお墓参りにいつてきたばかりなのに、人を驚かせて」

「だから言わなかったんだろ。昂にだって……心配かけたくないから」

ノンの語尾が小さくなっていく。

だからあんなものの良い方してんだ、私に心配させたくなくってでも、怪我をしていれば判る事なのに……

「本当に馬鹿な子だよ。直ぐに判ってしまう事だろう」

「そんな事じゃねえよ。事故なんて聞いたら思い出すだろうが。よっぽどぎっくり腰の方がマシだよ」

「そうねそうよね、ゴメンね、昂ちゃんの気も知らないで」

「ええ、そんな。ノリはお婆ちゃんの子どもなんだし。私の事は」

「昂ちゃんもそこに立ってないでそこにお座り」

「は、はい」

お爺ちゃんはお婆ちゃんの手綱を上手く握っている変な空気になるといつも変えてくれる。

そんなお爺ちゃんに言われてノンの横に座った。

「そんなに畏まらなくてもいいからね。昂ちゃんも高校生だろう進路の事とか悩むと思う。昂ちゃんの好きなようにしてくれて構わないんだよ。でもこれだけは知っていて欲しい。典彰や僕等に遠慮だけはしないで欲しいな。可奈と同じように僕等の大切な孫なんだ。大学にいききたいのなら心配はいらないよ。僕等にもその為の蓄えも

あるし典彰だつてきちんと考えているよね」

「当たり前だ。俺の娘みたいなもんだぞ。少しだけ貯金もしている保険にだって入ってるよ」

「うん、ありがとう。でもまだどうするか考えてないんだ」

「それで良いんじゃないか。とりあえず大学に入ってからでも、昂は頭が良いんだし高卒よりは大卒の方が選択肢は広がるからな」

「そうだね、ちゃんと考えてみる」

「お願いだよ。僕の言った事を忘れないでね」

「うん」

私は一人じゃない事を改めて教えられた。

周りにはこんな心配してくれている家族が居てくれる。

そしてノンはいつでも私の力になって背中を押してくれる。

私に何ができるか判らないけど今は笑顔で居るのが一番だと思った。

ちよつと

朝ご飯が出来てノンを起こそうとするとノンはぐっすり寝ている様だった。

ノンの横に座って前髪を少し払うと左の眉の所にある傷跡が見える。私が島から連れて来られた時に出来た傷跡だ。

顔つきはパパにそっくりなのに全然違う感じがする。

『俺の一番大事な昂』

あの時もそう言っておでこにキスしてくれた。

私の一番大事って何だろう……

今だけだから、ね。

ちよつとなら良いよね。

ノンの唇にそつと重ねた。

「ん？ んゝ 昂？」

「朝ご飯だよ、早くしないと遅刻するよ」

枕元の携帯で時間を確認すると普段より少し早い時間だった。

「早いじゃんか」

「早起きは三文の得でしょ」

「あのな、二束三文って言葉がある様に三文は基本的に安くて価値が無い物を指すんだよ。価値の無い物をもらっても得なのか？」

「ああ言えばこう言うんだから早く起きて」

「ああ、何だか誰かに襲われる夢を見て目が覚めたんだけど」

「夢？」

「無理矢理キスされた夢」

「欲求不満なんじゃない、彼女でも見つけたら」

「堂々巡りになるぞ」

「朝ご飯！」

とりあえず顔を洗って飯にする。

頭がハッキリしてくるにつれてあの感覚も妙にリアルに感じてしま
う。

仕事モードに頭を切り替える事にした。

「ノン、晩御飯は何が良いの？」

「ん？ 昴が食べたい物で良いぞ」

「張り合いが無いんだから」

「もう俺じゃ昴には敵わないって事だよ。俺に出来るのは魚を焼く
ことぐらいだよ。遅刻するぞ」

「うん！」

出社して今日のスケジュールを確認しながら頭で復唱していく。

今日は野田とは別行動になっていた。

すると熊谷さんが珍しく俺のデスクにやってきた。

「沢渡く〜ん、おはよう」

「お早うございます」

「何々、その他人行儀な挨拶は？」

「別に、沢渡典彰。営業に出ま〜す！」

「ちよつと待った！」

熊谷さんの口調に嫌なものを感じた俺はアム口張りに営業と言う戦
場に出撃しようとして阻止されてしまった。

俺の腕には熊谷さんの小さな体しがみ付いていた。

「沢渡君は午前中店舗回りだよね」

「あの、何で俺のスケジュールを？」

「野田君に聞いた」

ため息を付き頂垂れながらも沸々と野田に対する怒りが湧いてくる。

「あのさ、もう直ぐ文化祭の時期だよね」

「まあ、昴もそんな事を言っていましたね」

「でさあ、相談なんだけど」

「それって相談なんですか？ もう熊谷さんの中では決定済みでし
よ」

「まあね。だって高校生の知り合いなんて1人も居ないんだもん」
「そう言えば課長の息子さ……何すかそれ？」

熊谷さんが俺の腰を触りながら俺の顔を睨んでいた。

「誰のお蔭だっけ？」

「ええつと野田かな……あはは。嘘です」

小さな拳が腰に宛がわれていて、ここは大人しく引き下がる。

熊谷さんを敵に回すなんてあり得ないし熊谷さんが敵に回る事もないだろう。

とりあえず聞いてみて判断をと……

「で、相談つて何ですか？」

「私の友達が衣装とかを制作する会社を立ち上げたの。でね、何処かの文化祭で宣伝的な事を出来ないかなって。もちろんその代わりに衣装を提供するけどね」

「でも、コマーシャル的な事って学校側が許可するか難しんじゃない？」

「だから、沢渡君に声を掛けたの？」

「ええ、昴に聞いてみるって事ですか？」

「うん、宜しくね」

それだけ言つて熊谷さんは自分のデスクにスキップで戻ってしまった。

まあ、昴に聞くだけなら大丈夫だろうと判断した。

仕事を終えて家に帰るとテーブルに昴が突っ伏していた。

「ただいま」

「お・か・え・り」

「お疲れみたいだな、外で飯にするか」

「カレーが出来てるよ」

「随分、早いな」

台所に行つて鍋の蓋を開けて固まっちゃった。

確かにカレーは出来ているが、お湯にルーを入れただけの物にしか見えないのは気のせいだろうか？

試しにお玉でかき回して……

「ゴメン」

「まあ、良いよ。これはこれで美味いだろ」

「う、うん」

「学校で何かあったのか？」

「ちよつと……」

カレーの元は出来上がっていたのでひき肉や野菜のみじん切りを良く炒めてキーマカレーの様な物にした。

昂は元気がなくカレーをスプーンで突いている。

「で、何があつたんだ？」

「あのさ、ノンって文化祭の時とかに委員をやった人？」

「俺は、なんだ文化祭や学校の行事には参加しなかった、って言うか参加させてもらえなかったが正しいかな」

「ええ、どうして？」

「一言で言えば俺が参加すればクラスメイトに迷惑が掛かるからかな。高校時代の俺は聖司より荒れてたからね」

「でも」

「そうでも変わった。色んな人と出会ってね。文化祭は何をするんだ？」

「喫茶店と言うかコスプレ喫茶とか言っているけれど皆の気合が空回りしちゃって収集が付かなくて。委員長の補佐をする事になったんだけど予算やら時間を考えると無理があるんだよね」

「それで、頭を悩ませていたと」

「うん。進学校だから中には手伝いが出来ない人もいるし部活と両立しなきゃいけない人もいるから。それと」

「ん？ それと」

「あつ、これは私達の問題だから」

人生なんてタイミングで変わってしまう。

タイミングが悪ければ結ばれるものも結ばれない。

これはそう言うタイミングなのかもしれない。

「昴は子どもの頃から何でも自分でしようとする所があるからな。助かる事もあるけど少し甘える事をして欲しいと思ったりする。俺にはアドバイスはできないけれど仕事柄人と人を繋ぐ事は出来るんだよ。昴が学校側と交渉しなくてはいけない事が出て来るけれど出来るかな？」

「ええ、どう言う事なの？」

「俺の所に文化祭で衣装を提供する代わりに宣伝をして欲しいと言うオファーが来ている。衣装を準備する手間は省けても誰かが学校側と交渉しないといけない。どうする？」

昴が考え込んでいる。

派手な宣伝は学校側がYESとは言わないだろう。

文化祭は基本的に生徒の自主的な発表の場であって会社のPRの場ではないからだ。

まあ、熊谷さんの知り合いの事だから大々的には言わないはずだ。

「ノン、話だけでも聞くのはありかな」

「良いんじゃないか。昴だけじゃ判断は出来ないだろう。話を聞いて委員長と相談してみれば良い」

「うん、そうする」

直ぐに携帯で熊谷さんと連絡を取り昴に代わった。

熊谷さんとは何度か会っているので話しやすいだろうし直接知り合いの会社と昴が話すことなど殆どないだろう。

俺に今できる事は目の前にある食器を片づけるくらいの事だ。

洗い物をして風呂にでも入るとしよう。

女の子同士の会話は脱線を繰り返して長くなるもんだ。

風呂上がりいつもの様に缶ビールを煽っていると昴が後ろから抱き着いてきた。

「ノン、ありがとう。委員長に連絡したら何とかかなりそうって」

「まあ、まだこれからだけどな。それと俺が甘えろって言ったのは

「こういう事じゃないけどな」

「良いじゃん、たまには」

「良いけどさ。そう言えば昴はどうするんだ？ 進路？」

「う、うん。大学に行こうかと思う。そろそろ理系か文系か選ばないといけないし。まだ、何をしたいか判らないけど。良いのかな？」

「良いんだよそれで。お袋達だつて喜ぶし」

「あのさ、ノンはどうやって選んだの？」

「消去法かな不得意な科目が無いほうを選んだ。昴はもう少し慎重にな。頭は良いんだから」

「それって変だよ。先生も言つてたけど珍しいって。自分ちの子どもを頭が良いって言うの」

「ええ、良いじゃんか。嘘じゃないし」

「でも先生が褒めてたよ。今時珍しいくらい良く判っているって。

最近じゃ我が子の実力も知らないで無茶苦茶言う親がいるみたいだよ」

「それも一応、親馬鹿だよな。まあ、昴は俺の大事だからな」

「うん、だから甘えちゃお」

「ビールくらい静かに飲ませろ」

「嫌だ、ノンに甘える！」

女の子って複雑なんだなつてこの頃思うようになった。

だから、駄目なのか？

俺……

春遠く

文化祭もノンのおかげで無事に終わった。

宣伝の方はパンフレットや名刺を教室に置き、喫茶店のチラシに協力として会社の名前を入れる事を学校側が許してくれた。

それ以外に宣伝は出来ないけれど効果はあったみたい。

熊谷さんが大喜びで電話をくれたから。

学校では後夜祭が行なわれている。

私は元々そう言うのに参加するのが苦手な用があるからと委員長に任せてしまった。

可奈曰くモテモテだねって言われたけれど私には良く判らない。

そんな可奈は島中君に誘われて後夜祭を楽しんで居るはずだ。

何だか可愛らしい可奈が羨ましい。

「で、何で王子様の聖司がここに居るの？」

「あのさ、昴。その王子様って止めてくれないかな。昴に言われると凄く傷つくんですけど」

「仕方がないでしょ。皆の王子様なんだから」

「俺は昴だけの王子様になりたいんだよ」

となりを歩いていた聖司に肩を掴まれてしまった。

聖司の顔は何時になく真剣でふざけているんじゃないのが直ぐに判った。

「昴は俺の事が嫌いなの？」

「嫌いかと聞かれれば嫌いじゃないよ」

「じゃあ、好き？」

「嫌いじゃない」

「俺、まだノリには全然敵わないけど。昴の事を一番に考えるから優しく聖司が抱きしめてくれる。」

痛く無い様に。

直ぐに解ける様に。

変わらないこの感じホワットした真綿に包まれたような曖昧な感じ。良いのかな？

でもこれが自然なんだよね。

「俺さ、ずっとこうしたかったけれどやり方間違えて。本当にゴメン。これからは昴だけだから」

「うん。ありがとう」

胸の中のモヤモヤが取れたような気になった。

きちんと聖司と向き合えるような気がする。

何だか聖司と昴の間が柔らかくなったような感じを受ける。

2人が付き合うのは俺としては自然で良い事だと思う。

聖司は昴の事を大切にしてくれると思うし、聖司になら昴を任せられると信じていた。

会社帰り電車を降りると未来さんの姿を見つけた。

同じ電車だったようだ。

「お久しぶりです」

「そうですね、文化祭でもお会いしませんでしたね」

「ああ、俺は裏方でしたから」

「ええ？」

「まあ、色々です」

結局、文化祭の日は衣装を運んだりする裏方にひっぱり出され……殆ど校内の展示を見る事は出来なかった。

その分、優秀賞は惜しくも逃してしまっただけでクラスの全員が楽しんでやっていたのでそれはそれで良いと思うた。

「そう言えば昴ちゃん。聖司とですか？」

「さあ、どうでしょう。2人の事は2人に任せているんで」

「本当に見守ってくれているんですね」

「まあ、それが俺の為すべき事ですから」

家の近くまで来ると玄関先で昴と聖司が言い争っているのが聞こえてきた。

「もう、信じられない。来ないで」

「なあ、ちゃんと話を」

「近所迷惑だろうが、さっそく喧嘩か？」

「ノリにかーちゃん？」

「駅で偶然会ってな。で、何なんだ？」

俺が聖司に聞いても言い辛そうにしている。

昴は部屋に籠ってしまったようだ。

「未来さん、昴を頼みます。聖司ちよつと来い」

「気なんか使わなくて良い。ここで逃げたら俺男じゃなくなるから」

聖司が俺の手を払いのけて真っ直ぐに俺の目を見た。

「場所を変えても良いんだぞ」

「ここで良い。実はこの前まで一緒に遊んだりしていた先輩が妊娠

したって噂が学校で流れたんだ」

「で、先輩が本当に妊娠していたと」

「うん、それで昴が怒って」

「昴、相手は聖司じゃないかもしれないだろ」

俺が昴の部屋に向かって声を掛けると戸に何かをぶつけたような音がした。

「お前には心当たりがあるのか？」

「ゴメン」

「聖司……」

「未来さん？ 大丈夫ですか」

「すいません。本当にあなたって子は」

急に未来さんの体から力が抜けて慌てて抱きかかえる様にして玄関に座らせた。

それはそうだろう大事が一大事になってしまったのかもしれないのだから。

「相手に確認したのか？」

「まだ、してないって言うか出来ないんだ。結構な騒ぎになって」「まあ、当然だな。学校側とすれば表沙汰にはしたくないし自主退学だろうな」

基本、子どもの喧嘩親が出るもんじゃないと俺は信じている。でも、ここまで来たら2人に任せておく訳にはいかない。

家に入り昴の部屋をノックした。

「おい、昴。聖司が悪いのは良く判った。でもまだ確証がある訳じゃないだろ。開けるぞ」

部屋の戸をあけた瞬間に顔面めがけて何かが飛んできた。思わず顔を逸らし何とか掴むとそれは昴の携帯だった。

「あのな……はあ」

助け舟ではなくあくまで一言だけでも思ったが昴が部屋から出てきた。

強張った硬い表情で聖司に向かって歩いて行く。

「聖司、ゴメン。本当にずっと好きだったよ。でも無理だと思う」

「う、うん。判ったよ」

「ちゃんと言えなかった私も悪いと思う、ゴメンね。ファーストキスじゃないけど」

そう聖司に告げて昴がキスをした。

未来さんが驚いた様に昴と聖司を見上げている。

俺は……別の事を考えていた。

「おい、昴。何処に行くんだ？」

「えっ、先輩に聞いてくる。あの先輩の家この近所だから」

「上着を着ていけ」

「直ぐに戻るから」

「待て、携帯が鳴ってる。ああ、もしもし」

昴の携帯の会話ボタンを押すと可奈の声が聞こえてきた。

昴は怪訝そうな顔をして立ち止まり俺を睨みつけている。

「あれ？ 昴？」

「俺だ」

「ノリなの？ 昂は？」

「今、取り込み中だ。要件を言え要件を」

「その……」

「多分その件で取り込み中だ。傍に聖司もいる」

「あの先輩、大学生と結婚するって」

「はあ？ 大学生と結婚？」

「うん、前から決めてはいたけど結婚する前に遊んでいたただって本人が」

「取り越し苦労かよ。結婚する前に遊ぶなって言っておけ」

「ぶう、ノリのバーカ！」

そう言い放って可奈が電話を切りやがった。

「昂、そう言う事だそうだ。結婚相手がいるんだと、大学生の」

「もう、やだあ」

昂が走り出した。

「コラ！ 待て」

「典彰さん、早く昂ちゃんを追いかけて。ここは私が」

「すいません。お願いします」

脱ぎ捨てた革靴じゃなくスニーカーに足をつっ込んで昂を追いかけた。

後ろから何かを叩くかなり大きな音が聞こえる。

叩かれた頬より心の方が遥かに痛いだろう。

それが男の責任の重さだ。

この時ほど子どもの頃に徒競走のコツを教えた事を後悔した事は無い。

昂との差がどんどん開いていく。

「クソ！ 明日なんか知るか！」

明日と言うより数日後が怖い歳になっている……

しばらく走ると近くの公園で昂が立っているのが見えた。

荒い息を整えながら着ていたコートを脱いでコートを広げながらそつと近寄る。

まるで逃げ回る子猫を捕まえいてる様な気分になる。

「動くな」

「私は犬猫じゃない」

「それだけデカければ十分猛獣だ」

「酷いよ、ノン」

暴れていた昴が急に大人しくなった。

「おっさんを走らせるなよ」

「追いかけてくれなんて頼んでない」

「風邪ひいたらどうするんだよ」

「なんだ、そっちなんだ」

「それにこんな夜中に1人で出歩くななんて危ないだろうが」

「大丈夫だもん。交番が近いから」

「その屁理屈こきは誰に似たんだ」

「ノンに決まってんじゃない」

「まあ、良い。座れ。疲れた一休みだ」

「うん」

ベンチに座り込むと昴が寄りかかってきた。

頭から俺のコートを被っているので表情までは判らなかった。

昴が何も喋らなければ俺からは聞く事はしない、昴が嫌がらなければここに居るだけだ。

一息付い喉元に指を入れネクタイを緩める。

天を見上げるとオリオン座の三ツ星が輝いている。

確か冬の星座の代表選手だ。

すると急に昴が立ち上がって俺の前に立った。

「ん？」

「抱っこ」

「はぁ？ 抱っこ？ 何歳だから？」

昴の顔はコートの陰で良く判らにが確かに『抱っこ』と聞こえ、昴

が両手を差し出している。

その姿は保育園の卒園式でお遊戯が始まるのに舞台の上で泣きだした時の姿に良く似ていた。

何も変わってないんだな、あの時のまんまだ。

「私が嫌になるまで抱っこしてくれるって。嫌じゃないから、抱っこ」

「ほれ」

大きくなった昴を子どもの頃の様に抱っこしてやる事は出来ない。

膝を叩くと俺の膝の上に横に座って俺の首に抱き着いてきた。

今の俺には優しく抱きしめる事しか出来ない。

「聖司に嫌われちゃったかな」

「それこそあり得ない話だな。今までだって何度も聖司はお前を追いかけて来たんだ。幼馴染なんだから元に戻るだけだよ。ただ、お互いに好きな奴が出来た時にはどうなるか判らないけどな」

「そうだね、聖司はモテるもんね」

「昴だって」

「私は駄目だな。可愛くないもん」

「そんな事は無いと思うぞ。何時かきつと現れるよ」

「うん、だと良いな」

「まあ、お互いに好きな奴が出来ても昴と聖司は何も変わらない気がするけどな」

「幼馴染と言うより兄妹みたいだからね」

「まあ、昴がお姉さんだけだな」

「そうだね。聖司は何だか心配で」

「お互い様だろ。聖司だって昴の事を一番に心配しているよ」

「うん、ノンが風邪ひいちゃうから。帰ろう」

昴の手を引いて家に向かう。

それはまるで昴と出会った頃の様だった。

家に付くと玄関に未来さんが座って待っていてくれた。

聖司の姿は見当たらなかった。

「すいませんでした」

「いえ、こちらこそ。聖司が申し訳ありません」

未来さんが深々と頭を下げている。

気にするなと言う方が無理かもしれないが多分それほど傷は深くない筈だ。

それに俺達が気にしてしまえば聖司や昴が気まずくなってしまう、それだけはどうしても避けたかった。

「聖司は？」

「えっ、あ、先に返しました。今は顔を合わせない方が良いと思います」

「そうですか、送ります」

「いえ、そんな」

「迷惑なんて考えないください。昴、ちゃんと戸締りしておけよ」

「うん、判った。はい、コート」

「ありがとな」

未来さんの背中に手をやって玄関から出て家まで送る事にした。

大きなため息を付いた未来さんの口から白い息が上がっている。

「本当にあの子はもう」

「誰も責めるのは止めましょう。タイミングが悪かっただけです」

「タイミングですか？」

「ええ、出会うタイミング巡り合うタイミングです。少しでもずれてしまえば出会う事もない。また出会ってしまったから辛い思いをする時もある」

「それは早苗ちゃんの事ですか？」

「色々です。プラスの事が大きければ失った時のマイナスは同じように大きいものです」

「私ももう少し違うタイミングで典彰さんに出会いたかったです。そうすれば」

「冷たい言い方ですが、仮定は仮定にしかすぎません。それは僕が何度も考えた事です。でもそれすら思い出になつていくものです。そしていつの日かそれを懐かしく思い出せる日が来ればいいと思います」

「もう、思い出なんですか？」

「早苗も先輩も兄貴も俺の中に居ます。それが思い出かどうかは判りません。でも未来さんは早苗の代わりでないし俺も昂にとって兄貴の代わりじゃない筈です。聖司も昂もまだまだこれからですよ。また巡り会った時にはどうなっているか判りません」

「それは私達もですね」

「そうですね。聖司と昂の事で未来さんとの関係が壊れるのは嫌ですし、俺と未来さんの事で聖司と昂の関係が壊れる様な事は絶対にしちゃいけないと思うんです」

「お互いの大事の為にですね」

「すいません、何だかお説教じみた事を言ってしまった。今まで通りじゃ、駄目ですか？」

「判りました。またタイミングが合う事があれば」

「はい」

昂と聖司はたぶん別の道を歩んでいくだろう。

そして俺と未来さんもそれぞれの思いを胸に仕舞い込んで大事の為に歩いていく。

それと翌日が土曜日である事をこれほど感謝した事は無い。

昂も聖司も月曜まで顔を合わす事もないし、俺と未来さんも会社帰りに出くわす事もないだろう。

翌日は流石に昂もショックが大きかったのか昼近くまで起きて来なかった。

1人で食事を済ませて久しぶりにレコードを聴いていた。

「ノリ、おはよー」

「そう言う星の下なのか？　なんだ、可奈」

「ああ、酷い。姪っ子が遊びに来たのに」

「って棒読みだな。今日は何処にも行かないぞ。たまにはのんびりさせてくれ」

「ええ、映画のチケットを買ったのに？」

「何で疑問符？ とりあえず昴に聞いてみる」

「うん、ノリ。あのさ」

「もう終わった事だ。周りが気にしたら本人達が一番辛いだろう」

「うん、判った」

「昴が行かないと言えば行かないからな」

「うん。昴に聞いてくる」

可奈は可奈なりに昴と聖司の事を心配して気にかけているのだろう。出掛けるにしても俺は着替える気はないしそんな服は持ち合わせていない。

渋谷玄関で寝転んでいると可奈と昴が部屋から出てきた。

「ノリ、行ってくて」

「そうか、にしても昴の顔はひでえ顔だな。顔でも洗ってちゃんとしろ」

「うるさい！」

可奈が驚くほどの音がして俺の顔があつた場所に昴の足が落ちてきた。

「当たったらどうするんだ？」

「ノンは豆腐の角に頭をぶつけたら少しは女心が判るようになるんじゃないの」

「豆腐の角の方がどれだけ俺に優しいか」

昴は俺の横を膨れっ面で歩いている反対側で可奈が俺の顔を怖い顔で睨みつけていた。

「本当にノリはデリカシーが無いんだから」

「そんな物があれば今頃はモテモテだ」

「ねえねえ、聖司のお母さんとはどうなったの？」

「はあ？ どうにもならねえよ」

「うわあ、残念なノリ」

「それじゃまるで俺が可哀想な子みたいだろうが」

可奈が逃げるのを追い回す。

昴の方を可奈が気にしている、気にするなっという方が無理な話だ。異母姉妹で聖司とは幼馴染みで3人は本当に兄妹の様に育ってきたのだから。

映画館に行くとき大きな絵看板が出ていた。

「……って、何のパクリだ？」

茶髪の男の子が金髪の女の子やアンドロイドに果てはゾンビに追いかけられている。

そして、それは口に出すのも恥ずかしい様なタイトルだった。

館内に入ると場末の映画館を呈していた。

観客はまばらでそれでも明りが落ちて来たので俺を真ん中にして3人でシートに身を沈めた。

呆れてしまうくらいのB級のラブコメだった。

可奈は隣であり得ないくらい腹を抱えて爆笑している。

昴も笑ってそして泣いた。

映画もクライマックスになりスクリーンの中ではドタバタが繰り返されている。

音がもの凄い事になっていて周りに泣き声は聞こえないだろう。

俺の肩に顔を当てて昴が感情を露わにしていた。

映画館を出る頃には昴はすっかり元に戻っていた。

「昴、すっきりした？」

「うん、ありがとうね。可奈」

「まあ、姉妹だしね」

「あのさ、ノン。愛が欲しい」

「ブッ！」

眠気覚ましに飲んでいた缶コーヒーを噴出して、もう少しで鼻から

「コーヒーが出そうだった。」

思わず袖で拭いてしまった。

「あのな、俺から何万光年も遠くにある物を欲しがるな」

「ええ、そんなに遠いんだ」

「あつ、近くにあるぞ」

「ええ！ 何処にあるの？ 私も欲しい！」

可奈が大きな目をさらに広げて俺を見ている。

「綺麗なピンク色で」

「「うんうん」」

「こつ、いい感じに焼けた」

「「焼けた？」」

「土鍋に入ってる」

「「ど、土鍋？」」

「鯛めしの美味いお店がこの近所だったはずだ。アツアツのご飯の上にのった綺麗に焼けた鯛をほくしてご飯と混ぜて食べるんだよ。中骨と頭は味噌汁にでもらって」

「「ゴクリ」」

生唾を飲み込む音が聞こえ2人の目が既に輝きを増していた。

「飯でも食いに行きますか」

「「うん！」」

「鯛めし、鯛めし」

「鯛めしとアジの開き！」

「アジの開きもサンマの塩焼きもあるぞ」

「アジ、アジ、サンマ。鯛めし、鯛めし、クローバー」

久しぶりに昴のこの歌を聴いた気がした。

ここに有らず

「す・ば・る。おはー」

「おはよう、可奈」

「どうしたの？ 難しそうな顔をして」

「うん、ちよつとね」

「そう言えば聖司はどうしたの？ 今日是一緒じゃないの？」

「その辺で気まずそうに隠れてるでしょ」

家から離れて遠巻きに見ている聖司に気付いていて気付かない振りをしていた。

学校でも聖司は教室のドアからコソコソとこちらを伺っている。

「あつ、アホの王子様みつつけた」

「アホ言うな。バカ奈」

「ああ、聖司がバカって言った」

「聖司のバーカ」

「うつ、昴がバカって」

「何度も言ってやる。バ」

「判ったよ、もう気にしないよ。ゴメン」

「うわぁ、素直な聖司ってキモい」

「キモい言うな、それと王子様言うな。俺は変わるんだ！」

担任の咳ばらいが聞こえ声と腕を上げていた聖司の体が硬直した。

クラス中が爆笑し聖司が涙目になりながら教室を飛び出して行った。

「相変わらず馬鹿だね」

「うん、それが聖司の良い所だからね」

「昴って黒いね」

「えへへ、色々だね」

ホームルームが始まり授業が開始される。

きちんと授業を聞いてノートを取っているけれど頭の片隅から離れない物があった。

全ての授業が終わり掃除当番の日じゃないのでカバンを持つと可奈が声を掛けてきた。

「ねえ、昴。何かあったの？」

「えっ、あつ。大したことじゃないよ」

「でも、一日中ボーとしてたよ」

「あ、うん。あのね、お母さんってどんなものなのかなって」

「えっと、答えづらいかも」

「そうかな。聖司のお母さんは凄く強くって可奈のお母さんは凄く優しくてノンのお母さんって言うか私達のお婆ちゃんは凄く温かいでしょ」

「う、うん」

「私のお母さんってどんな人なのかなって」

いつも明るい可奈が難しそうな顔をしている。

ドアの方を見ると聖司が顔を出した。

「可奈、帰らな……いの？」

「聖司、ちよつと」

「えっ？ 可奈が俺に何用？」

可奈が聖司に耳打ちすると聖司の額に汗が浮かびゴクリと息を呑む音が聞こえる。

「お、俺、先に」

「逃げるな」

「もう、バカな俺達にそんな相談されてもな」

「聖司と一緒にしないでよね」

可奈と聖司が顔を見合わせていた。

「でも、ノンは私のお母さんの事を知っているみたいなの。会いたければ俺に言えって言ってたから」

「「ええ！」」

同時に私の顔を見て驚いている。

そんなに驚く事は無いと私は思うけど。

「で、昴は会うの？」

「判んないって言うのが正直な所かな。私を育ててくれたのはノンだし、会っても知らない人だからね」

「うっ、まあそうだよな。微妙だな」

「今更会ってもって思うけどどんな人なのかは知りたいかな」

「それじゃ迷うことなくノリに聞けよ。悩んでいたって先には進まないぜ。会っただけ会ってみれば良いじゃんか」

「でも、ノンは嫌じゃないのかな。私がお母さんと会うの」

「俺は昴が悩んでいる姿なんて見たくないな。どう考えたって堂々巡りだろ。ならはつきり会ってみたって言うてくれた方がすっきりすると思う」

「そっか、ノンに聞いてみる」

時々聖司には驚かされる時がある。

やっぱり男の子だからなのかなって思う。

「聖司のアホ兄貴が大人に見える」

「アホ言うな」

カバンを持って教室のドアに向かうと聖司と可奈が追いかけて来た。

「帰ろっ。心配するから」

「「うん」」

営業部内の午後の会議で頭を悩ませていた。

「学校制服の展示会ですか？」

「う、うん。そうなんだよ。前々から案だけは出ていたんだけどね。上層部がやっとう重い腰を上げてね」

目の前に置かれた書類には概要だけが掛れていて細かい事はこれからの様だった。

「展示会にしてもモデルとかはどうするんですか？ 募集をするにも時間が短すぎますよ。この際プロを使うか」

「それなんだが制服を前面に押したいから出来れば一般からと」

「要はプロを使うと制服より目立つし経費が掛かると?」

「撮影スタッフはどうするんですか?」

「それはプロを頼んである」

「ええ、そっちには経費を掛けるんだ。まあ仕方がないのかアパレルだし」

「まあ、そう言う事だ。カメラマンは鳴海涼子さんに頼んである。

彼女は子どもの表情を切り取るのが上手いと有名な……」

彼女の名前を聞いた瞬間に後の説明は吹き飛んだ。

まさか一緒に仕事をするなんて想像すらしなかったし、そんな接点は皆無だと思っていた。

服がメインとは言え表情の硬いモデルが着ていればイメージダウンにしかない。

ましてやプロのモデルではなく一般の生徒を使うとなれば尚更だ。

カメラマンの腕次第で成功か否かが決まってしまう。

仕事と割り切るしかないだろう。

向こうもプロなら俺達は営業のプロなのだから。

「それじゃ一般のモデルはこの短時間で調達できるんですか?」

「それなんだが知り合いの学校をあたって欲しい。特に……」

やっぱりそこを突いて来たか。

学校にもよるが新入生を集める為に宣伝をしたい学校は多々ある筈だ。

新しい制服の展示会となればモデルとして参加している学校の宣伝効果が大きい。

が、昴達が通う学校がそうとは限らない。

仕事上避けては通れない事で学校にお伺いに行かなければならないだろう。

「それと出来れば見栄えのする生徒さんを集めて欲しい」

「難関ですね」

その時、熊谷さんと目が合って嫌な汗が流れた。

金字塔を立てた人が僅かなチャンスを逃すはずがない。

それはどんな時と場合でもだ。

「課長、沢渡君の学校が良いかと。私の知り合いが文化祭の時にお世話になったので校長とも面識がありますし。ここにその時の写真が」

未だに熊谷さんに敵う気がしない。

要は宣伝させてもらったので今度は宣伝のチャンスと言う事なのだろう。

文化祭では熊谷さんが陣頭指揮を執っていた。

どんな背格好の生徒が居たのかも頭の中にインプットされている筈だ。

俺に出来る事はただ一つだけだ。

どんな時も庇い助けてくれた課長や熊谷さんに報いる為にも。

「課長、僕が熊谷さんと学校には一緒に出向いてきます」

「よし、それじゃ担当者は早急に話を詰める様に。沢渡以外にも学校関係をあたる様に」

とりあえず数校を選出してからと言う事なのだろう。

それでも熊谷さんが出向けばどんな高校でも8割は首を縦に振る筈だ。

それほど営業の中でも群を抜いた営業力を今ですら秘めている。

会議が終わり、直ぐに熊谷さんが打ち合わせに来てくれた。

「沢渡君、頑張ろうね」

「そうですね。宜しく願います」

「らしくないぞ、昂ちゃん絡みだからかな」

「それもありますけれどね」

「ああ、何が齒に挟まっているのかな？」

「熊谷さんに隠し事は無用ですね。カメラマンの鳴海涼子は昂の実の母親なんです」

「ええ？ 昂ちゃんは？」

「まだ、知りません。良い時期かもしれないので会わせてみようか

と」

「……知らなかったとは言えゴメンね。余計だったね」

「らしくないすよ。熊谷さん」

熊谷さんが少しだけ気まずそうにしている。

「言っ様になっただじゃん」

「当然です、俺は先輩と熊谷さんにケツを叩かれて育ったんですから」

「それじゃ、前進あるのみ！」

「はい！」

とは言っただもののデリケートな問題で昂に俺の子どもになるかと聞いた時よりも気が重い。

一番怖いのは何も知らずに展示会で出会ってしまう事だろう。

最悪の場合、個人的な事で取り返しのつかない事態に陥ってしまいかねない。

それだけは絶対に避けなければならない。

しかし、色々な事が頭の中を過る。

万が一の時の覚悟だけはしておくべきだろう。

「ただいま」

「あつ、ノン。お帰り」

「ん？ 何かあったのか？」

「ええ、何で？」

「いや、何となく」

「そんな事を言うノンも何だか変だよ」

「まあ、色々あるんだよ大人にも」

「そんなの私だって同じじゃん」

「そっか」

「ご飯にしよう」

とりあえずは飯だ、腹が減っては戦は出来ぬ。

着替えを済ませ昂といつもの様に晩飯を食べ始めた。

決心は一応したけれど流石に昂を前にすると切り出しづらい。

昂は母親の事をどう思っているのだろう。

会いたければ俺に言えと伝えてから一度も母親の事を昂が口にした事は無い。

たとえ記憶から抜け落ちてしまっていたとしても母親の事が気にならない筈がないと俺は思う。

「あのさ、ノン。私のお母さんってどんな人なの？」

「えっ、あっ、へえ？ あっちい！」

「もう、直ぐに水道で手を冷やして。早く！」

いきなり昂が切り出してきた母親の話に気が動転してしまい、湯呑を倒し熱いお茶が手にかかってしまった。

水道を出しっぱなしにして手を冷やしていると昂が台拭きでこぼれたお茶をふき取り流しにやってきた。

「ノン、大丈夫なの？」

「大丈夫だ、少し赤くなっただけだ」

「もう、どうしたの？ やっぱり私がお母さんの事を聞いたから？」

「昂の所為じゃないよ。俺の不注意だ。母親に会ってみたいのか？」

「う、うん……判らないって言うのが正直な気持ちかな。でも聖司のお母さんや可奈のお母さんを見てみると私のお母さんってどんな人なのかなって思う」

「悩んでいても何も解決しないぞ」

「うん」

昂に言い聞かせるように自分自身にも言い聞かせる。

「良いタイミングなのかもな。2年生になれば受験に向けて動き出すだろうし。今、すっきりしておいた方が後々良いと思うぞ」

「でも、ノンは嫌じゃないの？ お母さんの事を許せないんでしょ」

「それは俺の気持ちだ。昂には知る権利があると思う。昂は頭の回転が速いから戸籍を調べようと思えば簡単に調べるだろう。でも、デリケートな問題だと俺は思ったから会いたくなかった時は俺に言うてくれと言っただ」

「じゃ、会ってみたいと言えば会わせてくれるの？」

「当然じゃないか、昴の母親なんだぞ。でも、ある程度の覚悟はしておいて欲しい。昴が成長したように彼女にも10年と言う月日が流れている事を」

「うん、ノンが良いタイミングって言ってくれるのなら会ってみようと思う」

「判った、先方に確認するから」

「一つだけ聞いていい。ノンは会った事があるの？」

「一度だけな。でも僅かな時間だけだったからな」

「そうなんだ。ありがとう」

食事を済ませて昴は風呂に入っている。

俺は古い名刺を取り出して彼女の電話番号をコールした。

昴が会いたいと言っている事を告げると彼女も動揺を隠せないようだった。

仕事を盾にしようとしたので制服の展示会の事を告げると落ち着きを取り戻した様だった。

「仕事の為に再会しろと言う事なんですね」

「初めてお会いした時に言った筈ですよ。俺は昴の事を一番に考えると。無防備に再会させる訳にはいかないんです。もしそんな事になって昴が傷つくのなら俺は会社なんて辞めても構わないと」

「判りました。スケジュールを確認して折り返し連絡しますので」

「宜しく願います」

向こうも恐らく俺と同じ気持ちなのだろう。

相容れないと言えは良いのだろうか。

10年ぶりに話しても違和感を覚えイライラする。

お母さん

ノンがお母さんに連絡を取ってくれて週末に会う事になった。
凄く不安だけどノンも何処となく落ち着きが無くソワソワしている。

多分、色々心配なんだと思う。

「絶対に会わないといけないと言う事は無いんだぞ。昂が嫌なら今度にすればいい。ただ会ってモヤモヤしているものが晴れるなら会えば良い」

「うん、会ってみたい」

「そうか、判った」

私が言いだしたからなのかな？

それとも他に理由があるのか私には良く判らなかった。

学校で可奈と聖司は何も無かった様にいつも通り接してくれたし私も敢えて口にはしなかった。

でも、会ってみたいと言ったけれど週末が近づくにつれ不安と怖さが膨らんでいく。

お母さんに会う前の晩は流石に頭の中が整理できなくて中々眠る事が出来なかった。

部屋を出てノンの部屋の前に行くとノンが声を掛けてくれた。

「どうしたんだ？ 寝れないのか？」

「う、うん」

「こっちで寝るか？」

「うん！」

私のベッドからノンが布団を運んでくれてノンの隣に敷いてくれた。子どもの頃みたいで直ぐに布団に潜り込んでノンの横に体を動かした。

「なあ、近い」

「ええ、良いじゃん」

「まあ、良いけどさ」

「あのさ、ノン。何で私にお母さんを合わせてくれるの？ 私が言いだしたから？」

息をついてからノンが教えてくれた。

「会えば多分判る事だから言っておくよ。実は今度あの人と仕事をする事になったんだ」

「ええ、お母さん？」

「そうだ、学校制服の展示会があつてなモデルとして一般の高校生を探しているんだけど熊谷さんが昴達の学校を推したんだ。まだ決定ではないけどな」

「それで、私がお母さんと会つてしまつかもつて？」

「仕事上避けては通れないけど前もつて会わせておけばいいかなつて思つたんだ」

で、あの慌てプリだつたんだと思う。

ノンはいつも私の事を最優先で考えてくれる。

でも、流石にお母さんも事になると話は別だつたんだと感じた。

「いくら昴の母親だつて言つても昴には悪いけれど俺はあの人を許す気にはなれない。島から昴を置いて出ていった時点で俺は大嫌いだよ。それに俺の仕事で昴が傷つくのなら俺は」

「駄目！ それだけは駄目だよ。そんな事をしたらノンの事を嫌いになるからね」

怒つた口調でノンには言つたけど凄く嬉しかった。

ノンは私の事になると後先考えないで行動に移してしまう。

でもそれは私がノンに大切にされているんだつて実感できる瞬間だった。

「お母さんに会つても私はここに居てもいいの？」

「当たり前だ。昴はうちの子だ。それは未来永劫変わらないよ」

「ありがとう」

「もしあの人が昴を連れて島から出ていれば俺は昴と会つ事もな

無かっただろうしな」

そんな事を一度も考えたことが無かった。

パパが居なくなってしまうってノンが私の前に現れた。

初めて見た時はパパだと思ったけど直ぐに違う人だって気づいた。

それはノンからパパは吸わない煙草の匂いがしたから。

でも、今はそんな匂いはしない。

ノンは何で煙草を止めたんだろう？

私の為に？

ノンの匂いって凄く安心できる。

私はノンの事が……

お母さんが住んでいるマンションは驚くほど近くにあった。

電車で1時間くらいだろうか。

一番驚いていたのはノンなのかもしれない。

ノンの顔は寝不足そのものだった。

「もしかして、心配なの？」

「あのなここまで来て心配もねえだろ。心配なんて親にしてみれば毎日だよ」

「そっか」

お母さんのマンションの前までノンが付いて来てくれた。

「あそこの喫茶店で待っているからな、住所のメモは持ったか？」

「う、うん」

「そんな顔をするな何かあったら直ぐ呼べよ。昴は俺の大事なんだから」

「うん」

ノンがそつと後押しをしてくれる。

インターフォンを押すと男の人の声がして少し驚いた。

「あの、能登島 昴です」

「ええ？ 涼子さん！」

そんな声がして直ぐにドアが開いて小柄な女の人が出迎えてくれた。長い髪をポニーテールにしてショート丈のワンピースにスリムなジーンズを穿いてとてもアクティブな感じがする。

「り、涼子さん？ 昂ちゃんってもしかして」

「一応、私の娘よ」

「一応って失礼だよ。それに僕にも前もって言っておいてよ」

「あんたがオタオタしないの。だから下見にでも行けって言ったでしょ」

「ゴメンね、バタバタしちゃって。どうぞ」

「あつ、はい」

お母さんだと思ふ女の方は直ぐに奥に行ってしまった。

背の高い男の人が対応してくれている。

旦那さんなのかな？

でも下見って何の？

アシスタントさんか何かかな？

フード付のパーカーを着てジーンズ姿で物腰の柔らかそうな男の人だった。

「あの、僕はなんて言えばいいのかな涼子さんのアシスタント兼旦那みたいな者です」

「うふふ」

「あつ、やっぱり変だよ。旦那が先だよ」

何だか緊張していたのが和らいでくる。

部屋に案内され椅子に腰かける。

パソコンがあつて旅行雑誌や色々な地方の本なんか綺麗に並べられていて、机の上には高そうなカメラが無造作に置いてあった。

「沢渡さんから私の事を聞いたの？」

「は、はい。私があつてみたいって」

「そっか」

何だか嫌な感じの沈黙に包まれてしまった。

すると旦那さんがそんな空気を感じてか口を開いた。

「何だか変な感じだね。涼子さんに似ている様な気もするし似ていない様な感じもするから」

「そうですか？」

「う、うん」

「あの、私あまり覚えてなくて。その」

「ほら、涼子さん。大人がきちんと向き合ってあげないと」

「あんたが煩いからでしょ」

「はい。お茶でも入れて来るね」

旦那さん兼アシスタントさんがお茶を淹れに行ってしまった。

「小さい時の記憶なんてあやふやな物だからね。でも、一度だけ東京で会った事があるの」

「ええ、それって何時ですか？」

「何年前だろう。あんたが小学生1年生くらいかその前かな。動物園に来てたでしょ、確か雨の日だったと思う」

「えっ、それは覚えてます。運動会が雨で順延になってノンに我儘を言って」

「その日に写真を見に来たでしょ」

「はい、大好きな猫の写真をつて」

「そう、そこに私も居ただけどあんたは気付くことが無かった。正直ちよつとだけシヨックだった」

「すいません」

「謝る事じゃないわよ。悪いのは全て私なんだから」

そこに旦那さんがお茶を入れて来てくれた。

ガラスのカップに入った赤いお茶からはいい香りが立ち込めている。

「凄く良い香りですね」

「ハイビスカスティーだよ」

「頂ます。あつ、美味しい」

程よい酸味と甘みが落ち着きを取り戻してくれる。

テーブルにカップを置くとお母さんが教えてくれた。

「あの頃は、大好きな事にのめり込んでいてね。コンテストなんか

にも応募していて偶々それを目にした人から電話が来て一緒に仕事をしないかって。嬉しくて思わず島を出てしまったの。落ち着いたら迎えに行こうって。子どもは親が居なくても育つけど仕事は私じゃないと出来ないと思ってた。それが逆だと気付いた時にはもう遅かった。仕事が軌道に乗ってスケジュールは次から次へと埋まっていく。何度も島にっと思っっているうちに……」

お母さんが下を向いて俯いてしまった。

「ゴメンね……何だか」

そうじゃない、何を言えば良いのか判らなくてもどかしい。

ノンが居てくれたからって言うのも……

口を開く事が出来なくなってしまった。

「ほら、涼子さんもお茶を飲んで落ち着いて。ね」

「うん」

旦那さんに言われてまるで子どもの様に頷いてカップに口を付けている。

その姿はまるでノンと私がダブって見える。

お母さんは仕事の為に色々な物を切り捨て悩んで来たんだと思う。

それじゃ、ノンは私の為に何を切り捨てて何を考えて来たのだろう。

煙草もそうなのかな。

飲みに行かないのも私の所為なのかな。

ノンの大事が私。

私の大事って何なんだろう。

それにお母さんは何で写真展に居たんだろう。

鳴海涼子ってどこかで……

「あの、お仕事は何を？」

「ああ、カメラマン？ フォトグラファーと言えば判るかしら。一

応写真集も出しているんだけど」

お母さんが棚から数冊の写真集を出して見せてくれた。

「ああ、これパパも持ってました」

「そ、そうなんだ。宗一さんが」

「今はノンの家にあります」

「昂ちゃん、ノンって」

「すいません。つい癖でパパの弟で私を育ててくれている人です。

でも綺麗な海ですね」

空気が和んで写真集なんかを見せてもらってお母さんの所を後にした。

旦那さんが近くまで送ってくれる事になった。

「ゴメンね、戸惑うでしょ」

「仕方がないと思います。初めてだったから」

「僕も時々子どもなんだか大人なんだか困る事があるからね。でも、もし何かあった時は頼って来て欲しいな」

「でも、迷惑が」

「あれでも涼子さん凄く嬉しんだと思うよ。沢渡さんに言われてじやなく昂ちゃんが会いたいつて言ってくれた事に」

「そうですか。あれ？ ノンの名前」

「もちろん知ってるよ。沢渡典彰さんでしょ。今度の仕事の事を知つてたりするの？」

「はい、ノンに聞きました。でも、私が会いたかった事に変わりはないし」

「実はね僕には内緒にしているけれど涼子さん毎月積み立てをしているんだよ。昂ちゃんの為につて」

「えっ、でも」

「今じゃなくても良いからいつか受け入れてくれた時に受け取ってくればいいから」

「また、会いに来てても大丈夫ですか？」

「ええ、本当に？」

「はい。私知りたいんです。赤ちゃんの時の事とかパパの事とか」

「ありがとつ。涼子さんも喜ぶと思うよ、少し不器用な人だから判

りずらいと思うけどね」

「あつ、私も不器用だから」

「やっぱり親子なんだね。来てくれるのなら大歓迎だよ。でも仕事の方が先になるかもだけどね」

何だか不思議な感覚だった。

どんな人だか知りたいと思ったお母さんなのに実際に会って思う事はノンの事ばかりだった。

喫茶店の中は時間が止まってしまった様な感じだった。

まあ、それは俺の周りだけだろうけど。

今更ながら俺が知っている昴の母親の情報を伝えておくべきだったなんて事を考えていた。

先入観を持つとそれにとられる可能性が強いので敢えて何も教えなかった。

それが良かったのか悪かったなんて誰にも判りはしないのだろう。しばらくすると昴が見知らぬ男と一緒に歩いてくるのが見えて喫茶店を飛び出した。

「昴！」

「あ、ノン。あのねこちらは涼子さんの旦那さんでアシスタントの人」

「初めまして鳴海 慎と申します」

「ええ、旦那さんって」

「ああ、仕事の都合だね。涼子さんの名前は業界では結構知られている方だからね苗字が変わると何かと不都合かと思って」

「優しいですね」

「そんなんじゃないよ。僕の自己満足かな。僕には才能が無かったからねアシとして傍に居られるだけで十分なんだ」

「ノン、何処かで聞いた事がある様な話だね」

「そうだな。昴がお世話になりました」

「いえ、こちらこそ。昴ちゃんに会わせて頂いてありがとうございます御座い

ます」

頭を下げ歩き出すと昴が手を振っていた。

駅まで俺も昴の特になにも話さなかったけど昴は何だか嬉しそうだった。

「どうだった。すつきりしたか？」

「うん、何だかお母さんって言う実感は全然ないけどね」

「昴が会いたければまた会えば良い」

「ええ、良いの？」

「俺に決定権は無いよ。本当の親子なんだしな。離れていた分を取り戻すにはそれなりの時間が掛るだろ」

「そうだね。不器用そうな所がちょっと似てるしね」

「昴は昴だよ」

「でも慎さんってパパやノンみたいに優しいね」

「全然違うよ。彼と彼女は夫婦で兄貴は親だろ」

「じゃあ、ノンは何なの？」

「俺は親的な物だ」

「親的なノンが大好きだけどな」

「それは娘的な物だろ」

「うん」

昴は未来永劫うちの子だと言ったものの既に揺らいでいる。だがそれにさえ俺には決定権が無い。

選ぶのは昴本人だ。

その時俺は……笑顔で送り出してやれるだろうか。

パテ

金曜日にノンと熊谷さんが学校に来ていた。多分、展示会の話をしに来たんだと思う。

翌日は可奈と出かけるはずだったのに……

「可奈、大丈夫？」

「うん、ゴメンね。何だか私の所為で」

「そんな事言わないの。仕方がないでしょ女の子なんだから」

「そうだね」

駅前の待ち合わせ場所に行くと可奈が真っ青な顔をして座り込んでいて、行き交う人が心配そうに様子を伺っていて私は駆け寄って可奈に声を掛けた。

ノンに迎えに来てもらおうと電話をしたけど通話中で繋がらなかった。

展示会の事で電話してるのだと思う。

朝からノンは後輩の野田さんと電話でやり取りしていた、本当は休日出勤しなければいけない筈なのに本人は必要ないと言い切って野田さんに丸投げしてるみたい。

仕方がないので聖司に電話すると直ぐに来てくれた。

「ほれ、可奈」

「ええ、ヤダよ。おんぶなんて」

「じゃ、お姫様抱っこ？」

「聖司、殺す！」

聖司に抱えられるようにしながら何とか家まで連れて来てもらった。女の子特有の貧血だから少し休めば平気だろうけど出かけるのは無理だろう。

「ねえ、昇って殆どお肉食べないでしょ」

「えっ、少しは食べるけど魚の方が美味しいじゃん」

「それなのに貧血にならないの？」

「ん〜ならないかな。個人差があるんじゃない」

「そうか」

小腹が空いて冷蔵庫からノンが作り置きしてくれているパテとクラッカーをテーブルに置いて摘まみ始めた。

「なあ、昂。それなんだ？ 美味しいのか？」

「うん、美味しいよ。食べてみれば」

「それじゃ、少しだけ」

聖司がクラッカーにパテを付けて口に放り込んで不思議そうな顔をしていた。

「なあ、このクリームみたいのって……何？」

「ええ、ツナだよ。マグロのパテだってノンが」

「マジで？」

「可奈も食べてみる？」

「うん、どれ」

今度は可奈がクラッカーに付けて口にして何だかわからないけれど納得顔をしている。

「ははん。で、貧血にならない訳だ」

「だろ。マグロじゃないよな」

「そうだね」

「俺、ちよつと苦手かな」

可奈と聖司が顔を見合わせてから私の顔を覗き込んでいる。意味が判らなくて2人の顔を交互に見てしまった。

「どんだけ大事にされてるかな」

「絶対に敵わない気がしてきた」

「聖司は100年掛つても無理そう」

「無理言っつな」

「もう、2人で判つて私だけ」

「「ノリに聞いてみな」」

「イジワル！」

2人は教えてくれそうになかった。

このパテは私が中学生になる頃にノンが作ってくれてそれから冷蔵庫には常備されていて、小腹が空いた時に摘まんでいる。

そう言えばノンもマグロだってハッキリとは言ってない気がしてきた。

私がマグロみたいって……

すると玄関が開く音がした。

「ただいま。聖司と可奈が来てるのか？」

「うん、おかえり」

「出掛けるんじゃないかったのか？」

「うん、可奈の調子が悪くって聖司に迎えに来てもらった」

「で、可奈は？」

「もう大丈夫だよ」

「そっか」

部屋に行くとノンがテーブルの上に目を移して直ぐに台所に歩いて行ってしまった。

「あつ、ノン！ ビールはまだ駄目だからね」

「ええ、良いじゃんか。休みなんだし」

「会社は大丈夫なの？」

「あのな、会社なんて俺が居なくても平気なの」

「でも、まだ明るいのに」

「はい……」

「一回だからね」

「ういす」

聖司と可奈がお腹を抱えて笑っていた。

『まるで夫婦みたいだ』なんて言いながら。

恥ずかしいと言つか変な感じで聖司と可奈に詰め寄っても笑っていて相手にならなかった。

思わずノンに八つ当たりの事をしてしまった。

「ノン、そう言えばこのパテってマグロじゃないの？ マグロだよ
ね」

「えっ、ああ。マグロ的な」

「的な？」

「あ、用事を思い出した。ちょっと出てくるから」

ノンが逃げ出すように出かけようとした先は八百屋の木梨さんが経営している『ポンテ』と言うカフェだった。

「いらつしゃい。あらら、今日は勢揃いで」

「まあ、逃げたつもりが…… すんまそん」

逃げ出さない様にノンのシャツを掴んだまま店に入りノンを見つけた。

私の後ろから可奈と聖司が顔を出している。

店の中には魚屋の磯正さんがノンに手を振っていた。

「なんだ、パパ友会議か」

「まあ、そんなもんだ」

「で、私はまだ答えを聞いてないんですけど」

「聖司か可奈に聞いてみる」

そう言つてノンは磯正さんのテーブルに座つて木梨さん達と話し始めてしまった。

私達もテーブルに座つてメニューを覗き込んでいる。

このお店のお勧めはサンドウィッチで色んな種類がある。

定番の玉子サンドやカツサンド。

それにフレッシュなフルーツを使ったフルーツサンドは地元の子
高生一押しだった。

パンやカツなんかは商店街のパン屋やお肉屋さんから仕入れて商店街の活性に一役買っている。

そしてサラダやフルーツはどれも新鮮で本業の八百屋から厳選して使っているんだって。

私はグレープフルーツジュースとミックスフルーツサンドを、可奈はオレンジと卵サンドで聖司はコーラとカツサンドを注文した。

「あのさ、素朴な疑問なんだけどサンドウィッチって耳が無いじゃん。耳ってどうしてるのかな？」

「はあ？ 聖司は何を言ってるの？ 普通は捨てるんじゃないの？」

「あのね、勿体ないでしょ。小学校とかでは飼っている動物の餌にしてたり揚げてグラニュー糖をまぶして食べると美味しいよ」

「ええ、食うの？」

「聖司は信じられないって目をして」

「だって餌なんだろ」

「じゃあ、聖司の餌を作ってあげる」

木梨さんにキッチンを借りる。

パンの耳を2センチくらいに切ってフライパンにマーガリンを入れてパンの耳を入れて良く絡める。

そこにグラニュー糖を入れて砂糖が解けてきたら混ぜているとキラメル状になった砂糖がパンの耳に良い感じで絡み付いて来る。

それをお皿に取り出して冷ませば出来上がり。

仕上げてシナモンを好みで振りかける。

「ん！ 美味しい！」

「これが餌？」

「餌じゃないかも」

可奈も美味しそうに食べている。

実はこれ今度の新メニューなんだよ。

前に木梨さんにパンの耳をそのままで売るのに抵抗があるって言われて簡単だからって作ってみたの。

私はそんな事よりノン達の会話の方が何となく気になるんだけどな。3人で難しそうな顔をして話し込んでいる。

多分、駅向こうに出来た大型ショッピングセンターの事を話しているんだと思う。

最近はお客が商店街から遠のいているのが買い物に来ると良く判るから。

でも宣伝力の差は大きくて大変なんだと思う。

私達に出来る事なんて商店街を利用するくらいだけで何が出来るか判らないけれど力になれたら良いな。

結局、聖司にも可奈にもパテの事を聞き忘れて帰ってからノンに問い詰めた。

ノンの言い訳はこうだった。

私がお肉を殆ど食べないんで心配していたんだって。

それでいろいろ聞いてレバーのパテを作ったんだって。

結局のところ私の事を心配したからだった。

問い詰めた事をちよつとだけ後悔したけどそれ以上に心が温かかった。

カメラ

展示会が目前に迫って来ていた。

モデルの方は熊谷さんの思惑通り昴達の学校に決まった。

決め手はやはり写真だった。

数校が選考されたけれど何処の高校も制服姿の決まりきった写真や資料で決め手がなく、そんな中でも自然な笑顔の生徒達の写真は群を抜いて目に留まるところがあつたのだろう。

それは熊谷さんの計算ずくのだろうけど。

大筋が決まれば後は細かい事を手配するのが俺たちの仕事だ。

「沢渡先輩、弁当の手配ってどうすれば良いんですか？」

「少しは自分で考えろよ。野田が自分の足で見つける。もしくは専門業者を当たれば良いだろう。でも、メインの制服を汚すようなものは控えるよ」

「そこが一番の悩み所なんじゃないですか」

「それと不味い弁当なんて出してみろ大勢の生徒から白い目で見られるからな」

「……泣きそう」

「泣くな。サンドウィッチなんて良いんじゃないか？ 片手で食べられて撮影の合間に食いやすいから」

「何で難度を上げるんですか？」

「後輩が可愛いからな。ほれ、ここを当たれ地元の店だけど何とか対応してくれるだろう」

「あ、ありがとうございます」

野田にメモを渡すと飛び出して行ってしまった。

何故とりあえず電話をしてアポを取らないんだろうか？

あいつも直球馬鹿なのか……

それにしても仕事とは言え気が重い。

何で昴の母親の涼子さんと仕事をしなければいけないのだろう。

まあ、相手も同じような物だと思うが、社内で顔を合わせても会釈する程度で大人な対応だった。

無理もないのかもしれない。

後から決まった事とは言え実の娘が通う学校の生徒を使うのだからとやかく言われたくはないのだろう。

展示会には20名近い生徒が出る事になっている。

生徒の選出は熊谷さんが買ってですんなり認証された。

舞台上ではリハーサルが繰り返されている。

最初のうちは緊張していたが現代っ子なのか直ぐに笑顔でリハーサルを熟している。

本番の後には数社の雑誌による撮影会なる物も行なわれる予定になっていた。

リハーサルは凄く緊張したけれど同じ学校のそれも同級生なので次第に緊張もほぐれて笑顔が出る様になっていた。

舞台の上から花道を通って戻ってくるって言う簡単に言えばファッションショーのあれで、可奈は島中君と楽しそうに歩いていて周りにも幸せを振りまいている。

私も舞台の上からお母さんを見つけると小さく手を振ってくれたけれど、仕事をしている時の印象が全く違っていて驚いちゃった。

それより嬉しかったのは何故かノンの仕事姿を見る事が出来た事だった。

野田さんに指示をしながら自分も動き回っている。

営業の仕事と勝手が違うけどとても輝いて見えた。

「ねえ、あのカメラマンが昴のお母さんなの？」

「うん、そうだよ。鳴海涼子さんって言って写真集なんかも出してるよ」

「へえ、素敵だね」

「う、うん」

「あれ？ そうだよ。この間初めて会ったんだもんね」

「うん、まだ実感とかが全然なくて」

それが本当の所だった。

10年以上会ってなくて子どもの頃の記憶もあいまいで。

パパかノンの記憶しか私には存在しなかった。

未だに母親だと言われても初めて会った人とあまりかわりが無い。

本番になると流石に皆の顔に緊張が浮かんでいる。

すると熊谷さんがやってきて場を和ませてくれる。

「ほらほら、緊張なんかしない。文化祭の裏写真をばらまくぞ」

「うわあ！」

数人の生徒が慌てだして空気が変わっていく、慌てる理由はこの際はスルーする。

それと委員長の中田君の視線が気になる。

自意識過剰かもしれないけれど見られている気がして、すると可奈が声を掛けてきた。

「ははん、その顔は流石の昴も気づいたね」

「ええ、何が？ 委員長の中田君の事だよ」

「気の所為でしょ」

「違うよ。中田君は昴の事が好きなんだと思うよ」

「お互いの事をあんまり知らないのに？」

可奈が頂垂れて残念そうな顔をしている。

その訳が私には判らなかった。

「あのね、昴。そんなんじゃ恋人も出来ないよ」

「そんな事を言われてもあんまり興味ないし」

「女子高生の言葉じゃないよ！ 確かに学生の本分は勉強だけどさ、

今じゃないと出来ない恋愛も凄く大切だと思うよ」

そう可奈に言われてもピンとこない確かに背も高くなって周りからは人気もあるから良い人なのかもしれない。

言葉にはしないけれどまだ気心知れた聖司の方が気が楽な気がする。

「慣れてない人と喋るの苦手だし」

「本当に昴は奥手と言うより人付き合いが苦手だよね」

「そうかな、小さい頃はそうでもなかったけど中学の頃に色々あったから」

「そっか、仕方がないのかもね」

詳しい事情を可奈は知らないけれど何度もアドレスを変えた事は知っていて、何かあった事はなんとなく判ってくれているんだと思う。

本番のショーも無事に終わって会場を変えて雑誌の撮影が始まる。用意されていたのは教室をそのまま持ってきた様なセットだった。黒板があり机といすが綺麗に並んでいる。

そこに色々な制服（学校の）を来た現役生徒が入ればさながら普通の高校の様になった。

でも、展示会のショーとは違って今度は色々な雑誌のカメラマンやスタッフの人が間近に居て独特の雰囲気皆が飲み込まれていく。

「ん」。もうちよつと自然な笑顔で」

「はい」

何度も撮影をし直すけれど私も皆も初めての事で失敗すればするほど硬くなってしまふ。

いつも元気な可奈でさえ机に突っ伏していた。

そこにノンと野田さんが現れた。

「時間が無い所申し訳ございません。この辺で休憩を挟みたいのですが宜しいですか？」

「まあ、仕方がないですね。休憩ってここですか？」

「はい、時間が無いのでここで食事と思っています。幸い用意した物はサンドウィッチですから制服も汚れる事も無いでしょうから」

野田さんがセットの隅にあるテーブルに段ボール箱からパック詰めされたお弁当と色々なパックのジュースやお茶を準備してくれた。

「スタッフの皆さんも宜しければどうぞかなり多めに準備してありますので」

「それじゃ、遠慮なく」

ノン達が用意してくれたのは『ポンテ』のサンドウィッチだった。

定番の物からフルーツサンドまで沢山の種類が準備されていて皆思い思いに選んで机で食べ始める。

まるでいつもの教室の様な雰囲気に入れられ自然に皆の顔から笑顔が生まれている。

するとスタッフやカメラマンが慌てて撮影を開始した。

皆はただのスナップ写真程度にしかなってないのだろう。

会場の隅ではノンが熊谷さんに突っこまれているのが見える。

お母さんに目を移すと笑顔で生徒に声を掛けながら写真を撮っていた。

そして少しでも緊張の色が見えると手に持っていたぬいぐるみを翳している。

その姿はまるで子どもの御機嫌をとる母親そのもので……

生徒にぬいぐるみを放り投げると生徒がぬいぐるみを見て笑っている。

そのぬいぐるみは目つきの悪い動物で……

子どもの頃の事が頭の中を駆け抜けた。

カメラを向けられ不機嫌になった私をあやす様にお母さんがぬいぐるみを持っていた。

気付かないうちに涙が毀れていた。

名前を呼ばれた気がして涙をふき取って笑顔で顔を上げると熊谷さんがカメラを構えていてフラッシュが柔らかに瞬いた。

「よし！ 今日最高の一枚だ。沢渡君、宜しくね」

「へいへい、いい加減カメラを壊さないでくださいね」

そんな会話が聞こえてきて恥ずかしくって可奈や聖司達と写真を撮ってもらった。

その後の撮影は和気藹々と進み無事に終わった。

撮影が終わった教室のセットで委員長の中田君が声を掛けてきた。周りの皆は何か知っている風で騒ぎ立てる人は誰も居なかった。

「あの、能登島さん。良かったら次の日曜日に映画でも見に行かない？」

「ええ、私と？ どうして？」

「あ、あの。どうしてって能登島さんの事をもっと知りたいし出来れば付き合って欲しいと」

これって告白って奴なの？

でも、こんな所で何で？

答えに困って可奈を見ると親指を立てている。

その向こうにはノンの姿が見えて目が合った気がした。

何でそんな目で見るの？

私が離れてしまってもいいの？

ノンが言っていた言葉が蘇る。

『ここから嫁に出す事』

こんな気持ちのままじゃいけない気がするけどどうしたら良いのか判らない。

それよりも何でノンが居るのに告白なんて。

「ごめんなさい。私、好きな人が居るんです」

「あつ、そうなんだ。俺こそゴメン。もしかして」

「せ、聖司は絶対に違います。幼馴染って言うか兄妹の様な物です。私が姉ですけど」

「そっか、すっきりしたよ。ありがとう、はっきり言ってくれて」

委員長の中田君は颯爽と立ち去って友達達の輪の中に入っていて冷やかされている。

あんな性格だから周りに人が集まるんだって思った。

「ねえねえ、昂。好きな人って誰なの？」

「ええ、だってああでも言わないといけない様な気がして」

「怪しいな。聖司以外で好きな人って誰だろ」

可奈には変に勘ぐられるし聖司はしよげてるし。

まあ、聖司はどうでも良いけど。

「どうでも良い言っな！」

しばらくして商店街が大変な事になっていた。

明らかに買い物客とは異質で、それでも賑わっている。

「何でノンはあんな事を勝手に」

「まあ、良いじゃんか。宣伝だよ」

「ああ、もう。馬鹿」

「昴の大事な一つだからな」

それを言われたら何も言えなくなってしまう。

新しい制服の記事が載っている雑誌に出ている私のコメントは

『磯正が大好き』だった。

『ポンテ』に至っては近隣の学校の女の子達に火が着いて大変な事になっていた。

ノン

週末なのにノンと聖司が部屋で言い合いをしている。

「なんでノリはかーちゃんを嫁にもらわないんだよ」

「それこそ何で俺なんだ？」

「かーちゃんはノリの事が多分好きなんだ」

「多分だろうが」

「ノリはどうなんだよ」

仕方なく仲裁に入ると2人とも子どもみたいにそっぽを向いた。

「ご飯が出来たから運んで」

「はいよ」

「うん」

何でも聖司のお母さんに彼氏が出来たらしい。

そしてそれは結婚を前提にしたお付き合いだって聖司が言っていた。こんな言い方は失礼かもしれないけど40位の人が結婚を前提にしない付き合いなんてしないだろうと思う。

「聖司は散々迷惑をかけて来たんだから未来さんの幸せを邪魔するような事するなよ」

「判ってるよ、頭の中じゃ判ってるけどさ」

「それは俺にも判る。だけど祝福してやれ。時間だけが何とかしてくれるよ」

ご飯を食べながらノンと聖司がそんな話を話している。

私には意味が良く判らなかった。

「何で聖司は嫌なの？」

「嫌とかじゃないんだよ。嫌じゃないけど」

「複雑なんだよな。今まで母親だっと思っていた人の女の顔を垣間見ると」

「うん、しばらく無理かも」

何だか支離滅裂な事を言っている2人に怒りが込み上げてくる。

「それじゃ、バツイチじゃ再婚は駄目みたいな」

「じゃ、昴は平気なのか？ ノリが知らない女の人と仲良くしてても」

「それは喜んであげないといけないじゃん」

「説得力が無いな。そんなあからさまに嫌そうな顔をして」

それは嫌かもしれない。

聖司のお母さんがノンを甲斐甲斐しく看病している時にはつきり気付いた気持ちだから。

でも私は……

喧嘩していても直ぐに仲直りして今は一緒にゲームをして遊んでい

するといきなりノンが聖司にビールを勧めた。

「聖司も飲むか？」

「ええ、良いのか？」

「駄目！ 絶対に駄目！ ノンが悪の道に聖司を引き摺り込もうとしている」

「俺は悪魔か？ 煙草は体に悪いけれど多少の酒は良いだろうが」

「今日のノンは飲み過ぎだよ」

「たまには飲ませろ。大人は色々と大変なんだ」

何時になく大騒ぎしてノンが珍しく酔い潰れてしまった。

聖司に手伝ってもらって何とかノンを布団に寝かせる事が出来た。

「なあ、昴」

「ん？ なあに？」

「そのさ、ノリってこんな風になった事あったっけ」

聖司の言葉で初めて気が付いた。

ノンはいつでも私達の事が最優先でお酒を飲みすぎると言う事なんて今まで一度も無かった。

「やっぱりな」

「何がやっぱりなの？」

「多分、ノリもカーちゃんもお互いの気持ちを知っていたんだよ」
「それってノンもって事なの？」

「うん、でも俺達が居るから自分の気持ちに踏ん切りをつけたんだと思うんだ。俺は荒れていたし昂を危険な事に巻き込んで」

「でもそれは」

「偶々だけどさ。そう言う事だと思う。俺と昂の事を最優先に考え
てさ。だってそうだからもしもカーちゃんとノリが結婚したら俺と昂
は兄妹になるんだぞ」

「いつも私達が一番大事なんだね」

煙草を止めて。

飲みに行く事もしないで。

自分の恋愛を後回しにして。

割り切って諦めて。

私が居るから……涙が溢れてくる。

「泣くな。昂が泣く事がノリにとって一番辛い事だと思うぞ」

「でも、私が居るからノンは」

「俺には何も言ってやれないけどさ。俺でもマジで怒るぞ。自分が
居るからなんて言うな。昂は昂がやりたいようにしているのが一番
だと思う。それに」

「それに何？」

「実は俺とカーちゃんはノリが居てくれなかったら今の生活は無い
からさ」

聖司が教えてくれたのは聖司のお父さんの事だった。

酒を飲んで暴れて家の金を持ち出してまた酒を飲みにつて、そんな
事を何度も繰り返していたらしい。

そして時には見知らぬ女の人が怒鳴り込んで来たり借金の催促をさ
れたりしていたつて。

そんな状態で私が熱を出した時にノンと聖司のお母さんは知り合っ
て保育園で再会したんだつて。

それでノンが間に入って少し強引だったけどノンの力添えがあった

から離婚出来たんだって。

私は何も知らなかった。

ノンがどんなに危ない橋を渡ってきたのか。

「でも、それは全部俺達の為だったんだよ。俺と昴の世界を壊さない為にさ。だから俺はノリに敵わないし頭は上がらないよ。命まで助けてもらって」

「それって私もだよ。それじゃノンの10年って何だったの？」

私を育てる為なの？」

「それは俺にも判らないよ。かーちゃんは知っていそうだけど」

「どうして？」

「昴は知らないのか？ かーちゃんの従妹がノリの知り合いだって」

「何となくは知っているけど、その従妹って人は？」

「俺も知らないのが本当かな」

ノンとその従妹の人ってどう言う関係なんだろう。

聖司と話していて気付かされることが多い。

ノンと出会う前のノンの事を私は何も知らない。

知っているのはノンと出会ってから10年で、ノンがそれまでどうやって暮らしていたのかを知らない。

知っているのは高校生の時は荒れていたと言う事。

大学時代は？

20代は何をしていたの？

恋人は居たのだろうか。

今でも忘れられない人が居るのかな……

「なあ、昴。もしかしてお前ってノリの事が」

「えっ？ 違う……」

語尾が尻すぼみになってしまう。

「そうだよな。昴の親父はノンの兄貴だもん」

「そうそう、あり得ないでしょ。結婚できないんだよ」

現実を再認識すると再び涙が溢れてきた。

これで聖司には私の気持ちが判っちゃったよね。

「何だかな。俺には何も出来ないけれど一言だけ言える事がある。昂の気持ちを隠したままとか我慢の上に居るなんて俺もノリも嫌だけどな」

「でも、どうしようもないでしょ」

「難しいな馬鹿な俺じゃ何もできないな」

「そんな事無いよ。側に居てくれるだけで安心できるもん」

「それが恋愛感情じゃ無いのが俺は辛い」

「仕方ないじゃん」

「うっ、かーちゃんに慰めてもらおう」

「あはは、良いんじゃない」

聖司は夜遅いのに家に帰って行った。

俺を襲う奴なんて居ないよなんて言いながら。

自分の気持ちに正直に生きたい。

でも、それは私とノンの生活の終わりを意味する。

今は今までのままが一番いい気がする。

時間だけが何とかしてくれと信じていたい。

翌日は庭からの聞こえる物音で目が覚めると時計の針はお昼を回っていた。

縁側に座って庭を見るとノンが生垣の手入れをしている。

電動のバリカンで伸びた枝を掃っているけど私が植えた種はもの凄い事になっていた。

梨の木や桃の木は剪定をしてあまり大きくならない様に押さえあるけど葡萄だけは別なんだ。

芽が出て伸び出すと成長が早くって最初はノンが作った簡単なぶどう棚だったけれど、私が頼み込んでかなり立派なバーゴラを造ってもらった。

バーゴラからは葡萄がたわわまではいかないが実を付けて色づいてきている。

葡萄のおかげで日影が出来て夏場は過ごしやすくなった。

「おっ、起きたのか？」

「うん、頑張つてね」

「面倒だからブロック塀に」

「駄目！ 絶対に駄目だから」

ノンが生垣を見ながら腰に手を当ててそんな事を言いだした。

他の話題をつて……

「ねえ、ノンにも好きな人いたんでしょ」

「居たけど昔の話だ」

「私の所為でノンは結婚しないの？」

「あのな、そう言う事を言うな。出会いが無かったただけだ」

「ええ、ノンならモテそうなのに」

「モテません。全然」

「本当かな？」

「あのな、もう40のおっさんだぞ」

「モテ期が来るかもよ。女の人でも誘つてデートでもして来ればいいのに」

「そんな相手は居ないし、今更だな」

溜息をついて遠い目になっている。

「うわ、遠い世界に行っちゃったみたい」

「ちよつと、出てくる」

「ええ、何処に行くの？ ブロック塀なんて嫌だからね」

生垣をバツサリ切る代わりに髪を切つてサッパリとして日が高い内から縁側でビールを飲んでいる。

もちろん昴の許可が下りて。

七輪でイワシの丸干しを炙っていると切ったばかりの髪を昴が触ってきた。

「触るな、こそばゆい」

「何で触られるの嫌いなのか？」

「くすぐつたいから」

「私は触りたいけどな」

「その気持ちが判らん。おっさんだぞ俺は」

「ええ、でも触りたいんだもん」

「加齢臭が移るぞ」

「ノンは臭くないもん。少し匂うけど」

昂にそんな事を言われて思わず自分の体を匂ってしまいが今は炭の匂いと干物の匂いしかしなかった。

「臭い？」

「臭くは無いよ。嫌いな匂いじゃない。夏場は汗臭いけれど男の人って大体そうでしょ」

「まあな」

しかし、40男の何が良いんだろう。

もつと、同級生（男）とかに興味を示してもらいたいものだ。

「なあ、何で委員長を振ったんだ？」

「やっぱり見てたんだ」

「まあ、一応な。どんな男か知る権利が俺にはある筈だ。しかし聖司は勿体ない事をしたよな」

「そんな事をノンに言われたくないもん」
でも、誰なんだ？

昂の好きな男って、メチャ気になるけど……

そんな事を考えていると良い感じに炙られたイワシを昂が口に入れた。

「ああ、今食おうと思ったのに」

「早い者勝ちだよ」

「返せ！」

「やだ！」

昂が啜えているイワシの尾を引っ張ると半分から切れ口に放り込んだ。

「あっ」

「なに？」

「間接キスだ。あつ、落とした」

昴の言葉に思わず口からイワシが落ちた。

不思議な事にこんな関係がいつまでも続けば良いと思えてしまう。

他の女とデートや食事なんて考えただけで肩が凝ってくる。

枯れているなとつくづく実感する。

何も変わらないと思っていた。

それでも季節は巡り冬が終わろうとしている。

昴達は高校生活を謳歌して卒業すればある者は大学へ。

またある者は社会に飛び出し。

それぞれの道に進み恋をして結婚をし家庭を築いていくのだと思っていた。

痛み

こんな言い方は変かもしれないけれど、昴は母親と仲良くなり時々遊びに行ったりしている。

それは良い事なんだと自分に言い聞かせる。

「血は水よりか……良い得て妙だなまったく」

週末に1人で居る事が多くなってきた。

俺としてはとても喜ばしい事だと思っていると、こんな時に限って携帯が着信を告げた。

「もしもし、可奈か。昴ならいないぞ。はあ？ 俺？ 判ったよ、行くよ」

可奈が呼び出した先は駅前にある静かな喫茶店だった。

店に入ると可奈の横には聖司が座っている。

「で、2人そろって何なんだ？ 可奈は聖司にでも乗り換えるのか？」

「そんな訳ないでしょ。私には島中君が居るんだから」

「まあ、そうか。聖司だって昴の次は可奈なんて考えられないよな」

「う、うん」

聖司からは全く覇気が感じられない。

また、何か悩みでもあるのだろうか？

思春期なのだから悩みなんて尽きない物だと思うが。

ブレンドを頼んでしばらくしてコーヒーが来ても2人は口を開こうとしなかった。

「あのな、人を呼び出しておいて何も言わないと言うのは失礼だぞ」とすると可奈が恐る恐る口を開いた。

「ノリはその……昴の事をどう思っているの？」

「そんな事は聞かないでも判るだろう。娘みたいなものだ」

「そうだよねやっぱり」

2人が雁首揃えて何が言いたいのかがさっぱり判らなかつた。

「あのさ、ノリ。俺達がこんな事を言うのは変かもしれないけど、
昴はノリの事が好きなんだよ」

「あのな、嫌いなら一緒に居ないだろ」

「そうじゃねえよ。男としてだよ」

「はあ？ 何の冗談だ。お前等は知っているよな。昴の父親が誰か」
「うん」

「でも、本当なんだよ。昴だって百も承知だよ。だから、自分の気持ちを押し殺して」

聖司と可奈が嘘を付くなんてあり得ない事で。

この話がもしも本当ならその時は昴との別れを意味する。

「私も初めて聖司から聞いた時は驚いたよ。でも昴は大切な姉妹で友達なの。だから昴の悲しむ顔なんて見たくないの」

「話が本当なら昴を母親の元に返す事になる事になる」

「どうしてそうなるの？」

「当然だろ。あり得ない話だろ」

聖司と可奈が困惑した表情をして沈み込んでいる。

2人も考え抜いた末で俺に話を持ってきたのだろう。

それでも俺には選択権も決定権もなく、あるのは昴を送り出す覚悟だけだった。

「なあ、ノリ。今のままじゃ駄目なのか？ 昴は今のままを望んでいると思うんだ」

「お願いだからノリが何とかしてよ。ずっと傍に居ても気持ちを伝えられなくて、気持ちを伝えれば別れる事になるなんて悲しいよ」

「俺の願は昴を嫁に出す事だけだ。それが叶わないのなら」

「バカ！ ノリのバカ！」

可奈が泣きだしてしまった。

気持ちは良く判るが俺にはどうする事も出来ない問題だ。

「可奈、良く聞いてくれ。俺だって昴の泣く顔なんて見たくもない。でもな、俺にしてみればそんな話は聞きたくないし、本当だとした

「酷な話だ」

何かあれば昴を母親に返す事は常に頭の片隅にあった。それでも俺は昴の父親代わりとして。

昴もそれを望んでいたんじゃないのか？

あいつの気持ちがある事になっっているのなら……
心が揺れる。

休み明けなのに気が重い。

早急に対処を？

昴を母親に引き渡すか、それとも……覚悟が揺らぐ。

「沢渡。飯に行くよ」

「は、はい」

熊谷さんが声を掛けて来て昼休みになっているのに気が付いた。集中力を欠いていると言うか仕事をしていたのかさえ覚束ない。

「何かあったのかな？　ボーとして。まあ、昴ちゃん絡みなんですよ」

「まあ、そうですね。何と言えば良いのか思春期だからどうしようもない事なのかも」

「子育てって大変だよね。男の子ならぶん殴ってでも判らせるけど女の子はね」

「そうすね。狂暴になってくれた方がまだ楽ですね」

「そうだ、若い子を誘って飲みに行こうよ。気分転換に」

「無理す。若い子なんて俺からしてみれば宇宙人みたいなもんですよ。まだ40過ぎの方が」

「過ぎねって」

熊谷さんに小突かれてしまう。

今更、若い女の子と遊びに行こうなんて気すら起きない。

こんな事になるのならなんて事をフツと考えてしまいが仮定は仮定の話だ。

それはあまりにも突然だった。

夕飯を済ませ片づけをしていると昴が切り出した。

「あのね、ノン。私がお婆ちゃんになるまでここに居ていい？」

「その時には俺はもう居ないだろうな」

「そう意味じゃなくて。結婚なんてしないでずっとノンの傍に居たい」

「それは俺を親だと思って言っているのか？ そうじゃなければ答えは一つだ」

「やっぱり聖司達に聞いたんだね。私がそう言う気持ちだって」

「良い友達だな」

「そうだね、お節介でも一番先に私の事を考えてくれる」
振り向くのが怖かった。

昴は今どんな顔をしているのだろう。

覚悟はあるのに勇気が無い。

「俺は俺なりに必死になって昴を育ててきたつもりだ。できれば聞きたくない事だけだな」

「やっぱり、もう終わりにしないとダメなの？ 私はノンと一緒に

……」

「諦めて他の奴を好きになつてくれ。頼む」

「出来る訳ないじゃん！ 私は……出来れば伝えたくなかった。でも、苦しくって。ノンが辛そうな顔をするのを判っていたから。それなのに……他の奴なんて……ノリのバカ！」

初めて昴に『ノリ』と言われてこんな気持ちになるとは思わなかった。

昴にとってはどちらも大切な気持ちなのだろう。

でも、俺にはどうしようもない事だった。

「少し冷静になってくれないか？ 昴らしくないぞ」

「だって、どうしようもない気持ちでしょ。ノンだって誰かを好きになった事があるんでしょ」

「あるさ、壊れてしまふくらいな」

「それって……」

「未来さんじゃないのは確かだよ。彼女は俺にとって大切な友人の1人だ」

それは本心だった。

確かに揺れた時もあるのも本当だ。

それでもお互いの大事の為に歩いて来たんだ。

「そうだよ。私は子どもでノリからしてみれば娘だもんね。こんな感情を持ってしまったら一緒には暮らしていけないよね。もう少しだけここに居させてね」

昴が涙を浮かべ部屋に戻ってしまった。

胸の深い所に痛みが走る。

俺にとって一番残酷な事は…… 昴の泣き顔を見る事だ。

それが俺の所為であればあるほど痛みが強い。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1172y/>

アジとサンマとクローバー

2011年12月19日14時46分発行